

解説の宮永さん

融合好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

照魔鏡に能力を全振りした宮永照が、ラスボスである咲ちゃんを倒すまでの軌跡の話。

こんな作品あったら読みたいなあと思って走り書きした作品。誰か続き書いて（他力本願）

## 目次

物語の始まりの日（※始まっていません）	1
何かが突然訪れたある日	9
おそらく何かを諦めたその日	19
きっと何かが変わったその日	30
何かに納得せざるを得ない日	36
きっと何かを学んだあの日	47
おそらく何かに気付いたある日	56
何もかもがどうしてもよくなる日	64
何かを諦めそうになった日	73
多分何かが発覚したその日	83
きっと何かを慈しむその日	92
どうでもいいかもしれないその日	109
きっと全てが塗り変わったその日	129
おそらく何かが挫かれたその日	142
きっと何かを決意したあの日	153
確かに何かを刻んだその日	165
きっと何かが芽生えたあの日	179
おそらく色々と驚かされたあの日	191
きっと何かに絶望したあの日	200
おそらく全てが混沌に染まるこの日	210
きっと何かを頑張るこの日	218
きっといつか報われるその日	232
やがて必ず辿り着けるその日	247
きっとそうだと信じたあの日	259

何かどころなく安堵するこの日



276

まるで何かに導かれるその日



288

いずれ何かに望まれたあの日



302

## 物語の始まりの日（※始まっていません）

なんか麻雀が野球的なノリで扱われている。

そんな世界の異常に気付いたのは、ふと見たテレビで「ドラフト」から当たり前が如く続いた麻雀プロという単語を耳にしてからである。

この世界に生まれてはや10数年が経ち、いい加減に前世？との折り合いも付いてきた時分にこの始末だ。転生などという非常識を体感したこの身、パラレルワールド云々による多少の差異程度は当然のように覚悟していたが、これならいつそ魔法なりなんなりが全世界に普及していた方がまだ割り切れる。

（小鍛治健夜プロ……高卒でプロ入り……国内無敗……グラントマスター……）

更に、今世の両親にそれとなく聞けば、どうもその麻雀もオカルトと言う名の超能力が飛び交うトンデモ麻雀であるらしい。運の要素が強い麻雀で1年2年とほぼ毎日打ち続けて国内全勝とかなんの冗談かと思う。まあテレビに出てたその人が例外なだけで、なんだかんだ全体的には競技として成立する程度に拮抗しているらしいのだが。「うわっ、すっげえ。何この鬼ツモ……」

しかし、アレだ。麻雀は別に前世のアプリか何かで多少やった程度の知識しかないが、それでも半荘一回で役満が数回も出るような競技ではないのは知っている。けれどテレビの中にいる童顔の女性は明らかに何かが違う。いや、もつと言えば俗にトッププロと呼ばれる人物はその全員が常人とは何か異なるのだが、小鍛治プロは本当に何というか、誇張を抜きにして次元が違う感がヒシヒシと伝わるのだ。「……ムダツモ的な世界のラスボスとか、アカギの師匠的な人なのか……」

口にしたのは、前世ではそれなりに知名度があった二つの麻雀漫画のこと。発言自体は冗談だけど、それが冗談では済まないかもしれない。何なら今まさに世界の命運を賭けた麻雀勝負がどこかで行われていてもなんら不思議ではないのだ。

「……ちょっと麻雀、始めてみるかな……」

しばらく考えて、割と軽い気持ちで私はそんな決意をする。そして私のこの発言を待ってましたと言わんばかりの麻雀がバカ強い両親と、その両親すら敵わないどちやくそ強い妹の姿を見て、やはりこの世界はなんかどこかの麻雀漫画か何かなんじやないかと、更なる疑惑を高める私だった。

☆☆☆

「ツモ、九蓮宝燈」

麻雀を始めたその日から5年の月日が流れ、私もだいぶこの世界に染まってきたなと改めて実感する。

何故ならば、まず間違いなく前世の私であれば、人生で一度和了れるか否かというレベルの役満をこれほど無感情に和了ることなど出来なかったからである。というのも我が生家である宮永一家の麻雀ばうわーは明らかに異常で、東一で役満が上がった程度では当たり前のように捲られるのが常なのだ。

「ツモ、嶺上開花。子の3倍満は24000。責任払いよろしくね、お姉ちゃん」

「はい……」

早速、当然の権利のように次局で点棒を筆られる私。しかしこのめちやつよ妹、さらつとやってるが、前世の感覚であれば嶺上開花による責任払いなんか一生に一度あるか無いかというレベルのレア役である。なんなら前世であれば3倍満すら一週間掛けても出せない自信がある。けれどこの妹にとってはこれが平常運転というのが恐ろしい。

「ロン、親の満貫は12000」

「ツモのみ。500オールの本場は600オール」

「ツモ、8200オール」

「ロン、18300」

そしてそのまま妹の連荘であっさりとその局は終了。妹とは対面だったからか、和了られる度に全身を射抜かれたような錯覚に陥って

しまう。おかしいな、麻雀ってこんなに早く終わるゲームだったっけ？

「やっぱりお姉ちゃん、そのモードだと弱いよね……」

「そうね。あまりにも防御が疎かよ」

「え？ 東一ほぼ確定で役満和了れるのに？」

まさかまさかの駄目出しである。当たらない自信があつたとしても、もし方が一直撃したら即死の反則能力が弱いと評されるとか馬鹿じゃねーのなんだこいつら化け物か？ 知ってた。

そんなこんなでしばらくわちやわちやと話していると、不意に父が「そろそろ寝るか」と言い出して牌を一人で勝手に片付け始める。こっちはこっちでマイペースが過ぎると思う。また離婚言い出されても知らんぞ。

とはいえ既に夜も11時。明日からは私も妹も新学期が始まるわけで、流石にこの程度の夜更かしであれば支障はないと思うが、早めに寝るに越したことはないだろう。

「まあ、初見殺しが今更通じるわけないのは知ってたけどね……」

飽きるほど同卓している家族に初見殺しが通用しないのは当たり前だ。如何な初見殺しとはいえ、それは初見であるからこそ効果の高いものなのだから。

……………

……………

……………

「ですので！ なんら気兼ねすることはなく、皆様との学園生活をお待ちしておりますわ」

壇上にいる少女が吠える。風もないのに靡く金髪が、この講堂にいる全ての人種を魅了する。

龍門渕透華と名乗った女性。新入生代表としてその場に立っている彼女は、この世界が漫画的なそれではないかという疑惑を抜きにしても、他の人物とは比較にならないほど、圧倒的と言える個性キャラクター性を持っていた。

(今時、逆に珍しいくらいステレオタイプのお嬢様だね……)

一目で『如何にも』という、過剰な存在感を主張している女性。キャラ付けでは絶対に出せない馴染みきったお嬢様口調。疑惑がーだとかもうなんかあれだ。こんなの絶対に一般人じゃねえ。

「なんか、凄い人だったね……」

何せ入学式直後、たまたま隣に座ったクラスメイト(継続)の第一声がこれである。話題性抜群ですね。私自身、割と会話のレパートリーが乏しいので助かります。

「理事長の娘とか孫とか、そんな感じのこと言ってたね」

「そうそう！　なんか気品？　みたいなのが溢れてたし、本当のお嬢様ってあんな感じなのかなあ」

「気品はともかく、遠目だけどめつちや髪サラサラだったからそこは興味ある」

「え〜？　そういう宮永さんも相当じゃない〜」

「そうかな……？」

当たり障りのない会話。特に突っかかることもなく不穏な空気もなく、ひたすらに平坦な言葉の応酬。たったの数分で学校中の話題を搔っ攫った彼女に比べると、我々の如何に平凡なことか。

だって龍門渕ですよ龍門渕。名前からしてもう強そう。新入生代表ってことは学年首席で容姿もあの通り淡麗。私も宮永とか普通の苗字だし、隣の子なんて苗字佐藤ぞ？　あまりに普通過ぎモブて話になりません。

「……あの子、麻雀も強いんだってさ」

ボソツと、私を挟んで佐藤さんの反対側に座る、我々よりは若干キャラの濃い文学少女オカルトマニアな礼堂静さんが不意にそんなことを呟く。ちなみにこの子も一年時に同じクラスだったが、別にレズビアンだったりしないごくフツウの少女である。ついでに言うなら、同じ麻雀部。



「へ？ 麻雀もって、またまた。ホントだったら、ますます完璧超人だね」

「嘘じゃない。後輩の子が忠告していた。自信家かつ好戦的でもあるから道場破りとかしかねないって。照も注意した方がいい」

「え、私？ 別に入部するなら歓迎するけど」

何故麻雀が強ければ完璧超人なのかは分からないけど、強い人が部活に入ろうって思っているのならそれは喜ばしいことじゃないかな？

そう考える私に、静は嘆息して、

「違う。この場合は、部活そのものが潰されるという意味。実際、小等部にあつた麻雀クラブは事実上あの子のグループに乗っ取られたらしい」

「うーん…？」

悪役令嬢？ いや、まだこの世界が物語の世界だと決まったわけでもないんだし、こういう思考は失礼か。ただ単に、龍門瀧さんが評判通りの少女ではなく、一筋縄ではいかないかもというだけだろう。

このタイミングで新たな担任の先生が現れ、自然と会話は中断された。この時はまだピンと来ていなかった会話。その意味を真に理解したのはその日の放課後のことである。

☆☆☆

「いらっしやいまし！——ツモ、8000オール！ トビ、ですね」

腰まで届きそうな金髪がふわりと舞い上がる。こんな場面なのに『やっぱり髪綺麗だなあ』なんて思っている私は、緊張感とかそういうのが多分足りていないんだろう。

「うわっ、死屍累々……」

部室の扉を開けた直後、思わずそのように呟く。そしてその表現はまさしく的確で、そこそこ広い部室には何故か、見慣れた部活の面子のほぼ全員が床に倒れ伏していた。いや、なんで？ 物理的に殴られ

たわけじやないでしょこれ？

どういふことなのか聞こうと先程対戦していたらしき静を起こそうとすれば、既に彼女は気絶していた。どういふことだっただよ。

「あら？ 貴女もこの麻雀部のかたですの？」

「え、ええ……」

目を付けられた。まずい、と思う間もなく、龍門渚さんの取り巻きに説得され、あれよこれよと卓に座らせられる私。

「まずは腕試し——そう思っておりましたが、この麻雀部はなんて不甲斐のないこと。これでは衣を任せるのに不適ですわ。それならいっそ、わたくし達で管理した方がマシということですよ」

「……………」

なにがなんだかわからないが、とにかく私の部活がピンチであるというの分かる。この龍門渚さん、口でこそお嬢様特有の丁寧な言い回しだが、その裏に有無を言わさぬ迫力を感じる。ならばここで言う『管理』とは、まさしく字面通りの意味なのだろう。

「……………」

そんなことはさせるか。自然とそう思った。それに彼女は不甲斐ないと表現していたが、私はこの一年ずっと共に過ごしていた麻雀部の人たちの強さを十分に知っている。例のプロのような化け物相手ならいざ知らず、こんな雑に蹴散らされていい人たちではないのだ。

「……………通し、かな」

現在、私は彼女の取り巻きと思わしきメイド服の少女二人に囲まれている。そして私以外の卓の面子も知らない人——すなわち彼女側の人間。つまり龍門渚さんには我々全員の手牌が透けてるも同然。もしもあの子達が同様にここまでされたのであれば、それは普通に勝てるはずもないだろう。

（ふむ……）

だが悲しきかな。私は普通の人間じやない。母曰く、オカルト——麻雀限定で働く謎の能力が蔓延る人外魔境の卓で、それでも互角以上に競ってきた自負がある。あまりにもインチキ極まりないので普段は一つを除き封印していたが——ここはまさに、その使いどきだろ

う。

「……………」

手牌が配られる。私はそれを確認せず、伏せたままに2つずつ勘で理牌していく。最初は疑問にも思われなかったが、それが6つ、8つと続くにつれ、段々と周囲の視線が不審なものになっていく。

「ふう……………」

そして13——その全てを並べ終え、崩さないよう丁寧にこちらへ開く。背後にいた2人のメイド少女の、息を呑むような音が聞こえた気がした。

照 手牌

「一二一二三四五六七八九九九」

龍門渚さん当人は狙わない。おそらくだが、彼女は他の面子よりも頭一つは抜けている。昨夜にも改めて実感したように、このオカルトはまさしく初見殺し。一度でも警戒されると通用しなくなるため、最も弱い人間<sup>常人</sup>を叩く。

「……………」

3巡目 沢村智紀 手牌

「九②③④⑤⑥⑦⑧⑨23479」

打牌

「九」

「ロン」

幾分か経って、ようやく零れ落ちた当たり牌に宣言する。龍門渚さんの取り巻きやっているだけあって沢村さんというらしい眼鏡の子も相当な実力者っぽかったが、交通事故にでも遭ったと思って諦めて欲しい。

和了り宣言に対して眼鏡の人がビクツと震えるも、まだ3巡目なので安手だと思っているのだろう。表情には不安以上に油断が刻まれている。すまん、これで終わりですたい。

「九蓮宝燈。32000点……………これで終わり」

「え……？？」

「は？」

「な——なん、ですって……!?!」

沢村さんに数秒遅れ、龍門渚さんがガタツと音を鳴らして立ち上がる。面白い顔をしてる……けど。

(うーん、意外とあんまりスカツとしないな。ある意味で通し以上にインチキ極まりないからかなこのオカルト)

まあ、とにかく。腕試しというのならこれで十分だろう。事故当然とはいえ、こんだけボロ負けして「やはりこの麻雀部はワタクシが管理すべきですわあ！」とか言い出したら恥知らずにも程があるし。

とりあえずこの勝利を言い訳に、何やらキーキー言ってる龍門渚さんをその取り巻きごと無理やり追い返す。元より無礼はあちらだからか、案外簡単に引いてくれたので一安心した。……まあ、絶対に一時凌ぎでしかないだろうけど。

「ふう……」

そうして静かになった部室で、改めて卓の椅子に深く身体を預ける。

今日の出来事は、明らかに普通じゃなかった。これはいよいよ、本格的に疑惑が真実になる日も近いのかもしれない。

「あんな子が登場人物の作品……関わりたくないなあ……」

そんなことを独り言ち、軽い気持ちで龍門渚さんの残されていた手牌を倒す。まだ3巡目だったはずなのにそこには当然のように跳満以上を狙える大物手が眠っていて、ますます私はげんなりとするのだった。

## 何かが突然訪れたある日

『絶対に和了る能力』と聞かされて、驚愕よりも疑問が先に出たのをよく覚えてる。

「……つまり、どういうこと？」

母曰く、麻雀におけるオカルト使いには良くある相性以外にも強度やレベルといった概念が存在し、上位のオカルト保有者であればトツプロすら凌駕する可能性があるのだと。

(……)

わけがわからないよ。正直な感想がこれだ。いやだって、絶対に和了るなんて毎回やられたら、そんなものはや麻雀である必要すらないじゃないか。

流石にこれは極端な例ではあるが、しかしこのオカルト能力、何故一般に認知されていないのが謎なくらい保有率高めかつ多種多様で、基本的に制約が重いほど強力になるというまんまハンター漫画の念みたいなき質をしている。

必然、疑問が生まれた。それは普通の人間が抗えるものなのかと。私自身、そのオカルト能力を使えるので私を普通の人間に含めていいのかはさておき、オカルトがないと戦いの土俵にすら立てないようなら、牌効率など考えるだけ馬鹿馬鹿しい。

幸いと言っているのか、母は条件こそ厳しいものの『特定条件下において高確率で特定の役を和了る』ことのできる能力の持ち主であり、検証する場所や時間には困らなかった。仮にもオカルトと呼ばれるモノをこういった形で暴くのはちよつと……いやだいたいぶ恐ろしかったが、両親に才能があるとかベタ褒めされたらまあそれなりに頑張るよね。

「ふむ……」

そしてその検証の具体的な手順だが、まず実際に条件が成立した卓を残し、山や河や手牌を全て表向きにする。そしてその中で『他者が和了れる可能性はあるのか』というのを調べる、という単純なもの。

結論としては、『可能である』。それはおそらく、どんなオカルト能

力が相手でも。

配牌に干渉するオカルトが発動した時点でどう鳴きを絡めても天和地和が成立する可能性は消滅し、東一の一巡目で役満を和了ったような局でさえ、鳴きを絡めれば阻止できるルートが存在する。

むしろ強力なオカルト能力であればあるほどその傾向は強く、全員の配牌が十三不塔の状況下かつオカルト保有者がダブルリーした場合でも、実力を問わず必ず卓にいる全員が和了ることができ。

それは無論、他者に頼らずとも。まるで運命に定められているかのように。

「……………」

私はこれを、利用できるんじゃないかと考えた。実力を問わずして全員に和了れる可能性があるのなら、むしろ強力なオカルト保有者であればあるほど、その実付け入る隙は大きくなる。

そしておそらく、この事実はまだ知り知れ渡っていないはず。何せその『絶対に和了る』能力者であるはずの母ですら考えもなかったことだから。

こういう時、直感は大それたこと教えられた。それは偶然か運命か、私には明確に『見』の才能がある。ならば私が昇華すべきはその方向性。それに特化したオカルト能力。

名前も付けた。伝承に肖り『照魔鏡』——相手の全てを、暴き照らし出す鏡。

言うまでもなく、私の自慢の能力である。…………例の初見殺しは、実はその能力の副産物だったりする。

まあ、つまり、何が言いたいのかと言うと。

「…………あれ？…この能力、コーチとかに向いてるんじゃない？」

宮永照。中学2年生。能力とかに心惹かれるお年頃。執事やメイドといったキワモノ含む各種コーチング資格の充実する龍門渕高校へその進路を決めた瞬間である。

☆☆☆

「はい、ロン。タンヤオとピンフドラ2で……30符だから7700かな。これで終わり」

「ああああああー！」

オーラスで適当に捲ると、面白いくらいの絶叫が部室に響き渡る。やっぱり変なインチキスキル使うより、こういった駆け引きのが面白さという点では上だなと改めて実感。

(しかし……あつという間に馴染んだねこの子たち)

サラサラの金髪をぶんぶん振り回して悔しがる龍門渚さんを見て思う。そんなことしていると美人が台無しだなとも思うが、不思議とこちらの方が生き生きとしているように見えるのは気のせいではないだろう。

「宮永様。お茶が入りました」

「ん。ありがとうございます」

「そこー！ お茶などしばいてる場合ではありませんわ！ さつさと次の局に行きますわよ！」

そんな無様なお嬢様の姿に内心で笑いながら、ちょうど良いタイミングでメイド少女その一（歩さん）から差し出された紅茶に舌鼓を打っていると、そんな言葉と共に指先をずびしつと指し示される。お行儀が悪いですわお嬢様。口調も悪いですわよ。

「いやいや、透華。いつまでやってんだって。もう他の面子も全員呆れて帰っちゃったし、そもそもあと30分もしないで最終下校時刻だぜ？」

「そうだよ透華。これまで付き合ってくれたのに劳い一つもないのはちよつと……」

「そんなもの、わたくしが勝利した後に盛大なパーティーと共に行いますわよ！」

がーつと吠えながら龍門渚さんが割ととんでもないことを発言する。彼女が言うからにはそのパーティーの規模は凄いことになっていそうだが、それ事実上龍門渚さんの祝勝会ですよね？ どんな気持ち

で参加すればいいんだ私はそれに。

そんな彼女を宥めているのは、彼女の取り巻きである井上さんと国広さん。どうもどちらとも龍門渚さんの付き人みたいな感じらしいのだが、イエスマンというわけでもなくこうして割と庇ってくれる。「……………」

ここ数日付き合った感想というか事実だが、彼女はとてつもない負けず嫌いなのだろう。何しろ決着時の反応が非常にわかりやすく直情的で、付き合わされる身としては厄介だが素直に好感が持てる。

金持ち特有の嫌味な感じもない。総評としては、苦手ではあるが良き友人、みたいな感じだろうか。あとは遠目に見る分には非常に面白いので、唐突にライバルとかが現れて、出来ればそのままシレッツとフェードアウトして後方師匠面していたい。え、私が宿敵<sup>ライバル</sup>? お前が思ってるならそうなんだろうお前の中ではな。……実際、実力差的にはちよつとね。

「…………でも、本当に強い。もしかしたら、衣より……………」

私の対面に座っていた女性。いつか交通事故で轢殺した眼鏡ちゃんこと沢村さんの眩きに、私以外の全員がピクつと反応する。

衣。彼女たちと付き合うにあたって、時折その名前が出てくる。そして名前が出ると決まって皆が意味深な反応をするので敢えてスルーしていたのだが、いい加減追及した方がいいのだろうか。

「そう…………ですわね。いい加減、誤魔化すのはやめにしましょう」

空になったマグカップを弄びながら悩んでると、不意に佇まいを整えた龍門渚さんが神妙な表情で呟く。さつきとの落差で笑うからやめてほしい。

「宮永さん」

「ん?」

「既に夜分遅くとなり誠に恐縮ですが、これから更にお時間を頂いても……………」

「…………まあ、別にいいけど」

どうせ暇だし、そもそも用事なりなんなりがあったら、こんな時間まで付き合っていないしね。



☆☆☆

「……………」

照 配牌

〔一二三三六七八九⑨⑨北北東白〕

悪くないな、というのが、最初の感想だった。

あれよこれよと高そうな外車に乗せられて降り立ったその先。我が宮永家の数倍はありそうな立派なお屋敷（龍門渚さんちの別荘らしい）の最奥、そこにひっそりと佇んでいた少女。

天江衣、と名乗ったどこか龍門渚さんに似た小学生くらいの子は、最初の印象に変わらず龍門渚さんの親戚の子であるらしい。ついでに彼女の同級生（!?）だそうなの。

もうこの時点であからさまに厄ネタなわけだが、とはいえこの世界の法則的なあれやそれやで、少女が提案したのは麻雀による真剣勝負。まあこんなところにまで来て断るのもアレなので今に至る、というわけである。

「むう……………」

視線を配牌から僅かに上げて、天江さんの姿をじっくりと『見』てみる。

——強い。文句なしに。少なくとも、単純なオカルトの強度で言えば、母どころかあのめちやつよ妹すら凌駕しかねない。

この強度のオカルトが相手だと、りゅうもんぶちさんまともな人間ではもう勝負が成立しないのは目に見えている。察するに、天江さんは麻雀が大好きなのに、その類稀なオカルトから競争相手に恵まれず、そうして拗ねて屋敷に引き籠もっている、みたいな感じだろうか。

「うーん。これで」

打牌

〔9〕

少し悩んで、手牌を整理する。面倒なルールのオカルトだが、ここまでガチガチのオカルトであれば抜け道は幾らでもあるだろう。……背後に控えていたメイド少女その2から怪訝な目で見られたが、そういうのは対戦相手に伝わるかもしれないからやめようね。

「さて……」

天江衣 手牌

〔二五六九1167⑤⑨南白発発〕

打牌

〔南〕

対する天江さんは、たぶんおそらく手堅く字牌の整理から。先程までは難しい言葉で色々と囁っていた彼女だが、どうも集中すると口数が少なくなるタイプらしい。あんまり他に意識割く余裕ないから助かる。

2巡目 照 手牌

〔一二三23678⑨⑨北北東白白〕

打牌

〔⑨〕

3巡目

〔一二三236789⑨北北東白白〕

打牌

〔白〕

4巡目

〔一二三八236789⑨北北東白〕

打牌

〔7〕

（うーん。我ながら暴牌だなあ、これ）  
こうしないと多分和了れないから仕方ないにせよ、牌効率もクソもない馬鹿げた闘牌だと自嘲する。

既に能力の詳細は割れている。卓上全体に対して遅延を発生させるデバフタイプのオカルト。海底で和了れるのはおそらくその副産

物で、根幹は卓全体への支配そのものにある。

加えて、これはまだ不確定だが支配自体はほぼ全自動。鳴きなんかを入れて調整する必要がない代わりに、もしも似たようなオカルトで上から押さえられたら多分ポロポロになる……だろうか。

(まーこんな普通は絶対負けないような能力が全自動とは不幸ではあるけど、だからこそ私を呼んだんだろうし、テキトーに叩きのめして終わりかな)

他の人が最後まで和了れないのなら焦る必要もない。送り込まれる牌を解析し、一つ一つ、躡り寄るように手牌を整えていく。

……………

……………

……………

「……………」

照 15巡目

(一二三四五六七八三北北中中中)

打牌

(3)

(リーチは……いつか。引つ掛からないだろうし。無理する場面でもない。メンホン中、一気通貫、ドラ2)

一点読みはかなり細い和了り筋だが、ここまで元の形から脱線してそれでも和了形になったのなら多分いけるだろう。ちよつとオカルトの相性が良かっただけの気もしないでもないが、悪いのならばともかく相性が良くて困ることはない。

「む……？」

張った瞬間、天江さんが何故か突然怪訝な表情をする。おかしいな、ポーカーフェイスは得意なだけ。いや、こんだけ強力な支配

を卓全体にやっつてれば聴牌気配くらい感じ取れるのか？

「……………ふむ」

天江衣 16巡目 手牌

〔七八九九一七89⑦⑧⑨発発〕

打牌

〔九〕

そのまましばらく悩んでいた天江さんだが、しかしそれでも同格相手との実戦経験に欠けていたのか、それともまだ私と対戦するのは初めて且つまだ東一局だからか、おそらくは感じた脅威を気のせいだと思いついで不要牌を放る。

「ロン」

「む……………ほう。もしや、とは思ったが、まさか本当にそうだとはい。これは中々楽しめそうだし」

「えっと、混一色中一気通貫ドラ2で八翻。16000かな」

結構結構。とかなりの失費なのに何故か満足そうにしている天江さんから点棒を受け取る。楽しそうなのはいいけど、よくよく考えたらもう19時になるんだよね……………。

（うーん。まあこの様子だとまた呼ばれたりしそうだし、今日はとつとと終わらせよう）

ちらりと、両端にいる沢村さん及び井上さんの両名を見る。真剣勝負の邪魔にならないよう事実上の和了放棄をしているみたいだけど、それでも火の付いた天江さんを崩すよりかは幾分かやり易そうではある。

「ん……………」

照 配牌

〔一②②③④④⑤⑤⑨東東南南白〕

ちよつと力尽くで支配から抜け出し、必要最低限の点数が確保できそうな手牌を用意する。予想よりも高めになりそうで次局以降がそれなりに不安だが、まあ何とかなるだろう。多分、きつと。

「宮永照、と言ったな——貴様は衣の莫逆の友となるか？」

「やあ……………」

照 5巡目

〔②②④④⑤⑤⑨⑨東東南南白西〕

打牌

〔白〕

トラツシユトークを適当に聞き流し、割といい形で聴牌。天江さんもなまじ支配が強力な分、上から強引に無力化されるのを想定していないようで、今度の聴牌には気づかれていない様子もない。あれ、これもしかして直撃で行ける……？

天江衣 12巡目

〔五赤五五24567北北中中中西〕

打牌

〔西〕

「あ、それロン」

「……何？」

それからじっくりと狙いを定め、12巡目にしてようやくこぼれ落ちた牌に和了宣言。いやー、相手が最後まで和了らないって分かっていたら時間も使い易くてイイネ！ 普通は分からないとか言ってはいけない。我ながらおかしいって自覚してるから。

照 和了形

〔②②④④⑤⑤⑨⑨東東南南西〕

「混一色チートイドラ2で跳満。12000で終わりだね。お疲れ様でした」

「なんだと……!?!」

天江さんがそのつづらな目を限界まで見開く。うーん、この子も髪サラサラだしお肌ツルツルで羨ましいなあ。まあこの子の場合、幼い容姿の問題もあつてか美麗ってよりまんまたまご肌なんだけど。

ここまで何も出来ずにして敗北したのが理解しきれないのか、倒された私の手牌と河の様子を見て呆然とする天江さん。その様子を見て、私は彼女がなるべく傷つかないように、丁寧な言葉を選び、

「多分、最初から本気なら五分五分だったかな…？ まあそれはともかく、もういい時間だから今日のところはお暇します。多分色々納得がいけないと思うけど、それなら一晩じっくりと考えて、それでも分からなかったら麻雀部まで来てくれると嬉しいな」

これでも私、コーチ志望だったりするからね。と告げて踵を返す。

想像よりもショックが深かったのか、その言葉に対する反応はなかった。けれどまあ、多分大丈夫だろう。何故なら彼女には、わざわざこんな場所にまで私を呼びつけるような、心優しい友達が付いているのだから。

「……ありがとうございます」

部屋のドアを開けてすぐ、部屋の外で待機していた龍門渕さんからそんなことを言われる。なんとなく言わんとしてることは伝わるけれど、それもどうなんだろう？ 客観的に見て私、あの子を麻雀でボコボコにただけですよ？

「それでも、あの子にとって、貴女のような存在は救いになるのですわ」

「……多分だけど、やり方によっては龍門渕さんでも勝てると思うよ？」

流石にその言葉は予想外だったのか、龍門渕さんは目をパチクリとさせると、

「あら。ならば今後もよりいっそう、貴女には世話になりそうですわね」

「……………」

あまりに綺麗な笑顔でそう言われ、不覚にもその姿に見惚れてしまふ私なのだった。

## おそろく何かを諦めたその日

「しかしアレだな。宮永先輩はなんかほら、相手によつて随分と打ち筋が違うんだな」

最初にそう呟いたのは、意外……と言つては失礼なのだが、少なくとも私にとつては意外なことに井上さんだった。

「んー、まあそうだね。と言つても多分、この面子だと衣ちゃん限定だろうけど」

案の定部屋に居着いたロリっ子を横目に返答する。ぼんやりとでも背後から私の打ち方を見ていたならば、それは当然疑問に思つて然りだろう。

「ボクも気になるな、それ。特に何か変な力を使つてるわけでも無さそうなのに、どうして衣に勝てるのかを」

便乗したのは、今回は下座に座っている国広さん。まあ君は気になつているよね。単に言い出す機会がなかっただけか。

それと何か勘違いしているみたいだけど、力そのものは割と使つていますよ？ 私の場合、その力が内に向かつて他に影響しないから認識できないだけだからね。まあ使わなくても衣ちゃん相手なら多分勝てるけどね！（ドヤ顔）

まあそれはさておき、気づけば龍門渕さんやあの衣ちゃんまで真剣な表情で耳を傾けている。彼女らも面と向かつて聞き辛かっただけで、やっぱり気にはなつていたのだろう。

「ん…」

とはいえ私も、これは具体的に説明できるものでもなく、言つてしまえば勘のよなものなので少し悩む。……いや、そうだ。ここはちよつと半荘も終わったことだし、ちよつと衣ちゃんにも協力してもらつて――

「衣ちゃん」

「ん？ なんだー？」

「ちよつと協力してもらつてもいいかな？」

「分かったぞ！」

真剣勝負以外ではだいたいぶ緩くて素直な衣ちゃん（口調で判別できる）が、私の要請に従って全力で卓に支配をかける。

無論、それに対して今回は私も何もしていない。その状態で得られた配牌がこれだ。

照 配牌

（五七八22333④⑨東北白発発）

「…………どう思う？」

配牌を開き、そう質問する。随分と漠然とした質問ではあるが、そこには特に触れられず、龍門渚さんから各々の感想を告げる。

「それなりの手ですわね。二索と三索が対子、萬子には良形の面子候補がありますし、役牌を鳴けばそれだけである程度形にはなります」「ボクも透華とおおむね同意見かな。実際に鳴くかどうかはさておき、字牌を整理し切った頃には聴牌してそうだね」

「かなり良い手だと思っぜ？ とはいえ衣が相手だ。素直に鳴かせてはくれないそうだがな」

「衣なら海底で和了れるように立ち回るぞ」

衣ちゃんの意見は参考にならないので置いておいて、ひとまず手前の山を河の場所にズラし、その状態で山から私がツモるであろう牌を抜き出して裏向きのまま山があった部分に並べる。

「はい。では実際にツモって最終形がどんな形になるのかを見てみます」

萬子と索子をごっそり除け、一つずつ開きツモっていき手牌の形を整える。いきなり左側の牌を除け出した私の暴拳に衣ちゃん以外の面子がびつくりしているが、とりあえず出来た形がこう。

照 手牌

（②③④⑥⑥⑨⑨⑨東東東発発発）

「妨害されない前提でこんな形かな。役牌混一色三暗刻。裏ドラがチューピンだったから最高形は門前リーチ一発ツモドラ3役牌混一色三暗刻の数え役満。役牌が残ったのは予想外だけど、これは何か能力が作用したとかじゃなくて多分上振れだね。こんなこともある」「げ、原型がありませんわ……」



東、発にスーピンチューピンが残ってるじゃん、じゃなくて。まあ言わんとしてることはわかる。あの配牌から最終形がこうなるなんて普通は想像もできないだろう。

捲れた全てのツモ牌と最終形を見比べて、それでも納得できなかったのか国広さんが声を上げる。

「……ぐ、偶然だよな？　だって萬子や索子を使っても、一向聴までなら普通に——」

「でも、和了れない。聴牌もできない」

敢えて厳しく断言してあげると、流石に言葉を詰まらせる国広さん。理不尽だとは我ながら思うのだが、ここは強引にでも納得してもらわないと困る。

「多分だけど、この萬子と索子は罨です。あるいは撒き餌」

「罨？」

「そう。……実際のところ、どうなの？　国広さんは衣ちゃんクラス的能力者相手に……いや、こんな異常な麻雀を打つ人間に対して、実力で打ち勝てると思う？」

「……」

国広さんはちらりと衣ちゃんの方に視線を向けるが、やっぱり無理なのか黙り込んでしまう。厳密に言うならオカルト使いという時点で実力なんか関係ないも当然なのだが、そこら辺は長くなるのでとりあえず省くとして、

「あの、すみません」

「ん？」

「宮永さんは先程、衣を指して『能力者』と仰いましたが、よもや衣に起きている怪現象について心当たりがお有りでした？」

「……んん？」

そろそろ本格的な解説に移ろうとすれば、ちょうどその出鼻を挫くようなタイミングで、そもそも根本的なことを質問されてしまう。……いやまって、え？　身内に衣ちゃんがいるのにそのレベルからの？

（あー、いや、そっか。そういえば一般には認知されてないんだっけ

……)

正直、上位の打ち手はオカルト標準装備かそうでなくとも認知しているのが普通だったのですっかり忘れていた。でもホント、めっちゃつよ妹や衣ちゃん、母に私とこのレベルの能力者が市井に転がっているのに何で一般に認知されていないんだらう？

「……そうだよ、照」

「うわあっ!？」

不意に背後からあすなる抱きされ、前方に集中していたのもあつてか凄いい声が出てしまう。

慌てて振り返ればそこには抱きついてきた静を始めとした麻雀部の面々がほぼ全員こちらへ注目していて、いつから話を聞かれていたのかと思うと途端に恥ずかしくなる。

「照、ここ最近ずつと新入りの世話ばかりでツレない……かと思えばなんか重要そうなこと話してる……私にも教えてほしい」

「そうですねよ照さん。貴女はこのエースなんですからね？ そういった情報はしつかり共有してもらわないと。……そもそもそんなものがあるのなら、何故教えてくれなかったんですか？」

「え？ いえ、別に使わなくても勝ってたので……」

部長からの指摘に、やや歯切れが悪く返答する私。これは半分は本当だが、もう半分が嘘である。

如何に同じ部活の仲間と言えど、それは同時に切磋琢磨するライバルとなる。そうになると、特に私の見せ札になるオカルトは意識されるとそれだけで無力となるので、知る人間はなるべく少なくしたかったのが一つ。

またもう一つの要因として、そもそもあまりオカルト能力を意識して欲しくなかったのもある。実際のところ、衣ちゃんがいる今はともかく、能力なんてふざけたものを前提にすると打ち筋がめちやくちやになって地力が伸びにくくなる可能性があるからだ。

その旨をやんわりと説明すると、なんか額に軽くデコピンされた。ぺちん。痛い。何をする。

「これは相談もせず一人で勝手に決めた罰です。とはいえ……そう

ですよ。貴女はそういうところありますよね」

「照だからねえ……」

「……むう」

なんか微妙に納得がいかないものの、まあこれだけ重要な要素を意図して隠していたのは事実なので何も言えない。とはいえこれも良い機会だと、せっかくなので部の全員を巻き込んで軽くオカルト能力について説明をすることに。

「と、言っても。実のところ私もそこまで詳しいわけじゃなく、能力者と表現しているものの、そう呼称するのが正しいかどうかとも知りません」

ただ、それでも。一度でも天江衣と対戦したことがあるのなら、まず間違いなくその全員が思ったであろう。ただ端的に、これは普通の麻雀ではないと。

麻雀という競技は、普通に打てば立直ですら起きる確率は5割を切る。しかしそれは逆に言えば、誰か一人は4割5分の確率で立直が可能なゲームであるということ。

それが半荘一回分、最低8回の確率その全てを潜り抜け、その上で自身は0.4%以下でしか発生しないはずの海底摸月で幾度となく和了る。これは果たして偶然なのか？

「偶然では発生しないはずの事象が偶然発生した場合、それを引き起こした人物はまさしく超能力者であると言える。ただし、それが本当に偶然ではないことを証明するのは誰にもできない」

故にこそ、その発生した事象そのものをオカルトと表現し、それを意図して引き起こせる人物をオカルト使いと呼ぶ。

「そして、オカルト使いの中でも発生する偶然が限定的で明確な者――それがオカルト能力者。少なくとも、私はそう聞いている。特に上位の打ち手となると、ワンピースでカナヅチな人と同程度くらいには見かけるみたい」

「……………照が異様に強いのも、その能力者だからなの？」

発言内容のぶつ飛び具合に戸惑う部員の中、未だに私をあすなる抱きしてる静が耳元で囁く。くすぐったいからやめて。じゃなくて。

……うん、まあ。話を聞いてるとそういう結論になるよね。それも間違っではないんだけど……うーん。

「私は……まあ、そうなるのかな。というかね。実はこの部には私に限らずとも、むしろ麻雀に真剣に打ち込んでいるだろうほぼ全員が、厳密にはこのオカルト使いに該当するんだよね」

「え？」

流星にこの言葉は予想外だったのか、地味に首元にかかり続けた腕の力が僅かに弱まる。

さつきはついワンピースの能力者で例えてしまったが、このオカルト能力は知っての通り、性質としてはHUNTER×HUNTERの念能力に近い。そしてきつと、その習得のハードル自体は恐ろしく低い……何故なら明らかに前世と違うのだ。何というかその、全体的な和了率とかその辺が。

「だって静。貴女初心者相手に半荘2回もやったら、一回くらいは倍満狙えるでしょ？」

「え？……まあ、それくらいなら……」

「それ、ダウトだから。相手の弱さとか関係なく、普通はそう簡単に倍満なんて和了れない」

「ええ……？」

納得ができないのか、静の反応は鈍い。しかしこの点に関して納得できないのはこちらの方だ。龍門瀧さんが特に顕著だが、本来なら麻雀なんて派手さを求める競技ではない。もっと地味で静かで陰険で……3900くらいの点数を細々とやりとりする、そんな全体的に暗い遊びなのだ。

というか倍満なんて親で和了れば初期点数とほぼ同等だぞ。それ相応に難しいに決まってる。どうしてそれも簡単に和了れると思ってるんだ舐めてんのか。

「衣ちゃんが代表的だけど、例えば静であれば、『オタ風を明槓すると、その牌にドラが乗りやすくなる』能力がある」

「……初耳なんだけど」

「いや、言っていないし、聞かれてもないから……でもこれ、火力は相応

に高くなるけど、かなりリスクな能力なの分かる？」

「……そうですわね。積材集めも積そのものに関して、基本的には相手の利益に繋がりがやすいですわ」

口を挟んだのは龍門渚さん。唐突な流れで説明した能力に、きっちりリスクリターンを踏まえた上で発言できるのは流石だと思う。

そしてまさしくその通り。麻雀が相手と対面して行う競技である以上、意識していれば当然違和感が相手にも伝わるし、対戦中は厳しくても後で牌譜なんかを研究されれば一目瞭然。特に部内では毎日のように打つわけで、その度に変な打ち方をされると純粋に読みが鈍る。そもそも積でドラや符を調整してプラマイゼロで半荘を終えるような変態は妹一人で十分なのだ。

「だから短期的には強くなるけど、プロなんかを目指すならある程度の地力が付くまでしばらくそういうのは抜きにした方が——」

「……いや、短期的でもなんでもいいから、手っ取り早く強くなる方法があるなら早く知りたいんだけど」

「え？」

目をパチパチとさせて、思わず静の腕を振り払って強引に振り返る。そこには相変わらずダウンナーな雰囲気醸し出す静の顔があった。……うわ顔近っ。下手したらぶつかってたよ。びっくりしたなもう。

「……あのね、多分だけど。こんな龍門渚さん一人にボコボコにされるような弱小麻雀部でプロを目指す人なんてのは、それこそ照自身や照が実質引き入れた龍門渚さんたち一派くらいなもので、少なくとも私含むうちの大多数は、そんな先のことまで考えてないから」

「えー……？」

そうなのか。ってかそうだとしても、それをはつきりと公言するのはちよつとどうなんだろう。いや、でも……うーん。

(……………)

私自身、割と麻雀は真剣にやっていたのでその発言は地味に衝撃である。というか、そうか。別に麻雀が全ての世界ってわけじゃないんだなここ……こんなにあからさまに麻雀が人気なのに。

「それに私も、衣ちゃんみたいに予告和了とかしたい。『お前達の命脈も尽き果てる!』ってよく分からないけどカッコいいよね」

「……別にあれ、一発芸じゃないからね?」

半ば呆れながら返答する。思った以上にダメージが大きくて衝動的に周囲を軽く『見』渡すと、本当に結構な人数が同意を示している更に困惑。私と静、こんなにも意識の差があるとは思わなかった……。こんなんじゃないや私——いや、それで私が何かするわけでもないけど。

しかし、そうなら……うーん。……。

(……別にいいか。なんか面倒になってきたし)

「じゃあ更に脱線するけど、とりあえず希望者のオカルトを調べてみようか……私、実はそういうオカルトを保有しているので……面倒な条件でも、だいたいは分かると思えます」

しばらく考えて、本人の同意があれば構わないだろうと将来をぶん投げる私。人はそれを思考放棄と呼ぶ。加えて、よもやこんな酷い流れで行われたエンジヨイ勢による大能力精査祭(仮)が、まさかあのような大惨事を引き起こすことになるとは、この時はまだ、誰も予想だにしていなかったのである。

☆☆☆

『場の空気に呑まれる』とは、現在の状況のことを指すのだろうかと思う。

「……これは予想以上かな」

事の発端であるはずの宮永さんが、沈黙が満す空間に波紋を立てる。静寂の中に突き抜けるその声にふと我に返って周囲を軽く見渡せば、ボク達以外の人、つまり各々その『能力』とやらを試していたはずの部員たち全員が、等しくボク達の卓に集中しているのが見取れた。

「——では、起家である私から」

びくりと、大げさなほど勝手に身体が反応する。聞き覚えのあるは

ずなのに、あまりに聞き慣れないその声。それは今現在において、間違いなくこの空間の中心人物にあたる彼女から発せられたものだ。しかしそれは、原因ともなつた宮永さんのことではない。

即ち、ボクの主人でもあり友人でもある龍門瀏透華。いつも陽気な彼女が放つ異様な「オカルト気配」に、まさしくボクは吞まれようとしていた。

国広一 手牌

〔三三六七九2赤55①④④北西〕

ツモ

〔北〕

（パツと見、手牌は悪くないけど……）

むしろ『悪くない』ことこそが問題なのかもしれない。現在、この卓に座っているのはボクの他に衣、透華、宮永先輩の3トップだ。ボク自身もそれなりには麻雀の腕も立つ自負があるにせよ、この面子相手に勝てると思うほど自惚れてはいない。

特にオカルトなどという非常識な話を証拠付きで散々聞かされた直後だ。いや、宮永先輩の話が本当ならボク自身も自覚していないだけであつてそのオカルトとやらを使えるそうだけど、存分に使い熟しているはずの宮永さんには絶対に劣るだろう。

（でも……）

打牌

〔西〕

ぐるりぐるりと様々な思考が入り乱れ、最終的な結論として選んだのは普段と何も変わらない平凡な捨牌それ。これではマズいと全身が警鐘を鳴らしているのに、何をすべきかさえ分らない。

宮永照 打牌

〔赤⑤〕

まるで助けを乞うように宮永さんの方へ視線を向ければ、彼女の第一打は当然のようにセオリーから外れたもの。無論、手牌の形が最初から良いようなら危険牌になりかねない赤ドラを巡目の早いうちに捨てる、というの間違まちいではないのだけど、彼女のソレはボクの平凡な選択逃とはまるで異なる気配オカルトを感じる。

「ほう……っ？」

天江衣 打牌

(赤五)

その思考を証明するように、衣が宮永さんとほぼ同一の牌を手牌から溢す。宮永さんに衣、この卓にいる圧倒的強者2人が全く同じ選択をした。ならばきつと、間違っているのはボクなのだろう。それが如何に、傍目からはオカルトにしか感じられなくても。

「リーチ」

「立直棒は必要ありませんわ。ロン、5200」

「……はい」

10巡目、卓にいる全員がただただツモっては捨てるをしばらく繰り返したのち、動き出した宮永さんの立直牌を透華が直撃する。

しかしそれに衝撃を受けるわけでもなく、むしろ得心したように宮永さんは点棒を差し出す。何気に透華が宮永さんに直撃したのは初めてだったような気がするけど、今の正気には見えない透華を見るに、反応を期待するだけ無駄だろう。

「ツモ」「聴牌」「ツモ」「ノーテン」「聴牌」「ツモ」「ツモ」「ノーテン」

「聴牌」

それからはひたすらに透華だけが和了り続けて宮永先輩と衣(とついでにボク)をボコボコにするという異様な光景が続き、透華の点数が50000点を超え、遂に最下位である宮永先輩の10倍以上と圧倒的な大差にて迎えたオーラス。

そこでふと気づく。そういえばこの半荘で、誰も一度も鳴いていない、と。

それは、ボクと実力が切迫する純くんが鳴きを多用するからこそ気付けた異常。そう思うと、よくよく思い返してみれば、無理やりにも鳴ける場面がなかったのではと、浮かび上がったその事実、そのあまりにあんまりな偶然オカルトに驚愕する。

透き通る透華の冷たい声。それが振り返るとまるで反響他者による宣言しているかのようにリフレインされるのは、その中に余計なノイズが一つも混じっていないからなのだ。



「——いや、違う。正確には、一人だけ——」  
「ロン」

澄み切った泉に上空からダイブするような、無遠慮で無粋な一言が突如として透華に降り掛かる。

咄嗟に俯きかけていた顔を上げれば、そこには冷たい表情のままながらも、どこか動揺を表している透華がいて——そんな彼女に突きつけられている役を見て、更に驚愕する。

宮永照 和了形

（一一一二三四五六七八九九）

「——32000点。これで捲りトップだね」

「——」

当然のように、必然のように。以前にも見た、一生に一度しか和了れないと言われる役を携えながら宮永先輩は宣告する。

そして、そんな異次元の麻雀を間近で体験したボクは、確かにこんな相手にしていたら地力がどうこうという問題じゃないよね、と宮永さんがそれをひた隠していた理由について改めて実感するのだった。

きつと何かが変わったその日

「うーん、どうしようかな……」

ついにインターハイも目前に迫ったある日のこと。今日は透華が日直だということ一人で部室の扉を開けると、そこには何かの紙切れを片手に珍しく苦悩している様子の宮永先輩がいた。

「こんにちは。お疲れ様です。……一人ですか？」

「こんにちは。うん、一人。HRがちよつと早く終わってねー。うちのクラス、麻雀部は静くらいしかないし、その静も生理酷いからって今日は不参加だし」

「なるほど……」

とりあえず返事が返ってきたので一安心する。そうそう人前で弱みを見せないポーカーフェイスの彼女が、こうもあからさまに苦悩してるので何か重大な事件でもあったのではと邪推したが、口調からもそれほど重要な悩みでもなさそうだ。

「ああ、そうだ。国広さんって1〜5の中でどの数字が好き？」

その証拠に、悩みの内容についてだろう。軽い調子で宮永さんがボクにそんなことを尋ねてくる。質問の意図自体はまだわからないものの、別に回答に困るような内容でもなかったので、荷物を部室の片隅に置きながら軽く答える。

「特に拘りはありませんけど……強いて言えば、1ですかね？ ほら、

ボクって下の名前がはじめ一なので」

「そう？ ……じゃあ国広さんが先鋒でいいかな」

「ちよつと待って貰えるかな？」

ノータイムでエントリー用紙の一番上にボクの名前を書き込もうとした宮永さんを慌てて押し止める。やっぱりこの先輩は色々な意味で、一筋縄ではいかない人だと改めて実感するボクなのだった。

☆☆☆

いつだったか、麻雀のインターハイがあると聞かされて、思わず吹

き出してしまったのを覚えている。

あれは今から36万……という冗談はさておいて、中学一年生になったばかりの当時の私は、麻雀における対戦経験が家族に偏っている、むしろ家族以外との対戦経験がないことを憂いていた。

とはいえ実際のところ、あくまで親の庇護下にしか居られない学生の時分でそれ以上を求めるのは酷であろう。親からすれば、習い事の一つにしたって相応の時間や費用を割く必要がある。特にうちの両親はとある事情からちようどその時期は多忙で、4人で食卓を囲むことすら稀であった。

そうなると必然、私の対戦相手は妹一人に絞られることになる。しかしこの妹……咲も咲でその事情から塞ぎ込んでしまい引き籠もりがちで、とはいえ精神的にはそれなりに歳を重ねている私がい儘を言えるはずもなく、それ以前に間近に迫る生々しい家庭環境の崩壊を目の当たりにして、毎日を怯えて過ごしていた。

「……がああの女のハウスね……」

だから、だろうか。その日はクラスメイトの誘いに乗って、中学校に当たり前のように存在していた麻雀部の部内戦に軽い気持ちで参加した。家に居づらかった気持ちも多少は無くもないが、実際のところ、私自身としても、自分が同年代と比較してどれくらいの位置に存在しているのか気になっていたのだろう。

まずは結論から言うと、その試みは過ちだった。少し考えたらわかることだった。あの家で行われていた麻雀が、まともなモノじゃないことなんて。

部員全員を纏めて薙ぎ払い、以前はプロだったという顧問の先生すら手も足も出せない。最初は凄く凄いと褒め称えたクラスメイトも、その日の部活が終わる頃には何も言わなくなっていた。

私の家の事情もあってか、部活には勧誘されなかった。いや、仮に家の事情がなかったとしても、あの様子では歓迎されることはなかっただろう。

そして存分に思い知った。これではまるで楽しくない。勝つのが気持ちいいのは認めるが、こんな勝ち方では面白いとは言えない。

しかし実際どうすればいい？ 最早私の實力は、ただの事実として他者のそれとは隔絶している。手加減を学ぶというのも違う。勝負事は、あくまで全力でやらないと面白くない。

麻雀から離れる選択肢も頭に過った。けれど私は、麻雀が好きだった。何故なら麻雀は当時の私にとって、唯一と言つていい家族とのコミュニケーションツールだったのだから。

「嫌いになりたくないなあ……麻雀」

全力で打つことすら周囲によつて憚られ、いつしか牌を握るのすら苦痛になる。そうなつてしまえばもう終わりだ。私はそれが怖かった。それを捨てればあの家がどうなるのか、簡単に予想が出来てしまふが故に。

しかし結局、都合良く解決策など思い浮かぶはずもなく、それから丸1年、どこか家族とは気まずいまま、必死のフォローでどうか家族がバラバラになるかならないかのチキンレースを繰り返し続けたある日のこと。

「……ねえお姉ちゃん。明日なんだけど、友達喚んでいい？ 須賀くんつて言うんだけど……」

「——え？」

ついには問題が解決しないまま、ようやく学校にも行けるようになった妹から不意にそんなことを聞かれる。私はきつと、その日の衝撃と感動を、いつまで経つても忘れないだろう。

……

……

……

「——宮永さん、宮永さん」

「ん……？」

肩を揺すられ、微睡んでいた意識が覚醒する。視界の端には、いつ

も見惚れていた綺麗な金髪。どこかあの少年と被る眩しい彩色は、私の一番好きな色でもある。

「珍しいですわね。宮永さんが上の空なのは。何か思うところでもありませんか？」

「この時期はちよつとね……まあ、どうでもいいことだよ」

これは本当だ。もうあれは終わったことだ。今更後悔しても意味はない。いくら無力感を味わったところで、解決した以上は自己満足以外にはなり得ない。

(しかし、私がインターハイね……)

正直なところ、あの頃は家族が纏まったままに私が参加できるとは思ってもなかった。だから毎年この時期になると、つつい感慨に耽つてしまう。

今日はそのインターハイ長野予選の初日。56もの高校が犇めき合い、頂点の座を競い合う。過去を振り返ることなんて、終わってから良き思い出と共に構わない。

「ねえ、本当に私が先鋒でいいの？」

試合会場に向かう直前、最後に改めて部員の前で確認する。私は確かにこの部内における平均着順がダントツだが、それでも点棒の奪い合いという点では衣ちゃんに劣る。実際、去年はそれが原因で団体戦では風越に稼ぎ負けた。今回もそうなる可能性がある以上、衣ちゃんに任せた方がいいのではないか。

「先鋒は絶対的なエースを置き、大きく点差を付けて後続を縛る。それがインターハイでは一般的ですし、確かにその戦略は正しくあります。しかし——」

私がつい零してしまった弱音。それをばつさり否定すべく、龍門 隼さんは声を上げる。

「我が龍門 隼高校麻雀部の先鋒は、貴女以外はあり得ない。どれほど理不尽なオカルトでも、どのような相手だろうと安定して戦えて、最悪情報だけでも持ち帰る。それはまさしく先鋒の仕事です。」

——誇りなさい、宮永照。きつと我々の世代にて、正しい意味で『先鋒』に相応しいのは、貴女を置いて他はありませんわ」

」

俯きかけた私とは対照的に、どこまでも堂々と、胸を張って龍門淵さんは告げる。凄い人だと、素直に思う。それは入学式の日<sup>に</sup>茶化していたときとはまるで意味が違う、正しく彼女を表した言葉だった。

「——行ってくるね」

もう振り返る必要はない。去年までとは違い、今の私にはこんなにも頼れる仲間がいる。ならば私はいつも通り、全力で卓に臨むだけだ。どんな相手でも全力を出し切れる。それが私の望み<sup>オカルト</sup>なのだから。

先鋒戦終了

龍門淵	113300
今宮女子	76800
赤沼第一	84700
高瀬川	125200

「ごめん、負けちゃった……」

「つて、何をあつさり<sup>!!!</sup>と負けてるんですのおおおおつ!!!」

「さすがご控室へと戻った私に、予想通りの絶叫が響き渡る。だから言ったじゃん、とは流石に言えない。もう何というかただただ恥ずかしい限りです、はい。」

「……いや、でも、あれはしようがねえわ……むしろよくプラスまで押し返したもんだぜ」

「高瀬川の3年、物凄い豪運だったね……」

「……まさかこの大会での初めての役満が天和になるとは思ってもみなかった」

「ちなみにインターハイですら天和の記録はない。まさに天運。凄い」

「ははは……」

各々の必死のフォローを喝いた笑いで返す私。言い訳をするなら、

あの卓には今宮女子……『最速』の名で有名な門松葉子さんがいて、和了りに対抗するためにはどうしても安手で和了るしかなかったというのが敗因の一つなんだけど……ま、これは野暮な話か。

「稼ぎ負けたのは悔しいけど……まあ、たまにはこんなこともあるよ。麻雀ってそういうものだしね。バトンを渡すことになるみんなには申し訳ないけど……」

そう言いつつも、どこか私の心は清々としていた。確かに負けたのは悔しいけど、これは私が全力で挑んだ結果だ。そして私のような化け物が全力で挑んでも、時には負けることがあるのが麻雀という競技だ。

きつと、だからなのだろう。どんなに絶対的に見えるオカルトに対しても、必ず和了筋が残されているのは。

誰もが卓に座る以上、そこには勝負をしようという意志がある。ならば必ず、そこには勝ち負けが付き纏う。どんな異常な人間も、それが麻雀という競技である以上は、敗北の可能性から目を逸らすことが出来ない。その敗北をねじ伏せて勝利してこそ、勝負とは面白いものなのだから。

「——なににせよ、終わってしまったことは仕方ありませんわ！ ならばそこで待っていないさい宮永照！ 次は貴女のライバルであるこの私が、貴女の分まで稼いで魅せますわ！」

何故か副将である龍門渕さんがこのタイミングで控室から出て行き、それを追い掛けんとして退出した国広さんを私は苦笑して見届ける。

彼女の突飛な行動に、周囲の全体が巻き込まれる。それはまるで、彼女が世界の中心のようで。

しかし、それを愉快なことと感じている私と、いつの間にかそれを受け入れてしまっている自分がいて、こんなおかしな世界も悪く無いなど、改めて実感するのだった。

## 何かに納得せざるを得ない日

別に私は自分達のことを、決して無敵だと認識していたわけではない。

事実、客観的に見て我が校は、全国大会常連校と言えば聞こえはいいものの、その実態は毎年のように初戦敗退を繰り返す井の中の蛙であり、全国という大海に飲まれ、明らかに適応出来ていないのが現状だ。

しかしながら、それでも私は長野の頂点に立つ高校のキャプテンとして、その座に恥じない行いはしてきたはずだ。毎日毎日朝から晩まで研鑽を積み重ね、その上で後輩の指導も欠かさない。

特に次期部長候補の福路や、一年で頭角を現しレギュラーに選抜された池田は私から見ても相当に優秀で、今年こそは全国制覇を狙えるんじゃないか、などと意気込んでいたものだ。

当然、対戦相手の研究も欠かすことはない。城山商業や天竜女学院といった強豪校は勿論、個人的に気になった選手のデータを活用して取り寄せたり、人脈を活かして実際に対戦した選手からその印象を聞くなど、コーチからは心配性と言われることが私の常だった。

だが、池田を見れば分かるように、人材とは何処に眠っているのかわからないもの。団体戦における麻雀は5人で行われ、そういった人材1人ではそうそう覆せない競技ではあるのだが、逆に言えばたった5人が集えばそれだけで参加資格がある。最低限大敗しない実力を伴った人材を5人。厳しいが、やろうと思えば個人のツテでも十分に集められるだろう。そしてその個人が小鍛冶プロのような怪物であれば、風越の栄光も危ういかもしれない。

幸いにも、インターハイ長野予選大会の規模はそれなりに大きく、2日の日程に分けて実施される。56校全てのメンバー全員は流石に無理だが、2日目へ進出した面子、勝ち上がった8校程度であれば1日で牌譜を洗うのも不可能では無い。無論、城山商業や天竜女学院といった事前に調査した学校に關しても省かれる。よって私が最終的に集中して研究することとなったのは、たった1つの無名校の



存在だった。

「龍門渕高校……」

龍門渕高校。風越以上の規模を誇る全国有数のマンモス校で、いわゆるお嬢様学校としてよく知られている。しかしそのブランドは本物で、現在の長野市長や、長きに渡り政界で活躍している大臣の一部がこの高校の出身だということの数多の羨望を集める優良校である。

当然、人材についても相応のレベルだろう。単純に風越以上の生徒数がある。麻雀の競技人口はもうすぐ一億を超えるという。大会に出ようとまでは考えていなかったものの、趣味で麻雀をやっている実力者が部活を機に参戦というのは、あまりにありふれた話でしかない。

まさしくそれを証明するように、レギュラーとして登録されている面子は先鋒を除くその全員が一年生。インターミドルに出ていた形跡もない。おそらく完全に無名の人材だろう。先鋒である宮永は昨年個人4位の有力な打ち手。それが相応の実力者と組めば、決勝まで上がってくる可能性は十分にある。

「……の、はずなんだけど、何これ……?」

そう考えて、今大会のデータを漁る。のだが、その感想としては、困惑の一言である。

先鋒である宮永さんはまあいい。天和を食らってもプラスまで巻き返せる実力は流石の一言で、牌譜からも実に堅実な打ち手であるのが覗える。時折妙な打ち方の相手に対し、対抗するように暴牌するところがあるのが玉に瑕だが、それでも風越でレギュラーを張れる逸材だろう。

次鋒、中堅、副将と順に見る。データそのものは半荘2回分しかないものの、全員が真つ当な実力者であることが分かる。強いて気になった点を挙げるとするなら、中堅の子が時々無理気味に鳴いていた、副将が高め重視の打ち方をするこくくらいだが、これくらいならまあ嗜好の範疇だと思う。団体戦でそれはどうなんだろうと個人的には思うところがなくもないが、結果としてプラスで折り返している以上、それを咎める理由もない。こくまではいい。

しかし最後の一人——即ち大将の子の牌譜であるが、それは明らかに異常だった。

初心者としか思えないような暴牌。異様に進まない他者の手牌。極め付けは——たったの半荘2回で、4回も成立した海底摸月。

単なる確率の偏りにしてはあまりに異質すぎる。理外の打ち手——そうとしか呼べない、全国に時々現れるという怪物。おそらく彼女は、そのうちの一人なのだろう。

幸か不幸か、私にはそれらとの対戦経験はない。だから——だろうか。私はそれをデータとして間近で見ても『そういう人間もいるのだろう』とどこか他人事であったし、またそう言った人種に対して、それでも勝負にはなるだろうと考えていた。

それは理解できないモノに対しての思考放棄だと、その瞬間まで気付くこともなく。

.....

.....

.....

「今宵は朔夜か……だが、それでも構うまい。元より感覚のみに頼るつもりもない。それ以前に——有象無象の相手など、瑣少の力で十二分だ」

なんだ——これは。

とても同年代とは思えない体躯の少女は静かに告げる。あからさまな侮蔑。しかし私はその言葉に反論することができない。どころか——彼女が纏う異様な空気に、飲まれて声も出せないでいる。

発声をしなくては、もはや麻雀が成立しない……はずが、どういわけか、競技は滞りなく進んでいた。というのも、彼女以外の卓の全員が、先程から聴牌すら出来ずにいるためである。

これまでに開かれた手牌を覗く限り、配牌自体が悪いわけではない。とはいえ麻雀は極論すれば運ゲーだ。六面待ちの一向聴でも聴牌確率は5巡して5割前後。最善手を打ち続けても次巡であっさり裏目するなど日常茶飯事でもある。

そうだ。確率的にはあり得ないことでもない。だから私がさつきから10巡連続でツモ切りを繰り返していても大丈夫。だって私の闘牌に、おかしな点なんて一つも――

「ツモ。海底摸月、2000・4000」

文字通り、この場を支配している少女が和了る。この半荘では2度目となる海底摸月。大会全体ではもう10度目にもなるだろうか。

しかし、これも確率的にはあり得ること。大丈夫。ただ運が悪いだけ、何もおかしなところは――違う！そんなはずはない！おかしなおかしいおかしい、こんなものは麻雀じゃない！

18巡目 手牌

〔五六12345678⑧⑧西〕

ツモ

〔④〕

打牌

〔西〕

度重なるツモ切りを恐れ、最後の牌を手出しで放る。乱暴な捨て牌という自覚はあった。けれどそれ以上に、もはや何かが限界だった。とにかく早くこの空間から逃れたい――その時の私は、そんなことしか考えていなかった。

「ロン」

ならばきつと、この結果は必然なのだろう。悪夢の如き偶然オカルトの中で、たった一つだけ確かなもの。それこそが、今の私の状況であり――

天江衣 和了形

〔南南南東東白白白発発発西西〕

「――河底撈魚。四暗刻単騎・字一色。確かルールではダブルは無いな。32000」

その運命はいほくはおそらく、私にはどう足掻いても避けられないものだったのだろう。

大将戦終了

風越 128700

天竜女学院 5600

龍門渕 406200

城山商業 16900

☆☆☆

「えー、長野大会優勝を記念して、今日は特別ゲストをお呼びしました。妹の咲です」

長野大会を制した翌日のこと。当日は日程からか夜も遅くすぐに解散したということで翌日となる本日の午後より開かれた祝勝会にて、部室に入るや否や宮永さんがそんなことを言い出す。

それに反応して視線を向けると、見慣れた赤髪の宮永さんのすぐ側に、彼女を一回り小さくしたような茶髪の少女が控えていて、親戚である私と衣以上に似通った顔立ちから、彼女が言葉通り宮永照さんの妹であろうことは疑いようもなかった。

「あぁいや、まずは優勝おめでとう、だね。勿論、次は全国大会が控えているけれど、今日のところは勝利を噛み締めようか。ほら、咲も」「あ……えっと、うん」

机を纏めて作られた即席の長机にグラスを並べ、部員全員（+妹さん）で乾杯を取る。持ち寄ったお菓子のジュースで祝勝会という、我が家で時折行われるパーティとは規模も何もかもが違うものの、こういうのも悪く無いと素直に思う。

ちなみであるが、今回の祝勝会の音頭を取ったのは宮永照さんで

ある。すっかり仕切りが板に付いてきたことといい、一応は休日の昼間なのに部員全員がわざわざ学校にまで集合する人望といい、もはやこの部の中心人物が彼女であることは間違い無いだろう。

「……ところで照、どうして妹さんと呼んだの？ いや、別に悪いってわけじゃ無いけど」

しばらくして、宮永さん：照さんの友人である礼堂さんが切り出す。それはきつと部員の誰もが疑問に思っていたはずだが、こうして気軽に話題として繰り出せるあたり、やはり同じ学年でクラスも同じというのはかなりのアドバンテージであると僅かに嫉妬する。

「あー……いや、ほら。案外すんなりというか、ぶつちやけ風越があんまり手応えなくてちよつとこれじゃなあって思ってた。私見だけど、咲は既に全国区の実力はあるから、全国大会の前にそれを間近で体感して貰いたくてね」

「う……あう……」

妹さんの頭をわしゃわしゃと撫でながら照さんは告げる。あれだけ乱暴に撫でられると髪が乱れてしまいそうだが、妹さんは恥ずかしがりはするものの拒絶する雰囲気は感じられない。とりあえず、姉妹仲はかなり良さそうである。

「へー……強いんだあ。うりうり〜」

「あ、わあ……う……」

礼堂さんに頬を突かれるも、満更では無さそうな妹さん。とはいえ先程から擬音しか口にしてない。人見知りなのだろうか。けれど好意的に見られる分には嬉しいのだろう。人畜無害、その言葉がまさしく相応しい。そんな印象を受ける少女だった。

「ほう……」

しかしながら、照さんの口から「強い」などと言われては黙っていないのがこの子。普段の緩い雰囲気ですつかり排した衣が、まるで獲物を見るような目で妹さんを見据える。

こうなると彼女はもう止まらない。そもそもからして照さんが妹さんと呼んだ理由も彼女と同じである。よって当然の流れとして祝勝会の傍らで、部員がジューズを片手に見守る中、まずは衣、妹さん、

礼堂さん、純の4人で軽く勝負をすることに。

「……大丈夫ですか？　いくら妹さんが強いと言っても、衣が相手では……」

傍らにいる照さんに告げる。これは決して彼女を侮っているというわけではなく、客観的な事実としてだ。

照さんは妹さんを全国区と言ったが、衣や照さんの実力は全国という区分から最早逸脱している。特に衣が有しているオカルトとやらは、対峙した者に対しては悪夢でしかない。幾度繰り返しても聴牌すら出来ず一方的に和了られる。そんな怪物を相手にして、あのようない人畜無害な少女に悪影響を齎すのは流石に看過することはできない。

そんな私の忠告に、照さんは軽い調子で、

「大丈夫大丈夫。見てれば分かるよ」

「本当ですか……？」

照さんが言うのなら酷いことにはならないと思いたいが、それでもやっぱり心配なので僅かに移動して妹さんの背後に立つ。その頃にはちょうど配牌も終わっていて——彼女に配られたそれを見て、私は目を限界まで見開いた。

宮永咲　配牌

〔二二三二二四四四四三六七西西〕

(なんですの、これは……!?)

配牌の時点で分かる異常。対戦相手に表情が伝わらないよう、後ろを振り向いて驚愕する。とはいえそれも無意味だったのかもしれない。振り向いた先には私と同じように彼女の配牌を見た全員が、揃って私と似たような表情をしていたのだから。

「——カン」

そうこうしていると、部室に妹さんの声が響き渡る。それは先程までの人畜無害そうな雰囲気とは真逆、衣の本気モードと同等かそれ以上の、射抜かれるように鋭く冷たい言葉だった。

宮永咲　手牌

〔四四四四567①西西〕

暗槓（裏二二裏）

嶺上ツモ

〔西〕

暗槓で彼女が引いたのは当然のように有効牌。もはやこの程度では驚きもしなくなつたのが悲しい。しかし彼女はここからが本番と言わんばかりに、それから驚くべき行動を取る。

「もう一個、カン」

「は……？」

宮永咲 手牌

〔567①西西西〕

暗槓（裏二二裏）

〔裏四四裏〕

嶺上ツモ

〔西〕

彼女の対面に座る純が間の抜けた声を上げる。暗槓すら珍しいというのに、それが2連続ともなれば当然の反応だろう。しかしそれでもおそらくはまだ甘い。彼女の手牌を覗いている我々には、既に彼女が次に何を行うのかが透けて見えるようだ。

「もう一個、カン」

「ほう……！」

宮永咲 手牌

〔567①〕

暗槓（裏二二裏）

〔裏四四裏〕

〔裏西西裏〕

王牌から持ってきた牌を利用して3度目の暗槓。今対戦相手に晒した西が、手番が回った時点では対子だったなど誰が信じるだろうか。この時点で最低でも4翻確定であるのに、衣が嬉しそうに声を上げる。しかしまだまだその反応では足りない。ここまで来れば嫌でも察せられる。ここで次に彼女が引くであろう牌はおそらく――

嶺上ツモ

〔①〕

「――ツモ、嶺上開花。三暗刻三槓子、自風ドラ2で倍満。4000・8000です」

槓子にドラが乗らなかつたのは幸運ではあるのだろう。しかしとてもではないが幸運などという言葉からは程遠い、まさしく見れば分

かるほどに異常な和了り方であった。

「い、一体何なんですの、アレは……」

少し離れて彼女を見守る照さんに話しかける。そう言ってる間にも彼女は衣を相手に当然のように和了り続け、最早心配していた己が恥ずかしくなるほどに他を圧倒している。既に呼び方からして人間扱いしていない自分に気付くが、アレを見てそのようなに認識しない人間は稀であろう。

「あの子はねえ……ちよつとやり過ぎたというか、元からどちやくそ強かつただけど、あることをきつかけにそれはもう弾けてとんでもないことになっちゃってね」

「きつかけ……？」

あの人畜無害そうな少女があのような有様になるきつかけなんかこの世に存在するのだろうか。そうしたら私はなんとしても衣をそのようにするのを避けなければならない。衣も衣で既にあの子に負けず劣らず相当な気もしなくもないが、流石にあそこまでぶっ飛んではないと信じたい。

「説明しよう。あれは今から36万——」

偶に照さんが言い出す謎の冗談を聞き流し、得られた情報は以下の通りである。

・火事で親戚を亡くした彼女は、一時期引き籠もっていた時期があった。

・そんな彼女を救ってくれたのは、彼女のクラスメイトであった少年だった。

「……………？」

一通りの情報を聞き出した私の頭に浮かんだのは疑問符である。どこか衣の境遇と似ていて、当時の衣を鑑みるにその少年の献身は彼女にとって相当なものであろうことは想像に難くないが、それが一体麻雀に何の関係があるのだろうか。

そんな私に、照さんはどこか遠くを見つめて、

「かつての私は考えました。麻雀が精神的なものに影響を受けるのなら、陰鬱としていた当時の咲が強いのは当然の話。だけど精神的に



尖っているというのは、それは決してマイナス方向だけのものじゃないはずだと」

照さんは語る。何故か事実として弱体化していった妹さんと、そんな妹さん及び件の少年を巻き込んだ珍エピソードの数々を。

「最終的に相手方の両親まで巻き込んだ騒動の果て、遂に念願叶って2人の少年少女は結ばれました。そしてその頃にはすっかりもう、かつてのトラウマを抱えた咲はいなくなっていたのです」

「聞くに、その念願は8割くらい照さんのものだったように思うのですけど……」

「シヤラップ。……いや実際、一週間やそこらで引き籠もりだったあの子があそこまで心を開いてくれた少年だよ？　もう何がなんでもくっ付けるに決まってるでしょ」

色々と思うところはあるものの、照さんと衣を割と強引に引き合わせたこの身としては強く言えない。だがしかし、それでもまだあの少女の強さの説明になっていない気がするのだが。

「それは私もよく分からない。咲は元々私に匹敵するくらい強かったけど、今はなんかもうよく分からないことになってる。でも、強いて理由を挙げるとするなら——」

照さんは語る。実は彼女が今この場所にいるのは、この近くで行われた件の少年がやっているハンドボールの応援に来た帰りなのだ。この日のために彼女は早起きをして弁当を作り、熱気漂う体育館で必死に声を張り上げて応援をし、周囲に揶揄われながらも弁当を食べあつて、そして部活の仲間と学校に戻る姿を見送った。

「ほら。何というか、その——勝てないでしょ？」

「……………」

無言のまま少女を見る。先程までは気にもしていなかったが、確かにただ祝勝会に参加するだけにしては荷物が妙に多い気がする。今まさに彼女の側に置かれている手提げ鞆の中には、おそらくその少年が食べたという空の弁当箱が納まっているのだろう。

「……それは確かに、勝てませんわね……」

照さんが出した結論に、理屈ではなく、深く納得する。問答無用で

理解せねばならぬことが世の中にはある。そんな理不尽と謎の敗北感を、その全身で味わいながら。

## きつと何かを学んだあの日

ぺらり、とコピー用紙を捲る。飽きるほど繰り返した動作。いや、実際にもう既にウチはこの動作に飽きてしまっている。しかし習慣というものは恐ろしいもので、眠気や疲労感といった身体の反応とは裏腹に、頭は貪欲に知識を蓄え続けている。

とはいえ、データに関して麻雀はまだマシな部類ではある。何せ個人のデータであれば大会全体を通してA4用紙1〜2枚程度で済む。これが囲碁や将棋であれば一試合ごとに目が痛くなるほどの事細かな数字がズラツと並び、脳内での変換に慣れている人でも雰囲気をつかむため実際に駒を並べるなどして検討することもあるほどだ。

そう考えると大抵は画像で表示される牌譜は視覚的にも直感的にも理解しやすく、一目で得られる情報量も多い。されどそれ故に自分だけでは区切るタイミングを見失うこともある。

「ほー……」

だから、と言つてはあれなのだが、つい時間を忘れて熱中していたというべきか。ウチが気づいたときには既に集合予定時刻にだいぶ近づいていて、いつの間やらウチが座っていたソファの周りで先輩方がしげしげとウチを見ていて、しかもなまじ集中して研究しとった分気を遣われて放置されてたつてなんやねんこれうわ恥ずッ!?

「いや、なんで声掛けんねん!」

「そらお前、そんだけ不気味な顔しとつたら声掛け辛いやん」

ほれ、と近くにいた園城寺先輩が手鏡を渡してくる。そこに映るのは怒り顔の自分の姿。……いや、仮にウチがさっきまでニヤついていたからって、今んなって手鏡なんか渡されても分からへんやん。

「しつこくまあ、朝からホンマよーやるわ。これ全部集めたん自分やる?」

「資料自体はカントクから貰ったもんです。あの人、ウチらに見せとらんだけでこう言った雑務はきつちりやつとるんで」

「それは意外……いや、そうでもないな。こう言った細いのはフナQコマのが向いてそうやけど、カントクって色々と抜け目なさそうやし」

一体いつからそうしていたのか。いつの間にもやら対面にあるツファの上で清水谷先輩に膝枕までして貰っている園城寺先輩が、膝枕をされた状態のまま器用に資料の一つを手にとって読み始める。

「んー、臨海、永水、新道寺…一回戦の結果やな。だいぶ欠けとるけど…」

「欠けとるんやなくて、偏ってるですね。今園城寺先輩が持つてるのはウチなりに選別した後の資料で、隣の分厚いのと合わせて今大会一回戦のデータ全部になります」

「へえー。どういう基準なん？ 姫松がこつちやし、強いのを分けてるわけやなさそうやけど」

ぺらぺらと分厚い方の資料を捲りながら清水谷先輩が口を挟む。しれつと姫松について言及した彼女だが、姫松は確か最初の方に区分けしたはずなので地味に情報処理能力が高い。やはり一年の頃からレギュラー張ってるような人は違うなど僅かに嫉妬しつつも、別に隠す理由もないので素直に回答する。

「研究せないかんような変な麻雀打つ奴がいるかどうかの差…ですかね。三箇牧の荒川、永水の神代、ウチが今持つとる龍門渚の天江…そういつたオカルトな面子は、資料があるかないかで大違いですからね」

そう言いながら、読み終えた資料を机の中央に置く。彼女らが既にここにいるということは、他の面子もそろそろ集合する頃合いだろう。まだまだ整理にはそれなりの時間を要しそうだが、悲しきかな、レギュラーでないウチは大会中にも時間の余裕はある。

「ん？ それは怜んトコに混ぜんでええの？」

「こつちは更に別ですね。流石に次回当たる予定の高校は例外です。多分今日カントクからも別途に資料として渡されると思います」

「龍門渚やつけ…知らん学校やけど、とりあえず名前は強そうやな」  
「ウチは聞いたことあるなあ。麻雀とは無関係にやけど。ウチの好きなお笑い芸人がそんな名前の名門校から東大上がったとかで…いやそんな名門校出てお笑いやっとなのかーい！ってテレビの前でツッコんだ覚えあるわ」

首を傾げる園城寺先輩。とはいえ清水谷先輩が割と例外なだけで、普通はそんな反応だろう。ウチも軽く調べた感じ長野ではそれなりに有名な学校らしいのだが、その知名度は麻雀によって稼いだものではなく、これまでの全国出場経験はゼロ。しかし、そんな学校がほぼ一強状態であった長野の風越を打ち破って全国まで躍り出た。警戒するには余りある。

「強いん？」

「……強いですね。特に大将である天江は、根刮ぎと言っているレベルで地区・全国ともに点棒を荒稼ぎしてます。彼女が誰に対してもカタログスペック通りの実力を発揮できるのであれば、何万点差があるうと彼女一人に捲られる可能性は十分にあるかと」

「へえ……」

そこまで言われては流石に気になったのか、清水谷先輩が机の資料を手に取る。そしてペラペラと軽く捲って数十秒ほど。おそらくは天江の資料だけを流し見た彼女は正直な感想を漏らす。

「……酷い麻雀やな。こんなんやられたらトラウマになりそうやわ」

「仮聴が取れそうな場面でも無視してじっくり高目に手作りしてるので、確率的にもそれが天江の仕業で間違いないでしょう。ただ、問題なのが……」

「何をどうすれば対策できるんや、これ……？」

そう、その通り。事象としては明らかでも、聴牌すら出来んようでは対策もクソも無い。まさしく理不尽の化身。これほどのオカルトを有するのであれば、天江と同卓した連中が揃いも揃って惨敗するの無理はないだろう。

「あ、でもセーラなら案外あっさりと和了れるんとちゃう？」

「……かもしれせん。実際、聴牌までは行かずとも、個人戦の成績が良かった面子は早い巡目で手牌が整っていますし、同校同士で力チ合った時には普通に和了られています」

確かに、天江衣の麻雀は無敵に等しいものなのだろう。しかしながら、そもそも無敵が成立するようであればそれはもはや麻雀ではない。事実それを示すように、個人戦で天江と対戦した龍門渕の先鋒と

中堅は、彼女を前にして和了るところか先鋒に至っては一方的に打ち負かしている。

だからこそ、少なくとも、同校同士であれば分かる程度には天江衣にも弱点があるはず。そしてその鍵を握っているのはおそらく、そんな天江を抑えてエース枠である先鋒に座っている宮永の存在——

（データを見る限り基本は普通のデジタルやけど——あの天江を完封するのは流石に何かしらのカラクリがある。それを洗えば……）

理屈ではその通り。しかし、それ以上に——普通の打ち手ウチとおなじにしか見えない宮永が、あの天江衣を凌駕している事実<sup>ウチとおなじ</sup>に心惹かれている己を自覚する。このように打てばいい——まるでそう道を示されているように。彼女の闘牌は、普通の人間にはあまりに眩しく見えるのだ。「……。……大変そーやな。ま、りゅーかやせーらならともかく、ウチみたいな万年補欠には程遠い——」

「いや。生憎とそうもいかないんや」

「お、おばちゃん……!?!」

遠い目をして何かを言い掛けた園城寺先輩を遮るように、これまた唐突に現れた伯母ちゃん……監督の愛宕雅枝が、ぐいつと顔を乗り出して告げる。

「知つての通り、千里山の目標は常にトップを目指すこと。如何に理不尽な打ち手が相手でも、『どうしようもない』で済ませて貰ったら困る。……宮永の牌譜、見ていたんやろ?」

全てお見通しだ、という態度で、伯母ちゃんがウチらを眺む。しかし流石に年の功と言うべきなのか、事実としてウチらの浅い考えなど、この人には透けて見えるのだろう。

そんな伯母ちゃんは、しかし宮永の牌譜を机から手に取ると、

「ホント、面白い打ち手やんな? 選手としてより、ウチの立場にこそ欲しい逸材やわ。ウチがプロだった頃にこういう打ち手が一人でもいれば、それだけでチーム全体の勝率を10パーは上げられるやろ」  
心底感心したように言う。やけに評価が高いのは、己がコーチという立場に就いているが故だろうか。それでも流石に一人で10%は過剰にも思えるが。

そんな思考が漏れていたのか、伯母ちゃんは軽く首を振ると、

「方法が有るか無いかの差はダンチやで？ 最悪参考くらいにはなるしな。しかもこの宮永、去年からの牌譜も見る限り、初見の相手だろうと何だろうと弱点を全部暴いとる。特にこの年頃となると派手な和了りなんかに目が行きがちなのに、ここまで『見』に振り切った打ち手は初めて見たわ」

「……まあ、セーラなんかまさにそれやしな」

流石にここまで話題に出されては気になったのか、いつの間にもやらずに牌譜を片手に園城寺先輩が言う。その言葉に伯母ちゃんが『そうそう、江口は生理で今日は欠席や』などと言うが、その情報は要らんかったです。

一通りの話を聞いた清水谷先輩は、大きな瞳をぱちくりとさせて、「つまり……宮永を参考に天江に打ち勝てど？」

「他に方法があるんならええで？ あんな非常識な場に対して、こんだけ丁寧な『こうすりや和了れます』ってわざわざこの大舞台で実践してくれとるんや。知つとるか？ 一回戦で龍門測が当たった白糸台の先鋒——随分と狙い打ちが得意やったみたいやけど、半荘一回で一度も和了れてへん。全部直撃で返されてるわ」

「……ホンマですわね」

「別に、本当にどうしようもなければ考慮に入れる程度の考えでええ。正直メチャクチャな打牌やから必要ないと判断したら即座に忘れてしまっても全然構わん。実際に打つのはお前や。変にスタイルを崩して読みが鈍る方が困る」

「……………」

その言葉を受けて、しばらく悩んだのちに清水谷先輩は牌譜を受け取る。妥当な選択だろう。実際にどうするかはさておき、選択肢が多いに越したことはない。

意外なことに、清水谷先輩に紛れて園城寺先輩までもが牌譜を懐に忍ばせたのが視界の端に映る。普段の様子からはあまりそういう姿は見せないが、やはり彼女も思うところがあるのだろうか。

（とはいえ、所詮は付け焼き刃。監督も言うように、あんな無茶苦茶な

麻雀を確信を持って行えるのは宮永当人だけ。仮にその打ち方が正しかったとしても、ウチらはそれに半信半疑で挑まねばならん)

きつと、清水谷先輩は己の打ち方以外は行わないだろう。そも初見の相手に対して、最初から裏技で挑もうという考えそのものが単純に気が引けるのもある。それが幸となるか否かはさておき、ウチはその意志を尊重したく思う。

そんなことを考えていると、不意に扉が開く音が鳴り、キャプテンや他部員全員が纏まって部屋に入ってくる。

「さて、これで揃ったな。それじゃあ明日の試合に向けて、一先ず牌譜検討と行こか」

そして、確かな経験に裏打ちされた堂々とする提案に、ウチらは一様に頷くのだった。

☆☆☆

「はい。では今日は、明日の対戦相手について昨日ちよつと『見』てきたので、軽く方針なんかを話し合いたいと思います」

無事に全国大会一回戦突破を成し遂げた翌日のこと。我が龍門渚高校の宿泊場所であるホテルの休憩室にて。ミーティングをやるからとレギュラー全員を集めた宮永さんが、軽い調子でそんなことを告げる。

「とりあえず強そうな人は千里山の先鋒、中堅、副将、大将に、真嘉比の副将、射水総合の先鋒だね。先鋒に関しては私が担当するからいいとして、まずは千里山の中堅の人からざっくり解説していいこうか。では井上さん」

「おう、了解」

既にそこに置かれていた卓へ、宮永さんに促された純くんが素直に



向かう。あまり接点の無さそうに見える組み合わせだが、この二人は意外にも仲が良い。何なら宮永さんと透華よりも親しそうである。どこかプレイスタイルが似通っていて指導を受けることが多いからだろうか。それとああ見えて純くんは舎弟気質なので、明確に尊敬できる先輩相手には素直というのもあると思う。

「というか千里山の中堅の3年、キャプテンなんだってね。普通に一番強そうなのに、なんで中堅でエントリーしてるんだろう。どんなオーダーでも中堅ってほしい三番手だよな?」

「ああ……それは大阪の慣例みたいなものですわね。南大阪代表の姫松高校は、エースを中堅に据える伝統があります。おそらくはその対策かと」

「節目を締めるってわけか。中々面白い伝統だね。『衣ちゃんを大将にすれば後は別に適当でいいか……』なんて考えてた私とは大違い」「大将が衣というのは異論ありませんが、そんな理由で先鋒に成りかけたハジメを慮ってくださいます?」

「透華……」

ちよつと感動する。そういえば与太話で話したこともあったけど、まさか言及してくれるなんて。

それはそうと、中堅がエースとは確かに珍しい。そして宮永さんの見立ては間違っているとは思えない。そうなるかと純くんが心配になるんだけど、流石に彼女もそう簡単に大敗はしないだろう。

(何せ、『流す』ことは純くんの専売特許。特に最近だと、衣相手に半荘を生き残ることさえ安定してきている)

いわゆる能力ではないようなのだが、あれだけ安定して見極められるのであればもはや能力と呼んで差し支えない。それでも強豪校のエース相手というのはやっぱり心配ではあるが、ボクはボクで県大会のレベルを超えていない自覚があるので、むしろ心配するべきは自身のことだろう。

(とはいえ、宮永さんが言うには、次鋒にはそこまでの打ち手はいないらしいけど……)

宮永さんの「強い」の基準は衣なので、彼女が言う「強そうな人」に

該当してないなら大丈夫だと信じたい。中にはあの妹さんみたいに異様に擬態が上手いヒトもいるらしいけど、宮永さんが見破れないという時点でボクにはもはやどうしようもないのでそこは考えないことにする。

「えーと、次は副将の銘苅さんだね。……一応、例のオカルトを使えば多分完封できるけど」

「いつも通り、ナシの方向でお願いしますわ」

「ん……了解。なら、彼女のオカルトからだね。一回戦では使ってなかったけど、彼女には——」

(なんで使っていないオカルトの対策法とか解るんだろう……)

つくづく思う。やはり宮永先輩の情報収集能力は破格であると。

無論、ボクらだって個人的に対戦相手の研究くらいは行っている。ハギヨシさんが集めた資料を元に有力な選手を見繕って打ち方の傾向を調べるなど、それなりに勤勉な打ち手なら誰だってやって見せるだろう。

しかし、宮永先輩から齎される情報の濃さは反則の一言で、例えばゲームなんかで確率によって麻痺を付与する攻撃がいくつあったとして、ボクらがゲーム機とメモを片手に実際にプレイするのなら、宮永先輩は攻略本をズドンと持ち込んでくる。無論、麻痺のみならず火傷や凍結なんかの全ての確率が事細かに記されたそれをだ。

彼女が齎す情報には、およそ不確定要素と呼ばれるモノが存在しない。何なら『最初の手牌を見て混一色メインかタンヤオ中心か考える』みたいな曖昧すぎる情報すら当然のように持ち出して来る。まさしくオカルト的だ——衣とは方向性がまるで違うが、これはある意味で衣を遥かに凌駕しているとも言える。

「それと千里山の副将なんだけど——うーん」

「どうかしまして?」

「いや……あの人、『自風牌を捨てずに一色の牌だけを残すことで、手牌が清一色方向に伸びやすくなる』って能力を持ってるんだけど、その割には意識してる感じがしないなあって」

むしろ一目でその条件を見抜くお前は何者だよ。……危ない危ない

い。ついつい思考が乱暴になってしまった。今のボクは透華の高貴なるシモベ。かつての手癖の悪いボクはもういないんだから。

「大将は……衣ちゃんだし、初見は大丈夫でしょ。むしろどう抵抗するのか本人が知った方が良さそうだし、今日はこんなところかな。これで解散するけど……せつかく雀卓も用意したことだし、ちよつと打ってく？」

「衣はやりたいぞー！」

「あら。ならばわたくしも参加しますか」

「俺も頼んでいいか？ 今日はまだ打ってないし、肩慣らしには打って付けだ」

その発言を皮切りに、嬉しそうに空いてる席まで駆け出す衣と、それに追従してゆつくりと着席する透華。余った席に座って何故か腕捲りをする純くんの3人とで、宮永さんは賑やかに卓を囲む。

そんな姿を——こんな大舞台に来たというのに、いつも部活で繰り広げられるそれと何一つ変わらない光景をボクは穏やかな心で見つめ続ける。この人たちにとって、そこが全国大会であろうと変わらない。それはある意味では非常に正しく、彼女らはまさに麻雀大会を『遊び場』であると認識している。

それが良いことなのか悪いことなのか、捻くれたボクには分からなけれど。ただ目の前の光景は壊したくないな、と。明日への展望に胸を躍らせるのだった。

おそろく何か気付いたある日

——弱っちそうな奴。それが正直な感想だった。

全国大会も二回戦となれば、それはそれなりに緊張もする。それでもウチは去年の経験や生来の気質もあってかガチガチとまでは行かずとも、しかし内心では相応に緊張していたことを覚えている。

「あ、どうも。お先に失礼しています」

だからこそ、比較的早めに会場へと足を踏み入れたウチは、既にもの場で陣取っていた彼女の存在に面食らった。いくら会場には他に誰もいないからと、よもや仮にも全国の猛者が集う雀卓の一角で、休日のオヤジみたいに堂々と新聞を読んでいる阿呆がいるとは想像もしてなかったからだ。

(なんやこいつ……)

「ええと確か、千里山の人だよ。……そうそう、江口さん」

うわ話しかけて来た。遠巻きに様子を伺っていたウチの思考をよそに、そいつは広げていた新聞を畳んで自身の席に片すと、

「初めまして、龍門渕高校の宮永です。今日はよろしくお願いしますね」

「あ、ああ……」

にこやかにそう告げて、再びそいつは新聞を広げ始めた。……いやホンマ何なんやこいつ。マイペース過ぎやろ。思わず歯切れ悪い返事になってもうたわ。

(ん？ 宮永……?)

ふと、聞き覚えのある名前が思考の片隅に引っ掛かる。否、聞き覚えのあるどころではなかった。まさしく試合会場に向かう直前、長つたらしいミーティングの中で真っ先にその名前が出ていたからだ。

「ふむふむ……」

(……………)

しかし、どうだろう。今まさに経済紙を熟読しているコイツからは、いわゆる強者特有のオーラというものをまるで感じない。キャプテンや竜華、他校だと洋榎といった強い面子は、それぞれ独特の気配

を纏っているのが常だ。あくまでこれはウチの直感でしかないのだが、感じた奴らは全員それなりの打ち手であったので間違いはないだろう。

だから、弱そうな奴。ウチはこいつをそう断じた。それでもカントクやフナQが注意しとったんで警戒はするが、実際にはその必要もないだろうと。

そう思っていた。そして事実としてその感想は間違っていないかった。もしや卓上では雰囲気が変わるスイツチタイプかと思いきや、それは実際に打ち始めてからも朗らかなオーラを崩すことはなかった。

ただ、問題があるとすれば――

「あ、それロン。えっと白のみで1000点だね」

「……………了解や」

倒された牌を確認し、点棒を強く握って差し出す。安いからと安心することはない。何せウチの手牌には、その30倍にもなろうという手が眠っていたのだから。

(マジで何なんや、こいつ……………?)

弱そうな奴。その認識は今に至っても変わらない。ただ和了られる。理由もなく。根拠もなく。弱そうに見えるこいつを前にウチはロクに和了れずにいる。

気づけば、半荘も南場に差し掛かろうとしていた。しかしウチのこれまでの和了りと言えば、東一にあった様子見の満貫くらいで、それ以降の手は全てこの弱そうな奴によつて潰されている。

もはや頭では最優先で警戒すべきと理解している。けれどウチの本能と言うべき何かは、真嘉比と射水総合の先鋒を優先する。

理解についても止められない。それは強盗に拳銃を向けられた人間が怯えるのと同じ。実は同じく横で怯えていた一般人が強盗を瞬殺できる暗殺拳の担い手だとして、表に出て来なければそんなものは認識できるはずがないのだ。

「ツモです。一盃口と役牌一つ。他の複合は無いか……………1000・2000。お疲れ様でした」

「お疲れ様です」

「お疲れ様でした」

「……お疲れ様でした」

結局、訳がわからないままに、最後の高目も潰されて前半戦が終了する。半荘一回では終わらないことにこれほど感謝することになるとは、初めにこの弱っちそうな奴を見た時にはまるで考えもしなかったことだった。

先鋒 前半戦終了

真嘉比 1 0 1 9 0 0

龍門洩 1 1 3 4 0 0

射水総合 8 8 0 0 0 0

千里山 9 6 7 0 0 0

………

………

………

「実際に見ると、思った以上に気持ち悪いな……」

控室に戻ると、開口一番にカントクがそう告げる。誰のことを指しているのか、これに関しては本能的に理解した。気持ち悪い……そう、アイツの麻雀は、まさしく気持ち悪いとしか言えない何かだった。「何やねんホンマにアイツ……」

「高目を狙うと、それを悉く潰されとるな。まあ普通の人間は、高目を狙ったからとそう簡単に手が入るものでもない。なら少なくとも宮

永にとって、江口のそれはオカルト的だったというわけやろ」

何のこつちや、と思つたが、心当たりがあつたために直ぐ察する。高目を潰される。それは試合中に散々感じていたことだ。それでも理解できないことはいくつかあつたが、それがアイツの仕業という点  
は同意である。

「射水総合のこつちは分かりやすいな。こいつはリーチ牌を狙い撃ち……イカサマやない方の『燕返し』が得意やつたはずやけど、逆に2回返されとるな。偶然にしては出来過ぎや。これも宮永の仕業で間違いないやろ」

カントクも漫画とか読むんやなど、関係ない思考が過ぎる。つまりはそれだけ混乱しているということだろうか。普段なら試合中にこんなこと、考えもしなかつたはずなのに。

「そして真嘉比はデータ通り普通のデジタルと……結果を見たら一目瞭然やな。もう部員全員アイツの前に座らせて結果を見てみたいわ」  
はあーと深くため息をついて、カントクは改めてウチへと向き直る。仮にも強豪校の先鋒がこの有様、叱責の一つでも来るのかと思えば、返つてきたのは予想外のそれだった。

「……どうにもならん。特殊すぎるわ。運次第で勝てるかもしれんが……この試合中は無理やろな。既にこれだけの点差がついとる。高目を狙わずにこの点差をひっくり返すのは流石に厳しい」

「高目を狙わず……？ 安目でどうにかしろってか？ 冗談やろ、既にこんな——」

「甘えんな」

びくりと身体が震える。カントクが冷たい声を出すときは、ウチらに現実を突きつけるときだ。最後に見たのは、ウチが先鋒に選ばれたその瞬間。詰め寄る3年の部員に対して、このような態度だったのを覚えてる。

「そうやろうなとは思つとつたが、今回のハッキリしたわ。いいか江口——お前は普通の打ち手やない。だからこそお前は、あの宮永には絶対に勝てん」

「なに、を……」

「運が悪かったただけっか？ 違うで。確かに運の問題はあるが——お前が負けたのにはちゃんとした理由がある。江口、お前があの卓で高目を狙い続けるなら、安手より先に和了れるなんて希望は捨てる」  
「厳しい口調のまま、されどどこか言い聞かせるようにカントクは語り始める。それはまるで、子どもに常識を説くかのよう。」

「本来、麻雀というゲームはな——欲を出した方が負けるゲームなんや。当然やな。安目と高目、期待値で言えば前者が圧倒的や。お前も雀士の端くれなら分かるやろ？ 高目ってのはな、そう簡単に和了れんからこそ点数が高いんや」

それを簡単に和了れるお前はおかしいと、言外にカントクはそう告げる。そして事実、ウチにとつて高目とは、そこまで難しいものではない。確かに確率的にはおかしいかもしれないが、ウチはそれを、ウチが高い実力を持つてるからと認識していた。それがおかしいと？

「まあ、確かに実力と言えるかもしれない。そういった運も全部ひっくるめて、それがお前の強さという認識でええ。ただ、どういうわけか宮永相手にはその豪運が通用せーへん。だから普通に安手も狙う宮永相手に、高目しか狙わないお前が速度で負けるのは当たり前やろ」

「……………」

「とはいえ今更改善も無理や。けどまあ、この分なら大負けはせんやろうし、この際一度、持たざる者の気持ちつてのを存分に味わってみるとええ。言つとくがな、お前が蹴落とした3年の連中は全員、普通にあの宮永に勝てるで」

尤も、それも全部運次第やがな——と締め括り、やたらと長く感じた休憩時間も終わりに近づいていく。しかし、そろそろ会場に向かわなければならぬのに、何故か身体が追いつかない。

（ウチが間違ってた……？ でもウチは、それで先鋒を勝ち取ったんや。だけど、それだとアイツには——）

ぐるぐると、ぐらぐらと、揺らいだ思考が頭を鈍らせる。足元が覚束ない。まるでこれまでの全てを否定されたような気分になる。



「よろしくお願いします」

結局、ぐちゃぐちゃの思考のまま、気付けばウチはアイツと同じ卓の席に座っていた。今になってもオーラを感じない朗らかな微笑みに、どこか不気味なものを覚えながら。

先鋒戦終了

真嘉比	9 0 4 0 0
龍門渚	1 2 0 1 0 0
射水総合	7 3 6 0 0
千里山	1 1 5 9 0 0

「なんか勝てたわ」

「……………。……………。ホンマ、訳分からん打ち手やな。これは……………」

本気という言葉をあつさり覆されて、カントクは強く頭を抑える。そしてそのまま諦めたように、彼女は深くソファに凭れ掛かるのだった。

☆☆☆☆

副将戦終了時点

真嘉比	1 0 5 1 0 0
龍門渚	1 1 9 0 0 0
射水総合	6 8 5 0 0
千里山	1 0 7 4 0 0

「ほぼ横並び……………申し訳ありませんわ」

「うーん、龍門渚さんでも厳しいか……………やっぱり普通に強いね、銘苅さ

ん」

点数を見ながら告げる。副将戦開始時点では真嘉比は80000を切っていたので、単純に彼女一人で25000点持ちの初期点数分以上は稼がれたことになる。決して甘く見ていたわけではないが、やはり運が絡む麻雀では想定外なんていくらでも起こり得る。

「いや、それよりも千里山かな。強いのは分かってたんだけど、全体の平均値が凄まじいね。最低でも龍門瀏さんクラス……私も稼げるタイプじゃないし、今はどうにか食らいついてるけど、正直衣ちゃんがいなかったらかなり厳しかったかも」

「そうだぞー！」

少々弱音を漏らすと、衣ちゃんが背伸びをしながら無い胸を張って元気よく発言する。どうも今は緩い状態であるらしい。試合直前なのにこのモードのままなのは何気に珍しいが、彼女は咲と違ってスイツチの切り替えが上手なので、試合中には本気モードになっているだろう。

「まったく！ とーか達は不甲斐ないなあ。ここはおねーさんである衣が、とーか達のみまで稼いでやろう！」

「……うん。衣ちゃんなら心配はしてないけど、油断だけはしないようにね」

「信頼はしていますが……やはり少し心配ですわね」

「……未だに時々油断して、例の『初見殺し』で一撃死するからね、衣」  
ふふん！と意気込む衣ちゃんに聞こえないように小声で呟く龍門瀏さんと国広さん。いや、流石にそのレベルのインチキオカルトがあれば一昨日の時点で気づくよ？ それに初見殺しは本当に扱いが難しいから、存分に活かせるのはオカルトのルールがギチギチ且つ海底まで保たせる必要がある衣ちゃんくらいだし。

そう考えると、私と衣ちゃんはかなり相性がいんだなど改めて実感する。というか他人を妨害する能力者ってあまり見かけないんだよね。それも実力者ともなればそれこそ龍門瀏さんや衣ちゃんくらいで、大抵は自分の手牌を良くする方向に働く。そりゃあ普通はそうなるよね。だから一定の実力者相手だと基本的に照魔鏡は必須なの

だけど。

まあ何にせよ、心配は無用だろう。初見で衣ちゃんに勝てる人間なんてそういない。私自身が例外という自覚はある。あんな異常な場を前に、初見で正しい対応が出来る人間などいるはずがない。あるとすれば龍門渕さんの例のアレみたいになら抑えられることだが、そうであっても今の衣ちゃんであればどうにでもなる。

元より変なオカルトに振り回されていただけあって、我が龍門渕高校で一番伸び代が著しいのは衣ちゃんだ。あの扱いが難しいであろうオカルトを完全に制御し、このまま順当に成長したならば、よもやあのめちやつよ妹をすら凌駕するのでは無いかと期待するほどに。

尤も、妹も妹で、まだまだ婚約だのプロポーズだのといった強化イベントが待ち構えている。流石に在学中は認めるつもりはないが、罷り間違つて婚前交渉なんかをした日にはどんな有様になるのか考えるだけ恐ろしい。その場合はきつと、咲が牌を握っただけで無様に喚き散らす私が見られることだろう。

『ツモ。海底摸月——4000オール』

そんな数十分前の取り止めのないやりとりを思い返しながら、私はモニターの途中で元気に暴れ回る衣ちゃんを見つめる。

彼女に対してすっかり怯えてしまっている対戦者達に、未来の咲との対戦を重ね合わせながら。

2回戦第2試合終了

真嘉比 68200

龍門渕 207100

射水総合 39700

千里山 85000

何もかもがどうでもよくなる日

見誤っていたと、これはそう評するべきなのだろう。

「……………」

その童顔に不釣り合いな恵体を持つ、巫女服に身を包んだ黒髪の少女。彼女こそは鹿児島県代表、永水女子高校の先鋒である神代小蒔。地区大会から全国大会2回戦までを通して、まさに神懸かり的な闘牌を披露する今大会の大物ルーキーが一角。

神代小蒔 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏〕

打牌

〔二〕

なんと恐ろしいことに彼女は、地区大会個人戦計70戦を含むこれまでに打った全ての半荘で平均着順が1.0。平均獲得点数に至っては一試合で5万点を上回っている。それは即ち通常の半荘において最低二人をトバして勝利するのと同義であり、多少なりとも麻雀を齧った者であれば、それが如何に常識外れなことなのか、すぐさま理解することだろう。

正しく驚異的な打ち手。しかしそれでも私が彼女を『一角』と表現したのは、今大会は彼女に比肩する、あるいは彼女を凌駕しかねない打ち手が他に二人もその名を轟かせているからだ。

神代小蒔 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏〕

打牌

〔五〕

事実上の全国大会とまで呼ばれるあの大阪予選において、団体戦ではほぼ個人で北大阪代表の千里山高校と互角以上に競い、個人戦一位で全国に足を踏み入れた三箇牧の荒川翹。

地方・全国ともに平均獲得点数歴代一位。且つ現在進行形で総所得

得点のレコードを大幅に塗り替えて続けている龍門渚の天江衣。

先鋒、個人、大将と、団体戦では直接対決することがないことだけが救いと評された3人の怪物は、だがそれ故に個々の区画で存分に暴れ散らかし、大会を派手に荒らすだろうことが半ば我々の共通認識であった。

神代小蒔 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏裏〕

打牌

〔五〕

そして事実、その認識は間違っていないなかった。例えば対面にいる神代小蒔であれば、仮にも全国まで勝ち上がった猛者を相手に先鋒で10万点持ちを飛ばす快拳を成し遂げ、天江であれば前年度3位である千里山含む強豪校3校を相手にたった一人で10万点を稼いでいる。

どちらの方がより優れているという問答に意味はない。少なくとも団体戦である現段階では。重要なのは、彼女らが決して地区の評判に留まらない紛れも無い怪物であり、僅かにでも油断をすれば……否、そうでなくても、奴らが存分にその実力を発揮するだけで、我が臨海の輝かしい肩書きに『元』という拭えないレッテルが貼られることだろう。

しかし――

辻垣内智葉 7巡目 手牌

〔234677⑥⑦⑧中中白白〕

ツモ

〔東〕

(どうしたものか……狙い撃とうにも、この有様では話にならん)

追い続けることは出来ている。直近の神代の捨て牌は2萬の対子落

とし。何ならこのまま進めば捨て牌だけで役が作れそうなほど偏っていて、明らかに裏目を引いているのが丸わかりだ。それがこの異常な場の代償か本人の実力なのかはさておき、しかしこのような状況下では、仮に神代が役しか知らない木偶の棒だとしても、流石にもうデッドゾーンに侵入していることだろう。

河

神代

{二五五四四二二}

宮永

{①①①⑨⑨⑧③④}

江口

{北白2⑨西④①}

(これは、江口も聴牌しているか…？ 萬子が無い分手の進みは早い。私でさえ聴牌直前、奴の腕ならあり得ん話でもないな。だが、宮永のこれは何だ…？)

あまりに偏ったその捨て牌から、彼女らも私同様に神代の被害を受けているだろうことは察せられる。だから、江口が直近で数字の近い筒子をつも切りというのは理解できるし、ある意味では妥当とも取れる。だが、宮永は――

(オカルト殺し――だったか。それも、あの天江を封殺できるほどに強烈な)

地区では天江。全国では弘世、新免、小走、寺崎。そしてここにいる江口といった有力な打ち手は、本人の代名詞とも言われていた特徴的な闘牌を披露すると、その悉くを宮永に潰され憂き目を見ている。

反面、どうも対オカルトに特化しているようで、それ以外に対しては防御が上手い程度の普通のデジタルだが…もしもその認識が正しいのであれば、あの神代オカルト小蔭を前にして、こいつが大人しくしているかどうか。

辻垣内 打牌

〔東〕

「カン」

宮永 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏裏〕

明槓〔東東東横東〕

そんな思考と共に牌を捨てると、不意に宮永が動き出す。一瞬、直撃を取られたかと思つて流石に焦つたが、しかし宮永の動きはまだ止まらない。

「もう一つ、カン」

「何……？」

宮永 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏〕

明槓〔東東東横東〕

暗槓〔裏発発裏〕

嶺上牌を利用しての二度目の槓。それは如何なる確率によつてか。基本防衛重視の打ち手は、槓そのものを積極的に狙うことがない。ならばこれは、宮永なりの神代対策オカルトなのだろうか。

「……もう一つ、カンで」

「は？ 何やて？」

「……!？」

宮永 手牌

〔裏裏裏裏〕

明槓〔東東東横東〕

暗槓〔裏発発裏〕

〔裏11裏〕

更に追加の暗槓。江口が思わず呆けた言葉を発するが、私も驚いている。仮にこれが神代への対策だとして、それでもこれは色々とおかしい。

そしてこの状況は非常に拙い。まず滅多に使われないルールであるが、今大会において明槓からの嶺上開花による和了は、東を捨てた

私に責任払いが発生する。現在晒している牌だけでも役牌三槓子の3翻。当然、ここで暗槓ということも聴牌もしているはず。未だ私からは奴に聴牌気配を感じないが、何せ宮永はオカルト殺し。それくらいは無効化する何かを備えていても不思議では無い。

「もう一つだけ、カン」

「な……!?!」

「――」

宮永 手牌

〔裏裏〕

明槓〔東東東横東〕

暗槓〔裏発発裏〕

〔裏11裏〕

〔裏99裏〕

打牌

〔2〕

絶句する。明槓からの四槓子で裸単騎……私は夢でも見ているのか？　そしてここに来て、ようやく宮永から聴牌の気配を感じ取る。つまりは今の今まで聴牌していなかった……？　駄目だ、もはやこの感覚すら信用し切れない。

見誤っていた。そうとしか言えない。拙いなんてものじゃない――なんだこの状態は。状況的に明らかにおかしいのは神代のはずなのに、気づけば宮永が奴の喉元まで迫っている。

まるで、宮永を前にオカルトを以て臨む。それ自体が過ちだとしても言うように。

「……………」

神代小蒔 手牌

〔111233477888999〕

ツモ

〔五〕

打牌



〔五〕

「ロン」

「またもや裏目を引いたであろう神代の捨て牌に、有り得ない宣告が響き渡る。」

もはやこの場の異常性は、誰の目にとっても明らかだ。ならば当然、萬子を独占し続ける神代に直撃を取することは不可能であるはず。

宮永 和了形

〔五赤五〕 明槓〔東東東横東〕

暗槓〔裏発発裏〕

〔裏11裏〕

〔裏99裏〕

「四槓子。32000点。ダブルあつたら数えで加算行けたんだけど……」

「……………」

いや、既にそれは、不可能であつたに訂正すべきだろうか。見誤っていた。見縊っていた。このように、他に誰も和了れないような異常な状況下に於いてこそ、そこは宮永の独壇場と化すことを――

先鋒戦終了

臨海 89900

永水 27800

龍門渕 168300

千里山 118000

☆☆☆

「江口さん普通に強いから本当に困る……」

控室に戻って来た宮永さんが、珍しく弱音のようなものを溢す。い

や、厳密にはそこまで珍しいわけでもないが、とはいえあのような異常な卓を制して来たとは思えない呑気な内容だ。ついでに言えば矛先もおかしい。もつと他に言うべきことがある気がする。

「何ですの、あの永水の子は……」

当然に、必然に。透華がボクのを思考を代弁する。そう、まずあの卓で思ふべきことはそれだ。何なんだあの化け物は。この大会でもう散々豪運というモノは見慣れたつもりだったけど、あのオカルトは本当にやばい。何だ配牌からツモから全部萬子一色って。あんなのに比べたらボクの手品なんてイカサマにも入らないぞ。

そんな透華の絶望交じりの呟きに、宮永さんはあっけらかんと、「分かっているとは思うけど、一種類の数牌を引っ張ってくる能力だね。あそこまで強力で理不尽なのは初めて見たけど」

「いや何でアレに勝てるんだ……?」

半ば引いてる純くんがこれまた当然の疑問を呟く。というか勝てるどころか萬子を独占してるはずなのに当人を狙い撃ち出来るのが本当に謎である。この人の対オカルト性能の高さは常々思い知っていたはずなのだが、相手がヤバければヤバいほど、それに普通に打ち勝ってくる宮永さんの異常性が際立ってしまう。

「可能性を0にすると能力が成立しなくなるからね。だから可能性に最大限蓋をして、普通は触れられない場所に直撃する牌を隠してるんじゃないかなーって王牌に目を付けたんだけど、そうしたら案の定ピンゴ。しかも衣ちゃん同様ルールがガチガチなだけあって、それを乗り越えて和了した時の倍率がドン！ 多分リーチかけてたら裏ドラ含めて数えだけでダブル行ってたんじゃないかな。

それに、普通なら山に萬子だけとか3〜4巡もあればツモると思うんだけど、わざとやってるのかなってくらい裏目ってたし、意外と余裕だったね」

「……………」

もはや何を言ってるのか分からない。余裕。余裕と言ったのかこの人は。あんな異常な打ち手を前にして、意外と余裕で勝てちゃうと。

やっぱりこの人もこの人で、衣の同類なのだと改めて思う。永水女子の先鋒である神代小時。アレの異常性が衣さえ凌駕するのは確定的に明らかだ。確かに衣の闘牌は色々とおかしいが、それでも麻雀として成り立つ範囲でのオカルトだった。

しかしあの永水の一年と言えばアレだ。宮永先輩がさらつと言っていた理不尽なんて言葉すら生温い。それこそ実際に打ち勝ったこの意味不明な先輩の存在がなければ、彼女に対して喚き立てていてもおかしくはなかっただろう。

「まあ、安心していいよ。これは私の経験則だけど、あれだけぱつと見理不尽な感じの能力は、実際には見た目ほど理不尽じゃないのが常だから。仮に初見の国広さんが相手だったとしても、最後まで諦めなければトぶまで削られることはないはず」

「……それはどうして？」

「それはただの理不尽だから。……なんか哲学みたいになりそうだね。まあ頭の片隅にでも置いて。私は人より、ほんの少し視野が広いだけ。この世界の麻雀は、誰に対しても道が示されている。そして、神であろうと卓上では負けることもある。それこそが、私が好きな麻雀という競技なんだからね」

ゴーストライターはちよつとねー、などと訳の分からない言葉で締めくり、理解できない理論を乱発していた宮永先輩との会話が終わる。これは単なる偶然だが、その日にボクが宮永先輩と直接会話をする機会は訪れなかった。つまりはそれだけ宮永さんを頼る、即ち切迫する場面がなかったということだ。

しかしながら、それも当然だろうと内心では思う。何せあの衣が最後に控えているのだ。ボクも防御に自信がついて来たし、大負けさえしなければ捲れる保証があるのは思った以上に精神的なアレが大きい。

緊張感が足りない自覚はある。けれどそれでいいのだと。むしろそれこそが良いのだろうと。まあ実際にはそれも分からないけど、ボクらが他の学校にはない心意気で臨んでいるのは間違い無いだろう。

何にせよ、今は非常に楽しんで打っている。勝てば喜び、負ければ

悲しむ。そこにオカルトだのといった難しい要素は絡むことはない。それこそが無名校であるボクらの強みであるのだと、最近になってようやく実感するボクだった。

準決勝第一試合終了

臨海	9	2	7	0	0
永水	1	9	3	0	0
龍門渕	1	5	2	0	0
千里山	1	3	6	0	0

何かを諦めそうになった日

『ロン。四槓子、32000点』

「……わからん」

そんな言葉を吐き捨てて、リモコンの一時停止ボタンを強めに押す。仮にも生徒から提供を受けたビデオに対し指導者として有るまじき発言であることは百も承知だが、実際にカケラも理解できないのだから解説のしようもない。

改めて画面に映る宮永の姿を見れば、そこにはここ最近ですっかり見慣れてしまったポーカーフェイスがデカデカと表示されている。この場面で宮永が拡大されているのは単にテレビ局側の都合ではないのだろうか、一切の動揺を示さないその表情を見るに、少なくともその和了りが偶然ではないことが覗える。

いや、そんなことはこの意味不明な和了り方を見れば一目瞭然なのだが、それでも結論を後押しする材料くらいにはなる。元より可能性の一つとして考えてはいた、しかし証明する手段が無くて断念したある一つの仮説。

「……思えば、あの天江を難なく抑えてる時点で気づくべきやったな」  
小さく呟く。天江と宮永は同じ部活の部員同士。それは確かにそうだろう。しかしその事実があつたとしても、普通はそれで手を抜くなんてことがあるだろうか。むしろそのような関係だからこそ、公式の場では馴れ合いを廃して全力で闘うのではないだろうか。

実際、ウチは千里山の部員に対してそのように指導しているし、普段世話になっている先輩が相手だからと八百長なんてしようものならブチギレる自信がある。纏めると、あの個人戦の結果は紛れもなく死力を尽くした果てのものであり——宮永のオカルト殺しが、おおよそ怪物と呼ばれる程度であれば軽く凌駕しているということ。それ即ち、

「浩子、どうや？」

「はい。……あくまで推測ではありますが、宮永のオカルト殺しが、天江や神代のソレに匹敵……いえ、凌駕しているのは既に周知の事実。」

つまりは逆説的に、宮永もアレらと同等の才能を持つ存在——全国区の怪物の一人である。……ウチはそう見えています」

ほぼ100点満点の回答に深く頷く。やはり親戚だからなのか、思考回路等が非常に似通っていて話が早い。……いや、親戚云々は関係ないな多分。少なくとも洋榎はこんな思考回路してへんわ。面倒だからと適当に殴りかかりに行きそうやわ。

「あの打ち方を第一打から迷いなくやり始めるのがある意味一番の問題やな。打つ前からどんな能力かその対処法を含めて知つとつたつてことや。……まさにオカルトやな。もはや手牌が透けてるようなもんやろ。そら防御も上手くなるわ」

「……ですが、それで何かが変わるんですか？」

愚痴るウチに、清水谷が言う。一発目から中々鋭い意見で感心する。そうだ。宮永のそれが神代すら上回ったとて、それで何が変わるわけでもない。千里山の麻雀が良くも悪くも普通のデジタルをベースとしているのは他ならぬ宮永自身が証明している。であれば宮永がその方面での化け物であれ、それが表に出てこないのであれば問題ないのではないかと。

「慌てんなや。単なる確認や。清水谷の言う通り、ウチは多分問題ないやろ。これは完全に予想外なことに、ウチの江口はどういうわけか、相当に宮永と相性が良いみたいやからな」

「せ、せやろか……？」

首を捻る江口。まあ普段の江口のこと、基本互角以下で勝った半荘も大勝ちはしてへんのに相性が良いなどと言われても困惑するだけだろう。しかし、

「姫松はまあいいとして——新道寺の白水。これが普通の打ち手かと聞かれると非常に疑問が残る。配牌の後に牌を伏せる謎の動作。あれが何かしらのオカルトである可能性はそれなりに高い。」

しかし、流石に初見で全く通用しないとまで割り切るはずもなく、臨海の先鋒同様に、自慢の打ち筋を何度かは試すはずや。となるとオカルト殺しの宮永は、おそらく点数稼ぎのために新道寺を狙ってくる」

永水のアレを破れるからには、具体的にどんなものかさえ分らない新道寺のオカルトがあつた宮永に通用するはずがない。とはいえ新道寺も愚図ではない。通用しないものをいつまでも試すはずもなく、故に予想できる試合運びとしては、基本的に全体の点差は横並びで、新道寺の試行回数次第でその分宮永が突出してくるといふもの。

「仮に先鋒終了時点で新道寺を8万、龍門測を12万とする——そこで問題となるのが新道寺の次鋒や。地区獲得点数20万点越えの怪物……鶴田姫子。天江や神代に隠れとるだけで、世代が違えばまず間違ひなく大物ルーキーとして称えられたであろう打ち手。これが存分に暴れてくる」

次鋒はオーダー的に副将とどちらかとで四、五番手が基本となるので当然であるが、厄介なことに、次鋒はウチや龍門測含む全ての高校で穴と呼べるレベルの打ち手しか存在していない。無論、それでも実力者揃いであるため飛ばされるほど大負けはしないはずだが、それでも新道寺が凹んだ分を軽く挽回してくるであろうことは事実。となると、

「姫松中堅の洋榎は親の鼻肩目を抜きにしてもまず間違ひなく区間一位を取ってくる。副将は何処も同程度のデジタルでそれほど差が付くとは思えない……結果、唯一あの天江と長く打つとるウチだけが沈んだ状態の横並びで大将戦や。厳しいことを言うようやけど……清水谷。アレに打ち勝つ自信はあるか？」

「……………」

返事は沈黙。つまりは実質的な否定。それでもハッキリと口に出さないのは、彼女がウチの教えを忠実に守っているからだろう。泣ける話だ。監督としてとても不甲斐無く思う。

しかしだ。直近の半荘の結果を見るに、打ち勝てるとは断言できずとも、あれが不甲斐ない結果だとは口が裂けても言えず、少なくとも最初の頃のような大負けはしていない。その旨について言及すると、「別に、あの宮永を参考にしたわけではないんですけど……何というか、最初は理不尽でしか無かったのは確かなんです、何度も打つてる内に『これは残したらアカン』って牌がなんとなく分かってきたと

言いますか。牌効率とかやなく、あくまでウチの勘でしかないんです  
が……」

菌切れの悪い言葉。本人も言うように完全に感覚頼りで説明を求められても困るのだろう。だが、非常に興味深い答えではある。天江との対戦を重ねるにつれて、清水谷が段々と暴牌をするようになっていたのはウチも当然気付いていた。それはあの異常な場での彼女なりの足掻きなのだろうとこれまで言及はしていなかったが、やはり対戦相手にしか分からない何かがあるのだろうか？　そして、だからこそ清水谷と同程度かそれ以下の実力の井上も、あの天江衣を相手に和了れたりしたのだろうか。

ウチがその言葉を受けて色々と考え込んでいると、清水谷は更に続ける。

「それと……これも確証はないんですが、なんか天江、打つ度に弱なつとるような気が……」

「弱なつとる？」

「はい。……何ですかね。ウチが慣れたとか多分そういうの関係なく、二回戦と比べて体感できるくらい圧力が減ってます。もちろん、天江自身が『この程度で問題ないやろ』って加減しとる可能性もあるわけですが、その割にはあの点差でオーラスにも圧力がそのまま聴牌もできたんでちよつと違和感が……」

「ふむ……？」

対戦する度に弱くなる……？　仮に天江が体調を崩していたとて麻雀にそんなことが関係あるだろうか？　いや、神代の例からしてそれと同格以上の天江衣に常識は通用しないと見ていい。

そして、(あの和了り方を弱点と呼んでいいのか疑問であるが)宮永が証明して見せたように、どんな理不尽に見えるオカルトにもおそらく何らかの穴がある。あれから宮永が傍目には暴牌している牌譜を漁ったが、天江を筆頭に個人戦での成績が高い面子ほど宮永に点棒を筆られる傾向があったはず。順当に考えるなら(あんなオカルトに順当もクソもないが)麻雀の楯と同様に、その力が強ければ強いほどデメリットが悲惨なことになり、そこを宮永は突いている感じか？



(……分からん)

結局、結論は同じまま、その日のミーティングもロクに成果が出ないままに終わる。元より、この段階まで来たらかが一指導者に出ることなど何も無い。せいぜいが生徒を激励し、信じて送り出すくらいだ。

土壇場で都合の良いアドバイスなんて出てこない。それが対人戦である麻雀の指導の課題であり、運否天賦の競技の宿命なのだから。

☆☆☆

「えー。新道寺の先鋒と次鋒ですが、非常に面白いオカルトを持っています」

唐突にボク達の居た衣の一室を訪ねてきた宮永先輩が、その部屋にたまたまレギュラーが全員揃っていたのを見て、これまた唐突に話し始める。

とはいえ今となってはこれも馴染んだもの。彼女が衣の部屋を訪ねたのは単純に衣の部屋がボクらに割り当てられた部屋の中で一番広いからで、そもそも彼女がこんなノリでボクらを風呂だの食事だのに誘うのは一度や二度では済まない。何なら透華の意向で部屋も無駄に広いのでボクら以外の部員も割と居着いて駄弁することも多く、その中でも特に宮永先輩と仲がいい礼堂さんが返答する。

「……新道寺？　また神代さんみたいなトンデモ能力持ちだったりするの？」

「いや流石にあんなのはそうそういないからね？」

即答する宮永さん。それは宮永さんと言えど即座に否定できる内容だったらしい。むしろそうでないと困る。あんなバケモノがゴロゴロ居たらイカサマしてまで勝利を貪っていたかつてのボクの立場が本当に無い。

と、思っていたら

「いや、ある意味では神代さんより酷いかな……和了れないという意味で」

「え」

手牌が萬子一色とかいうバグより酷い能力？　なんだそれ。想像もできないんだけど。ていうか宮永さん今次鋒つて言つてたよね？

何、ボクそんなバグ相手と戦わされちゃうの？

「新道寺と言えば……確かに先鋒が、配牌の後に妙な仕草をする話題になっていましたが」

「そう、それぞれ。それが起動条件みたいで、しかも発動条件は異なるっていうまんま『能力』だね。ここまで明確にルールが限定されるタイプも初めて見たからびっくりした」

「起動条件と発動条件……？　とりあえず一旦、どのような能力なのかお聞きした方が良さそうですね」

「……………」

何らかの条件が必要な能力とか本格的に別ゲー感がするなあと思いつつも、自分のことなので真つ先に無言で居直るボク。見れば礼堂さんと戯れていた衣や純くんなんかを始め室内にいる全員がこちらに注目していて、それを受けた宮永さんが小脇に抱えていた携帯型ホワイトボードを広げると、

「えー、まず先鋒である白水さんが配牌を確認します」

「ふむ」

「配牌を見て『これならN翻で和了れそうだな』と判断したら一旦牌を伏せ、能力発動。Nの翻数以上になるように縛り打ちします。ちなみに発動は任意です」

「…………縛り打ち？」

「うん。で、例えば4翻の役数で縛り、予想より手が高くなって跳満で和了る。そうすると能力が成立。実際に白水さんが和了した翻数とは関係なく、縛った翻数の倍の翻数、つまりは倍満で、次鋒の鶴田さんが白水さんの和了した局にほぼ確実に和了できるというものだね」

「……………頭が痛くなりそうですね……………」

発言の通り、額に深く手を当てて頭痛を堪える透華。その気持ちは

非常に良く分かる。確かにこれは酷いオカルトだ。つてかここまで来ればオカルトも糞もない完全な超能力者じゃんか！

「対応する局つてのは白水さんが東一局に和了すれば鶴田さんも東一局で和了る。南三局だったら南三局で和了るって感じだね。親が連荘して南二局の三本場なんかになってから白水さんが和了した場合、南二局になってもその本場に到達するまで能力は発動しない。流局して流れ一本場となった場合は0本場で和了した場合の引き継ぎを持ち込めず、縛りに失敗した場合は成功した場合と同様に、ほぼ確実に鶴田さんも和了が不可能となる。他にも細かい条件はあるけど、概ねこんな感じかな」

(……………)

まずい。結構重要そうな内容なのに全然頭に入ってこない。なんだこれは。本当に麻雀の話なのか？ ボクはどんな異世界に紛れ込んでしまったのか。

「……………酷いとかそれ以前に、自分が和了れるかどうか完全に相方頼りとかそんな能力あるんだ……………」

礼堂さんが言う。……………確かに。他人依存の麻雀とか、そんなの色々可笑しいだろうとボクも思う。だってそんな能力まで持ち出したら、初心者ですらその能力を持っていれば衣を相手に完封するとかも容易に出来てしまう。

「……………倍の翻数ともなれば、比較的容易なタンヤオピンプの2翻ですら鶴田姫子にとっては満貫に匹敵する。満貫であれば倍満以上。倍満を2度成立させるだけで役満を2回ほぼ確実に和了ることができ……………これが地区大会獲得点数20万点越えのカラクリですか。なんともまあ……………」

もはや色んなトンデモ能力に慣れてしまっていた透華でさえこれには呆れ顔だ。とはいえ透華も透華で人のことは言えないけど、透華は極力例のオカルトが暴発しないよう努力してるだけで本当に有り難いと思う。衣とかボク相手だろうと全然加減しないしね。

そんな衣は、この巫山戯た能力のあらましを聞き、

「……………確実に和了る。それは衣が相手でもか？」

「衣ちゃんはまだ無理かな。咲でギリギリ行けるかどうかってレベル。多分だけど、あの2人だけじゃなくて、白水さんが対峙した3人の力量もそのオカルトの強度に上乘せできるんだと思う。あれだけの相手から縛り付きで和了したんだ。だからこれくらいの報酬はあってもいい——ってな感じで」

「やられる側からすると理不尽極まりないですわね……」

「……でも照、『ほぼ』って言ってたよね。それは妹さんだけ？ 照はどうなの？」

「私は逆にああいうのカモれるから大丈夫。ただ……どうだろう。私が戦うのは白水さんの方で、白水さんがオカルトかって聞かれると実際に戦ってみないと微妙というか」

(行けるんだ……)

成立させた後に失敗させたら木偶になりそうだから稼げそうなんだけどねー、と軽い調子で言い放つ宮永さんに戦慄する。今の説明を踏まえてもなお行けると判断する辺り、本当にこの人にはオカルトが通用しないんだなと改めて実感する。

「いや、成立すると理不尽だから多分行け……行けるんだらうか……だって縛ってるだけだし……でも影響が酷過ぎるからきつと……おそらく、メイビー……」

「……」

結局、とても不安になる言葉を最後にその日の対策会議はお開きとなった。いやだって、これ以上その理不尽能力の何を話し合えと？

他力本願なのは承知の上だが、宮永さんには本当にどうにか頑張つてそのオカルトを阻止して欲しい。ここまで来てそんなオカルトを理由にボクが原因で負けるなんて悔やむことすら出来ないじゃないか。

「じゃあ行ってくるねー」

翌日。そんなボクの思いが通じているのかいないのか、宮永さんは決勝だろうと変わらぬいつもの軽い調子でやや早めに試合会場に向かう。卓でゆっくり本なり新聞なりを読むと何となく集中力が高まる感じがするんだとか。理解はできないが、もう錯覚でもなんでもいいから極限まで頑張ってください。

「はじめ。……貴女の結果が如何でも、きつと衣が取り返してくれませぬ。最悪、このわたくしがあの力を使って——」

やめて透華やめてやめて宮永先輩が失敗する前提で話さないで。いいから、そんな悲壮な決意とかいらぬから！ 確かにボクの実力とか信じる以前の全部ガン無視するような酷い能力だけど、ボクも何とかなるように頑張るから！

(でも、衣ですら無理って言われる能力をどうやって……？ 倍が基本だから安手には期待できないし、直撃を避けるにも、多分ボクがあの卓で一番弱いからどうしようも……)

押し寄せる絶望感と焦燥感に頭がくらくらとする。いつそ透華に例のアレを使わせてしまった方が楽なんじゃないかと考える弱いボクが頭の中に湧いて来て死にたくなる。透華はボクの恩人だ。そんなことはさせてはならない——そうは思っても、状況が許してはくれない。ここまで来て負けるだなんて、透華にとっても絶対に避けたいことだろう。

それでいいのか？ そんなことが許されるのか？ あの力は確かに強いが……ある意味で、衣以上に麻雀を否定する力だ。そんなものを振り翳して勝利する透華を、ボクは見たいと思うのか？ でも——

先鋒戦終了

龍門淵	126000
千里山	107300
姫松	96500
新道寺	70200

「まさかあの能力があった上で、卓外から更に『信じてますからね』っ

てノリでサポートしてくるとは……これは酷い。近年稀に見るイン  
チキ能力だったね」

「……………」

そのインチキ能力をカモに出来るお前のがインチキじゃねえか、と  
いう言葉を辛うじて飲み込んだボクを誰か褒めて欲しい。

## 多分何かが発覚したその日

油断がなかったかと問えば、完全にそうだとは言えない。

だが、断じて慢心していたつもりはなかった。これまで積み上げた経験を糧に、いわゆる強者のいなし方がようやく手に馴染んできて、これが最後だと全霊を以て挑んだ試合。

衣や透華の派手さとは対照的な聴牌流局を二度繰り返し、遂に行われた親のリーチを警戒する。それ自体はまあ仕方ない。それに対し、一発消しのためにオレは多少強引に鳴いた。この対応も、場合によるが非常に良くある対処の一つだろう。

しかし。

「鳴けばなんとかなる——ってか？ ハッ、ちゃんちゃらおかしいわ」

鳴きは麻雀のリズムを乱す行為である——そう例える人間がいる。その理由は明確かつ明瞭。単に順番がズレるのもあるし、コトコトと小気味良く鳴り響く牌の音の中でじつくりと手作りするのが好きなヤツは一定数存在する。

鳴く、という行為は即ち、他者の和了りを意識させる行為だ。その中でも一発消しによる鳴きは特に嫌われることが多く、逃れられない状況下での振り込みの可能性を意識させられることが苦痛だという気持ちは非常に良く分かる。ルールにもよるが食い換えによる鳴きが大体禁止されているのは、実はそういった私情が絡んでる可能性がないとは言えない。

転じてオレは、鳴きにより相手のリズムを乱すことで、相手の調子を崩すことを自身の得意技としていた。宮永先輩曰く、これ自体に能力と呼べるほどの精度はないらしいが……それは逆に、その技術は、オレ自身の培ってきた歴とした技の一つなのだ、磨いて来た経験の賜物であると、ある種の自信を抱いていた。

「今までは多分、それで何とかあったんやろうけどな——ウチをお前がこれまで戦った連中と一緒にしてもろたら困る」

だからこそ、これは初めての経験だった。ハジメくんのように柔軟に躲すでもなく、透華のように繊細に受け流すでもない、まして衣の

ような強引に潰すのともまた違う。正しく初めて受ける感覚。

全く効いてないわけではない。一発消しには眉を顰め、リズムを乱した感覚もある。しかし、それではまるで揺るがない。彼女は鳴きを厄介だと感じるそれ以上に、自身の打ち方に絶対の信頼を置いている。

衣や宮永先輩とも異なる形質の気迫——強者としての矜持。無名であったウチの学校には決して持ち得ないもの。名門校のエースとしての誇り。それを振り翳すでもなく、確かな積み重ねと共に実績を積み上げ、彼女はその座に恥じないよう真つ直ぐに突き進む。

揺らがない。折れない。曲がらない。故に強い。そんな人物。姫松高校2年、愛宕洋榎を端的に換言するならば、それはまさしく——

「——格が違うわ」

「……！」

中堅戦終了

龍門渕	9	5	3	0	0	
千里山	1	1	6	1	0	0
姫松	1	4	4	2	0	0
新道寺	4	4	4	0	0	0

☆☆☆

「悪い……」

「……いえ、彼女が貴女よりも強かった。それだけの話です。純に落ち度はありませんわ」

バツが悪そうに戻ってきた純くんは、透華が柔らかく迎え入れる。これもちよつと前までの透華であれば「何を負けているんですの！」などと理不尽に叱咤していたかもしれないが、彼女もこの大会で色々



と理不尽極まりないオカルトを見慣れてしまったせいか、もはやその声色に責める意思はまるで感じられない。

(でも、本当に強かった。大阪予選が事実上の全国大会とまで呼ばれる理由が分かるかも……)

姫松高校中堅、愛宕洋榎。中堅にエースを据える伝統校にてその座に座る2年生であり、衣や宮永先輩とはまたタイプの異なる強者。何ならボクがこれまでこの大会で見えてきた打ち手の中で一番真つ当に強い打ち手であり、名門校のエースとしてはこれ以上ないくらい適任の人物とも言える。

「搦め手が通用しないわけじゃないけど、その上で踏み越えてくる……私の一番苦手なタイプかも。真つ当に戦ったら普通に負けそう」

「……江口さんに似たタイプ？」

「そうだね。江口さんを更に柔軟にした印象の打ち手かな。爆発力では江口さんに劣りそうだけど、その分手の形に拘らないで丁寧に打ち回す。厄介だね」

宮永先輩がボソツと呟いた言葉に、礼堂さんが興味深そうに反応する。そして語られる内容についてもボクが抱いた印象に相違ない。だろうとは思っていたが、やはり彼女にオカルト云々は付き纏っていないらしい。

そしてそれは即ち、彼女がボクの目指す強者としての理想系にほど近いということ。正直なところオカルト能力に興味がないと言えば嘘になるが、散々理不尽なオカルトを体感したこの身。どうせ宮永先輩には通用しないだろうし、神代さんのレベルまで行ってしまうと麻雀を真つ当に楽しめなくなりそうだから、そういった要素を抜きに強者として君臨する彼女の真つ直ぐな麻雀にはある種の憧憬を抱かざるを得ない。

そんな風に考えていると、点数状況を見ていた宮永先輩が不意に、「やっぱり全体的に実力不足が響いてるかな……ぶっちゃけ私達のチームって、衣ちゃんの稼ぎに割と依存してるしね。龍門瀬さんも素の状態で相当強いと思うんだけど、それが平均クラスとかまさかここまで全国が魔境だとは」

いやはや井の中の蛙つてやつだね。と続ける宮永先輩。しかし、ボクや純くんの実力が足りていないのは否定しないが、貴女は十分その大海に適応できてるので安心してほしい。何ならゴジラでも這い出てきたのかつてくらい暴れ散らかしてるから少しは自重してほしい。「ごめん。失言だったかな」

「……いえ。でしたら、わたくしがあの力を使って」

「それはちよつと短絡的だね。むしろ今回は使わない方がいいかな。ちよつと想定以上に新道寺が凹み過ぎてる。龍門渕さんはあのオカルトを制御してるとは言い難いし、発動中は意識があるかも怪しいから逆転するより前に新道寺が飛びそう」

「ですが、今夜は……！」

「はい、ストップ」

何やら反論をしようとした透華を、宮永先輩は強引に窘める。とうか今の会話、まさか透華、自主的にあの力使おうと……？ いや、思えばボクの出番の時にも似たような会話はしていた。その時は新道寺の次鋒が見るからに焦燥していたので流れた話だけど、いつからだろう。生来の気質かここまで勝ち進んだからなのか。いつの間にか透華にとつても、この勝負はボクの思ってる以上に重要なものになっていたのかもしれない。

そんな透華に、宮永さんは一瞬だけ純くん以上にバツの悪そうな顔をして明後日の方向を向くと、

「そういえば、衣ちゃんは何処に？」

「え？ あ……外の空気を吸いに……ハギヨシさんが付いてるから、遅刻の心配はないと思う」

「そう。……なるほどね」

ちよつと唐突な質問に戸惑うも、解答には納得したのか宮永先輩は改めて静かに透華へと向き直る。……そういえば衣が唐突に一人になりたいたからと退室したのも、少し前までは良くあったけど麻雀部に所属してからは初めてだったはずだ。ボクには普段通りの様子に見えていたのだが、良く考えれば衣はこの大舞台での大トリである大将。あの小さな体躯には収まりきらないほど、膨大なプレッシャーが

掛かっているもおかしくはないのだ。

「……確かに、今日は衣ちゃんにとって都合が悪いかもしれない。もしかしたらこの点差では、流石の衣ちゃんでも厳しいのでは……そう思う気持ちは分かるし、どうにか出来るならと考えるのも納得できる。だけど、元より麻雀とはそのようなもの。確実に勝とうだなんてそれこそ巫山戯ている。もちろん、私だって勝ちたい気持ちはある。こんなところまで来たわけだしね。でも、それで龍門渕さんが気分を悪くするようでは話にならない」

「……」

「この際だから言っちゃうけど、実は衣ちゃんのオカルトに酷くムラがあるのは、厳密には月齢が関係しているわけじゃない」

「……え？」

「多分、そのことはもう、衣ちゃん自身が一番良く分かっているはず。その上で彼女はこの大舞台に挑まんと気を落ち着かせているのに、他でもない貴女が、みすみす敗北に直結するような打ち方をするのは私が許さない」

「……」

(……)

黙り込んでしまった透華を尻目に思考を回す。正直、衣についてとか割と衝撃的な内容だったが、彼女が言わんとしていることは分かる。そう、勝ちたいという気持ち以上に、ボクは透華が苦しむことを望まない。当然それは宮永先輩やボクだけじゃなく、純くんも智紀も、衣や他の部員だって同じ気持ちのはずだ。

この部の中心は誰かと問えばおそらくは宮永先輩の名前が一番に挙がるが……そもそのきっかけを築き上げ、皆をここまで引っ張って来たのは透華がいたからこそだ。そんな彼女の我儘で負けたところ……否、そもそもそんな彼女らしくない打ち方をして勝ってきたとして、それはボクらの心に痙りを残すだけだろう。

「……」

「透華……」

厳しい言葉に頭が冷えたのかどうか、しばらく考え込んでいた透華

は不意に時計を見て、

「……そろそろ時間ですわね」

「お、おい、透華……」

純くんの制止も振り切り、そのまま彼女は控室を後にする。時間がないのは本当だ。しかし今のは明らかにこの場を去るための言い訳だった。無愛想とも言える、基本物腰が丁寧な透華は滅多に見せない態度だが、やはり長年付き人なんかをやっていると、稀にそんな姿を見る機会もある。……『超絶不機嫌です』っていう、そんな感じの態度をだ。

「……………」

その透華も去り、すっかり静寂に包まれた控室の中心で、宮永先輩は無言で立ち尽くす。透華ばかりに注目していたが、こつちもこつちで態度が冷え切っている。空気が重い。衣の本気モードと同等以上の重圧を感じる。

と思ったのも束の間、やがて宮永先輩は長い、長いため息を一つ吐くと、近くのソファに深く腰掛けて、

「…………ごめん。支配が漏れてた」

何を、と疑問に思う間さえもなく、その一言で周囲に張り詰めていた重圧が霧散する。……いや、え？ 何なの今の？ 支配って何？ もしかしなくても今の宮永さんがやってたの？ あれだけはつきり周囲にプレッシャー与えるとか、やっぱり超能力者なんじゃないのこの人？

そんな感じで混乱しているボクを余所に、宮永先輩はため息混じりで、

「……まあ、大丈夫かな。龍門渕さんは意固地だけど、融通が利かないわけじゃない。何より、衣ちゃんのことを誰よりも考えてる。ちよつと……いやかなり強引に押し止めたからだいぶ怒らせちゃったみたいだけど、生憎と恨まれようと勝負は妥協できないからね……」

「……………」

意外……でもないのだろうか。けれどボクにとっては意外なこと  
に、ああ見えて彼女は勝負に結構シビアな考えを持つていたらしい。

普段の緩い雰囲気からはあまり結び付かないが、そういえばこの人って部内戦でもほぼ無敗……衣と同様、完全なお遊び以外で手を抜いてる様子は見られないんだよな。尤も、能力が能力だからか、それでもボク相手にさえもごく稀に負けることはあるんだけど。

「しかし、オカルトが本人の気質に合わないとかあなるんだね……龍門渕さんには悪いけど、とても興味深い事例」

「いや、大丈夫なのか、あの様子で……」

「問題ないよ。少なくとも、あのレベルの相手であればね」

これまでの流れを全て否定するような発言をあっけらかんと言いつつ宮永さんに、こっちの方が呆気を取られる。やや言葉に咎める意図もあった純くんもこれには目を見開いている。そこは流れる的に透華がピンチになる感じじゃないの？ いや、そんな展開は全く求めでもないけどさ。

「——姫松の副将の上重さんは、特定条件下において手牌の質が向上するオカルトを持つ」

「え？」

「それだけじゃなく私は、その特定の条件が何なのかも、手牌が具体的にどんな方向性で伸びるのかも、当然、その対策や弱点も含めて、きつと彼女自身が把握している以上に、私は既にそれを知り尽くしている」

「――」

何やら語り出した宮永先輩。聞くに、これは宮永先輩本人の能力の解説だろうか？ いや、違う。前にも何度か似たような語り出しを聞いたことがある。多分これは——何かの説明の前振りだ。

宮永さんはそこで一度言葉を区切ると、控室にあるモニターに映り込んだ透華を一瞥して、

「私は、自分のことを強者であると認識している。特に、『見る』分野にかけて——私を超える存在は、トッププロにもいないと確信するほどに。その理由は……」

「対オカルトへの対応力。およそ見たモノ全てを暴くオカルト能力……」

「照魔鏡。私はそう呼んでいる。既に我が眼と一体化して久しいこの能力は、私自身のツモ運雀力支配力抵抗力拘束力その他色々麻雀に係するもの全てと引き換えに、捧げた分だけ私の視界を拡大することができる。ちなみに副次効果で視力が6以上ある」

そんな能力だったのか。そういえば概要くらいは流石に知っていたけど、こうして詳しく説明を受けたのは初めてかもしれない。あと捧げたものの半分くらい麻雀と関係ない力が混ざっていませんでしたか？　というか視力増強まで出来るとかやっぱり超能力者なのでは？

「母さんも、咲も、衣ちゃんも、神代さんも、あの小鍛治プロでさえも。私の眼からは逃れることは出来ない。それはつまり、少なくともこの分野において、彼女らが私に劣っている証明となる」

でも、と一度宮永さんは言葉を止める。ゆっくりと動かししていたその目線の先には、既にモニターの先で卓に座って集中している透華の姿が見える。

「たった一人——ある人物のオカルトを、私は看破することが叶わなかった。事前にたくさんの能力を炙り出していたのが理由かもしれない。この能力は私の眼、それ故に乱用すると眼精疲労のような症状に襲われて精度が落ちるのは確認してる。だけど、私の感覚だとそれとは違う」

「……！」

ハツとする。思い出すのはかつての勝負。割と唐突な流れで始まった能力精査大会のこと。その最後の最後に行われた戦い——確かに、今になって思えば、あんなオカルトな場に対して、この人がオラスまでされるがままだったのは違和感がある。

「今は確かに全国平均レベルかもしれない。でも、私が例の初見殺しに目醒めたように、オカルト使いとしての素質は、使わなかったからと無駄になることは絶対はない。」

だから、私はあの人を——龍門瀏透華の持つ潜在能力を評価している。他でもないこの私を、彼女はある意味で凌駕していると言えるから」

「……」

まるで何かを噛み締めるように彼女は告げる。この場の誰よりも優れた視界を持つ彼女の視線が注がれる先には、何だかんだと幸先よく満貫を和了る龍門渕透華の姿が映されていた。

副将戦終了

龍門渕	1	0	7	0	0	0
千里山	1	2	1	0	0	0
姫松	1	3	9	9	0	0
新道寺	3	2	1	0	0	0

## きつと何かを慈しむその日

ギンギンに照り付ける太陽が、容赦なく全身を焦がす。

蛍光色は光を反射する、などと言っても、所詮は鏡面でもない人間の髪。他者よりポリウームのある髪量は熱を溜め込む機能もそれ相応に高く、蒸すような周囲の気温も相俟って私の体温を上昇させ続けている。

暑いからと薄着で外まで足を運んだのは失敗だった。露出している肌部分が既に赤く染まりかけ、一部は焼けて皮膚が捲れてしまっている。昨日まではこれほどではなかった。だが天気など気紛れなもの、夏なのだから仕方ない——そう思うそれ以上に、この会場の付近だけが、他の場所に比べて異様に熱気が漂っている気がする。

否、気のせいなどではないだろう。何せ今は、全国の麻雀好きが集まる祭典の頂点を競う戦いの最中。その中のごく一部とはいえ、いよいよ一億を超えた競技人口の更に選別された民草が、この状況で平静にしている方が無理というものであろう。

「衣様」

そうこうしていると、衣の健康を気遣ってか、あるいは単に時間が差し迫っているからなのか。透華の付き人であるハギヨシの声がどこからか聞こえてくる。正面に姿を現さないのは、衣の気分をなるべく損ないたくないという彼なりの流儀だろうか。時間になったら声を掛けるよう依頼したのは衣なので些か気を使い過ぎのような気がするが。

「……………うむ」

返事を返し、ベンチから立ち上がる。踵を返せば真正面とはややズレた位置にハギヨシは控えていて、これも不意に背後を向いた衣を驚かせまいとした配慮だとすると病的でむしろ感心する。いや、彼のことはいい。そんな彼がこうして声を掛けたということは、本当に時間が差し迫っているのだろう。まさかここまで来て遅刻が原因で負けるなどと馬鹿馬鹿しい。急ぎその場を後にして会場へと向かう私。

「……………」



会場の入り口に差し掛かる直前、ふと背後に広がる空を見上げる。中心には空を独占し我が物顔で輝き続ける太陽がいて、少しの間探してみても、その対となる存在はカタチすらも確認できない。

しかしまあ、それも当然のこと。今宵は新月、月などいくら探しても人間の眼では観測できまい。新月と言えば夜のイメージこそ強いが、実際には完全な新月が確認されるのは昼間の時間帯だけなのだ。「ふむ……」

手を無意味ににぎにぎさせる。意外というか、脱力感のようなものは感じられない。しかし実際に卓で支配を掛けると圧力が減衰する辺り、やはり体力とは無関係な部分で何かしらの不調をきたしているのだろうか。

『……限界まで？ えーっと、私の場合は何故か色盲になるね。限界が迫るとゴリゴリと色が削がれてく感じ。そういえば何でなんだろう。いやオカルトに理屈求められても困るんだけど。視力そのものに影響が出ないのはいいんだけど、赤ドラが把握できなくなるのは地味に厄介』

いつか照にもそのことについて聞いてみたことはあるが、あまり参考にならない意見を言っていた。そもそも彼女のオカルトはそうそう切れるようなものでもなく、例の初見殺しを使うか一日中雀荘に張り付いて百人単位での分析を行わなければ限界まで辿り着くことはないそうなのだが。

(オカルト、か)

衣が持つ超常の力。幼き時分には(今もだろうか?)龍門渕の入り婿に妖異幻怪の気形だと畏れられたこの力も、少し視線を上にはズラせばなんて事はないありふれたもので、中でも永水の先鋒などは衣でさえ瞻るほどの奇幻な手合だった。加えて、千里山の大将の存在が非常に煩わしい。故にこそ、衣でさえ確実なことは何も言えない。

否、そもそも衣が万全だったとして、麻雀とは運否天賦にて定められる競技。如何なる状況であっても誰が勝つかは天命に拠る。それこそこの私が神に祈るなどと馬鹿馬鹿しいが——彼方から助力してくるのであれば、応えるのも吝かではない。

「ハギヨシ」

「はい」

「父君と母君が黄壤に去ったその日——紅に染まる湖月は如何なる紋様であつたか」

「……………」私は何も、存じ上げません」

背後に控えるハギヨシが、衣の問いに、炎天下にもかかわらず、涼しい顔で言つてのける。きつちり着こなした黒尽くめの燕尾服は衣の髪よりも遙かに熱が籠るだろうに、そんなことはおくびにも出さない。照とは方向性の異なるポーカーフフェイスは、彼女同様、その意を表面に現すことはない。

「……………」

まあ、所詮は戯れだ。仮に彼が何を答えたところで意味などあまり無い。質問そのものも衣の想起でしかない。たとえ衣のオカルトがそのことに関係してようとも、今となつてはどうでもいいことだ。

今の衣は、一人で戦うわけじゃ無い。今もまさに、衣のために戦つてくれる人がいる。ほら、歩を進めれば、見慣れた金髪の従姉妹の姿が其処に、

「——後は任せました」

互いに無言のまま視線を交わすと、すれ違いざまにそれだけを言われる。言われるまでもない——などと言うのは無粋だろう。あの意地っ張りな従姉妹より託されたのだ。期待には応えないといけない。

試合会場の扉を開けば、既に面子は出揃つていた。時間はぴつたり5分前。衣が無駄口を叩くことさえ計算済みとは、相変わらずあの男は嫌味なほど抜け目が無い。

「さあ、御戸開きと行こう——」

もはや私に憂いはない。しかしそれ故に不安定に成りつつあるこの力。けれどどうだろう。新月の昼間、最悪の状況下に於いても、どういふわけかこの私は、それでも負ける気など微塵も感じられなかった。

☆☆☆

纏わりつくような圧力を感じる。少しでも気を緩めると、思わず頭を項垂れてしまいそうになる。

カントクに対しての「慣れてきた」なんて発言はただの強がりだ。それは五度目ともなれば流石に初回のように訳もわからず戸惑うことはないが、だからといってこのプレッシャーが消えるわけでもない。

むしろ回数を重ねる毎に、己の無力感を実感し吐きそうになる。仮にも名門校の大将を任されているこの身、これほど機会に恵まれ結局は何も出来ませんでしたでは話にもならないし、ウチのなけなしのプライドが許さない。

「起家は私ですね。それっ」

姫松の大将が自動卓のスイッチを押している最中、圧力の原因たる天江が、卓の下で足をプラプラさせているのが視界の端に見える。彼女自身の容姿と相俟って側から見るととても同年代の少女とは思えない微笑ましき光景だが、ウチは彼女の恐ろしさをここ数日で骨の髄まで味わっている。ライオンが毛繕いをしていたからと和むことが許されるのは、その檻の中に自分が加わっていない場合のみだ。

尤も、天江の場合、随所に見え隠れする愛らしい仕草から、猛獣化するのはあくまで麻雀に限った話なのかもしれないが。

清水谷 配牌

{八八九二四五六⑥⑧⑨西白白}

ツモ

{7}

(さて、どうしたものか……)

配牌は悪くない。というより、天江を相手にする場合、いつもこんな感じの「良くも悪くもない」手牌ばかりが手に入る。或いは「どちらかと言えば良い」くらいの手だろうか。最初のうちは疑問にも思わなかったが、半荘4回も打って5向聴以上のクズ手が一度も来なければどんな阿呆でも違和感を覚える。

あれはいつのことだったか、『手の進み具合がまさに一向聴地獄ですな』などとフナQは語っていた。特に呼び名に拘りはないので今後はそれで通すとして、その一向聴地獄のカラクリの一つに、手牌の中に「どう足掻いても進まない面子」が配牌、あるいは最序盤に良形が入っている事が挙げられる。それが意図的なものかどうかはこの際置いておいて、期待値を優先する優秀な打ち手ほど陥りやすい非常に悪質な罠だと言えよう。

(これ……やろか)

清水谷 打牌

〔九〕

これまでの半荘で培ってきた経験に感性を全振りして、初っ端から暴牌をする。こと天江衣との対戦に限っては、牌効率だのといった小難しい理屈は投げ捨てた方がいい。尤も、流石の天江も東一は様子見に徹することが多いので序盤から無理をする必要はないのだが、むしろ他の面子が天江含めて手が鈍る今こそ最大のチャンスであると  
言える。

「……………」

清水谷 二巡目 手牌

〔八八24567⑥⑧⑨西白白〕

ツモ

〔④〕

打牌

〔八〕

「……………」

清水谷 三巡目 手牌

{八 2 4 5 6 7 ④ ⑥ ⑧ ⑨ 西白白}

ツモ

{①}

打牌

{2}

「……………」

清水谷 三巡目 手牌

{八 4 5 6 7 ① ④ ⑥ ⑧ ⑨ 西白白}

ツモ

{五}

打牌

{7}

「……………」

……………

……………

……………

「……………」

清水谷 1 4 巡目 手牌

{一 四 五 六 4 5 6 ④ 赤 ⑤ ⑥ ⑧ 白白}

ツモ

{⑧}

(来た……！)

度重なる暴牌の末、どうかにかこうにか天江の和了りまでに聴牌することが成功する。

しかしながら毎度毎度、結果的にカタチになるのが信じられないくらいの出鱈目な経路ばかりだ。こんな方法で聴牌できること自体が、まるでこれまで学んだ積み重ねが全て無駄だったのだと自ら証明しているようで精神がゴリゴリと削られていく。

叶う事なら、この場から一刻も早く逃げ去りたいとすら願ってしまふ。しかしそれでは天江衣の思惑通り。如何に手牌やツモがボロボロになろうとも、勝利のために、皆のために。唯一無事な心だけは折れず死守しなければならない。

「リーチ！」

清水谷 打牌

(横一)

どうせ聴牌したことは直ぐにバレる。故にこそ全霊で即リーチをかます。天江から和了ることはほぼ不可能。とはいえこの場には、まだ天江の闘牌に慣れていない面子、即ち先程からツモ切りを幾度となく繰り返している人間が二人もいる。

尤も、流石の天江も様子見だろうとリーチまでかけられたら黙っているはずもない。隙は一巡かあるいは二巡か、三巡はおそらく有り得ない。つまり実質牌が6つつ分。この巡目でそれぞれ一枚切れのシャボ待ちなど普通に考えたらかなり無謀な選択だが、ここを賭ける価値は十分にある。

「ツモ！ 立直一発ツモ三色役牌ドラ3赤1、裏3！ 8000・16000！」

清水谷 和了形

{四五六456④赤⑤⑥⑧⑧白白白}

龍門湊 99000

千里山 153000

姫松 123900

(よし……！)

初手から役満。予想以上の結果に思わずほくそ笑む。一先ずは逆転に成功。加えて天江と比較的安全圏まで点差を引き離れた。それでも役満一発でひっくり返される点差なので油断はできないが、流石の天江も役満を狙うとなれば手牌が透けて見えるはず。

更にここからはウチが親。期待値はざっと子に比べ1.5倍。ここから勢いに乗って更なる点差を——とは行かないのが、天江衣の恐ろしいところである。

「ツモ。4000・8000」

「ッ……」

天江衣 和了形

(一一九九1199⑨⑨北白白)

あまりに雑に。あまりにあっさり。当然のように大物手を和了られる。5巡で倍満。抵抗の余地などまるで訪れなかった。彼女がほんの少し、僅かにでもウチらを警戒して本腰を入れるだけで、容易にウチらを卓に縛り付ける。これが全国獲得点数ナンバーワンの高校生。全国の怪物、天江衣の実力——

「見えるか？ 衣の手の、黄泉比良坂への案内人が」

「……………」

不意に、件の天江が、何やら難しい言葉と共によく分からない発言をする。

トラツシユトクの一種だろうか、と思うも、最早それに回答する余裕もない。一番打ち慣れているウチですらこうなのだ。初見の新道寺や姫松などウチの比じゃないくらい戸惑っていることだろう。最初に意気揚々とサイコロを回した姫松の大将も、本来であれば役満どころか満貫すらロクに和了してくれないほどの実力者なのに。

「二つは伝令、一白水星の豪商。九星が集い煌くその時——お前達の命脈は尽き果てる」

龍門湊	115000
千里山	145000
姫松	119900
新道寺	201000

.....

.....

.....

「.....ん?」

清水谷 配牌

{二三四五①③④⑤⑥⑧北中}

(手牌が良くなった.....?)

そのことを疑問に思ったのも束の間。そこからの展開は、怒涛としか呼べなかった。

「ロン。1800」

親であるウチを挫いて親を迎えた天江。流れとしてもそれだけで勢い付く場面であり、彼女もその例に漏れず調子良く連荘をする。

安いから、などと油断してはならない。安いとはつまり、相応の速さを備えている。そも天江のオカルトは卓上全体の速度を下げる力。そんな異常な場を前に早和了りなどされてしまつては、追い続けるなど出来やしない。

「ロン。2400の2本場は3000」

「くっ.....」

流石にここまで良型であれば面子を捨てずとも、と思うも、単純に機先を制される。天江が和了に要した時間は7巡。早くはあるが、異常と言うほどでもない。ただ、この場でその「優秀」に付き合えるかと問えば、それはやはり否である。

「ロン。4800」



6巡での和了り。役牌ドラ1、3900の手。普段はあまり実感することはないが、チリも積もればなんとやら。積み上げられる棒が、徐々に重みを増していく。

「ロン。3200」

抵抗をしようにも、そうなればどうしても捨て牌が甘くなる。元より、ウチ以外の面子は先程からツモ切りを繰り返しているような有様で、この早和了りの中、天江の手を掻い潜りながら和了るなど、出来る人間がいるのだろうか。果たしてそれは人間なんだろうか。

「ロン。5400」

あれだけあった点差も気付けば殆ど埋められて、その上で更に積み棒を重ねられる。役牌と赤ドラ。役は奇しくも先程と同様の3900。しかし、これは、

「ロン。3800」

タンヤオのみ。点数はもはや素の点数の倍近い。止まらない。止められない。何だこれは。ウチは一体どうすればいい？ まさか最初に役満を和了られたからと打ち方を切り替えた？ もしも、そうであるなら……唯一の抛り所であった、これまでの経験すら——

「ロン」

9巡目。これまで必死に耐えてきたものの、遂に撃ち抜かれた新道寺の大将が、天江の発言にびくりと肩を震わせる。これほどの積み棒の数。あわやゲームセットかと怯えるものの、天江衣は、この怪物はウチの常識的な予想など遥かに超えてくる。

「混一色二氣通貫ドラ2で跳満。18000の7本場は、20100」

龍門洩	157100
千里山	142000
姫松	100900
新道寺	0

(一)、それは……まさか、狙って——)

戦慄する。八連荘に加え0点調整。もう天江について驚くことは

何もないと思っていたが、それでもまだ甘かったらしい。まさに神業としか呼べない所業。逆転された悔しさなど何処かに吹き飛んだ。卓上の怪物、牌に愛されし者。もしもこれが意図的なものだとしたら、こんなモノ、抗うこと自体が間違っているのでは、

(いや、折れんな。まだや。まだ逆転の余地はある)

この点差。この状況。天江衣の早和了りに対し、安手で対抗することとは事実上封じられた。逆に天江はここから500オールでもツモれば、それだけで試合を終わらせてしまう。

いや、そうでなくても、今の和了りで新道寺の大将が完全に折れた。あれだけ連続して出和了りが出来るのだ。木偶を相手にするならば尚のことだろう。

「――8本場」

既に麻雀用語であるはずなのに聞き覚えがない単語を紡いで、天江が静かに賽を回す。出目は9。まあこの数値に意味はない。重要なのは、如何にして天江の9連荘を止めるか。

「……………んん？」

清水谷 配牌

{二五九59①④⑥西西発発中}

ここ来てクズ手…………？ 落胆する以上に、困惑が先立つ。これまでが異様に良配牌だっただけに、この手の異常さが際立つ。

何故今になつて？ 天江は何を狙っている？ 偶然ではないはずだ。ウチはそれを存分に思い知った。分からない。分からない。分からない……………が。

もしも天江が、何かを狙っているならば。

それはつまり、付け入る隙があるということだ。

「……………」

ツモ

{①}

打牌

.....

.....

.....

『短期決戦?』

その提案を聞き返す。聞こえなかったわけではない。単に理解できなかつただけだ。団体戦と短期決戦。順当に考えれば結びつくはずもない言葉同士。それを大真面目に提案されてしまったのは、困惑するの無理はないだろう。

『ええ。清水谷先輩には酷ではありますが、おそらくまともに闘っては天江衣に勝てません。なので可能性としては、彼女が油断しているうちに、正確には様子見をするだろう最序盤に大物手を和了り、その後暴れる隙を突いてどうにか新道寺をトバすというものです』

まともに戦って勝てるはずもない。断言されるのは悔しいが、それは自他共に認めざるを得ない純然たる事実だ。彼女一人に30万点を稼がれる。ほんの少し歯車が噛み合えば、容易に実現するであろうその未来。それだけの力が彼女にはある。それだけの隔絶した格差が、ウチと天江との間には存在する。

それでもウチは勝たなければならない。中々無茶を言ってくれろ。フナQにしても、こんな作戦も何もない提案を、言うのは心苦しいだろう。

それを証明するように、フナQは肩を落ち込ませて、

『……理論にすらなっていない。そうならば良いな、という思い込み、単なる願望です。ですが』

『それでも成し遂げられなければ、ウチらに、いや、他の高校に勝ち目など有り得ない』

順当に天江が暴れて、そして順当に勝利する。天江衣とはそんな人

間だ。今すぐプロに殴り込んで、そこで当然に勝利するような選ばれしもの。牌に愛されし者とは、そのように理不尽なものである。

『そう。残された他の高校にも、天江衣に勝てる人材は存在しない。それは確固たる事実。しかし、今はチームとしての力を競う団体戦。状況が、場が、運が、流れが、たった一つの可能性を示唆してくれています』

天江の所属する龍門渕が3位の状況下で、且つ新道寺がトビ寸前。新道寺の大将とは一年の頃に対戦経験がある。決して勝てない相手ではない。いや、そもそも天江の手前、初見の彼女らが和了れるのかどうか。姫松の大将も実力的にはウチをおそらく上回るが、こと天江に限っては強さよりも経験がモノを言う。

それでも、と、弱い私が滲み出てくる。無理ではないか。そんなのは妄想だ。諦めてしまえ、そうしたら楽だと。愚痴るように、私は発言する。

『状況、場、運、流れ……なんや頼りないなあ』

フナQが悪いわけじゃない。そもそも不安になってフナQに話を持ち掛けたのは私の方だ。誰かに弱音を言いたかった。仲の良い怜だからこそ見せられない情けない姿。それがフナQであったのは、彼女が一番対天江に対し、一緒に尽力してくれたからこそ。

『なんですか、清水谷先輩』

『……………？』

そんな私の身勝手を受けたフナQは、しかしなんとも意外そうにこう告げる。

『状況も場も運も流れも——全て麻雀を勝利へ導くものではないですか』

……………

……………

.....

「.....」

清水谷 1 2 巡目 手牌

〔五九 1 1 2 2 3 3 ⑦⑧ 西 西 西〕

ツモ

〔九〕

(聴牌……)

1 2 巡目。ようやく可能性を掴み取る。天江はまだ動く様子はない。もしかしたら最後は得意の海底摸月で決めようとしているのかもしれない。

いや、その決めつけは単なる甘えだ。天江だけに、などと巫山戯ている余地もない。感じるのだ。ふつつつと、湧き上がる恐怖が、すぐ喉元に迫っているのだと。

(しかし、これでは……)

足りない。ドラは無し。チャンタを引く前提にしても他の複合は一盃口のみ。捲るには最低満貫以上の手が必要だ。立直ツモを信じ、即リーするのも一つの手だが、既に天江に対しては2度目であり、本気の天江衣に対し、そんな安直な手が通用するのだろうか。

(………)

打牌

〔五〕

しばらく考えて、横には曲げずに形を確定させる。あくまで直感でしかない選択だが、ウチはこれまでその直感だけを頼りに戦ってきた。ならばここでの直感を信じなければどうなる。惨めに敗北を喫するのか？ ウチはそんなのお断りだ。絶対に、絶対に――

清水谷 1 3 巡目 手牌

〔九九 1 1 2 2 3 3 ⑦⑧ 西 西 西〕

ツモ

〔西〕

「ん……う？」

永劫にも思える一巡が通り過ぎ、遂に引き込んだ予想外の牌に、一瞬思考が停止する。

河を見れば、確かに4枚目の西は切れていなかった。自分の和了りばかり考えていてそんな初歩的なことさえ見落としていたとは、恥入るばかりである。

（まあ、安牌は有り難いけど……そんなことも言ってられへんよな）

次はない。この一巡で確信した。死はすぐそこに迫っている。選択の余地など無いと。しかし、これも所詮はウチの直感だ。事実として、先の一巡は何も無かった。ならば今からでも堅実に立直でもして、天江がモタついてる今のうちに——違う！

（勝つんや。なんとしても。リスクなんか考えんな。その先なんか必要無い。常に勝利を——名門千里山の大将をナメんな、天江衣！）

「カン！」

清水谷 手牌

〔九九112233⑦⑧〕 暗槓（裏西裏）

舞い込んだチャンスに全てを委ね、リスク度外視での暗槓。いや、ここまで来ればどのような打ち手であろうとも、リスクのことなど考えはしないだろう。

勝つか負けるか。運否天賦の一発勝負。それがどうした。そも麻雀とはそういうもの。

だからこそ勝てる。だからこそ負ける。それが面白くて楽しくて、ウチは麻雀をやっているのだから——

「ツモ」

清水谷 和了形

〔九九一 1 1 2 2 3 3 ⑦ ⑧ ⑨〕

暗槓 〔裏西西裏〕

「門前混全帯么九一盃口、そして嶺上開花。70符4翻は満貫、2800・4800です！」

大将戦終了

龍門渕 152300

千里山 152400

姫松 98100

新道寺 | 2800

☆☆☆

違和感に目を向けると、音も無く控え室の扉が開く。誰かが入ってくる様子はない。が、扉の向こう側から特徴的な髪飾りが覗いていて、その先に誰がいるのかをすぐに察する。

無理もないな、と思うと同時に、それを伝えるべきかも少し迷う。後で探しに行く必要があると思ってみんなで意気込んでいたのだが、こうして自力で戻ってくるなんて、本当に成長したものだとしみじみ実感する。

「衣ちゃん？」

そうしていると、視界が異常な宮永先輩も扉の様子に気づいたのか、その方向に向かって声を掛ける。それを受けて逃げ出すかと思いきや、俯きがちに入室する衣。驚きも一瞬、何を言うべきなのかも悩んでいると、宮永先輩は穏やかな口調で、

「楽しかった？」

「……！」

衣が思わず顔を上げると、長い金髪が舞う。透華に通ずる美しい長髪。それに付着した僅かな水滴を振り払うように、宮永先輩はやんわりとその髪を撫でると、

「このお祭り。毎年あって、次は咲も参加する予定なんだって」

「……………」

「だから来年は、もっともっと楽しいお祭りになりそうだね」

「……………うん」

静かに頷いた衣は、そのまま彼女の胸に顔をすっぽりと収める。そんな2人を、透華は慈しむように見つめ続ける。

色々あったこの大会だけど、確かにはちやめちやで楽しい日々だった。実力不足を感じることもたくさんあったけど、それはこの先でいくらかでも埋められる。

衣のため。透華のため。そして何より自分のために。次はもっともっと充実した祭りを楽しもう。それこそが、まだまだ先のあるボクらの特権なのだから。



どうでもいいかもしれないその日

惜しくも楽しい日々を過ごした全国大会も全行程を終了し、団体戦準優勝かつ個人戦優勝という創立以来の快挙を成し遂げた我が龍門渚高校麻雀部。

元より、主に龍門渚さんのおかげで麻雀部の注目度はそれなりに集まっていた。そうでなくても全国大会に出場しているのだ。まだまだアングラなイメージこそ拭えないものの、結果を出せば如何なる競技であれ賞賛されるのは道理。となると表彰式や全校集会なんかが開かれるわけで、

「えー、我が龍門渚高校麻雀部は、皆様の応援もあり——」

しれつと引退だの何だの吐かして面倒ごとを回避した元部長の代理として似たような内容の定型句を二度ほど吐き捨て、ポーカーフェイスの一つに無駄に綺麗な笑顔が追加されたりとそんな激動の日々もようやく落ち着いて、一月もするころには大会前と同じく穏やかな日常を——

「練習試合……ですか？ ああ、はい。はい、予定を確認次第折り返し……はい。それではよろしく申し上げます」

取り戻してなんかいなかった！ 派手に大会に殴り込み、上から下まで大会を荒らしに荒らした結果、当然の如く暴れ過ぎて全国各地に悪名をばら撒いていた!!

「……………また？」

スマホが恋しいなあ、などと無関係なことを考えながらガラケーを閉じる私に、近くに居た静が声を掛ける。ちなみに現在地は教室である。放課後だからって教室で堂々とケータイ取り出しても咎められない大らかな校風助かります。まあ私服はおろか制服改造すら許されてるからね龍門渚……でもメイド服はちよつと流石にあれだと思ふんだ。今更だしかも慣れたけど。

「まただね。今度は姫松の方。よりにもよって来週千里山なのに……」

「……………あれだけ暴れておいて注目を集めない方が無理じゃ…………？」

う。いやまあそうなんだけど。でも千里山なんてマジで大会終

了後直ぐに連絡来たからね。一応優勝したのはあっちなのに警戒されまくりで草生ええますよ。

「……千里山の監督、娘さんが姫松にいるって話だけど」

「姫松。え、誰？」

「中堅の愛宕さん」

マジか。千里山の監督ってあの人の親御さんなのか。静はどこからそんな情報を仕入れて……ってのは今更だからいいとして、娘さんをあれだけ真つ当に育て上げられる人ならそりやウチの異質さには目が行くよね。

「でも多分、理由の半分くらいは照だよね……残り半分は衣ちゃん」

「まあ……確かに私の能力の類似品、大会どころかこれまでの人生通して一度も見えたこと無いけれども。衣ちゃんも何だかんだでめっちゃ珍しいタイプの能力だし……」

相手の心情や牌の流れなんかを限定的に見る能力は割と存在しているのだが、そもそも世間的には存在さえ定かではないはずの能力があることを前提に、それを封殺するでもなく弱点を暴くだけで後は本人の腕に委ねるなんてキワモノスキルがそりやあまともな経緯で発現するはずがない。

それ以前にこの世界、そんな細かいことしなくても気合い一つで牌効率が上昇する理不尽が常識として罷り通つてるのである。ぶっちゃけ私も前世の価値観がなかったらデメリット云々とか深く考えることもなかっただろうし、まあ普通に例外の部類だよね私。

「とはいえ、まあ所詮は練習試合だし……」

「エンジョイ勢、能力精査会、龍門瀏さん……うっ、頭が」

その話はやめーや。あんなもん事故ですよ事故。でも思えば私基準で半分くらいは例外的な打ち手だったなあ団体戦。神代さんとか白水さんとかマジで酷かった。あれ本当に私以外にどうにかできる人いるんだろうか……。

「でもそれ込みで考えるなら、私に情報抜かれてもいいのかな？ 自慢じゃないけど多分全員丸裸に出来るよ？」

「今更じゃない？ 私のオカルトとか私以上に知ってたし……」

そうかな。そうかも。いやでも流石に遠目で観察するのと実際に打つのでは訳が違う。遠目だと「どんな能力か」は見抜けても、具体的にその能力が牌にどう影響を及ぼすのかは曖昧なこともある。というかその日の気分によって左右される能力も割と多いからどうしても場当たりのならざるを得ない。

「……そういえば、あれから妹ちゃんにコツを聞いて、槓からの聴牌が安定するようになった。嶺上開花は流石に無理だけど、もう火力だけなら龍門渚さんにも負けない」

「コツを聞いてどうにかなるものなの……？」

このように、オカルト能力者は総じて独自のルールを保有している。そしてオカルト故にシステムチックな対処法が事実上存在しない。しかしながら、それでも対戦中の私は相手の状態の変化を観察することでルールのブレ幅をある程度アドリブで調整できる。当然、その精度は対戦回数によって上昇する。

すなわち、オカルト能力者は私と対戦を重ねる度に勝率が下がる。尤も、龍門渚さんのような例外や、咲くらしい対戦回数を重ねて向こうが照魔鏡の欠点に気づいたなら話は別だが、所詮は他校との練習試合程度の付き合いでそこまでの進歩は望めないだろう。

「それ以前に、姫松や千里山にオカルト使っていたの……？」

「断言するけど、いなかったからあんなに稼げない。厳密には江口さんや愛宕さんもオカルト使いで、あくまで彼女らは「私が能力者と定義してない」ってだけ」

何なら麻雀で一定以上を安定して稼げる人間はもれなくオカルト使いだ。多少麻雀が上手い程度では確率論を超えられない。ギャンブルを舐めるなよ小娘。麻雀以外でその認識だと普通に破滅するぞ。

「……やっぱり、リスク以上にオカルトの経験を積みたいんじゃない？」

「やっぱそうかな……衣ちゃんクラスの支配系ってあんまりいないしね」

同意すると、いや照の。と返されて微妙に困惑。結局大会では露呈が怖くて初見殺しを使えなかったし、牌譜を見たら私にツモを可笑し

くするような能力は無いと思われてるはずなだけだ。

「いや、ほら。照のオカルト判別……」

「あー……そっちね。そっか、江口さんや娘さんの傾向を考えれば、そっち方面には疎い可能性もあるんだ」

そもそも千里山や姫松は有名過ぎて研究され尽くしている。ただか練習試合一回で無名だったこちらの情報が得られるならリスク込みでもやる価値は十二分、と。

「それなら遠慮なく盗んでいこう。まあ、結局私はいんまり変わらな  
いんだけど」

「オカルトが絡まないと、照は衣ちゃんと違って最終的には運ゲーだからね。勝率なんてちよつと上がっても認識しづらいし」

「5割が55%になるだけで安心感がだいぶ違うよ。地味に私もメンタルの影響を受けやすい能力だから」

メンタルに影響を受ける能力は結構ある。咲や衣ちゃん、最近では鶴田さんとかがそうだっただろうか。そういう打ち手はムラこそあれど、共通して「ただ絶好調である」という理由だけで雑に勝率を爆上げしてくる。私はそういうのはいないけれど、それでも観察するにあたってかなり集中しなければならぬから割とメンタルは大事なのだ。

「ふっふっふ。結局何を企んでいるのかは分からないが、ならばこの私が妹ちゃん直伝必殺ドラ爆で悉く爆殺してくれようぞー」

「どういうキャラなのそれ……あと多分静じゃ無理だから。せめて国広さんに勝てるくらいにならないと……」

なにおう、と反論する静を宥めながら、私は答えの無い思考を巡らせる。そしてついつい癖でネットを見ようと携帯を取り出して——その形状からネット接続料金が結構かかることを思い出し、ますますスマホが恋しくなる私なのだった。

☆☆☆

「そんなわけで、可能ならウチの部員全員、一度は宮永と打って貰いたい」

「やだ、初手から酷使宣言……!?!」

いつかの静との戯れから一週間。その日は祝日ということで朝から晩まで麻雀に傾倒するダメ人間たちが学校に集結し、更に遠方から遙々やってきた同類共と鎬を削る地獄絵図が展開されつつある龍門渕高校麻雀部。

引退宣言したくせに普通に部室居座ってる元部長を皮切りに、何だかんだと身内以外との対戦相手に飢えていたエンジョイ勢も結構な割合で参戦し、主に龍門渕さんの我儘で無駄に広くなった部室が、かつて以上の密度まで鮎詰めになっていく。

「千里山女子高校の監督をしております愛宕です。本日はどうかよろしくお願いします」

「先日、この麻雀部の部長となりました宮永です。よろしくお願いします」

それでも雑多な印象をこちらに与えることはなく、整然と並んだ部員達の前で一人の女性が躍り出る。やや関西特有のイントネーションが混じる標準語に、どこか姫松の愛宕さんの面影を持つ妙齡の女性。高校生の娘を持つには少々若すぎるような気はするが、母も下手したら20代にしか見えないので触れない。

ちなみに父も相当若く見える。そして見た目がチャライ。言動もチャラくて結構な頻度で幻滅されてる。出身も東京でどこか浮世離れしてる母との接点が割と謎な組み合わせだけど、母って初心だし多分ナンパか何かで引っ掛けたんだと思う。どうでもいいけど。

「申し訳ありません。急な申し出で……」

「いえ。ストイックな姿勢は羨ましいばかりです」

頭を下げる愛宕監督。しかし確かに急な申し出ではあるものの、優勝したからと慢心せず即座に情報を貪ろうとする貪欲さは正直嫌いじゃない。ウチなんてレギュラー陣や元部長を除けば自称エンジョイ勢の静ですら結構真面目な部類に入る。まあ別に趣味でやってる

麻雀なんてそんなもんでいいんだけど。……ただ、うん。その、あれだ。

「……そんなに気になりました?」

「ならんと思うか?」

ですよねー。とまあ、そんな感じであつさりと上辺が剥がれた監督さんがいの一番に切り出した方針が、先に反応した冒頭の台詞というわけである。

「まあ私のアレが、多少なりとも皆様の参考になるようであれば構いませんが」

「ええんですか?」

問いかけたのは、まず一番最初に同卓した眼鏡で長髪の女性。どこか監督さんに全体的な雰囲気似ているが、この人も監督さんの娘さんなのだろうか。いや、静曰く娘さんはどっちも姫松にいるんだっただけかな? 二人いたってことは覚えてるんだけど。

それはそうと、疑問については隠すことでもないので、素直な気持ちで回答する。

「私、実はコーチ志望で、龍門渕に入学したのは、この学校が長野で一番教員関係の資格が充実していたからなんだ。だから私の能力がそっち方面に強いことは、私自身誰よりも理解しているつもり。無闇にひけらかすつもりはないけれど、こうして頼ってもらえる分には問題ない」

「コーチ志望……?」

呟いたのは、下座に座っている黒髪の女性。というか清水谷さんだよねこの人。もう一人も確か副将の人だし……ははーん。さては思った以上に計画的犯行だなこれは? 練習試合を受けた時点でこの流れまで持つてくる気満々だったわけだ。仮にも他校の人材を便利利用とか、中々どうして強かな監督である。

「さて……」

それぞれが卓に着き、サイコロを振る直前の段階になって改めて居直る。立場の確認は大事だ。特にこの場では私がホストになるわけで、私から話すことが礼儀だろう。

「私は龍門渕高校麻雀部2年、宮永照。最近この部の部長になりました。好きなことは麻雀と、あとは読書とか天体観測とか色々。割と居る妙な豪運を發揮する雀士……いわゆるオカルト使いと呼ばれるヒトの超能力を解析する眼を持っていて、そういった打ち手に対してかなり優位に出られる自信があります」

「……。ええと、千里山女子高校2年の清水谷竜華と言います。好きなことは麻雀と……怜、いえ友達と過ごすこと。割と居る妙な豪運を發揮する打ち手……具体的には天江とは、以前の大会で死ぬほど精神をすり減らしたので、もう二度と勝負したくないと思っております」

ちよつと間を空けて清水谷さんが答える。かなり独特な自己紹介だったのにわざわざ形式を揃えてくれる辺り、実は意外とノリが良い人なのかもしれない。でも多分君は今後もよつぽどのがない限りずっと衣ちゃんにぶつけさせられるぞ。あの子に多少なりとも対抗できる人材をあの監督さんが腐らせるはずないし。

「同じく千里山女子3年の吉田花江。好きなことは麻雀と、それ以外にもボードゲーム全般が好き。割と居る妙な打ち手に関しては……実は対決した経験が少なくてなんとも」

「ああ、やっぱり自覚してなかったんですね……千里山レギュラーで唯一の能力者だったのに」

「え!？」

分かりやすい反応からあちらの状況を察する。全国大会があまりに魔境すぎて誤認していたが、名門校と呼ばれる学校でもこの程度の認識なら、思った以上にアングラな技能なのかもしれない、オカルト。「吉田先輩が能力者つてのはホンマですか? いえ、それ以前に能力者とは一体?」

驚いている当人よりも先に切り込んだのは眼鏡の子。それを知らないのは今更として、随分とぐいぐい来るなこの子。静の同類かな? 思えばあの子もオカルト関係の話題ではだいたいこんな感じだった気がする。まああの子はホラーとかそっち方面が主だけだ。

しかし静の同類となれば慣れたもので、私は一つ一つ船久保さん(質問のついでに名乗られた)の疑問に答えていくと、

「オカルト能力者……それこそが『牌に愛された子』の正体……」  
「正体かと言われると違う気はするけれど、そうとしか呼べない偶然を意図して招き寄せる人間は事実として存在する。

流れに乗る、運が良い、牌が偏る、程度であれば誰にでもあるかもしれない。けれどそれがあまりに度の過ぎるもの、偶然には有り得ない偶然であれば、私はそれを成せるニンゲンを能力者と呼称している」

「……………」

カンチャンが初手でずっぱりハマる。槓をした瞬間その牌にドラが乗る。リーチをして一発でツモる。一つ一つはありふれたものでも、あまりに重なるとおかしなものとなる。私の初見殺しに妙な迷信が付き纏っているのは、その役が成立する確率が、およそ人間が意図して出すのは不可能なものであるからだ。

「ただし、麻雀という誰にも平等でなければならぬゲームにおいて、意図して己が運命を歪めようと目論む者は、必ず本人が把握していない部分に致命的な欠陥を抱えている」

「そして、宮永さんはその欠陥を見破れるからこそそのオカルト殺し……ってわけですか」

「オカルト殺し？ 何それ……まあそういう面が無いとは言わないけど」

積み上がった山に崩れがないか確認し、ホスト権限で賽を回す。出目は8。この数字に大した意味はない。順当に牌を配り終え、背筋を伸ばして全員と向き合う。

「……………ふむ」

宮永照 配牌

（一二五七九九79④⑥北西白白）

「……………まず一つ訂正。清水谷さん、貴女も能力者だね。それもとびつきりの……………なるほど、衣ちゃんの九星を止めたのはそういう……………」

「……………へ？ ウチ？？」

「厳密には違う。いや、正確に言えばその素質がある。進むべき道が見える力……………なんかそんな感じのオカルトになりそうな雰囲気か、そ



れとなく貴女の周りに漂ってる気がする」

「え、えらくフワツとした説明ですね」

「実際まだフワツとした力だから仕方ない。推測でいいなら、卓全体で一定数の役を確定させる力〃、〃その場での最善の和了り方を見る力〃、〃相手の運命に割り込む力〃、なんかになりそうかな」

「……この段階でそこまで分かるんですか？」

困惑する清水谷さんに代わり、船久保さんが疑問を呈す。これも中々鋭い質問だけど……んー、まあ、これは別に言ってもいいかな。「正確にはこの段階じゃないと、かな。牌が配られた時点でその局の運命は決する。だからオカルト能力者がそれに干渉するならその前の段階でしか有り得ない。もしもこれ以降に牌の並びが入れ変わるようであれば、それはオカルトじゃなくてイカサマということになる」

「……道理ですね」

物凄く微妙な顔をしながら船久保さんが答える。あれは〃じゃあ衣ちゃんのアレはイカサマじゃないの？〃って顔だね。分かる分かる。でもどんなに納得がいなくてもあれはイカサマじゃなくてオカルトなんだ。耐えてくれたまえ。

吉田 配牌

〔三七八①②③⑤⑤⑧⑨西中中〕

「で、多分今の吉田さんの手牌には6割くらい筒子があることと思いますが」

「え？ な、何でそれを……」

「勘です。それで、私の勘が正しければ、孤立してる自風牌を捨てずに筒子での染め手を目指してください」

「は、はあ……？」

「……………」

釈然としない表情で、それでも吉田さんは素直に従う。けれどあまりにも意味不明な指示に戸惑っているのが見て取れる。まあ手牌を

覗いてもいないのに勘の一言でその大半が第一打より前にバレてる  
とか恐怖でしかないから仕方ないね。

吉田 7巡目 手牌

{①①②②③③⑤⑥⑨⑨西中}

ツモ

{⑨}

「さて。そろそろ吉田さんが聴牌すると思いますが」

「ひあっ!？」

可愛らしい声でびくんと震える吉田さん。大会では龍門洩さんを普通に圧倒していた彼女であるが、この程度の鎌掛けでビビり散らかすとは、度胸の面ではやはり龍門洩さんには遠く及ばないらしい。いやあの人より度胸ある女子高生なんて世界見てもそういないと思うけど。

「ここで吉田さんの能力の詳細です。吉田さんは『自風牌を残した状態で染め手を指すと、手牌が清一色に寄っていく』という能力を保有しています。しかしながら、清一色と自風牌は両立することが出来ない役。したがって吉田さんはどこかのタイミングで、道標となる自風牌を切り捨てる必要があります」

「そ、そうなんだ……」

やばい。露骨にドン引きされてる。でも気にしない今更だし。嘘ですちよつと気になります。なまじ観察力が優れてるから表情で考えてることわかるのが憎い。でもこれが私の役目、私の役目……。

「なら自風牌を含む混一色でいいんじゃない? とお思いでしょうが、能力発動中は混一色でツモれません。理由? 知らないです何故かそうなってます多分未熟だからなので改善したいなら努力してください。でも出和了りなら可能なので狙い撃ちもありますが、今回は素直にリーチをお願いします」

「じ、じゃありーちで」

吉田 打牌

〔横西〕

「あ、清水谷さんも聴牌してるっぽいけど、今回はステイでお願いします。船久保さんはまあ和了ってもいいけど、多分間に合わないからOKです」

「……………」

「……………」

「……………」

念のため釘を刺しておく、卓の全員から見慣れた視線を受けた。はいはい分かっていますよ変だよねおかしいよねあり得ないよね異常だよ。でもこうにでもならないとウチでは勝負の土俵に立つことすら出来ないんだ。しかもそれでもプロだった母曰く、私の評価は「とりあえず便利枠でレギュラーには入れそう」くらいらしいので、プロを目指すなら私なんかただの人格付きスカウター程度に思えないと付いていけないぞ。

けれど場の空気が凍りついていても、遠くで衣ちゃんのオーラが爆発していても時間は刻々と過ぎて行く。やがてこのまま固まっても居られないとそれぞれ無言で牌をツモ切りし、それが2巡ほど繰り返されると、

「あ……ツモ。リーチツモ、混一色、一盃口……ドラ4。4000・8000」

吉田 和了形

〔①①②②③③⑤⑥⑦⑨⑨⑨中中〕

必然の和了り。巡目が早くそれなりに良型で、他者が和了る気もないなら当然こうなる。裏ドラに関しては私にも見えないので予想外ではあるが、これほど対子の多い形なら期待値もそれなりにあるだろう。

「とまあ、こんな感じで。偶然か否か、信じるか信じないかは勝手です

が、意識してみると高火力が期待できるかもしれません」

「う、うん……」

どこか固い表情で強張った気のない返事をする吉田さん。うーん国広さんを思い出すなあ。つまり感性が結構マトモな人なんだなあ麻雀やってるのに。そんな子にこんな超能力自覚させてもいいのかなあ。でもこの人は静なんかと違って地力も十分だし……監督さんに任せよう（丸投げ）

ただ、まあ。もしもオカルトに頼り切りになったらアレなので、一言だけアドバイスをする。

「しかし、先程も申し上げたように、如何に便利なオカルト能力でも、その実確実に拭えない弱点を抱えている。尤も、それを初見で見破れる人はそういないと思いますが——」

「……………」

発言と共に手牌を倒す。吉田さんのサポートのため2巡ほどツモ切りした手、つまり彼女がリーチをかけた時点でこの形になっていたわけなのだが、

宮永照 手牌

〔一二三四五六七八九南南南西〕

「——今後も私と闘うつもりであれば、そんな小手先の技は使わないか、せめてそれくらいは克服して来てください」

如何に強力なオカルトがあろうとも、ただそれに頼るだけでは私にとつて木偶と変わらない。オカルトとはあくまで手段。有つても無くても強い人は強い。

そして彼女たちには、強者になれる素質がある。ならば私は強者の一人として、彼女たちへの壁となろう。それこそが私の理想の、指導者としての姿なのだから。

半荘終了（各25000点）

宮永	86900
吉田	—5800
清水谷	1200
船久保	17700

「ありがとうございますました」

「あ、ありがとう、ごさい……まし、た……」

「ありがとうございます……」

「ありがとうございます。……ホンマ、露骨に相性が出ますね宮永さん……」

「まあ私、冗談じゃなく全てを『見』に振り切ってるから、刺さる相手にはとことん刺さるんだよね」

確かに毎度オカルト相手にはこんな感じだし、案外オカルト殺しつてのも言い得て妙かもしれないかな。

☆☆☆

「それでは、またいずれ機会がありましたら」

「ああ、その時はまたよろしく頼みます」

差し出された手を固く握りしめる。あれほど得体の知れない存在に見えた彼女も、こうして手を握ってみるとウチよりも一回り二回り小さくて、如何に精神が成熟していても彼女があくまで高校生の若造でしかないことをつくづく実感する。

「うむ。中々良き饗宴であった！ マサエも褒めて遣わす！」

「こちらこそ勉強させてもらったわ。つくづくあの大会の結果は奇跡やったんやなって……」

結局部員全員どころか、元プロで腕に自信もあったウチすらあっさり蹴散らしたちびっ子にひらひらと手を振る。まさに怪物としか呼べない実力を有する彼女も、ただヒトとして接する分には非常に好

感の持てる小気味いい性格をしている。強さだけを見て邪険にするのは、客観的にも主観的にも過ちであろう。

「それで最後に、園城寺さんについては一考願いますね」

「分かっとする。吉田や清水谷。清河、樋口なんかのオカルトで宮永の眼の恐ろしさは散々実感したからな。尤も、アイツは病弱なんで監督としてあくまで体調の方を優先させるけどな」

「負担については無理をしないか、無理出来ないようオカルトの方向性を調整するかすればどうにでもなりそうですが……無理しそうな人でしたしね」

「……ああ」

園城寺怜。兼ねてより病弱を理由に気にかけていた部員であるが、彼女の立場は非常に悩ましい。

彼女と清水谷は親友と言っているいいほどの仲。なのに清水谷はスタメンなのに自分は三軍の補欠。残酷な話だが、これ自体はどんな競技でも起こり得るありふれた出来事ではない。ウチもプロになる以前、高校の頃にレギュラー争いで潰れた友情の話を、それこそ一つ二つでは済まないほどには小耳に挟んだ経験がある。

それでも友人関係を保っているあたり、彼女と清水谷の関係はそんな立場で縛られない素晴らしいものなのだろう。しかしその上で劣等感を感じないかと問われるとそれは否だ。むしろ仲が良ければ良いほどに、劣等感というものは爆発的に膨れ上がるもの。思えば今までもどこか自分を卑下するような発言をしていたことが思い起こされる。

そんな折に、降って湧いた自身の素質の話。それ自体はオカルトという眉唾物でも、厄介なことに信憑性はある。というか実際に覚醒したらしい超能力はそれまでの劣等感を覆して余りある劇的なもので、ならばそれに傾倒しないかと問われると厳しいものがあるだろう。

「私がそうなので助言しますと、眼と一体化するタイプのオカルトは時間と慣れこそが習得の近道になります。負担を感じないレベルの能力行使をゆつくりと慣らしていけば、順調に行けば来年の大会と言わず、半年後くらいにはちよつと眼を凝らす感覚で能力が使えるよう

になると思います」

「半年か。よく覚えておくわ。幸いにも吉田や樋口と違って園城寺にはまだ時間がある。その頃の大会で一度結果を残してやれば無茶も控えるようになるやろ」

背後にいる部員を見渡せば、ちょうど件の園城寺と清水谷がバスの内部に入っていく姿が見える。その姿は比較的園城寺と関係が薄いウチであっても、傍目に見てわかるほど浮かれているのが分かる。それを確かな自信として刻ませてやることこそ、監督であるウチが成すべきことだ。

そうこうしていると、不意に宮永が呟く。

「……難しいですよ。私自身は園城寺さんがオカルトの反動によって倒れても自己責任だと認識していますが、やはりその判断では今後に響きそうです」

「監督ってモンは生徒の無茶を止めるのも仕事の一つやからな。場合によっては恨まれるんも承知の上で引き留める必要がある。ウチは麻雀部やから直接命の危険がある運動部ほど厳しく躰けんけど、それでも彼女らが学生であるからには赤点を理由に参加禁止を言い渡した経験はあるな」

当然、園城寺などの病弱な生徒には過度の参加を控えるよう忠告している。しかし、麻雀をすることによって身体に負担が掛かるなどと冗談のような話。たとえ無理をしても本人が『問題無い』と言えばこちらとしては『そうですか』と頷く他に無い。

だが、宮永はあくまで素質を見出しただけ。その辺りは監督であるウチか、そうでなくても本人や千里山の生徒が気にかけるべきこと。そこまで彼女が気に病むことなのかと問うと、

「私、将来的にはコーチの道も目指しています……進路選択の頃にこんな眼を開眼したからなんて浅い動機なんですが」  
「……………」

まるで想像もしていなかった返答に心底驚く。しかし確かに良く考えると、彼女がこれ以上ないくらい適任の能力保持者であると深く納得する。それでも大袈裟に反応してしまったのは、そういうあから

さまに特別な能力を、他者のために惜しみ無く活用しようとする発想が、ウチ自身にまるでなかったからである。

「く、くくくつ……」  
「？」

ついつい笑いが漏れる。娘からは「なんや悪役っぽいわ」などというよく分からない理由で人前で控えるよう言われていたが、これが笑わずにいられるだろうか。

ウチの知る『能力者』とは、それ即ち小鍛治健夜のような心無い怪物のことだった。だが当然、目の前の少女は小鍛治健夜とは何もかもが違う。そうなれば今後進むべく道も異なるのは道理。

かの小鍛治健夜すら超える全国最多獲得点数トドを保有する天江衣。そんな天江さえも容易く完封する宮永照。そんな彼女が、プロとしては遙か昔に一線を退いたウチの後進を、こうも不安そうに歩んでいる。こんな愉快なことはない。

「……どうかしましたか？」

「いや、すまん。つい昔を思い出して思い出し笑いしてもうたわ。いや、ウチは別に、昔からこの道を志していたワケやないんやけどな」  
「？」

「こつちの話や。しかし、せやな……いや、マジでスマンな。なんかアドバイスでもするつもりやったけど言葉が出ん」

「いえ、お気になさらず……」

首を傾げる宮永。その表情も新鮮ではあるが、これはこちらが単に礼を失しているだけなのでいつまでもそのままでは忍びない。これ以上バスを待たせるわけにもいかないと、緩んだ表情を頬を叩いて直し、バスに乗り込もうとして——ふと最後に一つだけ、気になってしまったことを問う。

「そういえば、あの大会で宮永は気になった選手とかいるんか？」  
「え？ ああ、そうですね……」

唐突な質問だったからかしばらく宮永は考え込み、流石に急すぎる質問だったかと謝罪をしてバスに乗り込もうとして——しかし去りに際にギリギリになって、彼女は思い出したかのように一人の名前を上



げる。

「臨海の辻垣内さん。あの人が順当に成長すると考えたら……ちよつと今の私では、真つ当に勝つのは難しいかもしれません」

謙虚にそう告げる宮永だが、しかしその発言は裏を返せば、真つ当でない手段であれば問題ないという自信の表れであり——やはり龍門測で一番侮れないのは彼女であると、改めて実感する私だった。

☆☆☆

「なるほど。お姉ちゃんより上位の眼……どういふものか想像もつかないけど」

「どちらが上位なのかとどちらが便利なのかは全然違うから、流石に今は私の方が明確に上だけどね」

へー、と言葉の割にあまり興味が無さそうな顔で咲が頷く。まあ羨ましがったところで何が得られるわけでもないから仕方ないけど、麻雀とそれ以外で態度がガラツと変わるのは毎度のこととはいえ慣れない。

ちなみであるが、今の私達は漫画「カイジ」に登場した2人麻雀こと「17歩」をしながら駄弁っている状態だ。前世の漫画ということで当然この世界では存在しないルールなのだが、何度か戯れでやってみるうちにあまりにお互いが振り込まなさ過ぎて最早第六感を鍛える訓練として活用されているのが現状である。

「あー、もう無さそう。発と白のシヤボ待ちだよね？」

「そうだね。流石にこれは露骨過ぎたか……じゃあ次行こう」

しかも何だかんだ私が考案した（ということになっている）ルールなので咲も割と気に入っているらしく、段々とルールもエスカレートして今では手持ちの牌が地雷牌だけになった時点でそれを公開して成功で流局失敗したら罰符とかいう色々異次元の争いになっているが、しかしそれ故にこうしてダラダラと駄弁る分には中々に便利な遊

びなのだ。

「そういえば、咲はもう進路決めたの？」

「京ちゃん次第かな……まあ順当に清澄辺りになりそう」

「そっか。咲がいれば全国優勝もだいぶ楽になりそうだったけど、龍門渕は女子校だから仕方ないね」

「もつと正確には執事とかの男子部で分かれてるって聞いたけど、ちよつと共学の魅力には勝てないかな……」

まあ私も確かに男子部の人とはそれなりに交流もあるけど、あの人はハギヨシさんみたいに良い家の使用人とかになるためか相当馴けられていて、少なくとも授業中では他所行きというか恋愛度外視の紳士しかいない。だから絶賛交際の咲に薦めるのは厳しいだろう。「そういえば、お姉ちゃんは浮いた話とか無いの？」

「私かあ……最近部長になったから外部との関わりも多少出来たけど、交流を持った相手が尽く女子校なんだよね。来週の姫松も女子校だって話だし、現時点でそれなり以上に交流のある男性となると京太郎くんを除くとハギヨシさんくらい？」

「ハギヨシさん？　って確か……」

「うん。龍門渕さん家の執事の……まだ19とか聞いてびっくりした記憶がある」

でもあの人も恋愛という意味ではどうなんだろう。そう歳も離れてないし仕事とプライベート完全に分けるタイプだから龍門渕さんを性的な目で見るとか無さそうで案外狙い目ではありそうだけど。交流があるだけで仲が良いわけでもなんでもないし。私の側も好感は持つてるけどそれだけだし。

しかしまあ、彼がキャラ作ってるのかもしれないけど、あそこまでは女所帯に居座って男を感じさせない人も珍しいから普通にアリではある。エスコートも完璧そうだし、個人的にプライベートがどんな感じなのか気になるから一度食事に誘ってみるのも良いかもしれない。

「……ふーん？」

「」

——と、そんなことを考えていると、咲が何とも言えない微妙な表

情でこちらを見ていた。やばい忘れてた。見るな、そんな目で私を見るな…！（KONMAI感）

冗談はさておき、これはちよつとまずいかもしれない。咲は私の影響で恋愛脳というか多分京太郎くんを取られたくなくて身近な女性をすぐ他の男性に充てがおうとするから、下手をすると今後変なサポートに回りかねない。

「やだなあサポートなんてしないよ？　ただちよつと、ね」

やめろ当たり前のように心を読むな。ただちよつと何をするつもりだ逆に怖いぞ。そんなんだつたら露骨にサポートされた方がまだマシだわ。いやサポートなんて要らないからね？

「卒業まで一年半…私、頑張るね」

「何をだ。やだよ私は積極的にこつちを墮とそうとするハギヨシさんとか。いいよ私はしばらく独り身で。軟派なのはお父さんだけでいいんだよ」

私のサポートなんかしてないで、むしろ咲は割と軟派な印象のある京太郎くんを押し留める努力をした方がいい。そう返すと京太郎くんパワーが効いたのか、すぐに咲はスンと落ち着くと、

「そういえば京ちゃん、ハンドボール部引退して暇になったからか、最近遂に麻雀に手を出したみたいなんだけど…多分京ちゃんって何か変な能力あるよね？」

「何で分かるんだ…あるよ。立直かけると相手が有効牌引きやすくなるってやつ」

「へえ。立直で有効牌。それは中々便利そうな…相手か？」

「うん。相手が。対戦相手全員に有効。本人のテンションでオンオフ可。多分その気になれば個別指定もできる」

「…。一瞬、『使い辛いな…』とか思ったけど、これ良く考えると結構便利じゃない？」

一瞬の困惑の後、しばらく考えて咲はそう切り込む。まあ一見するとただのデメリットにしか思えない能力なので、その反応も仕方ないとは言える。

けれど相手が有効牌を引くということは、即ち余った不要牌を切る

可能性があるということでもあるため、相手に安牌による逃げを許さないということでもある。しかも現状では立直前提なので、要するに立直をかけた相手に突っ張るかどうかの選択を強要する能力だとも取れる。

ただまあ、玄人向けの能力であるのは否定しない。聞くだに京太郎くんはまだ読みもクソも無い完全な素人なので、現時点ではただ和了られやすいというデメリットしか享受していないことだろう。効果を実感できるようになるには最低でも国広さんくらいの実力が必要だろうか。何にせよ、ズブの素人が持つていいような能力ではない。「オフに出来る時点であるだけお得だよー。私は多分常時オンだからネットマだと露骨に戦績が落ちるし」

「私も事実上解除不可能だしね。……はい。赤五索の単騎待ち。形はタンヤオインペーパーコーにドラ混ぜた形じゃないかな」

せいかーい。と気の抜けた返事をする咲に合わせたように、ちょうど部屋の外から父の「そろそろ寝ろよー」という声がして、今日のところはお開きになる。

「でも能力かあ。ちよつと羨ましいなあ……」

「……………」

そして卓を片付けて咲が部屋を去る直前、やや遠い目をして彼女はそう呟く。私からすると咲の方が羨ましかったりするのだが、しかしそれは持たざる者のジレンマということで、互いに何も言うことはなかった。

きつと全てが塗り変わったその日

長野県にある清澄高等学校は、無駄に設備が充実しているというこ  
とで地元ではそれなりに知られている。

兎にも角にも広大な敷地。旧校舎を含めて4つもある建物。やた  
らラインナップのある食堂。それらと比較すると小さめながらも充  
分な質の蔵書と、それらの設備に惹かれて入学する生徒も多いと聞い  
ている。

かくいう私も、蔵書に関しては何心惹かれるものを感じていた。私が  
この学校を志した理由こそ不純なそれでも、今後3年もその場所に通  
うとなるとやはり設備が優れるに越したことはない。とはいえ上記  
の設備についても箇条書きマジックのようなもので、単に予算の都合  
で旧校舎を解体していかないだけだったり、敷地が広いのも辺り一面畑  
しかないようななど田舎だからだったりと色々と不便なところはある  
ものの、それでも私は都会の喧騒から一步離れたこの校舎が、おそら  
く思った以上に好ましいものだと感じていた。

「……………ふう」

本校を見下ろす位置にある木漏れ日の漏れるベンチの上で、心地よ  
い風に晒されながら本を捲る。以前から読みたかった推理小説シ  
リーズの第一巻。都合の良いことに、図書館にはシリーズ全巻がまだ  
誰にも借りられていない状態で残されていた。ざつと蔵書を見た感  
じそれ以外にも面白そうなシリーズはいくつかあったし、しばらくは  
退屈せずに済みそうで何よりである。

「おつす。何だ、もうお気に入り場所を見つけたのか？」

「……………京ちゃん？」

十分ほどその調子で本を読みながら涼んでいると、不意に視界に金  
髪の見慣れた少年の姿が映る。

私よりも一回りは高い身長。細身に見えて意外とがっしりした体  
躯。やや軽薄ながらも穏やかな表情。見間違えるはずもない。私の

恋人である須賀京太郎その人だ。

「いやー、思ったよりも広いのなこの学校。色々見て回ったつもりだけど、まだまだ旧校舎側の方はさっぱりだ」

「ああ、うん。地味にこっち、本校舎から遠いよね。道路や階段も挟んでるし、もう別の建物扱いでいい気もするけど」

「でも、いつまでもそのままじゃいられないだろ？ こっちには体育だけじゃなく、美術なんかでも足を運ぶそうだしな」

美術？ 写生の授業とかで使うんだろうか。確かにロケーションとしてはいい感じだけどわざわざこんなところまで来ることもあるんだ。まだ入学して二日目の放課後なのにどこからそんな情報を仕入れてきたのやら。相変わらず無駄に顔の広い男である。

「それに、文化系の部活はだいたい旧校舎が部室だって話だから、咲にも他人事じゃないんじゃないか？」

「私？ いや、私はハンドボール部のマネージャーにでも」

「咲よ。この学校、ハンドボール部はもう無いんだ……」

「数年前にはあったみたいなんだが、そもそもハンドボール自体がだいぶマイナーな競技だしな。自分で作ることも少しは考えたんだが、それ以前に俺がハンドボールを始めたきっかけは、男友達とワイワイやってくうちに何となくって感じだったし、アイツらとはもう校外でしか会えない以上、そこまでハンドボールに拘る理由もないんだよな」

まあ、次に何で遊ぶかはまた集まった時にでも考えるさ、などとあつけらかんと言いつ京ちゃん。結構頑張ってたのに適当だなあ、と思うものの、だからこそ情熱を注げるといふのはあるのかもしれない。少なくとも、私はいつまでもハンドボールに拘って友達を蔑ろにする彼より、こういった小さな繋がりを大切にされる彼の方が好ましく思う。

「ってなわけで、俺は先に本校舎の部活を幾つか見学してからこの旧校舎まで足を運んで、そしたら図書館に向かったはずの咲がベンチでぼーっとしていたから声をかけたわけだ」

「なるほど…」

「ここにいてるってことは、もう図書館は見てきたんだろ？　せつかくだから咲も一緒に見学していいこうぜ」

「そう……だね」

自然に手を差し伸べられる。読んでいる推理小説が丁度良いところだったのでほんの一瞬だけ躊躇ったものの、すぐ本なんていつでも読めると思い直すとその手を掴む。直後、思い掛けぬ力強さで引っ張られて蹠踵めくも、京ちゃんは「おっと」と私の体勢を支えて上手く立て直すと、

「じゃあ行こうぜ。まずは屋上からだ！」

「いきなり最奥ってのはどうなの……？」

そのままぐんぐん進む彼に引きずられる私。正直言つて新学期二日目から旧校舎の屋上で活動している部活なんてまず無いと思うのだが、高台にあるこの旧校舎の屋上からの風景は地味に気になるので無抵抗にズルズルと追従する。いや、それ以前に鍵が開いているんだろうか。見たところ柵が設置されてる感じでもなかったし、転落防止のため立ち入り禁止となっているのが妥当なのでは？

「……開いてないな」

「だろうね」

屋上に繋がっていきそうなドアをガチャガチャ捻りキョトンとする京ちゃん。なんか意外そうにしているが、むしろ何故この結果を予想できなかったのか。そもそもここに来るまで誰一人として他の生徒とすれ違うこともなかった。当然だ。部活動見学は明日以降に午後いっぱい専用の時間が設けられている。なのに貴重な放課後をわざわざ削つてまで部活動見学に勤しもうとする殊勝な生徒がどれほどいるのか。現状を鑑みるに、そんな人物はいたとしても極々少数派だろう。

「……ん？」

ガチャ、と。瞬間、直ぐ近くから確かに聞こえてきた音に耳を凝らす。しかしその頃には音も虚空へと消えていて、聞き間違いかとも思うものの、見れば隣の京ちゃんにも聞こえていたらしく、彼も私と似

たような顔をしている。

「聞こえたよね？」

「ああ。……あれ、もしかして更に階段があるのか？」

どこことなく不気味さを感じて、まだまだ外も明るいというのに京ちゃんの後ろに隠れるように階段を登っていく。我ながら大袈裟だなあとは思ふ。けどなんだろう。このシチュエーションは思ったよりも悪くない。むしろ良い。ぶっちゃけテンション上がる何これ胸がすごい高鳴るんだけどやばいやばい。

「なあ、咲。見えたか？」

「えっ何?! ごめん聞いてなかった!」

「急にどうした。じゃなくてほら、今あの先の扉閉まっただろ? あ

そこの鍵開けた誰かが入ってったんじゃないか?」

「そうだね! 多分そうなんじゃないかな!」

「いやマジでどうしたよそのテンション。とりあえず落ち着け」

すみません全く見てませんでした。だけど適当に肯定する。若干不審がられたが気にしない。京ちゃんは私が大丈夫だと言えば一度は流してくれる優しい子。それよりも今は存分にこのシチュエーションを堪能しなくては。

「大丈夫、大丈夫だから……」

「そうか? ならいいんだが……疲れたんならしつかり掴まっつけよ」

優しい。鼻血出そう。でもここで鼻血を出したら色々台無しなので必死に堪える。気づいたら彼の腕に縋り付くような体勢になってしまった。無様。今私は無様を晒している。京ちゃんの前であり得ないあり得ないあり得ない。でも不思議と心が滾るのは何故なのだろうか。ひよっとしてこれが愛? これまでの恋と重ねて進化して夫婦になったりするの?

「ここは屋根裏部屋か? え、旧部室とかじゃなくて誰かいるのか?」

「誰が居ても関係ない、今行くしかない。幸せな家庭……」

「行く? そっか、そうだな。せっかくこんなところまで来たんだ。男は度胸、たのもーう!」



「……へ？」

コンコンボタン！と、ノックの返事すら聞かないまま京ちゃんが目の前の扉を開く。屋根裏部屋らしきその部屋の内部は外観から予想していたよりも遙かに広々としていて、また内装の整い具合から物置部屋の類ではないことが見て取れる。

何より、

「あら、お客様かしら？ それとも道場破りだったりするのかしら？」  
その部屋の中心部——今では一般家庭にも当然のように普及しているという見慣れたゴテゴテしい机を携え、その席に佇んでいた女性がこちらを一瞥し挑発するように告げる。

今更ながらに部屋の入り口近くの表札を見る。ボロボロの紙には『麻雀部』と書いてある。そして見紛うはずもない。あのゴテゴテした机は麻雀の自動卓だ。ならばここは麻雀部の部室。我々はそこに、無遠慮に足を踏み入れてしまった。

「——ようこそ麻雀部へ。私の名前は竹井久、僭越ながら、この学校の学生議会議長をやっているわ。愛すべき新入生さん」

「……」

すっかりと冴えてしまった頭に、堂々とした名乗りが澄み渡る。口調の端々から漏れるのは確かな自信。しかしそれは、学生議会議長…生徒会長としての立場から来たものではなく、一人の雀士として、彼女自身が築き上げて来たものの現れである。

「……学生議会議長？」

「いわゆる生徒会長ってヤツね。入学式で顔を合わせなかつたかしら？」

「そういえば……って、すみません。失礼しました竹井学生議会議長。つい勝手に扉を開けてしまって……」

「いーのよそんなのは。むしろすつごく嬉しいわ。まさかこんな早くからこんなトコにまで新入生が見学に来てくれたんだもの」

しかも2人もね。と付け足され、そういえば私も彼と一緒に突入したんだつたと改めて実感する。当事者であろうと一歩引いて物事を見てしまうのは私の悪い癖だ。早く治すべきと理解しているつもり

だったが、しかし性分というものは中々に覆るものでもない。でも。「新入生の宮永咲です。こちらは同じく新入生の須賀京太郎。急な来訪にも寛大な対応感謝します」

「う、うん……随分と硬いわね貴女。学生議長長って言っても所詮は貴女たちとなんら変わらない一生徒に過ぎないんだから、そんなに硬くならなくてもいいのよ?」

客観的に見ても美人である竹井先輩から詰め寄られて困惑する京ちゃんを庇うように、私は自己紹介と共に彼の一步前が出る。自己紹介をしたくらいで何かが変わるわけでも無い。なのにどうしてわざわざそれを遮ろうとしたのか。嫉妬も過ぎては見苦しいだけ。それは分かっているはずなのに。

けれど私の醜い内心を吹き飛ばすように、竹井先輩は心底から弾んだ声で輝くような笑顔を見せると、

「宮永さんに、須賀くんね。せっかくのお客様だもの。今日は見学と言わず、好きだけこの卓で打って行きなさいな。貴方たちが初心者でも上級者でも、きつと満足できる卓を用意するわよ?」

「は、はあ……」

その態度があまりにも嬉しそうで、無駄に警戒していた私が馬鹿らしくなつてすっかり毒気がこそぎ落とされる。たかが見学希望の新入生に対し些か対応が過剰なような気はするが、こんな旧校舎の屋根裏部屋なんかには部屋を構えているのだ。おそらく私が計り知れない深い理由があるのだろう。単に廃部寸前だとかそんな世知辛い事情だつたりするのもただけだ。

「ほら、まこ起きなさい! 入部希望者よ。5秒で支度して!」

「な、なんじゃあ!」

あれよこれよと卓に座らされ、私達とは全く違う態度で竹井先輩が奥のベッド(なんでベッドがあるんだろう)を蹴り飛ばすと、同じく流されるままに卓に付いていた京ちゃんが今更のように、

「……なんか流れで麻雀打つことになったけど、咲って麻雀できんの?」

「それなりに出来るよ。京ちゃんこそ大丈夫? アプリなんかと違つ

て手動で点数計算しないとだけだ」

「げ。そうだった。けど、その言葉が出るってことは思った以上に麻雀できんのな。俺も最低限の計算はできるつもりなんだがあんまり自信はない。いざとなったら頼むわ」

「りよーかい」

軽くなった気持ちのまま緩く返事をする。実際、気取る必要性すら無い。点数計算は私の得意分野だ。そんなことで頼られるなんて気楽なものだ。

そうこうしていると、竹井先輩が奥の方から髪にウェーブをかけた眼鏡の女性を連れ立って現れる。

「待たせたわね。これでようやく面子が揃ったわ」

「悪いのう。わざわざ新生がこがなトコまで足を運んどるつちゅーに寝入ってもうたわ。わしは2年の染谷まこゅーもんじや。よろしゅー頼むわ」

「あ、よろしくお願いします」

「……よろしくお願いします」

一瞬、爺口調にも思えるキツイ方言に面食らったものの、真摯な謝罪と丁寧な挨拶に好感を抱く。少なくとも、口調だけで敬遠していい相手では無さそうだ。そして何より――

(竹井先輩もだけど――この人、強いな……)

彼女は気負うことなく、「満足できる卓を用意する」と発言した。それはつまり、彼女は私達が初心者でも上級者でも、軽くあしらえらるだろう自負を持っているということ。

そして事実、彼女達は間違いなくその自信に恥じないだけの実力を有している。それこそ、どうしてこんな寂れた旧校舎の片隅に部室を構えているのか理解できないほどに。

「それで、どうする? とりあえず肩慣らしに東風でも――」

「半荘一回。赤入り各10万点持ち順位点は無し。トビあり。ただし京ちゃん……須賀京太郎はトビを考慮せずそのまま続行する。これでお願ひします」

「え?」

「なんじやと……?」

「お、おい、咲……?」

改めて居直り、先んじてルールを提案する。通じるようならそれで良し。そうでなければそういう部活なんだと思うだけのこと。いつだったか、スタンスの確認は大事だと姉に教わった記憶がある。しかし、彼女がこのルールの意図を理解し、その上で乗ってくるようであれば——ここで現実を叩きつけるのも、今後の彼女のためのはず。

「乗った」

「おい、久!」

「いいじゃない——こんなに心が躍ったのは久々よ。まさかまこ、こ  
うまで言われて黙ってるつもりはないでしょ?」

「そ、そりゃあそうじゃが……」

竹井先輩がニヤリとイヤらしく笑う。素で言っているのか、表情を作っているのか。お姉ちゃんほどの洞察力を持たない私では分からない。ただ、意図は十分に理解しているようだ。その上で挑発に乗ったのであれば、こちらも相応の対応をしよう。それがおそらく、現状の彼女たちにとって、一番の礼儀であると思うから。

「——それでは改めて、よろしくお願いします」

☆☆☆

「ロン、一気通貫。3900の8本場は6300」

幾度となく響き渡ったその声が、私を射抜くように突き抜ける。

否、〃ように〃という表現は適切ではない。少なくとも声の主には私を射抜く意志があり、その代償は点棒という形で根刮ぎ奪われていく。

何も出来ない。何もさせて貰えない。縮こまっただけでも、強引に引き寄せては潰される。自信が、声が、意思が、心さえもが。一手進むごとに急速に失われていく。

「……………」

竹井久 6巡目

{999①①②②③③⑤⑨北北}

ツモ

{⑦}

悪くない手——そのはずなのに、それに一体何の意味があるというのか。良型も愚型もその中間の微妙な手も。和了れなければ全てが無意味。必死の抵抗も諦めの境地も、いずれも先に和了られてしまえば終わり、その卓に爪痕を刻むことはない。

竹井久 打牌

{⑨}

「ロン、役牌のみ。100符1翻の9本場は7500」

無慈悲な発声が再び響く。最初のうちは横に曲げていた捨て牌も、しかし今では力無く河に流れ落ちるだけ。パラパラと開かれた相手の手を掠れた視界で見つめる。五筒と九筒のシャボ待ちの手。どちらを捨てても無意味だった。何故、どうして。どうやって。疑問ばかりが募っていく。

「——10本場」

東二局10本場 親 宮永

染谷 100000

宮永 193400

竹井 6600

須賀 100000

いつの間に二桁の大台にまで乗っていたのか。もはや勝負を挑んだことさえ間違いないんじゃないかとすら思い始めている。それはおかしい。理性では理解している。けれど頭には後悔が占める。一体、私はどうすればいいのか。

「リーチ」

宮永咲 打牌

〔横四〕

親によるダブルリーチ。それが発生する確率についてはもう考えもしていない。重要なのは、この後の選択肢。しかしその思考も意味などない。親のダブルリーを相手にして、己が直感以外に信じられるものなど存在し得ない。

竹井久 手牌

〔三五六九468①発発中中白〕

「っ……」

現在は10本場。積み棒を含めダブルリーの2翻だけでも直撃すれば飛ばされる。そして彼女の目的は明白。とにかく徹底して私への直撃狙い。即ち、この一打に切る牌次第で、このまま私はこの卓で、何一つ残せずに全てが終わる。それはまるで、私のこの3年間の軌跡のように。

〔上等……い〕

まさしく絶望的と呼べる状況。だが、それが果たしてどうしたというのだ。その程度の逆境など、私はいくらでも乗り越えて来た。

立場も親も自らの名前さえも。自己を形成するありとあらゆるモノを精算してたどり着いたこの小さな部屋。しかし今日の前に立ち塞がる彼女は、それら全てを纏めても比肩さえ出来ないほどの圧力を以ってして、無慈悲にこちらを蹂躪してくる。

しかし。しかしだ。ピンチはチャンスとはよく言ったもの。逆にこの状況さえ乗り切ることさえ出来たなら、その矛先はそのまま私の覇道を均すための武器となる。何としても彼女を味方に引き入れる。そのためにも、ここでいつまでも蹲っているわけにはいかない。

竹井 打牌

〔①〕

「……そう。まだこの場面で逆転を狙うのであれば、たとえそれが罨であろうと踏み越える他に無い。その結果の是非はさておき、少なくとも、私はその選択を高く評価したく思います」

「え……？」

処刑台を一段一段踏み締めるかの如き一巡が通り過ぎて、再び手番の回って来た宮永さんが静かな口調で語り出す。けれどその内容は、これまでのように冷酷なだけの和了宣言ではなく、ほんの僅かながらも、こちらを賞賛する意図が含まれていた。

「ツモ」

宮永 和了形

〔北北東東南南西西発発中中白〕

〔白〕

「字一色七対子。16000の10本場は、17000オールです」

「……………逆転の目は既に無く、しかも逃げたら振り込んでいたとか、ちよつと性格悪過ぎない？」

「まさか。こんなものはただの偶然オカルトです。私は役満手なのにリーチをかける素人ですよ？ そんな意地の悪いことなんて出来ません」

「貴女のどこが素人なのよ。素人は100符の符点計算なんかスラスラ出来ないっての」

たつぷりと皮肉を込めてそう言うと、彼女は悪びれもなく「流石に無理でしたか」などと言い放ち、主に私から掻き集めた点棒を見せびらかすように卓上へ置くと、

「それで、どうしますか？ 先程の私よりも強い打ち手は、残念ながら全国各地にゴロゴロといます。力の差は今まさに実感した通り。それでも抗うつもりであれば、おそらく地獄を見る程度では済みませんよ」

「全国行きの切符としては、随分と安い代償ね」

がっしりと卓上の点棒を握り締めると、互いに顔を見合わせてニヤリと笑う。目に映るのは計算され尽くした自然な笑顔。その瞳の奥

底に、彼女はどれほどの獣を隠し持っているのだろうか。何にせよ、面白い後輩が入ってきたものだ。

「そんなわけで京ちゃん。私、この部活に入るから」

「……あー、うん。色々聞きたいことはあるし、それ自体はまあ構わないんだが……いや、やっぱなんか色々心配だから俺も入るわ」

「え!?! いや、駄目だよ京ちゃん。私、京ちゃんがいたら加減しちゃうかもじゃん。確かに京ちゃんがいた方が嬉しいけど、ついさつき地獄を見せるって約束したわけだし」

「地獄で。お前は麻雀で一体何をするつもりなんだ？ それに仮にも生徒会長、じゃなくて学生議会議長に地獄を見せるって、もしも竹井先輩が再起不能になったら生徒会の運営はどうするんだよ」

「えーと。そこはほら、自己責任？」

「はい入部決定」

「何で!?!」

「何でじゃねえって。さっきのお前は昔のお前みたいで危なっかしいんだよ。ならストッパーは多い方がいいだろ？ それに、仮に会長が本当に地獄を潜り抜ける必要があるにせよ、その回数は少ない方がいいに決まってる」

「良くないんだよ本当にこの道は魔境なんだよおさっきの私くらいなら余裕で完封できる変なヒトたちがたくさんいるんだよ……」

「安心しろ。お前の言う『変なヒト』も、さっきのお前にだけは言われたくないと思ってる」

(……………)

訂正。本当、面白い後輩たちがやってきたものだ。何ならこれまで燻っていたこと自体が彼女らを迎え入れるために必要な道程だった。そう納得しかねないほどとびっきりの。

「ええんか？ おそらくじゃが、アレは久が思っちよるより遥か上の化けモンじゃぞ」

「化け物猛獣大いに結構。それくらいは飼い慣らせないと、全国なんて夢のまた夢よ」

善意から忠告してくれているまごに、精一杯の強がり返す。当然



のこと、先の勝負による苦手意識はまだ消えていない。しかも彼女は私に対して、何故か意欲的に地獄を見せようと決意している様子。はつきり言おう。普通に恐ろしい。一体何者なんだろうかあの少女は。実はストツパーになりそうな須賀くんの入部発言に、一番ホツとしてるのはおそらく私である。

(それ以前に、贅沢を言えるような立場でもないしね)

いくら家庭の事情があったとはいえ、この部の現状は私の怠慢に近い。何なら彼女たちが入部してもまだ人数も足りていない。そしてそれは流石に誰かには頼れない。あれだけ大見栄切っておいて「メンバー不足でエントリーすらできませんでした」では話にならない。

「あ、じゃあ週一くらいのペースならどうかな？ それならどうにか夏までに間に合うかも」

「何が『じゃあ』なんだよ。今から夏までって最低10週以上あるぞ？ 何がお前をそこまで地獄へと駆り立てるんだ」

「だって、その方が強くなるし……もし万が一京ちゃんに現を抜かしたら困るし」

「え、何だって？」

「なんでもない！」

「これから忙しくなりそうね……」

わちゃわちゃと楽しそうに不穏な会話を繰り広げる彼らを見ながら独り言ちる。不安はある。むしろ地獄云々の発言には不安しか感じていない。でも同時にワクワクしている自分がいる。その方が強くなるとは即ち、まだまだ私にも伸び代があると言うことだからだ。

明日からは、きつと激動の日々が始まる。どんどん騒がしくなっていく部室を見回しながら、そのことを深く実感する私だった。

## おそろく何かが挫かれたその日

清澄高校が栄えある入学式を迎えて数日が経過し、いよいよ各種手続きや学校のオリエンテーションなんかが一通り終わったある日の午後。

その日は兼ねてより説明のあった部活動見学の日であり、事実上昼いっぱいがまるまる自由時間ということもあつてか朝から浮かれた生徒も多くいて、京ちゃんが既に部活を決めたのを良いことに男友達大勢と連れ立って部活見学全制覇するなど無茶苦茶言っていたのを覚えてる。

けれどそれも、彼と同じく既に部活を決めていた私には関係のない話。しかし無視して図書館で時間を潰すことは心情的に出来ず、また彼のように部活全制覇なんて無茶苦茶をする気力も湧かず、何だかんだと部長に任せるのも心配なので旧校舎へと向かうことにした私。とはいえ部長も伊達にこの学校の学生議会議長をやっているわけではない。当然、宣伝なんかもばっちり、それはもうあの無駄に広い部室から溢れんばかりの人混みが――

「誰も来ませんね……」

「じゃのう……」

そんなことを夢想してちょうど一時間。人が溢れるどころかいつもの半分しか人がいない部室でボソツと呟く。

それに反応するのは染谷先輩ただ一人。何でも部長は放課後近くまで会長としての仕事が忙しいらしく、また学生議会に入ろうとしてやる気のある生徒に対しまさか麻雀部を大っぴらに薦めるわけにもいかず、つまるところ宣伝なんてものは本校舎一階にある掲示板に申し訳程度に貼り付けられたポスター一枚が精々で、ならば初日から旧校舎の、しかも地味に分かりづらい場所にあるこの部室を目指す人なんてそういない――そんなところだろう。

「まあ、まだ1時間ですからね。ここに来るまでで10分くらいかかりますし、本校舎の部活を全部無視でもしない限り、まだまだこんな

奥までは人も来ないでしょう」

「じゃといいがのう……」

不安になる眩きを残される。その不安を打ち消すようにそれから  
は黙々と二人で何故か部屋の清掃を行う。しかし待てども待てども  
人は訪れず、いよいよそれが1時間半、2時間と放課後付近まで差し  
掛かると、いよいよ現状を誤魔化すことも出来ずに私が思わず染谷先  
輩へ問いかけると、

「初日から見学に来るような者、つまりは本格的に麻雀をやつちよる  
打ち手は大体風越の方に進学するから。わしは実家の関係であ  
まり遠くに行けなくて清澄を選んだんじやが、もしも位置関係が逆  
だったなら風越を選ばん理由がない」

「風越……ああ、風越女子高校ですか。ありましたねそんな高校」

「あそこはいわゆる強豪校と呼ばれる学校で、インターハイの常連校  
でもある。長野では優勝せん年の方が珍しいくらいの一強状態  
じゃった。加えて形だけの顧問しかいないウチと違い、元プロだとい  
うコーチも正式に雇つとる。当然、指導なんかもウチとは比べ物にな  
らんくらい充実しとるじやろうし、そりやあ真面目な雀士はそこを目  
指すじやろて」

「なるほど……」

「何より、ウチは人数の問題で正式な部活と認定されておらんからの。  
入学前の資料やオープンスクールだけでは麻雀部があること自体分  
からんのじや……」

「あー……」

そもそもその問題として、入学前の時点ではこの学校には麻雀部が無  
いと思われてるはずなので、麻雀をやりたい人はまず前提として他の  
学校に行っているのだと。ふむふむなるほどなるほど。……これ、詰  
んでないかな？

「いやほんとたまたま私が入らなかつたらどうするつもりだったんで  
す……?」

「この前見学だけで久がはしゃいでいたのはそれが理由じゃな。おん  
しの実力に関しては完全に誤算じゃつたらうて」

「そういえばテンションがだいぶおかしかったですね……」

あの時はあれがデフォなのかと思っていたが、普段の会長はその肩書に相応しい落ち着いた印象を受ける人物だ。少なくとも、普段から仮眠している友人を強引に叩き起こしているような人とは思えない。……いや、案外それくらいならやりそうに思えてきたな。部長って結構強引なところありそうだしなあ。いや全部私の勝手な印象なただけども。

「まあ本人は最悪、他は人数合わせでも構わないと去年から言っただけえの。その発言の分、足りない戦力の責任は久に取らせるから安心しい」

「いやいやいや。無茶ですって。だってこの地区には——」

いや、そういえばまだ言ってなかったかもしれない。それはなまじ私という特記戦力を序盤で開示してしまったからこそその慢心。しかしおそらく、それもある意味で間違いでは無いのだけど——でも、それでも。こんな私でも恐れるものはある。例えば、私のような人外を、平気な顔で人の領域まで押し下げて来る変なヒト、とか。

「いえ、何でもありません」

「？」

「まあ、私も煽ったからにはそれなりに頑張ります。ですが今は、その前の問題について考えましょう」

「そうじゃな……」

人数不足は勝敗云々を語る以前の問題である。そこを解決できなければいくら部長が頑張ったところで意味はない。何ならこのザマでは私や京ちゃんが加入した意味すら無くなってしまう。この際部長のことはいいとして、それだけは絶対に避けないといけない。

「とりあえず京ちゃんに頼れば幽霊部員の1人や2人くらいなら何とでもなりそうですけど……」

「あやつのおツテとなると男子じゃろ？ インターハイは男女別で実施されるんじゃないか……」

「万策尽きましたか……。困りましたね……」

「いや諦め早過ぎじゃろ!? おんしのツテとかはないんか!？」

「無いですね。私、京ちゃんがいなければおそらく引き籠もり一直線の根暗女なので」

断言すると、お、おう…とだけ呟いてしかしそれ以上は追及しない大人な染谷先輩が、ならばと懐から取り出したケータイを用いて自身のツテをいくつか当たる。

しかし先にも彼女が言っていたように、そもそも麻雀を真面目にやろうとする人間はこの学校に進学しようとしなない。故に成果も芳しくなく、いよいよ色々と不安な部長のツテを頼るか、あるいは京ちゃんを女装させるなんて意味不明な案まで出始めて、

「京ちゃんって意外と顔立ちは可愛い系なので、薄い色のカツラ着けてちよつと目元をメイクすれば——」

「おーつす、新入生連れて来たぞー！」

「——ツ、ちよつとタンマ、京ちゃん!!」

「お、おう!!? なんだ!?!」

自分でも驚くほどの声量が出るも、それどころじゃないと卓に広げていた化粧品を片付ける。後で冷静になって考えれば別に化粧品を見られたところでどうということはないのだが、その時の私はきつと非常に混乱していたのだろう。

だからこそ、気付くのに遅れてしまった。声の付近に存在する異なる気配を。普段は抑えている支配が興奮で若干量漏れ出ていたのを。そして何より、

「——お客様?」

「おう。さつき丁度下で迷つてるところを見かけてな……つて、何故地獄モードに。部長はまだ来てないはずだろ?」

「あ、いや違くてー!」

「お、お邪魔するじえ……」

「……………失礼します」

何より——彼の背後に連れ立って現れた2人の人物。それらの女性の端正な顔立ちと、何げに彼と程よく近い距離感に軽い殺意を抱く。こういう時、無駄に優れた感覚器官が恨めしい。有りもしない邪推で彼を不快にさせるのは、私にとっても本意ではないのだから。

ともあれ、

「ようこそ麻雀部へ。……とりあえず、一局どうですか？」

精一杯の営業スマイルで醜い嫉妬を押し隠す。私は今、綺麗に笑えているだろうか。ただそれだけが気になった。

☆☆☆

原村和は困惑していた。

中学からの親友である片岡優希に連れ添って訪れた旧校舎。本校舎にも引けを取らない巨大な建造物まるまる一つが文化系部室と聞いた時は流石に驚いたものの、その実態を鑑みれば珍しくはあっても可笑しな話ではないと一人納得する。

とはいえそこに訪れるまでに長い坂や道路を挟むのは想像していたよりもよほど億劫で、恥ずかしながら優希に引き摺られて来なければ、もしかしたらこの建物に足を踏み入れることもなかったかも知れない。

ただ、運の良いことに、ちょうど私達が旧校舎に入ったタイミングで下駄箱には同じく一年生の少年が居て、流れで軽く会話をすると彼は既に麻雀部に入部しているとのこと。まさか部活見学に先んじて入部を決めている生徒が居るとは思わなくてそれなりに驚くも、ならば勝手知る少年に案内を願い出るのは至極当然の話。須賀と名乗った彼もその提案を快諾してくれたことで、我々はスムーズに目的地への到着を果たした。ここまではいい。

「ウチの部長は学生議会議長も兼任でな……放課後までに一度戻って来れるかもとは言ってたんだが、最悪今日は会えないかもしれん」

「学生議会議長？」

「生徒会長のようなものですよ、ゆーき」

しかし早速不穏な情報が出てくる。が、これを過失と認識するのは

違う。兼任は一見すると不真面目に思えるかもしれないが、つまりは二足の草鞋を履けるだけの能力があるということ。麻雀という競技は運の要素こそあれど、基本的に地頭が良いに越したことはない。清澄高校は学力的には中堅校でもその生徒会長ともなれば相応に優秀なはず。これは中々期待が出来そうだ、などとこの時までは悠長に考えていた。

「この階段の先だな。屋根裏部屋だが、中は結構広いから安心してくれ」

「随分と入り組んだところにありますね……」

素直な感想を述べると、須賀くんが苦笑いで返す。どうやらあちらも似たようなことは思っていたらしい。事実旧校舎の、しかも奥も奥の屋根裏部屋にひっそりと部室を構えているというのは相当に分かりづらい。まだこの学校に明るくない優希と二人では迷っていた可能性だつてある。周囲に人影が見当たらないのもその辺りが理由だろうか。

「おーつす、新入生連れて来たぞー!」

「——ッ、ちよつとタンマ、京ちゃん!!」

「お、おう!? なんだ!」

須賀くんが手慣れた様子で扉を開けると、中から絶叫に近い声が聞こえて来て面食らう。どうやら何かあったようだが、しかし勇んだ彼の手によって扉は既に勢いよく開け放たれてしまっている。私自身、悪いとは思いつつも好奇心が先立って扉の先を除けば、そこは何の変哲もない部室風景と言ったところ。傍目にはおかしな点はないように見える。

後になって考えれば、この時中に着替え中の男性がいたら気まずいどころではなかったのでこの行動はやや軽率だったかもしれない。少なくとも須賀くんの存在から、他に男性の部員が存在している可能性は充分に考えられたはずなのに。

「お客様?」

「ッ——」

結局、叫んだ理由もよく分からないままに、僅かな間をおいて先程

の声の主と思われる少女が姿を見せて——息を呑む。

端正な顔立ち、茶髪のショートボブ、スカートの色から察するに一年生。身長は私とほぼ同等だろうか。外見から読み取れる情報はこの程度だ。

しかし、どうだろう。自分でも理解出来ないが、彼女からは何か得体の知れない恐怖を感じる。それは父に窘められる時のような、それは先生に叱られる時のような、それは母に怒られる時のような、あるいはそれは、あのインターミドル決勝で感じた以上の——圧倒的強者による威圧。

「じ、ごえ……」

「……………」

隣を見れば、あの優希が迫力だけで気圧されてしまっている。インターミドルでは見なかった顔。いや、この学校にいるということは同じ地区だったのだろうか。いずれにせよ、興味を抱く。雀士の端くれとしての血が騒ぐ。是非、彼女と一手交えたいと。

「ようこそ麻雀部へ。……とりあえず、一局どうですか?」

都合の良いことに、申し出は向こうからやって来た。やや歪んだ好戦的にも見える笑み。あちらも同様のことを考えているのだろうか。

尤も、あちらの考えがどうあれ、麻雀部というなら勧誘としては実力を見せる一択な気もしなくもないが、とにかく互いの利害が一致した結果、もう一人の部員である染谷先輩を交え、初心者である須賀くんを除いた女子4人でひとまず一局交えることに(案の定部長さんは居なかった)なったのだが——

「あ、それロンです。鳴き清一色、40符5翻で満貫、12000点」  
「——!」

東四局 親：宮永

片岡 18100

染谷 23000

原村 12000

宮永 46900



(なんですか、これは……！)

強い——なんて一言で表せるレベルじゃない。東四局まで来てこれまでの和了りは全て宮永さんのもの。和了までは平均して5巡ほどだろうか。追い続けることさえ叶わない。なんだこれは。運の偏りにしてもあまりに異常過ぎる。

「一本場」

「っ……」

都合の悪いことに、現在はそんな宮永さんの親番。それまではどうにか振り込みを避けていたものの、親満の直撃によってトビすら見えってきた。そうでなくても親の一本場、優希が跳満を喰らえばそれで終了になる盤面。果たしてどうするか——

原村 配牌

{一六八99③⑨北北発発白白}

(悪くはない……ですが)

得られた配牌は対子が多め。向聴数こそ少ないものの、横に伸ばしにくい分有効牌の数も同様に少ない。ツモは9筒、初手から実質単騎待ちが嵌まるとは中々運が良いものの、それ以前に七対子を積極的に狙いたくない心理が働いてしまう。

(いえ、臆しては……)

原村 打牌

{六}

逆転の可能性に賭けて高めを目指す。字牌や么九牌を捨てなかったことで何かを悟られる危険性はあったが、そもそも彼女の速度に追いつけないようでは話にもならない。

4巡目 片岡 打牌

{横⑥}

「リーチだじえ!!」

「——」

(……おや)

4巡目にして一向聴。しかしまたもや先んじて和了られたかと思えば、予想外の角度からの発声が来る。私も今回はかなりツイていた方だと思うのだが、こんな状況下にあつてなお、彼女の東場での異様な勝負強さは健在らしい。

「……。……カン」

「——え？」

宮永 手牌

{裏裏裏裏裏裏裏裏} 明槓 {横⑥⑥⑥⑥}

(この巡目でのリーチを大明槓!?)

七対子を狙うのがどうのというレベルではない暴挙に目を見開く。一発消しにしてもこの巡目の立直を相手に明槓はリスクがあまりにも高過ぎる。そもそも基本的に、上位の打ち手であればあるほど槓は控えるべき——

「もう一つだけ、カン」

「——」

宮永 手牌

{裏裏裏裏裏裏裏} 明槓 {横⑥⑥⑥⑥} 暗槓 {裏中中裏}

続けて発せられた言葉に今度こそ絶句する。確かに、普通の打ち手であればこの場面でのカンなど、敵に塩を送るだけの行為でしかない。

しかし——

{嶺上開花。混一色、中、対々和、三暗刻、ドラ3で三倍満。 1 2 1 0  
0 オールです}

宮永 和了形

{②②②②⑤⑤⑦⑦} {⑦} 明槓 {横⑥⑥⑥⑥} 暗槓 {裏中中裏}

半荘終了

片岡	6000
染谷	10900
原村	—100
宮永	83200

「まさか、そんな……」

しかし、それはあくまで常識的な、普遍的な事例を挙げての事。先程までの闘牌を鑑みれば、彼女がこれまで闘って来た普遍的な打ち手とはまるで異なるであろうことも、また一つの事実である。

☆☆☆

「のどちゃん、そろそろ講堂に向かう時間だじえ……」

「いいえ、まだです！ あと一局、いえ二局は——」

それから部活動見学の一区切りとなる放課後まで、具体的には計4回の半荘全てで全敗という屈辱的な記録を叩き出し、どころかその全てが宮永さんの和了りで占められた実質東風戦だったという意味不明な状況を経て、しかし諦めきれずに食い下がる。

ムキになっている自覚はある。けれどそれ以上にプライドがズタボロで、まさか自分のことを世界最強などと思ったことは一度もないが、それでもインターミドルチャンピオンとして同年代の打ち手に手も足も出ないようでは大会で闘って来たライバル達にも申し訳が立たない。せめて一矢報いるまでは、

「あー、いいか？ 見ていただけの俺が言うのも何だが、俺も咲も、お前たちと同様にそろそろ講堂に向かわなきゃならんからこころいらでお開きにしてくれ」

「ですがっ……」

「こういう言い方は卑怯かもしれないが、それでも納得できないようなら改めて入部でも見学でもすればいい。こいつマジで俺が初心者とか関係なく異常に強いから、その気持ちも分からなくは無いしな」  
「ぐっ……」

確かに、正式に入部したわけでもないのに屁理屈で不当に居座るのはバツが悪い。まして相手は私たちの同級生。同等のスケジュールで動いているからには言い訳も通じないし、何より私自身勝手な理由で遅刻など許されるはずもない。それでも、と態度に出ていたのだろう。そんな私を見た宮永さんが、囁くように告げる。

「……きつと」

「……？」

「きつと、私の運が貴女より優れていた。多分ですが、理由はそれだけです」

「な——」

それは、ある意味で残酷な結論。培って来た技術でもなく、積み上げて来た経験でもなく、ただ運が良かったから勝てたのだと。それだけで、私の全てが打ち碎かれたのだと。

「そんなオカルト、あり得ません……！」

何かから逃げるように、何かを恐れるかのように、そんな言葉と共に屋根裏部屋を後にする。いつだったか、麻雀とはそういう不毛なゲームであると告げた尊敬すべき父親の言葉が、今はこの上なく耳障りに感じられた。

「……本当なんだけどなあ」

「どうした？」

「ううん、何でもないよ。京ちゃん」

「……まあいいか。じゃ、俺らも向かうとするか」

「うん」

## きつと何かを決意したあの日

ウチの姉は意外と多趣味で、時々漫画のようなものを描くことがある。

ようなもの、とは文字通り、それがとても漫画と呼べるような出来ではなく、キャラクターこそ比較的良く描けているものの、コマ割りも構図も素人の域を出ず、当然トーンなんかも未使用で全てが手書き。字はそれなりに綺麗なのだが、姉の字は如何にも女の子の子としていて漫画の空気と致命的に合わない。題材の不穏さもあってか初見では一目見ることさえ躊躇する代物である。

しかしながら、その漫画は独特の引力を備えていた。とてもじやないが愉快的な内容の話ではない。後味だって結構悪い。何というか、クズの書き方が無駄に上手いというか、どんなな人生を歩めばこんな話が書けるのか不安になる内容のドス黒きで、幼心ながらにこれを素面で書ける姉の精神状態を心配したのをよく覚えている。

そしてその趣味は、どういうことか今を以てなお続いていた。主な理由としてはウチの父親が、何故かその漫画を相当に好んでいたことにある。

なんでも、ウチの父はお母さんと結婚する以前は酒もタバコもギャンブルも存分にやる結構なダメ人間だったらしく、自分も一歩間違えたらその漫画の主人公のようになっていたと考えると、現状と比較してどこか愉快的気分になってくるのだとか。

初めてそれを聞いた時、色々な意味でこの父親は大丈夫なのかと思つたものの、そもそもそんな漫画を描いているのが姉なので私は何も言わなかった。その後直ぐに離婚の話が出たり火事だのなんだので大変なことになったので何か言っておくべきだったと今は後悔している。

ともあれ。

「なに……その、何これ？ え、何？ なんなのこれ……」

眼前に並べられた数冊の漫画本を見て、心底からの困惑を露わにする。こんなに動揺したのは一体いつ以来だろうか。私が引き籠もる原因となった出来事ですらこれほど心は動かなかった気がする。

そんな私に相對するのは、どこか照れ臭そうにしている私の姉。基本がポーカーフエイスの彼女には珍しく愛らしい表情だが、そこに置かれてる漫画本があらゆる印象を台無しにしている。何ならこんな本を愛読していると知られるだけで友達を無くしてもおかしくない。

「いや、以前咲に言われてからハギヨシさんを食事に誘ったりとかしてね。なんか話の流れでハギヨシさんにあの漫画モドキを見せることになったんだけど、せっかくだからと龍門渚さんの人脈借りてプロの人呼んで製本してもらった。ひっそりアルバイトとか雀荘で賭け麻雀とかして貯めてたへソクリが全部消し飛んだけど後悔はない」

「色々と突っ込み所はあるけど、そもそも以前っていつの話をしてるの……？ お姉ちゃんが部長になった頃の話ならあれからもう半年くらい経つよね……？ まさかお姉ちゃん、半年もこんなアレな漫画を製本するために奔走していたの……？」

「ん？ 半年なんてすぐじゃない？」  
「……………」

そういえばこの姉、割と時間感覚がおかしい人だった。中学二年の時点でもう将来の構想を粗方の方針や妥協案まで含めてキツチリ決める結構アレな人だった。最近では龍門渚さん家のコネの影響で選択肢がやばいことになったみたいだけど。

死んだ目で目の前の本を一冊手に取る。パラパラとページを捲ると、絵もコマ割りも線もトーンも何もかもが読みやすく一新されていて、単にあの落書きを本にしたわけでもなさそうに更に困惑する。  
「……いや、これ本当に幾ら掛かったんだろう。」

「だいぶ格安でやってくれたから1ページ3000円くらいだね。今はまだ三冊しかないけど、稼げるようになったらレート上げて順次刊行していくつもり」

「それ安いのか!？」

しれつととんでもないこと言ったぞこの姉。一冊200ページ強はありそうなんだけどそれが三冊ってどっから200万円近くも捻り出してきたんだ。それよりも姉のこの漫画に懸ける謎の情熱は何なんだ。

「前世の業、かな……麻雀関係の漫画が何故か無くて悲しかったのもある」

「……………そう」

「そうだ。私スロットの目押しとかも出来るからそっちで稼ぐのもありかもしれない。最終的には十三冊揃えたところで終了かな」

「まあ、頑張ってるね……」

私も流石に全部は覚えてないしね、と訳の分からない発言をして、姉は私の部屋の本棚にその漫画を置いて去って行く。後日、実は私も割と気に入っていた姉考案の謎二人麻雀が、元々はこの闇深い漫画に使用するつもりだったルールだと知って、この上なくゲンナリする羽目になるのはまた別の話である。

☆☆☆

なんてことがあった翌日。その日は気分が最悪に近い状態だったので部活を休もうかと相当に悩んだものの、まだ指導の取っ掛かりも掴めてない状況で無駄な日を過ごして姉と顔を合わすと、全国大会への懸念が加速して更に体調を崩す気がしたので素直に参加する私。

幸いと言っているのか、最大の懸念であった人数の問題は期せずして解決したので、とりあえず現状私がするべきことは、とにかく自重せずに実力差を見せ付けることだろう。

「あ、ロンです。3900」

「……………はい」

嫌な予感がして仮聴のまま和了る。あくまで直感のようなものだが、麻雀における私の直感はその捨てる置いたものでもない。とはいえ

直感は直感でしかなく、実際には相手の意気込みに実力が追い付いていない場合、要するに警戒のし過ぎという場面が結構あったりするのだけど、それはまあ仕方ないというか、先んじて和了れている時点である程度妥協している。

「ツモ。1000・2000」

「むむう……」

しかしやっぱり、偶には姉のような便利な異能が欲しいと願ってしまふこともある。根拠の有る無しは判断にガッツリと影響を残し、仮に直感で姉と同じ選択が出来るにせよ不安というのは少なくともその勝負中には中々拭えるものでもない。

「ロン。7700」

「じえ!？」

故にこそ、先手必勝。相手が如何なる戦略を企んでいようと、先んじて封殺してしまえば多少は気が紛れていく。点差が嵩めば根拠の無い判断にも自信が生まれていく。気兼ねなく迷いなく、実力通りに相手を蹂躪できるようになる。

「嶺上開花。1000オールの本場は1100オール」

「嶺上開花のみって逆に凄いわね……」

これで私が半端者であればお粗末にも程があるが、幸いにも或いは不幸にも、私の麻雀に関する才能は他者と明らかに隔絶している。まるで息をするように和了れる。警戒するだけで何となく狙いが読める。特に意識するまでもなくプラマイゼロなんて曲芸も出来る。それを羨ましいなんて話も聞いたことはあるけれど、私からすればいずれにしても面倒なだけだ。

「ロン、二本場の親跳満、18600。これで終了ですね」

「くっ……」

麻雀をつまらないと思つたことはない。でも、それも私にこんな才能が備わっていたからだけなのかもしれない。何にせよ、納得できないという気持ちは私にも分かる。だからこそ、ひたすらに真面目で神経質な彼女が、このようなことを言い出すのは必然でもあった。

「ぜーったいにおかしいですー!」



いよいよ耐えられずに部室で叫んだ原村さんの言葉に、部室にいた全員が注目する。とはいえ私と同様に、彼女が入部した時点でいずれこうなるだろうというのは分かりきっていたので、代表して部長である竹井先輩が発言の意を問う。

「……何が言いたいのかは分かるけど、一応聞いておこうかしら」

「なら遠慮なく言わせて貰いますが、何ですかこの宮永さんの和了率は！ おかしいでしょう、2日間ずっと計100局は打って現状100%ですよ!? 一体どうなっているんですか!？」

「同感だじえ……こんなの仮に咲ちゃんがイカサマしてても不可能だじよ……」

「どうなっているのかしらね……」

「どうなつとるんじやろうなあ……」

「やつぱ色々とおかしいよなあ……」

「手加減は無用と、私は確かにそう聞いたはずなんです」

そして予想通り、一切反論する気のない全員に代わって当事者である私が口を出す。先に言っておくと、私の反論は嘘ではない。私はこの部に入るに当たって、主に部長を戦力にするために自重がある程度投げ捨てている。当然、その旨についてもきっちり了承を得ている。何なら勝負の直前にも原村さんから加減は要らないとはつきり言われたというのに、それで負けが込んだからと不満を漏らすのはどうなのか。

「いや、限度があるだろ。ほぼ初心者の俺ですら部長や原村相手に時々和了れるんだぞ？ なのに和了率100パーを維持できるのはお前が何か怪しい超能力でも使っていると考えた方がしっくり来る」

「……………」

それを使ってるのはむしろ優希ちゃんとか部長だといっそ暴露してやろうかとも思ったが、同時に全然使えていないという訳の分からない状態でもあるため、説明がややこしいことになりそうだから堪える。

ちなみに、もつと言えば京ちゃんも超能力を使ってる。何ならここにいる面子でおそらく京ちゃんがその超能力を一番能動的に使える。

使う機会がないだけで。

「母親が元プロであるとか、それっぽい理由ならいくらでも並べられますが、結局のところ本当に強い人はそんな肩書などに縛られないので、まあ私が突然変異みたいなものなのでしょうね」

「……愛さんって元プロだったのか？」

「うん。アイ・アークタンダーって。聞いたことない？」

「……悪い。分らん」

「私は何となく聞いたことがあるような……ってか思いっきり横文字だけど、宮永さんってハーフだったの？」

「いえ、母がハーフなので私はクォーターですね。と言っても、私も母が活躍していた時期のことを知っているわけではありませんが……まあ、基準はおかしくなりましたね。このレベルの麻雀が普通なんだ、と」

これは嘘ではない。実際、ウチの家族は最弱のお父さんですら当然のようにトップを取れるくらいには基準がおかしなことになっている。本人はその能力を賭け麻雀だの不純な目的にしか使う気が無いのが玉に瑕だが、今からでもプロに紛れ込めば男性最強プロとして君臨するのもかもしれない。あんまり想像したくないけど。

「調べたら結構出てきたじえ。20年くらい前に活躍したプロらしいじよ」

「かなり前じゃな……まあ活躍をきっかけに結婚しておんしを生んだのなら活躍時期はその辺りが妥当かのう」

「そうかそうか、なるほどな……ん？ いや、疑問には答えてくれないか？」

「……そうだね。まあ結論から言うと、そんな感じの超能力があるよこの世界」

「え？」

原村さんの絶望交じりの声が聞こえる。つい先日からずっと「そんな超能力なんてあるわけがない」と必死に主張していたのに、それがこうもあっさり否定されるのは辛いだろう。でもこれは事実なので慰めることも叶わない。加えて彼女が知らないだけで、アングラで

は割と普及しているのが中々に笑えるポイントである。

「あるのね……まあ、そうでもないと言明が付かないか」

「超能力、とまで行くとかなりレアですが——そうですね」

言いながら自動卓の中央にある開閉ボタンを押し、中にある二つのサイコロを取り出す。厳密には私のこれは能力というわけではないのだけど、あくまでそれが在るといふ証明だけならこれで十分だろう。

「何を——」

無言のまま賽を振る。出目は1と1のピンゾロ。それなりに珍しいが、確率としては17%前後。別段驚くことでもない——1度であれば。

「え——？」

賽を振る。2ゾロ。賽を振る。3ゾロ。賽を振る。4ゾロ。賽を振る。5ゾロ。賽を振る振る振る振る振る振る振る。最初は困惑していた原村さんも、6ゾロから再び1ゾロに戻った辺りで表情が消え失せ、2周をした頃には誰も何も言わなくなっていた。

「……とまあ、こんな人種が割と居るので、とりあえず部長には一刻も早く地獄から這い上がって、せめてこのレベルにまで到達して欲しいんです」

「いや無理でしょ」

即答される。知ってた。でも無理でもやるんですよ全国行くんですから。私がワンマンでやる方法だと少なくとも龍門渚には絶対に勝てないんですよ困ったことに。私一人で全部済むならそれはどれほど良かったことか。

「さ、咲ちゃんはこれがデフォルトなのか……？ それは強いはずだしえ……」

「ごめん、実は結構加減してる。麻雀は色々と確率が複雑だからもうちょっと頑張ってる」

「頑張っただうにかなるもんじゃないだろ……」

出来る。そして部長にはその素質がある。だからこそ、私は彼女に目を付けた。彼女が順当に成長すれば、よもや本当に全国制覇も夢で

はないほどに。……思ったより時間がかかりそうだから、部長を無視して彼女と同等かそれ以上の素質がある優希ちゃんを2年掛けてじっくり鍛え上げた方が姉や天江さんたちもいなくなるし楽だと思ってるのは内緒だ。

「……。……実際のところ、どうにかなるものなのか？」

「なるよ。この状態は、あまりに私にとって都合が良過ぎる。ならばこそ、この卓には多少なりとも私の意思が、麻雀というゲーム性を揺るがす身勝手な介入が施されている。だからこそ」

この現象には、明らかに人の意思が絡んでいる。つまりは逆説的に、それは人の意思一つで抗うことが出来る。その争いに力の多寡など関係がなく、むしろ無能力者であった方が運命に愛される。何故なら麻雀とは本来、誰にも平等でなければならぬからだ。

「……なら」

「……？」

「誰でも抗うことが出来るというならば、どうして私は和了れないのですか……？」

「……」

普段のハキハキしたそれとは真逆、消え入りそうな声で原村さんが問う。彼女は確か、自身をインターミドルのチャンピオンだと言っていた。ならば相応の自信もあつたのだろう。しかし現実にはこんな場末の、しかも人数さえ欠けていた麻雀部の一年生に手も足も出ないでいる。その苦悩は、私には計り知れない。

ため息を一つ。本当は部長のためにも自力で気づいて欲しかったけれど、ここで返答を誤ると原村さんが潰れかねない。それは私にとっても本意ではなく、故に私は断言する。

「……それは私のせいですね」

「えっ」

「誰でも抗える——そうは言っただけ、それは貴女が万全であればの話。相手の意思が不安要素であるならば、事前にそれを挫く方が私にとってはやり易い」

忘れてはならないのは、こんな私にとっても彼女らの意思は脅威で

あるということ。無自覚ならば、ではない。むしろ無自覚であればこそ、予想外のところで変な偶然オカルトが起きそうで恐ろしい。だったら、事前にその対策を施すのは、至極真つ当な結論であろう。

「自分が和了り易いよう場を整え、相手の可能性に最大限の蓋をし、更には圧倒して、和了れないかも」という不安を相手に植え付ける。全力とはつまりそういうこと。インチキなのはそう見せているから。実態としては、一度でも何かがズレて和了られてしまうと全てが崩壊する諸刃の剣」

「……………」

和了れないよう場を支配し、他者の干渉に抵抗し、恐怖で相手を拘束する。それが私の……いや、私たちオカルト使いの麻雀。それは私にとって常識でもあった。

また同時に、その常識は他者にとってはあまりに理不尽で、それを平気で押し付ける輩がこの世界には割と無視できないほどにはいる。だからこそ、その領域まで上がって来ると豪語するならば、せめて突破口くらいは自力で見つけて欲しかった、というのが本音である。

「その上で……………」

「っ——?!?!」

サイコロを卓の中央に戻し、自動卓の機能を使って山を張り直す。各々の配牌を勝手に振り分け、ついでに全力で卓に支配を掛けて運命を都合良く弄る。起家は私。配牌で聴牌。しかし天和には至らない。それはおそらく今の話を受けて、皆の心が多少なりとも持ち直したから、だと信じたい。

「リーチ」

「っ……………」

宮永 打牌

〔横五〕

意図が伝わらなければそれでもいい——そう思っていたのだけど、僅かな沈黙の後、下家に座る原村さんが配牌を開き山から牌をツモり長考。第一打で悩むのは彼女の癖だ。しかし最近は段々と思考時間が短くなっていたので、やはり彼女が和了れなかったのはそういう理

由なのだろう。

けれど、今の原村さんからはこれまでと異なる気配を感じる。なら、多分、ここで彼女が取る選択肢はきつと――

「――カン」

原村 手牌

〔四四四八八八東東東裏〕 明槓〔横五赤五五五〕

(……………)

親リーを相手に明槓。これまでの原村さんであれば、絶対に取ろうとしないだろう一手。更に言うなら、手牌の質は十二分。何れにしても引ける牌の数は変わらないのだ。ならばここで悪戯に振り込んだ際のリスクを上げる必要はない。だというのに、

原村 嶺上牌

〔八〕

「……………」

またもや長考する原村さん。これも二打目以降はほぼ即打ちする原村さんには相当に珍しい。それは即ち、それほど彼女にとって選択の悩ましい牌を引き込んだということ。

しかし、あれこれ考えたところで、今度は迷う理由もない。少しでも和了る可能性を高めるのなら、

「もう一つ、カンです」

「なっ……………!?!」

原村 嶺上牌

〔四〕

部長の驚愕が声色から伝わる。ここまで来れば原村さんにもこの卓の異常を悟ったのか、更なるカンはほぼノータイムで行われた。引き込んだ嶺上牌は東、加えて王牌には原村さんの和了牌が眠ってい

る。当然、その意図を察した原村さんの選択は、  
「カン」

原村 暗槓

〔裏東東裏〕

まるで運命に導かれるように、原村さんが自身の手牌を発声と共に  
ゆっくりと倒していく。四槓子単騎待ちの役満聴牌。大会ルールに  
合わせたこの卓のルールなら、ツモれば責任払いでこの私をトバして  
余りある火力。当然のこと、原村さんもその未来を夢想し、嶺上牌に  
手を伸ばして――

「ロン」

宮永 和了形

〔一九一九①⑨北西南発中中白〕 〔東〕

「槍槓、国士無双。48000」

まんまと罠に掛かった彼女に、用意しておいた一撃をぶつける。発  
想としては非常に良かったものの、残念ながら今の彼女では私の運命  
に抗うことは出来ない。それらしい言葉に踊らされて、この状況自体  
が私の罠だということに気付けなかった彼女の敗北である。

「……。……鬼じゃな、おんし」

「だからこそ、私一人じゃ不安なんですよ」

「いや、お前一人で十分だろ……」

「同感ね」

「だじえ」

失礼な。などとそんなやり取りをしている合間に、嶺上牌に手を伸  
ばした状態で固まっていた原村さんが、無言のまま立ち上がって扉の

方へと歩き出すと、

「いつか絶対に、絶対にそのオカルトを暴いて見せます……!!」

震える声でそう告げて、彼女はそのまま姿を消す。それから彼女が私にしつこく挑み続け、遂には私から和了りをもぎ取ることに成功するのは、その日から5日後の話である。



確かに何かを刻んだその日

べらり、とコピー用紙を捲る。慣れない作業。無心で行える学生議会のそれとは違う。自ら取り寄せた資料だというのに、既に眠気や疲労感といった身体の反応が込み上げてくる。

しかし、データに関して麻雀はまだマシな部類ではある。何せ個人のデータであれば大会全体を通してA4用紙1〜2枚程度で済む。これが囲碁や将棋であればどうか。あまり私も詳しくはないのだけど、それらの競技には共通してわざわざ専用の記録係が付いている辺り、麻雀で手一杯な私ではついていけないこと必至だろう。

けれど、これが如何に私にとつての苦手分野であっても、これは私のやるべきこと、やりたいことなのだ。それ以前に、これは唐突に見えてきた現実に対してそれまでの準備を怠っていたツケが回っただけ。時間は充分にあったのだ。であれば部活後のたかだか1時間程度の消費、甘んじて受け入れるべきだろう。

「……………」

一通り纏めた資料をひとまず雀卓に置き、疲労感を抑えて改めてパソコンに向き合う。この作業をわざわざ部室でやっているのは、やはり部室にパソコンが備え付けてあるのが大きい。無論、自宅や学生議会議室でも使えないことはないのだが、大つぴらに使えるか否かの差は集中力に多大な影響を及ぼす。特に自宅は未だ時々気の休まらない場面が訪れるので、自ら築き上げた城という安心感には勝らない。

「ふう……………」

それから10分ほどして、ふと誰もいない部室をぐるりと見渡す。2年前の埃まみれの空き部屋に比べると、気づけば随分とたくさんのものが増えていた。雀卓は壊れて倉庫に放置されてたモノを修理して、ベッドは保健室の廃棄予定のモノを拝借して、本棚は図書館の整理に伴い空きが出来て——と、軽く見渡すだけでさまざまな思い出が蘇る。

一人で大会に出る気力もなく、燻っていた2年間。しかしそこには確かな軌跡があった。それは人によつては無意味と断じられるものかもしれないけれど、それでも報われる日がやってきたのだ。ならば怠けてなんかいられない。

「全国大会、か……」

清澄高等学校麻雀部に所属する一年生の宮永咲は、およそ人間とは思えないレベルの異常な豪運の持ち主である。

正直なところ、如何にこの私とはいえ、可愛い後輩をいたずらに“異常”などと評したくない気持ちはあるのだが、その評価はただの客観的な事実として存在し、加えて当然ながら本人もそのことをきっちり自覚しているらしい。

とはいえ、それ自体は目を逸らす余地もないほどあからさまなのでいいとして、問題は彼女がその豪運を、ただ自覚しているというだけに留まらず、麻雀という競技で存分に活用していることにある。

通常、麻雀という競技は熟練者であつても半荘一回で一度も和了れないなんてことがザラにある競技だ。どんなに牌効率を勉強しても、どれほど期待値が高い選択でも、実戦では確率なんて息を吸うように裏切つて来る。運が向く、ツキが回るなんて言葉があるように、基本的に運とは自然に任せるもの。なのにその指向性が云々と平然と語る彼女は神か悪魔かはたまた別のナニカなのか。何にせよ、実は私とは根幹からして違う生き物だと言われた方がしっくりくる。

『私よりも強い打ち手は、残念ながら全国各地にゴロゴロと——』

それはつい先日宮永さんから言われた言葉。全国には彼女と同じステージに立つヒトが無視できない程度にはいる、と。否、全国だけじゃない。宮永さん自身が証明しているように、今も市井には彼女と同等以上の力を持つ誰かが転がっているかもしれない。それを踏まえると、今の私には何もかもが足りていない。何より、

（龍門瀬高校……）

決して目を逸らしていたわけじゃない。長野県に所属する我ら清澄高校が全国に行くということは、下手をすると全国優勝よりも厳しいハードルを潜り抜ける必要がある。

龍門渕高校。昨年度インターハイにおいて団体全国2位の実績を誇る、つまりは現状全国で2番目に強い高校。更に言うなら、龍門渕は初出場で上記の成績を残しており、メンバーの大半が1年生というのもあって当時の面子もそのまま残されているため、今では当時のレギュラーがほぼ引退した千里山高校よりもずっとずっと脅威かもしれない。

加えて、龍門渕高校は高校生における和、つまりはインターハイチャンピオンを有している。そう表現すると大したことのないように思えるかもしれないが、要するに咲と同じステージに立つ怪物たちの頂点、人外魔境の制覇者だ。咲にすら3人がかりで100万点のハンデがあつて手も足も出ない現状、それと同等かそれ以上の…いや、咲の半分以下の実力であつたとして、それでも私たちでは惨敗する未来が見える。

「チャンピオンである天江衣は当時一年生…十中八九、咲の同類よね」

「そうですね」

「ひあつ!？」

びっくりしてソファから飛び上がる。反動で手に持っていた資料が散らばるが、そんなの気にしていられない。別に見られて困ることをしていたわけでもないのだが、それでも集中している姿を見られるのは存外に恥ずかしいものだ。

「み、宮永さん。帰ったんじゃないの？」

「図書館で本を借りたので置きにきました。本棚を半ば私物化してしまつて申し訳ありません」

「い、いえ。それはいくらでも使つてくれて構わないのだけど——つて」

待った。今さつき宮永さん、まるで天江衣を知ってるかの如き発言をしなかっただろうか。そんな疑問を抱いた私が彼女にその旨を尋ねると、

「ええ。衣さんは姉の友人です。片手で数えられる程度ですが、私も対戦経験があります」

「姉?……そういえば、まさか先鋒の宮永つて——」

「……逆に知らなかったんですか? もうとつくにご存知かと思つていました」

それを言われると痛い。まあ確かに姉がいることを隠す理由も無し、少し調べれば分かりそうなものだったが、いや、そこは今重要じゃない。それよりも——

「お察しの通り、姉と衣さんは私と同格の存在。特に姉——宮永照は、私をしても確実なことは何一つとして言えない。」

あの人は、きつと誰が相手だろうと当然のように勝つ。そして同時に、きつと誰に対しても当然のように負ける。だからこそ強いんです」

「??」

「ああ……いえ、そこは理解する必要はないですね。幸いなことに、実力そのものはどちらに対しても多分私のが上です。ただ、あの人も私に手番を回せばほぼ終わりなのが分かっているはずなので、その辺りをどうするべきか……」

「……………」

頓智のような発言に戸惑うも、続けて紡がれた空恐ろしい言葉に返す言葉を見失う。彼女が底知れない存在だとは常々思つてはいたのだが、インハイチャンプとそれを有する高校の先鋒を相手に、何ら気負いすることなく「自分の方が上だ」などと言える人間がどれほどいるだろうか。それはあまりに頼もしい発言。頼もしい、頼もしい……が、漫然とした不安が込み上げる。それは、きつと。

(……………)

きつと、私が彼女に頼り切りだったとしても、この先の結果は何も変わらない。勝つにせよ、負けるにせよ、私がどれほど死力を振り絞ったところで、それはその分彼女が楽になる程度。逆に私が怠惰を極めようと、彼女がほんの少し気合を入れるだけで私の存在など軽くカバー出来てしまう。きつとおそらく、彼女はそういった人間だ。

しかし、しかしだ。だからと言って、そこで腐つて立ち止まるのはあり得ない。元より私は、大会そのものの結果に対して称号以上の価

値を求めている。いや、そもそも理屈なんかでは語ることも出来ない。

何故、私が全国大会に拘るのか。それは一言で言ってしまうと憧憬、あるいは後悔によるもの。家庭の事情で手放さざるを得なかった切符を、当時のまま、理屈ではなく、ただ欲しいからと、子どものように追い求めているだけなのだから。

だからこそ私は、私の我儘で築き上げたこの麻雀部の部長として、決して後輩におんぶに抱っこではいられない——そう私が決意を新たにしている、まるで計ったようなタイミングで彼女は告げる。

「……やはり、この手しかありませんね」

「？」

「5万……いえ、10万点。どうかして私が入意します。部長はそれを、あのインターハイチャンピオンを相手に、如何なる手段を用いても守り通してください」

「え？」

10万点。それはインターハイ団体戦における初期点数に相当する。それを用意するということはつまり、半荘2回で誰か一人をトバせるだけの点棒を稼ぐということ。それ自体に驚きはない。むしろ宮永さんにしては謙虚だと思っただけに。しかし、

「あるいは私を次鋒辺りにして他をトバす……いや、そんなの後が続かないしそれこそお姉ちゃんがなりふり構わずアレ使って来そうだし伏兵の存在も考慮しないと……うーん」

「……………」

一欠片の邪気さえ混じる余地もない真剣な表情で、ぶつぶつと不安そうに荒唐無稽な算段を立てる宮永さん。いつそ真正面から「役立たず」とでも罵られた方がマシかも知れない寂寥感が全身に漂う。

もはや疑うべくもなく、宮永さんの発言に一切の嘘はない。それはつまり、宮永さんの見立てでは、10万点なんて冗談のような点差があつてようやく、いや、それですらまるで相手にならないくらい私と彼女らには格差がある。

どうしようもなく懂れた。ただひたすらに焦がれていた。けれど

私は、それがこんなにも高い壁だと思っていたのだろうか。どこかで悔つてはいなかったか。中学時代に善戦したからと、よもや私が本気を出せば、ただそれだけで良い勝負になるなどと自惚れてはいなかったか？

(やつぱり、私じゃ……)

押し寄せる絶望感に頭がくらくらする。主観的にも客観的にも、本能も理性もありとあらゆるものが無謀だ蛮勇だと訴えかける。

かの有名なバスケット漫画の台詞が頭に過ぎる。あの漫画と私とは競技も状況も何もかもが異なるが、心情的には似通っている。要は実力が足りなくて嘆いているだけだ。私に宮永さんほどの力があればそう嘆くことはなかっただろう。

(……)

未だに頭を抱えてうんうん唸る宮永さんを見る。冗談みたいな実力を有す彼女が、冗談みたいな戦略を立てながら、冗談みたいな敵の前に唸っている。まさに喜劇だ。私はその当事者だという冗談みたいな事実が無ければ、もうきつと何もかもを投げ捨てていたことだろう。

「……………」

「……………」

ふと気づくと、いつのまにかそんな私を宮永さんが無言で見つめている。そして先の思考が表情に出ていたのか、あるいは彼女の超人的な洞察力に抛るモノなのか、彼女はある意味で私の不安を全て吹き飛ばすトンデモない発言をする。

「私が敵に回ると、どっちがマシだと思えます？」

「は——？」

彼女が、宮永咲が、敵に回る——？

ぐるぐるしていた思考が完全に停止する。そして同時に、それが自分にあり得た未来なのだというのを改めて実感する。

以前、彼女がこの学校に入学した理由について聞いてみたことがある。それは非常にくだらないというべきか、ぶっちゃけ場所や条件さえ同じならこの学校である意味がないくらい大雑把なもので、しかも

麻雀に一切関係がない結構アレな内容だった。

無論、この学校で入学時点では存在すら定かではない麻雀部を求めていたというのは逆におかしな話。加えて私の心象はどうあれ彼女の理由はそれはもう無理やりにも納得せざるを得ないものであり、ある意味では麻雀や家庭の事情に青春を捧げた私よりよほど人間として正しい。

まあ正直なところ、そんな彼女に手も足も出ない現状は中々にクルものがあつたりなかつたりするのだが、なまじ私には納得はしても理解はできない理由だったためにそれ以上の思考を放棄していた。しかし、

(——無理)

結論は一瞬で出た。この一週間で、骨の髄まで身に染みていた。この下手をすると一生懸けても敵わないかもしれない彼女と敵対する。しかも半年やそこらで対応しなくてはならない。……不可能なんてレベルではない。想像しただけで吐き気を催してくる。でも、本来ならばむしろそれが当然だったはずなのだ。

故に、それと比較するならば、確かに今の状況は天国に近い。何せ、目下一番の脅威である宮永さんが味方にいる。加えて彼女と同格らしい脅威も彼女が率先して抑えるつもりでいる。更にはどうにか勝負になるレベルまで舞台を整えることにさえ尽力する。これが果たして幸運でなくて何だというのか。

「……安心してください。人間とは慣れる生き物です。こんな私ですから、最初のうちはルールも役も点数もスジもオカルトも、何もかもが分からずにボコボコにされていました」

無言でいる私をどう受け取ったのか、普段よりは幾分か柔らかかな声色で宮永さんは語り出す。ちなみに彼女の名誉のために補足すると、彼女がこういった冷たい声を出すのは麻雀やそれに関すること限定で、読書中や須賀くんと一緒にいる時はだいぶキャラが違うことを付け加えておく。

「だからきつと焦る必要はありません。まずはルールを覚えるように。次いで役を把握するように。一つ一つ符点を数えるように。河

を見るようになったあの日のように。人の顔を窺ったその時のように。運命を糸で繰るように。徐々に、徐々にとハードルを上げて蹴り寄って行けば、いずれは部長もこちら側に立てるはずです。他でもないあの姉がそうでしたから」

「そのお姉さんもかなり例外な気がするけれど……ちなみにだけど、そのお姉さんの家でのトップ率は？」

「……………1割強、でしょうか。基本毎回2位に居座ってるので平均着順は高いですね」

「……貴女は？」

「7割くらい……………」

「ええ……………」

「なんですかその反応は」

いや、だって。いくら元とはいえプロやそれと互角に闘える2人を相手にしてトップ率7割って。逆にどうして困惑されないと思ってるのかそれが分からない。

「貴女の基準は高すぎて不安になるわ……………」

「ですが実際、成果はそれなりに出ているはずですよ？」

「そうなの？」

「ええ。部長らには気づかれないよう徐々に出力を上げていたので……多分今の部長なら、入部当時の私を相手に生き残るくらいできるはずです」

「そんなことをしていたのね……………まるで実感が湧かないのだけど」

しかもそれでも“生き残る”程度なのか。いやまあ一度も和了れずにボコボコにされた身としてはそれでも大躍進なのだけど、そもそも出力云々と言われても彼女のような超能力を持たない私では何一つ理解できない。

そう告げると、宮永さんはちよつと悩んだ様子で、

「うーん。これはちよつと証明が難しいですね。仮に今から当時の私を再現したところで、ただ単に私が手を抜いているだけと言われたら終わりですし。」

そうですね……………今の部長が敵わないくらいがいい感じの実力者で、



部長の強さを以前から知っていて、それでいて決して甘い評価はしない、中立の立場にいる外部の人間なんかがいたら話は早いのですが……」

「……………一人、心当たりがあるわ」

「え？ ……言い出しておいて何ですが、そんな都合の良い知り合いがいるんですか？」

「私も、伊達にこの学校のトップじゃないってことよ」

折れそうな心を奮い立たせるために、敢えて気丈に返答する。実のところ、このツテも元はと言えばまこの実家のもので、私が動いた結果というわけではないのだが——何にせよ、きっかけはどうあれ、その人と個人的な連絡が取れるほど親睦を深めたのは私の功績だと、無理にでもそう思うことで様々な感情を飲み込む私だった。

☆☆☆

藤田靖子は戦慄していた。

実家の近くに佇む小洒落たお気に入りの雀荘。そこに住む一人娘の先輩というやや回りくどい経緯で知り合った知人こと竹井久。知り合って早々にウマがあつたのか気安い関係となり連絡先も交換し、以来時たま連絡を取り合っては共通の趣味である麻雀を打つという……まあ多少の年の差はあれど、対等の友人という立場で接してきた。

そんなある日のこと、久から突然のヘルプを受ける。最近はこちらの入学式だのこちらの入社式だったのでしばらく顔を合わせていなかったの、連絡が来ること自体はそう不思議でもないのだが、私に助力を願うとなると話が変わってくる。

今更言うまでもないことだが、私は実業団チームに所属し麻雀に

よって金を稼ぐ立場にある。まあ友人に多少プライベートで頼られたくらいで咎めるつもりはないのだが、ある程度の線引きはしてもらわないと困る。特に久はそういった金銭に関わりそうなことはキチンとしている印象があったため、尚更今回の依頼の内容に戸惑ってしまう。

(久を含め、部活のメンバー全員と戦って欲しい……ね)

必要なら金銭を払うとまで言われた。家庭の事情で動かせる金も少ないだろう友人にそうまで求められたら如何に私といえども動かざるを得ない。単純に久しく顔を合わせていない友人に会いたいという気持ちもある。何にせよ、今回の件は互いの思惑が上手いこと一致し、次の週末に「Roof-Top」の店内で待ち合わせをすることになった——そこまでは良かったのだが、

「ツモ、嶺上開花。倍満、4000・8000」

宮永 和了形

②②④⑤⑥西西 ② 暗槓 裏⑨⑨裏 裏中中裏

(何だ、この化け物は——)

久の後輩として紹介された少女、宮永咲。紹介の時に『全力で打ち倒しても構わない』と言われた時点で警戒はしていたつもりだったが——これが常軌を逸していた。

息を吸うように和了られる。当然のように思考を見透かす。7、8巡で和了るのはまだ遅い方で、持ち前の豪運でこちらがロクに手牌も整っていない段階から容赦なく圧を掛けてくる。それも嶺上開花による責任払いなんて曲芸も添えられてだ。

槓子ができる確率だけでも相当におかしいが、それを言い始めたら彼女は何かもおかしい。まだまだ若輩とはいえプロとして幾多の強敵との対戦経験を踏んだ私が、それでも明確に彼女より上だと断言できる存在が誰一人として思い浮かばない。

無論、とりあえず思い浮かんだ強敵の一人と実際に彼女を戦わせてみたら、案外あっさりと彼女は敗北するかもしれない。しかしそれとも、あくまで私の勝手な推測でしかない。

現状、彼女について分かることといえば、少なくとも彼女が私を圧倒できる実力者であるという一点のみ。流れで久から細かい話も聞かずに彼女と対戦に臨むこととなった私だが、おそらく久の案件も彼女に関連することだろう。

南4局 藤田 配牌

〔①23赤5689②中中中白白〕

(さて……)

どうにかして迎えたオーラス。配牌は上々だが、もはやそれに意味があるのかどうか。仮にもプロとして一矢報いたい気持ちはあるが、見苦しいと言われたら否定できない。とはいえ諦めるなんて選択は端からありえない。それは私のスタンスとしても、心情的にもだ。

「……………」

……………

……………

……………

5巡目 藤田 手牌

〔234赤56899中中中白白〕

「リーチ」

(早い……！)

手牌は上々、かつオーラスという絶好の機会。しかしその上で先んじて仕掛けられる。否、それでも遅れているのかもしれない。それさえもロクに判別できないほどに、この少女は底知れない。

不意に、かつて対峙した小鍛冶プロの姿が少女とダブる。果たして少女は、彼女と一体どちらが強いのか。そしてそれは、私如きが抗えるものなのだろうか。

「わしもリーチだ」

「は……？」

そのタイミングで、完全に予想外の発声が対面から聞こえる。たまたまこの不幸な卓に座ってしまっただけの山崎と名乗った初老の男性。当然のこと、麻雀とは4人で行う競技である以上、私が誰に注目していてもそれ以外の人物が和了ることは充分に考えられる。だが、今になって——？

「なら、俺もリーチだ！」

「……!？」

更なるリーチ宣言。何が、何が——起きているのか。それまで彼女に手も足も出なかった面子が、ここに来て唐突に続けざまに聴牌をする。偶然にしても不自然極まりない。

「……………」

5巡目 藤田 ツモ

〔7〕

(こ、これは……)

ぴったりと嵌まる。1—4—7の三面張。あるいは9索と白のシャボ待ちの聴牌。河には2枚切れと3枚切れの5索、8索がそれぞれ。どちらを切っても聴牌までは問題なく繋げられるはずだ。しかし。

(四家立直は……ここでは採用されてはいないはずだが……)

四家立直。卓上にいる4人全員がリーチを掛けると流局するといろーカルルール。ローカルルールであるが故にこの雀荘では採用されていないが、こう都合良く条件が揃うなど、何か恣意的なモノを感じる。

(流局……)

流せと、そう言っているのか。それはきつと、おそらくはあの少女が。そのまま大人しくするべきだと。それ以上傷を広げる必要はないのだと。そう訴えてるとでも言うつもりか。

(……………)

「——リーチだ」

藤田 打牌

{横9}

迷いはなかった。葛藤はあつたが、行動に移す前には消え去った。嫌な予感がする。それはそうだ。しかし、だからと逃げるのは許されない。最初から決めていた。たとえそれが無意味だからと、諦めることは許されないと。逃げない。逃がさない。逃してたまるものか。お前が如何なる化け物であろうとも、だからこそ私はいつまでも最後まで、常にお前たちを狙い続ける。

「……………」

宮永 手牌

{77北北北西西東東南南南}

「……………お見事です」

「え？」

小さく何かを呟いた少女は、自身のツモと同時に手牌を全て前方に伏せると、そのままツモった牌を河にゆつくりと捨てる。捨てられた牌は1索、それは私の和了り牌。しかし思考が追い付かず、宣言がないと判断した山崎さんが山に手を伸ばそうとしたところで、私は慌てて自らの手牌を倒す。

「ロン、リーチ1発。一通、中、混一色。赤1……………裏6。数え役満、32000」

半荘終了

宮永	63800
山崎	400
井口	1900
藤田	33900

それはきつと、無意味な一撃だ。ルールによつては、トップを決める和了りということと和了さえ認められないような愚手だ。しかしそれは、確かにその卓に「何か」を残した和了りだった。だからこそ、少女もその攻撃を甘んじて受け入れたのだろう。

「……やはり、捨てたものじゃありませんね」

少女が呟く。その発言の真意は分からない。だが、口元には僅かな笑みが浮かんでいる。ならばおそらく、その感情はそう悪いものではないのだろう。

久が彼女に注目する理由。言うまでもない。彼女が大会に出場するつもりなら、その大会は荒れに荒れる。彼女が順当に暴れるにせよ、あるいは対抗馬が現れるにせよ、それはそれは愉快なことになるはずだ。

それが楽しみでもあり、不安でもあり——何にせよ、彼女が次の大会において特大の台風になろうことは、もはや運命であるかのように感じられた。

## きつと何か芽生えたあの日

「親睦会をするじよー！」

優希がいつものように無い胸を張りながら雀卓の椅子の上で裸足になって立ち上がって何かよく分からないことを叫んでいた。

「はしたないですよ、ゆーき」

色々とツツコミどころ満載の咆哮。それに率先して答えるのは、親友である私の役目。内容については改めて問うのでもいいとして、まずは優先して正すべきところを指摘する。

如何に唯一の男性がパソコンの方へ向いていようと、今の言葉で部員全員の注目を集めてしまっている。無論、須賀くんがそういう邪な視線を優希に向けると思っっているわけではないのだが、今後も彼女が彼女の言うレデイに成長するつもりであれば、その辺りのリテラシーはきつちりとするべきだろう。

特にウチの制服はスカートの丈が比較的短く、あんまり高いところで派手に動き回ると下着が見えてしまう。その旨をなるべくやんわりと告げると優希は「そんなことより！」とそれを強引に流し、

「来る日も来る日も特訓特訓と！ とにかく部室の空気が重いんだじよー！ ぶちよーは今回の大会がラストチャンスとはいえ、まだまだ4月も半ば！ そう焦るような時期じゃないはずだじえー！」

「う……………」

(ふむ……………)

自分本位ではあるものの、確かに筋の通った発言に、部長が「痛いところを突かれた」と怯むような仕草を見せる。まだまだ慌てるような時期ではない。その主張は分かる。とはいえ部長が焦る気持ちも理解できる。どちらの視点に立ち、どう返答をするべきか悩んだその僅かな時間に、

「なるほど。それはいい考えかも……………」

「えー!」

この場の誰よりも個人技を突き詰めたような人が真つ先に賛同したので戸惑う。それ以前に部長を意欲的に鍛え上げているのは宮永さんのはずなのに、まさかこんな完全なる寄り道に肯定的な意志を示すとは思わなかった。

部長も同様のことを思ったのか、なんとも言えない微妙に引き攣つた表情になると、それを受けた宮永さんはいつだったか須賀くんが風邪で休んだ日の時のようなどこか不機嫌な様子で、

「何ですか。私だってやりたくてスパルタやってるんじゃないですよ。部長がお姉ちゃんくらい強かったら特訓なんていらんんですよ」

「……そういえば以前から疑問だったんじゃないが、お主らの特訓って一体何をやっちゃよるんじゃないや？　時々二人で部室に残っちゃよるのを知つとるが」

「謎のルールで二人麻雀をやっているわ……じゃなくて。だ、大丈夫なのかしら？」

どこか不安気に呟く部長。現状が部長の我儘に近い状態であるが故に罪悪感を抱いているのだろう。事実、宮永さんの高過ぎるハードルに部長の実力が適うなら、基本的に須賀くんを優先する彼女が彼を置いて居残つてまで特訓を行う必要は無いはずである。

「実のところ、麻雀の実力が急激に伸びるなんて普通はあり得ません」  
「……まあ、そうね」

「いえ、正確には方法はあるのですが、部長はもうその段階をとつくに通り過ぎています」

「通り過ぎる？」

そう言いつつ、宮永さんはちらりと須賀くんの方を見る。彼はこの部活で唯一の初心者で、実力的には南場の優希にも劣るくらいの力しか持たない。しかし、それ故に。

「ルールを覚える。役を覚える。牌効率を覚える。河の見方を覚える。人の表情を覚える。いわゆる初心者から中級者、中級者から上級者になるための方法……ブレイクスルーはいくつか存在します。しかし部長は既にそれがある程度習得し、後は経験を重ねて地道に磨く



のみ。そうなるともう、一気に強くなるというのは現実的な手法では  
なくります」

「ふむ……」

顎に手を当てる部長と同様に、内心でなるほど頷く。確かに須賀  
くんは初心者ではあったが、だからこそ本格的に麻雀をやるようにな  
ってからの成長は著しい。役を覚えた。牌効率の計算も早くなっ  
た。河の見方はまだまだこれからだが、その2つを磨くうちに彼もや  
がては中級者と呼べる一端の実力者となるだろう。それはまさしく  
入部当初からすると雲泥の差であると言える。

しかしながら、部長は現時点でも私が唸るほどの実力者。先の基準  
で言うなら上級者に当たる。そうなるかと最早初心者のようなブレイ  
クスルーは見込めず、既に所有している技能を磨く他に実力を向上さ  
せる手段は無いに等しい。

「なので、麻雀以外の要素で麻雀の実力を底上げするというのは、実は  
結構有用なんです」

「????」

(:?????)

だからこそ、当然のように突飛な発言をする宮永さんに戸惑う。な  
まじ真剣に言っているのが伝わってくるだけに更に困惑する。麻雀  
の実力を麻雀以外で底上げ……哲学だろうか。あるいはパズルなど  
で頭の回転を高める？ しかしそれでは優希の親睦会とは結び付か  
ない。一体どういう意図の発言なのか。

「現状、私が部長に明確に負けている……いえ、おそらくは他の参加者  
の大半よりも遥かに劣っている要素が一つあります」

「……劣る？」

貴女が誰かに劣っている要素なんてあるのか。そんな猜疑的な視  
線を部長が向ける。だが、続けて紡がれた彼女の言葉は、確かに他の  
参加者の誰よりも、ある意味で宮永さんが劣っていると呼べるもの  
だった。

「モチベーションですよ。まあ、部活に入った経緯からして成り行き  
です……」

モチベーション。物事を成し遂げるための動機、目的。それが欠けていると、ともすれば致命傷になりかねないと彼女は言う。

「麻雀が精神的なものに影響を受けるのはもうご存じだとは思いますが——」

いえ、全然ご存じではないのですが。

「それに伴って、『連帯感』というのは結構大切ですよ。ああなりたい、置いていかれたくない気持ちは、おそらく思ってる以上に原動力となり得ます。部活動などのコミュニティで、不思議と強さの差が出難い理由の一つでもありますね」

「……」

思い当たる節はある。初心者である須賀くんや何もかもがおかしい宮永さんが例外なだけで、確かに私達も特訓でメキメキ力を上げている部長に引き摺られて強くなっている自覚があるからだ。そして、その2人を除く4人で打った場合、不思議と回数を重ねることに着順がバラけてくる。尤も、麻雀にそういうものがあるのかどうかは疑問が残るため、単に確率の偏りなのかもしれないが。

「去年の記録を見る限り、おそらくあの姉も衣さんも、それを理由に団体戦優勝を逃しています。私自身、相手の実力が劣っていても、なまじ無駄に強いからこそ勝利への執着が薄いので、土壇場で気押されて勝ちを譲ってしまう可能性は否定できません」

「そこはどうか頑張っただけのだけ……」

「仕方ないじゃないですか！ 私は部長以外の動機とかないんですよ！ 麻雀に興味以上の感情を持っていないんですよ！ 何なら部長が諦めたらそこで試合終了ですよ!?!」

「それは本当に嬉しいんですけど、期待が重いわ……」

「とにかく！」

優希が吠える。それは自身の主張を通したいが為か、あるいはどんな表情が沈んでいく部長を気遣ってのものなのか。彼女の場合はどちらもあり得そうなのが面白いところだが、いずれにせよ、優希にとっては最大の障害でもあったはずの宮永さんが乗り気であるために、彼女はここぞとばかりに告げる。

「古来より連帯感を深めるは親睦会……！ だから私は提案するじよ！……」

「タコスパーティーを開く、とかでなければ私も参加しますよ」

「……………。……………。……………。勿論だじえ！ 色々考えて来たから問題ないじよー！」

「だいぶ悩んだのう……………」

彼女の言いそうなことを先んじて制すると、案の定悩みに悩んだ末に代案を捻り出す優希。ただ「色々考えて来た」という発言に否は無く、トランプ、すごろく、UNOにその他どこから持ってきたのか疑問視するような様々なボードゲームを取り出し、淀みなく次々と遊びを提案していく。しかし――

「やはり咲の豪運はネックじゃね。媒体を変えても賽を代行しても、結局狙った目が出せるんならゲーム性が崩壊してしまう」

「そういえばお前、マークシートだと途端に成績上がったよな……………もしかしてだが」

「真剣に考えた問題が間違っていて、自信無くて適当に塗り潰した問題が正確だった時のやるせなさはなんとも言えないよね。むしろマークシートだと苦手な教科の方が点数良くなるんだ……………」

「難儀ね……………むしろ割り切って全部勘に任せるとかどうかしら？」

「残念ながら部長。運とは波があるもので、それ自体はどう足掻いても人には変えられません。私はその波をある程度弄ったりできるが故の豪運なのですが、流石にそのレベルで運命を歪めようとする直ぐにキャパオーバーして決壊します」

「具体的にはどうなるんじや？」

「……………おそらく、保って二教科目の半ば辺りが限界。以降の選択問題は全問不正解。更にそれから一週間ほど運勢が最悪の状態になると思われます」

(……………)

これまた色々とツツコミどころ満載ではあるが、何よりもまず妙に具体的な未来予想図なのが気になる。まさかと思うが試したことがあるのだろうか。そして波とやらを弄っている自覚があるのならそ

れを逆に平穩にしたりは出来ないのだろうか。

ともあれ、そこからはあれこれと話し合いを続け、そんな中ふと染谷先輩が、先の私の発言について言及する。

「もうタコスパーティーでも構わん気がするのう。和はどうして駄目なんじゃ？」

「それがお茶菓子であつたりそうでなくても手元で個人的に食べる分には構いませんが、旧校舎の片隅とはいえ仮にも学び舎で大っぴらに食材を広げるのは主義に反します」

「あー、なんか分かるかも。私は同感かな」

「私はどちらでもって感じね。尤も私の場合、学生議会議長の伝手で事前に許可なり取るだろうけど」

「なるほど。そういう理由なら俺も原村に賛成だな」

「ぐぬぬ……」

思った以上に賛同が得られず優希が唸る。そもそも彼女は気軽にタコスパーティーと言っているが、どういう趣旨の催しをするつもりだったのか。確かに清澄高校の学食はタコスが常設されているため、そこからタコスを仕入れるのは容易なもの、それを購入して食べるだけでは間食と何も変わらず芸が無さ過ぎる。タコスパーティーを謳うからにはそれこそタコスを自作できる環境を整えるくらいはして欲しいところである。

しかし、その様子を見た染谷先輩は、ならばと一つの提案をする。

「要は場所が問題なんじゃな？ それなら前も来たウチの雀荘のスペースを借りるのはどうじゃろうか？ 他のお客さんもいるのがネックじゃが、雀卓一つとその片隅のテーブルでも借りれば、それっぽい雰囲気は出せるじゃろうて」

「それだー！」

ずびしつ、と水を得た魚のように染谷先輩を指差す優希。この際敬語じゃないのはいいとして、人を指差すのは非常に失礼なのでやめなさい。

「……タコスに必要なのはトルティヤって皮に挽肉の炒め物、メヒカーナって野菜ソース。他は好みの具をお好きに感じて。その

3つさえそれなりの量用意できれば後は持ち寄りでもいけそうだな」  
「それならウチに常備してあるじえ！ 他にもタコスソースとかワカモレなんかもたくさんあるじよ！」

「聞きなれない食材がいくつも出てきたけど、必需品については優希に任せましょうか。それより流れでタコスパーティーになりそうだけど、宮永さんと和はそれでいいの？」

問題が改善されたのなら、私からは反対する理由も他にないので素直に頷く。元より親睦会そのものには乗り気だった宮永さんにも否は無く、また同時に、突発的であるが故にそうそうトラブルなんて起きようはずもなく、親睦会という名目のタコスパーティーは恙なく実施される。

「今宵の私は、人間火力発電所だじえ……！」

そして案の定親睦会など建前で、その場の材料を食べ尽くしそのような勢いでタコスに夢中な優希にやや呆れる。仮にも親睦を深める目的の会なのに。でも、そこで空気を読まないでこそ彼女らしいとも言える。何にせよ、ある意味では予想していた展開ではある。

まあ、いつまでも優希の事ばかり気にしても仕方ないと私も彼女に倣い皿を手に取り、ふと思う。

(そういえば、自分で作るのは初めてですね……)

私も伊達に優希の親友を名乗っているわけじゃない。彼女に勧められてという形ではあるものの、タコスそのものはそれなり以上に嗜んでいる。

しかしながら、それは当然学食や売店で売られているものに限って、自身が作ることはおろか材料についてもロクに理解していない。とりあえず皮を半月状に折ってホットドッグのようにしてレタスを敷き詰めてみるも、中央に偏ったり端からこぼれ落ちそうになったりと悪戦苦闘。どうにかそれっぽく仕上げたものの、形が歪で非常に持ち辛い。

一口食べる。……味が以前食べたものとはだいぶ違う。何というかタコス独特の風味が無いというか、ぶつちやけあまり美味しくない。見ればメヒカーナという野菜ソースをかけ忘れていた。後で聞

いた話だが、このソースがメキシコ料理特有の風味を生み出すようなので、それは味気無く感じるはずである。

そんな無駄な戦いを繰り広げていると、すっかり放置された自動車に座っている部長と宮永さんが、私同様手作り感溢れるタコスを手手に会話しているのが聴こえてくる。

「ホントに、こんな悠長にしているのかしら……」

「いいんですよ。現状、私も部長も動機がふわつとしていますからね。動機付けと考えたら悪くない一日です」

ぐったりして今にも崩れ落ちそうな部長の声と、それをぎつくばらんに切り捨てる宮永さん。一応は部活の先輩と後輩という構図の筈なのに、事実上師弟関係のようなものだからか、こうしていると立場が逆転して見える。

「でも、今は少しでも練習しておかないと……」

「それはそうですが、今はきつとそうではありませんよ。おそろく」

ちぐはぐな関係の二人。だが、それ故にだろう。彼女らは距離感があるように見えて不思議と会話は気安く、特に部長は宮永さんの前ではよくこうして弱音を零しているのを見かける。きつと学生議会議長としての部長を知る者はこの光景に困惑するだろう。けれど私には、その姿こそが部長の本質であるように感じてならない。

「きつと」とか「おそろく」とか、随分と曖昧なのね」

「やりたいこと」に対する動機なんてそれで大丈夫ですよ。そこをギチギチにしてもただ疲れるだけです。聞いたことはありませんか？好きなことを仕事にすると続かないという話を」

「……そうかもね」

「それに今更崇高な理由を考えたところで、ウチが素人交じりの寄せ集めである事実には変わりません。その上で意識までバラバラでは、本当に烏合の衆以下の何かにはなりませんからね」

「……………」

(……………)

厳しい言葉に優しい声。相反する感情が綺麗に練られた音が雀荘の片隅に木霊する。それはきつと曖昧な言葉。けれど不思議な説得

力がある。それが真理であるか否かという話ではなく、敢えて彼女は  
その先をボカして語る。

「きつと、これから夏までに行われる方の半荘よりも、こういった他愛  
の無い一日の積み重ねの方が、より一層貴女の力を高めてくれるはず  
です。そうでなくても——」

そこで宮永さんは一度言葉を区切ると、部長に小さく何かしらを呟  
いて席を外す。最後に何を呟いたのか、何を理由に席を外したのか。  
直接会話していなかった私には分からない。けれどそれ以前に、思っ  
た以上に彼女の言葉に耳を傾けていた自分に気づく。

(理由をギチギチにしても疲れるだけ……)

大会に出場するからには何としても勝ちたいし、断じて負けてもい  
いと思っっているわけではない。でも、そういう考え方があるのだと  
知った。そういう考え方があること自体が目から鱗だった。

いや、あるいは。だからこそ彼女は強いのかもかもしれない。こと麻雀  
に関しては、強さについて環境などの要因は必要ない。彼女にとって  
麻雀とは単なる一趣味でしかなく、それを特に気負うこともない。故  
にブレない。揺らがない。安定してその実力を発揮できる。

(尤も、彼女の場合はその実力こそが問題なのですが……)

とはいえ、何かの参考にはなるだろう。特に私は、ネット以外だと  
集中力が散漫になっていると指摘されたばかりだ。彼女のように行  
かずとも、誰が相手にも安定して打てるようになれば、それだけで  
私はきつと、誰よりも強くなれるはずだから。

☆☆☆

——『後輩たちのために』と、ほんの僅かにでも部長が思ってくれ  
たのなら、それだけで私は最後の最後に、きつと必死に頑張ろうって  
思えるようになります。

『まもなく抽選が開始されます。各高校の代表者は番号に従って――』

いよいよ待ちに待った日が訪れる。けれど私の頭の中は真っ白で、手が震えて抽選用紙が掌からこぼれ落ちそうになる。あんなに積み重ねた特訓の日々も、今はまるで全てが夢だったかのように消し飛んでいる。それはまさしく、あの子の言う通りで、

(大丈夫、大丈夫……)

荒ぶる内心を必死に鎮める。そうしてようやく思い起こされる部活での日々。成長を実感した日や、惨めで泣き出しそうになった日もあったけど、思い返せば蘇るのは他愛のない日常のことばかり。

部活のみんなでタコスパーティーをした。まこを誘って映画を見た。和と部室で討論をした。優希と縁日でばったり出会った。須賀くと屋上の清掃をした。宮永さんとは特訓でずっと一緒だった。

全てが偶然から成立した団体戦。しかしいつしかそこには不思議な連帯感が生まれていた。今を以て全国を目指す理由も曖昧なままだけど、それでも私は頑張ろうと思うことができる。

いや、理由なんて後から幾らでも生えてきた。とりあえず今は、後輩たちを悲しませたくはない。きつとその気持ちだけは、誰よりも負けないから。

『番号札10番から20番の高校は――』

顔を上げる。もはや迷いは吹っ切れて、ずんずんと力強くステージの方へと進んでいく。席を立ち、数十歩の短い距離をしっかりと踏み締め、ステージ横にある階段へと近寄っていく。

その時、

「――宮永さん?」

一番前右端の席に座る、不意に視界に飛び込んできた、この場所にいるはずのない存在に驚く。何故彼女がここに、そもそも今日は大会前の抽選会だから、宮永さんはこの会場にすらないはず――そう思



う間に、宮永さんは、

「ん？ 確かに私は宮永ですけど——あれ。もしかしてお知り合いでしたか？」

顔はまるで瓜二つ。しかし、声が——身長も、よく見たら髪の毛の長さも。そして何よりも雰囲気があるで違う。誰だ、と思ったのはほんの一瞬。すぐに彼女の正体について思い至る。

（宮永、照——）

前年度長野県優勝校にして、全国でも2位の実績を誇る龍門渚高校。その部長にして先鋒、宮永照。そして何より、彼女はあの宮永咲のお姉さんでもある。……あれ？ 龍門渚高校ということは、彼女は第一シードなのでは。どうして抽選会に参加しているのだろう。

疑問が表情に出っていたのか、彼女はまるで私の心を読んだかのように、

「ああ。私はただの“見学”です。どうにも心配性なもので……」

妙に含みのある言い方だったが、朗らかな表情で彼女はそう告げる。その顔は部室でツンケンしてる宮永さんとも、須賀くん相手にデレデレしている宮永さんともまるで重なることはない。いやまあ別人なのだからそれはそうなんだけれども。

『16番の方、会場におりましたらステージまで——』

「あつ!? す、すみません、知り合いに似ていたものでつい……失礼しました！」

「??？」

彼女と初めての邂逅はそんな一幕。自己紹介はおろか、何かドラマがあつたわけでも、トラブルがあつたわけでもない。何なら向こうはそんなことがあつたことすら覚えていないかもしれない。

（……………）

しかし、私は知っている。彼女が時にあの宮永咲すら凌駕し得る化け物であることを。その強さが表面に漏れ出てこないからこそ、内にどんな怪物を飼っているのかまるで測れないことの恐怖を知っている。

（46番……）

その後引いた番号は、第四ブロックで位置としては右下。即ち左上に位置する第一シードの彼女ら龍門渕高校と戦うのは決勝のこと。それが果たして幸なのか不幸であるのか。まだまだ今の私には、それはまるで判断できないでいた。

## おそろく色々と驚かされたあの日

「ねえ、清澄のあの子。強いつてレベルじゃなくない……?」

騒めきと共に、どこからかそんな眩きが聞こえる。それも一つや二つではなく、時が経つにつれ似たような眩きが伝播するように会場全体へとそれが広まっていく。

彼ら彼女らの視線の先にあるのは一つのモニター。選手以外は立ち入り禁止、電波遮断と不正防止を徹底された試合現場の様子を、一般の観客にも確認できるように会場に設置されたもの。

テレビ中継もされない一回戦のこの時点において、控室が与えられる対戦校を除けば、現状この会場において他の高校や一般の人が戦況を確認できるのがほぼ唯一の手段というのもあり、会場にはそれなりの人数が集っていた。

それらの視線が、一様にモニターの中にいる一人の少女、あるいはその少女の手牌に向けられている。それもそのはず、何故ならモニターの光景にはそれ以外の見所など無いに等しく、正しく蹂躪という言葉が相応しい惨劇が繰り広げられていたのだから。

『ツモ、嶺上開花。6000オールの9本場は、6900オール』

一回戦第十一試合終了

南ヶ丘	—5300
大芝	400
大豆島	—1700
清澄	406600

東四局9本場、開かれたのは門前自摸嶺上開花混一色三暗刻で親跳満の手。しかしそれ自体は問題ではない。いや、和了り自体も中々に強烈なものだが、何よりも恐るべきはその和了率。あまりに圧倒的な

点差から察せられるように、試合開始から終了までの13局、その全てが少女を除いて他に誰一人として和了れていない。それどころか、少女が和了るまでに他の誰も聴牌まで漕ぎ着けることすら叶わない。なればこそ、見所など他にあるはずもない。仮に彼女以外の面子を全て素人に置き換えても、同じ絵面が成立してしまうのだから。

「……やはり、凄まじいですわね」

試合終了から一呼吸を置いて、透華が静かにそう呟く。先程は蹂躪という表現を使用したのが、それでさえあの試合を見ていると足りるのかどうか。加えていざれその力がボクらに向けられることを考えると、戦慄も警戒も当然だろう。

横目で宮永さん……宮永照さんの様子を伺うと、モニターへと向けられていたその表情が見える直前に彼女は語り出す。

「えー、見て分かったとは思いますが、アレが宮永咲です。もーとにかく強いのが特徴で、しかも困ったことに彼女にはこれと言った対策が存在しません」

「対策が存在しない……とは？」

「そのことについてなんですけど、実は彼女の存在こそが、我々宮永一家が自身の持つ能力のことを「超能力」ではなく「オカルト」と表現するようになった由縁でもあります」

「ほう？」

興味深そうに衣が声を上げる。衣ほど露骨じゃなくても、ボくらだってその言葉の意は気になる。照さんの言う「能力」の定義についてはこれまで散々教わったものの、そのきっかけが咲ちゃんというのは果たしてどういう意味なのだろう。

「私の母親がかつて麻雀のプロとして第一線で活躍していたという話は以前したと思いますが、麻雀なんて運要素強いゲームにおいて一線で活躍するとなると、いずれその根拠となる武器が必要になるのは想像に難くありません。それは例えば私の眼であったり、衣ちゃんの妨害であったりと人によって様々ですが、当然プロであった私の母にも、それらに対抗できるだけの立派な武器を携えていました」

やたらと丁寧な口調で、既に何も映されていないモニターを見つめ

ながら照さんは語る。彼女にとっての当然を、ボクらにとっての非常識を。まるでゆつくりと擦り合わせるが如く。

「母は、『前局において聴牌時点から切り捨てた翻数を、次局に持ち越しして使用することが出来る』。ここの『切り捨てる』の定義が暗刻なら3枚全部捨てる必要があったり最低でも2翻は捨てないと能力として成立しなかったりその上で先んじて和了らなければならなかったりとだいぶ扱いの難しい能力ではありましたが、真に恐るべきはその『持ち越し』の強度。たとえば衣ちゃんと龍門澁さんと能力成立後の鶴田さんが3人まとめて同卓していても、事前に能力が成立さえしていれば問題なく和了れるほどの性能を秘めていました」

「わたくしたちはともかく、あの鶴姫以上ですか……」

まるで頭に入っていない解説に、透華が神妙な顔で相槌を打つ。……そういえば透華も、もうすっかり能力があることを前提で会話している。きつと彼女も色々な意味でこの非常識な世界に染まってしまったのだらう。一体いつから彼女はこうなってしまったのか。今では彼女の纏う優雅な空気が心なしか煤けて見えるのが悲しい。加えてボクがそう認識しているだけ説が濃厚でもっと悲しい。

ボクがそのように関係ないことで嘆いていると、照さんは一度目を閉じた状態になり、何かを思い出すように続ける。

「プロが誇る、本人さえも『絶対に和了れる』能力として認識していたその武器は、しかしあることをきつかけにその定義が揺らぎます。言うまでもなく、その能力が破られる時が来たからです」

「だが、それだけでは問題にはならない。単に能力が成立しないだけなら鶴田姫子と同じ。ただ自身の能力が他の誰かよりも劣っているというだけ。しかし、その対象がよりにもよってあの宮永咲だった。それが問題だと。照はそう言いたいわけだな？」

「どういうことだ？」

オーギュスト・ロダンが制作したブロンズ像そのままの格好で得心する衣に、うん、と頷く照さん。彼女らはボクらの中でも特に人外に足を踏み入れているからか、時々こうして会話が飛躍することがある。詳しく説明が欲しいと純くんが促すと、照さんは再び目を開いて

映らないモニターの……おそらくは映像を隔てた先にいた宮永咲を見つめながら、

「質問を質問で返すようで悪いけど、去年、咲を初めて見た時、皆は一瞬でも彼女のことを弱そうだなとは思わなかった？」

「へ？」

「多分きつと、一度は皆もそう思ったはず。皆はスイッチの切り替わりが激しいとか擬態が上手いとか色々勝手に理屈を付けていたと思うけど、あの子の本質はまるで違う。あの子の強さは、恐ろしさはその視点では絶対に測れない」

「……………」

「その視点では」。……そういえば、彼女の能力は厳密にはあくまで『視界を拡大する』という、それだけの能力であったことを改めて思い出す。しかしそれがどうして宮永咲の強さの本質に繋がるのかが分からない。おそらくこの場で唯一話の流れが理解できている衣も、今は咲ちゃんに充てられてか本気モードなので語彙力の関係で解説に期待ができない。

必然、照先輩はいつものように、いつかのよう<sup>に</sup>懇切丁寧に。まさに彼女が目指しているという監督気取りで、しかし「説明はちよつとややこしいんだけど」と前置きし、本人も言うように何とも恐ろしい驚くべきことを、拍子抜けするくらい至極あっさり<sup>と</sup>告げる。

「まずは大前提として、あの子はオカルトを扱えるけどオカルト使いではない」

「????」

「いや、ええと。そうだね……井上さんが、たまに感覚だけで私や衣ちゃんを出し抜くことがあるけれど——あの子は常にそんな感じなんだ」

「……………」

いきなり矛盾に塗れた発言。続く言葉と合わせて少し考えれば多少は理解できるかなとも思ったが、脳内を占めるのは相変わらずの困惑。単にボク<sup>の</sup>理解力が足りないのかとも考えたが、衣以外の面子は似たような反応をしている。芳しくない様子が伝わったのか、照先輩

は更に言葉を重ねて、

「根本が違う——つて言うのかな。私達オカルト使いは「能力を如何に上手く使えるか」を競うわけだけど、あの子はそれと違って能力そのものを創出する。」

有効牌を望めば欲しいままに、妨害をしたければその通りに。オカルトを操つて運命を弄っているのではなく、運命を弄つてオカルトを操っている」

「……それは」

透華の声が掠れている。ボクの何倍も何十倍も聡い頭脳が発言の意図を導き出したからか、未だくらくらと揺れる頭蓋に、確かな「危機感」が染み渡る。

本人も言っていて辟易として来たのか、照先輩は語り出しよりだいぶぐつたりとした様子で続ける。

「だからこそそのオカルト呼び。超能力とかじゃなくて、そもそもそのステージが違うんだ——偶然オカルトのうりよくによる偏りなんて、あの子にとっては技の一つでしかなく。本人曰く、一発消しの感覚で散らせる児戯でしかない。つまりはまあ、こういうこと。あの子の雀力もツモ運も。支配力も抵抗力も拘束力も纏う威圧も何もかも。全てはあの子が有する純然たる技術によって成立している」

だからこそ、他人のオカルトの助言なんかも当たり前のように見えるみたいだね——と、乾いた笑いを浮かべながら礼堂さんの方を見る照さん。礼堂さん側は何とも微妙な表情だ。彼女も彼女で咲ちゃんとは個人的に親交を深めていた分、その衝撃も大きいのだろう。

「……………」

しかし、此れに至つては反応できるだけまだマシだ。ボクはと言えば、理解はできても感情がまるで追いつかない。だってそうだろう、今さつき見せた神懸りの闘牌が全て単なる技術だった？ なんだそれは——身体が震えている。ただ、もしも。もしもそんな出鱈目が真実だとしたら……それは、それは。

——それは果たして、本当に人間を相手にしてると言えるのだろうか

か？

一様に絶句する部員達。けれどこの話をした時点で、当然その反応は予測済みだったのだろう。照先輩は小さくため息を吐くと、結論付けるようにこう述べ――

「勝てますか？」

「ん？」

「話は一応は理解致しました。ですが、貴女なら――わたくしの知る宮永照であれば、そんな神の如き存在にも対抗が叶う。わたくしはそう読んでいますが、それは如何に？」

「ん……」

――述べ、ようとす。その直前に。鋭く抉り込むように、誰もが気になっていた疑問を透華は問う。きつと、透華だって完全に話の内容を飲み込めたわけではないだろう。しかし、極論を言ってしまうば宮永咲が如何に化け物染みていようとそんなことはボクらには関係がない。なにせ、実際に彼女と戦うことになるのは、同じヒトから外れた化け物なのだから。

「……あんまり期待されても困るけど」

照れ臭そうにそれだけを付け加えて、彼女は中断した結論を再び再開する。

だからこそ、照先輩は彼女を、宮永咲を他の誰よりも恐れている。彼女はきつと、照先輩が必死に会得したこの眼も、衣の海底も、透華のあの治水でさえも。おそらくは透華達の能力オカルトとはまるで異なる理屈で、至極当然に対抗してくるから。でも、

「過程が如何に理不尽でも、あくまで表面に露出するのは、あの子がその場に応じた最善のオカルトを使用するという結果だけ。――だからこそ、私であれば対処は叶う。流石の咲も、直接相手の視界を奪うことなんて出来ないみたいだからね」

「それでしたら、問題はありませんね。ウチは貴女が先鋒なのですか  
ら」

「確実に合わせに来てるけどねこれ……大将だったら私がりなり構



わずトバしに行くのを阻止するためとかだよ絶対……」

透華が凜として切り捨てたその締めは、その実ボクらに向けたものだったのかもしれない。不安はある。むしろ不安しかない。しかしそれ以上に、照さんならば何とかなるといふ信頼もある。如何にその根拠が無かったとしても、それを信じられるくらいの関係を積み上げている。

加えて、更にウチにはあの衣まで控えている。透華だって、純くんだって何ならボクも微力ながら全霊を振り絞るつもりでいる。

一人が如何に強かったところで、如何に一人が頑張ったところで、それだけでは勝てないのが団体戦だ。その事実は皮肉にも、稼ぎを實質衣一人が担っていた去年のボクらが証明しているのだから。

「でもまあ、そうだね。何とかするし、何とかなるよ多分。やるのはあくまで麻雀だから、確実なことは何も言えないけどね」

その曖昧な返しに、しかし透華は満足そうに頷く。透華だって、きっと懸念は抱えたまま。しかし、それでも、その上でそれらを全て飲み込んだ。

それが「信頼」。当時のボクらが劣っていたこと。今のボクらが積み重ねて来たこと。それがああるから、ボクらは負けない。どんな脅威が相手でも。不安なんていらぬ。進むんだ、どこまでも。

目指すは一番、どこまでだって。透華と一緒になら、ボクらはどこへだって行けるんだから。

☆☆☆

——などと言っても、どんなに色々なオカルトが入り混じったところで、最終的にやることは麻雀運ゲーでしかないわけで。

『みつつずつ、みつつずつ……』

「……………」

モニターの中の一人の女性に向けて、“眼”を凝らしてじつくりと集中する。

今更言うまでもないことだが、麻雀という競技は、普通にやれば立直ですらできる確率は5割を切る。我々オカルト使いはその可能性を歪めることで都合の良い運命を引き寄せているわけだが、やはりオカルトと言えど何かを歪めるような真似をすれば必ずどこかで反動が押し寄せる。

それは、あの宮永咲であつても同じこと。人外の感覚を有する彼女も、人であるからにはその理には抗えず、ならば私の能力は、宮永咲の天敵であるとも言える。

しかし、しかしだ。もしも本当に運命に愛された存在がいるとするのなら——そもそもそんな小細工など通用しないのではないだろうか。

当然のように豪運で、奇跡のように存在を見過ごされ、偶然対策を見誤る。私だつて人間だ。ミスを少なくすることは出来ても、全くのゼロにすることはできない。

『あ……ツモです。えっと、トイトイと三暗刻。でしようか……？』

『な——それ、四暗刻じゃ……?!』

そして、如何なる競技であつても。それは麻雀のように技術や運が試される競技であつたとしても、多人数が行う競技であるからには、必ず一定数“ある存在”が誕生する。

『え？ 役満……つて、ええええええ?!?!』

即ち、“何だかよく分からないけど運が良い”。あるいは、“何故かは知らないけど勝てる”。と言った、本当に理屈が通用しない相手である。

また、その存在は、間違いなく、あらゆるオカルト使いの“天敵”であるとも言えるだろう。

「……………」

ため息を吐く。全国以上に荒れそうな決勝。龍門渕さんへの返答

は強がりだ。勝てる見込みなんて、それこそ咲一人であっても一割を切るほどしかない。その上、どこかに咲と同レベルの化け物が潜んでいないとも限らない。

楽しみじゃないと言えば嘘になる。しかしそれ以上に龍門渚高校麻雀部の部長としては、私はこの地獄のような大会の行く末が、あまりに不安で不安で仕方がなかった。

二回戦第六試合終了

城山商業	9	6	8	0	0
古里	4	7	5	0	0
鶴賀	1	6	9	0	0
緑ヶ丘農業	8	6	7	0	0

## きつと何かに絶望したあの日

最近、普段はとても厳しいはずのコーチがいやに優しいのが気になる。

彼女を恐れている大半の部員は、それが良い事であると言う。しかし、彼女のことを長く知るレギュラー陣やそれに準じた人であるほど、そのことに対して多大な不安を抱いている。

何故なら久保コーチは、典型的な“叩いて伸ばす”タイプの指導者であるからにして、ならばこそ彼女の厳しきとはつまり、生徒への期待の裏返しでもあるはずなのだ。なのに突然態度が軟化したということは、それはつまりコーチが私たちに厳しくする理由が、その必要が無くなってしまったとも取れるわけで。

(……………)

もちろん、全てが私の杞憂という可能性もある。しかし、こうまで露骨に態度が変われば何かがあったのだと懸念するのは当然の流れだろう。

きつかけは何時だっただろうか。私の記憶が正しければ、去年私がキャプテンを引き継いだ頃にはまだまだコーチもいつもの調子だった。指導に熱が入りすぎて部員に手を出しそうになった場面を目撃したこともある。それもそれでまた別の問題はあると思うのだが、だからこそそんなコーチが、それほど指導に熱心だった彼女の心変わりには、それがおよそ尋常なものではないように感じてしまうのだ。

「福路。先鋒戦だが……………」

そんなコーチが、いよいよ差し迫った決勝を前に私へ声を掛ける。以前であれば身構えていたかもしれない。それが忠告にせよ激励であるにせよ、学生の身からすると彼女の立場には畏れを抱かざるを得ず、意識をしても身体が勝手に身構え萎縮してしまう。しかし、

「……………いや、いい。お前の思うように行け」

「……………はっ」

しかし、今の彼女からは、何故かその必要性を感じられない。私も内心では彼女に対して怯えていたはずなのに、これは一体どうしたことだろう。彼女を侮って下に見始めたわけでは断じてない。自分でも具体的な理由を聞かれたら答えを出せない。得体の知れない違和感だけが加速する。まるで世界がおかしくなったかのような、自分こそが場違いであるかのような錯覚すら抱く。それほどの異常事態。

「キャプテン、頑張ってください!!」

「……そう、ね。頑張るわ。ありがとう」

後輩からの激励にも、どこか力無い返答しかできない。……本当は、コーチが変わった理由なんてとくに理解している。わかっているか。コーチが心変わりせざるを得なかった理由。或いはあれだけ麻雀に熱心だった前キャプテンが麻雀からすっぱり足を洗ってしまったその理由は、他でも無い、今から対戦するあの高校以外にはあり得ないのだから。

(龍門渕高校……)

龍門渕高校。今から丁度一年前、無名校から一気に全国準優勝校にまで上り詰めた新鋭のチーム。当時のメンバーの大半が一年生であり、また先鋒の宮永さんも当時二年生でまだ現役というのもあり、もっぱら現状における高校最強のチームとも噂されている。

そして恐らく、その噂は真実だ。いや、あるいはその認識でさえ危機感がまるで足りていない。何せ去年対峙した彼女らはおよそ最強程度の肩書に縛られるほど生易しい存在ではなく、むしろ去年に全国で辛酸を舐めた事実が未だに信じられないほどに、彼女たちの存在は強烈な印象と共に記憶に刻みつけられている。

陳腐な言い方になるが、特に天江衣の打つ麻雀は異常だ。確率がどうこうという話ではない。おそらくは根本的に、私たちとは何もかもが異なっている。

そして、良くも悪くも常人の域を超えない我々では、天江衣を凌駕する算段など存在しない。ならば“指導者”としては何をするのが正解であるのだろうか。まさか『お前らではアイツらには勝つてっこ無いから諦めろ』と慕う生徒にすっぱりと告げてあげることが最適解だと

言うつもりか。

だからこそその態度なのだと、私は大まかに推測している。そんなことではないと声を大にして主張しても、事実としてそうなのだろう。天江衣を少しでも知る者であれば、勝つ方法など選択肢にも浮かばない。『どう上手く負けるか』……最低限、無様にならない見栄の張り方だけを考え抜いて、それさえ為せずにただただ絶望する。最悪、麻雀そのものを恐れ離れてしまう。それはまさしく、あの人キャプテンをなぞるかのよう。

(何にせよ、やるしかないわね……)

不安はある。しかし蹲っているわけにはいかない。そもそも対戦すらしていない相手に情報だけで怯えて縮こまるなど滑稽でしかない。加えて、幸いと言っているのか、私が闘う相手はいわゆる『そういった手合』を封殺することに長けた宮永さん。いや、全国大会の様子から、彼女はそれに『特化している』と表現しても過言ではない。暴れっぷりを見せている。なら、特殊な力なんて持たない私でも、天江さんの同類が他に居たとしても、彼女がいる限り、最低限はどうかなる……はず、である。

「……………」

他力本願の上に希望的観測。更には根本的解決になっておらず、負担を後輩に押し付けているだけ。いくら私が先鋒向けとはいえ、私自身天江さんと闘うが矢面に立つことだって、やろうと思えば出来た筈。なのに——  
(いけない。本当に切り替えないと……)

いよいよ迫った試合会場の扉の前に、頭を振ってネガティブな思考を振り払う。

根拠らしい根拠はないのだが、試合中のテンションが勝敗に大きく影響を残すという眉唾な話もある。それがほんの気休めであつたとしても、いたずらに勝率を下げる真似だけはしたくない。

「よし……………」

頬を両手でばんばんと二度と叩き、気持ち力強く会場の扉を開ける。この先からは応援はおろか電波さえも遮断された孤独の闘いに挑まねばならない。特に私の場合、慕ってくれる後輩たちの存在で気

力を奮い立たせている面もあるので、やはり寂しきは拭えないけれど――

「――だから、ストーリーは結構いい感じなんだからさ。もつと軽くて明るい感じの話にできないの？」

「無理……だって麻雀以外の作品はそのままだし、麻雀が主題の作品なんて大体アレな内容だし、そもそも麻雀漫画なんてカイジとムダツモくらいしか覚えてないし、ムダツモは首相や大統領が全然違うから面白さが伝わらないし……」

「なんかよくわからないけど、麻雀が題材つてこの漫画麻雀と全然関係ないじゃん……」

「ええと、これでは駄目なんでしょうか？ 確かに題材は暗いですが、惹き込まれる魅力を感じますし、かなり面白い作品だと思いますよ……？」

「そ、そう？ ありがとう。気に入ってくれたなら、後日龍門渕に電話でもしてくれば――」

「やめてお姉ちゃん。製本も刊行も構わないけど布教するのだけはやめて恥ずかしい。人に薦めるような内容の漫画じゃないよこれ！」

「えー……」

「まあ、それについてはちよつと否定できませんね……」

「――……」

――などと私が闘志を燃やしていると、私以外の対戦相手が揃いも揃って和気藹々と、雀卓に所狭しと並べられた、おそらくは麻雀と全然関係ない本の話題で盛り上がっているのを目撃して思考が完全に停止する。

特に清澄の先鋒の方の宮永さんは、これまでの試合を見る限りあまり感情を面に出さない非情で冷徹な打ち手という印象があったので、漫画を片手に感情豊かに吠え猛っている今の姿に尚更脳がバグリそうになる。しかし怯んでもいられないと足を踏み出すと、龍門渕の宮永さんが真っ先に私に気づき、

「あ、福路さん。こんにちは。一年ぶりですかね。今日はよろしくお願ひします」

「こんにちは！ 本日はどうかよろしくお願ひします!!」

「またお早いですね……ではなく、どうもお手柔らかなによろしくお願ひします」

「え、ええ。よろしくお願ひします……」

あまりにも気安く声を掛けられて呆気に取られる。取り分け鶴賀の妹尾さんと来たら、その挨拶は後輩たちの声援にも劣らない。まさか敵対している彼女から元氣よく言葉を投げ掛けられると思わず、これまた困惑する。

「しかし、遂に面子が揃ってしまっただか……憂鬱だなあ」

「その割には新刊まで揃えて楽しそうだったけど?」

「そこはほら、現実逃避とかそんなんだよ。少しでも心を軽くしないとプレッシャーで死にそう。私3年生、部長」

「ああ……ちなみにだけど、今日は10万点くらい筆るつもりだから覚悟しておいてね」

「そんな軽いノリで死刑宣告は止めよう? ぐぬぬぬ絶対逆になり取ってやる……!」

「このノリで普通に阻止してくるから困るんだよなあ……」

かと思えば、急にバチバチと重圧を撒き散らす二人。しかし互いに片手には漫画らしきものを握ったままで微妙に緊張感がない。けれど纏った重圧は直接向けられていない私が思わず押されるほど凄まじいモノ。温度差で頭がおかしくなりそうだ。

「わあ……! 今日はいき皆さんと闘って楽しみです!」

「そ、そう……」

そんな二人を見ての妹尾さんの台詞。理解しているのかしていないのか。何にせよ、この状況を楽しみだと言えるのは大物だと思う。(……)

妹尾佳織。この人についてもよく分からない。試合の映像を見ると危なっかしいというか、見るからに素人なのだけど、その割には戦績は私を遥か上回っている。素人にしか見えない、しかし圧倒的な



実力——となると天江さんの姿がダブってしまい、こうして無邪気な姿を見てもどうしても警戒してしまう。

けれど、彼女から感じる視線はどう考えても“憧れ”そのもので——何というか、対応に困る。彼女については、あまり深く考えない方がいいのかもしれない。

(そして、清澄の——)

未だに龍門渕の宮永さんとわいのわいのと騒いでる清澄の宮永さんに視線を向ける。

宮永咲。清澄高校麻雀部の一年生にして先鋒。その実力は圧倒的の一言で、一回戦での東場だけで30万点稼いだのを皮切りに以降はぴったり10万点を安定して稼いでいる。

この“ぴったり”の意味はまさしくその言葉通りで、2回戦以降の次鋒戦における清澄の点数は決まって2000000でスタートしていた。1000の端数すら残さない完璧な点数調整。それは彼女の座った卓が、最初から最後まで彼女の思惑通りに事を運んだ証明に他ならず。

「というかお姉ちゃんは衣さんいるじゃん。正直10万点差があってもこつちが不利くらいだと思うのに何が不満なのさ」

「あの子は良くも悪くもムラがあるというか対人経験が偏っていて乏しいから、割と抵抗力に難がある」

「へえ……?」

「はっ!? おのれ咲、何と小癪な……!」

「いや今のそつちが勝手に言っただけだよね!? 人の能力そうやってぺらぺらと語る癖止めなよ!」

「ぐっ……猛省します。とはいえ、多分咲も分かっているように、アレがあの子の課題でもある。去年もそれで最後の最後に——」

「まあ確かに予想はしてたしそれを伝えてもいるけれど……でも、清澄<sup>ウチ</sup>じゃ結局対抗は厳しそうだなあ」

(……………)

しかし、表情豊かに語り合う今の彼女からは、試合中に受けた冷徹なイメージは感じない。まあ、如何に彼女が強かったとしても、常時

あんな雰囲気撒き散らしては疲れるだけだろう。

そういえば、宮永照さんも試合前後はかなり朗らかな人物であったのを思い出す。でも、それは逆に言えば、今の態度からは彼女の實力は測れないというわけで——お姉ちゃん？

「妹さん、なんですか……？」

「ん？ 咲のこと？ そうですけど……」

隠す事でもないと言わんばかりに、あっさり返答する宮永照さん。実際、隠す理由も必要もないのだろう。言われてみれば、というより、どうして私は今までその可能性に思い至らなかつたのか。苗字も同じで同じ地区で傍目にも顔が似ているのに。

(宮永照の妹……)

しかし、なるほど。そうして見るとあの強さも容赦の無さもどこか通ずるものを感じる。いや、お姉さんの口ぶりからして妹さんの方が強いのだろうか？ 試合での暴れっぷりを見るに、少なくとも同格かそれ以上であると見たほうがいいのかもされない。……待って、宮永さん、じゃなくて宮永照さんと同格？ それは即ち天江さんと同格つてワケで、え、嘘でしょ？

「あ、そろそろ時間ですね！ 改めてよろしくお願いします！」

「そうですね。よろしくお願いします」

「よろしく。……サイコロ誰回す？」

「座り順ならお姉ちゃんだけど……せつかくだし妹尾さんでいいんじゃないかな？」

「え!? ありがとうございます！ では僭越ながら私が……！」

衝撃で固まった私をよそにいつの間にかその時はやってきて、風越ではまず見ないであろう緩い空気のまま緊張の一瞬を遂に迎える。

そしてまさかの起家は私である。……待って、まだ気持ち全然追いついていないの。などと嘆いても運命の賽は変わらない。配牌を整理するうちにどうにか心を落ち着かせて、さあ——

〔三八二六④⑦⑦北西東南白発中〕

(……………)

——これは本当に不味いかもしれない。場所が場所なら役満十にもなり得不る手だが、この舞台では考え得る中での最悪に等しい。

加えて九種九牌で流すことはおろか、絶妙に処理し辛い牌ばかりが並んでいる。この手牌ではよほどツモ運が良くない限りベタオリでもどこかで振り込んでしまう可能性が高い。

「……………」

福路 打牌

〔北〕

しかし、そんな思考どうようはおくびにも出さず、自信満々に牌を捨てる。この最悪が最良の手牌であると、心の底から信じて突き進む。

表情とは、人の心が最も顕れる鏡であるという。故にこそ、私はそれが映し出す情報の大切さを知っている。

それは試合が始まるや否や表情を消した宮永照さん然り、それまでのやり取りが嘘のように眉間に皺を寄せる妹さん然り、何故か喜色満面な妹尾さん然り——

(……………)

「ポン」

宮永咲 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏〕 ポン 〔北横北北〕

その顔を見た瞬間に押し寄せた不安を打ち消すかのように、対面の妹



めている3人を見比べて、衝撃で頭がおかしくなりそうになる。  
けれど私は、こんな異常な場を前にどうにかして勝利を掴まねばならない。あまりにあんまりなその事実には、私は密かに絶望するのだった。

決勝戦先鋒戦東一局終了

風越 9 6 0 0 0

龍門 9 8 0 0 0

清澄 9 8 0 0 0

鶴賀 1 0 8 0 0 0

おそろく全てが混沌に染まるこの日

宮永咲 配牌

{①①①②②③③北北北中白}

(……うーん)

与えられた配牌を見て悩む。配牌の時点で高打点を狙える一向聴。客観的にも主観的にも良配牌なのは間違いないのだが、何故かなんとなく嫌な予感がする。

普段であれば……部活の時であったのなら、私がこの配牌で悩むことはなかったであろう。次に引くだろう中を手牌に入れ北で暗槓、嶺上牌の2筒を引き込んでそのまま適当に和了ればまるで問題ない形。多分、感覚的には行けると思う。のだが、どうにもその選択に不安が付き纏う。これはただ単純に私が警戒し過ぎただけじゃなく。困ったことに、私はこういう時の勘を外したことがない。

「……………」

宮永咲 一巡目 手牌

{①①①②②③③北北北中白}

ツモ

{中}

打牌

{白}

虫の知らせ、という諺があるように、嫌な予感ほど良く当たるもの。単に警戒のし過ぎなだけで仮にそれが外的外れだったとしても、それはそれでこの卓の“程度”を知れるので判断の助長にも繋がる。

故に、ここは静観する。聴牌云々は私には関係ない。父辺りには悠

長だと思われるかもしれない。しかし検めるまでもなく、私の力は強大であるが故に特に他の人の影響をとびきり受け易い。本来、スペックを存分に活かせば100%勝てるだろう勝負。ならば一局や二局、いやいつその半荘一回を落としてもでも状況が整うなら代償としては安いと私は考えている。

(いや、そこまではちよつと厳しいかな? お姉ちゃんもいるし……) とはいえ、多分静観はこの一巡だけで十分だろう。妹尾さんの地和には流石に驚いたが、あれは対処のしようがないからこそ対抗が叶う。お姉ちゃんなら詳しい原理まで見抜いて私にも読めない不安要素を排除できることを考えると、やはりあの力は是が非でも欲しいなあと思うところではある。

(まあ、お互いに両立できないからこそその力なんだろうけどね)

姉の言葉を借りるなら、私と姉の力は両立出来ればそれこそ『理不尽』以外の何者でもない。故におそらくはどう足掻いても両方成立することはないだろう。それは私と姉が組んで戦った場合でも同じで、以前試しにやってみた場合では力の所在が曖昧な私側に猛烈なデバフが降り注いでいた。

どんな偶然にも穴はあり、その穴はおそらく意図的に残されている。だから絶対的に見える妹尾さんのアレにも対策は存在しているはずで、事実アレより先んじて和了する運命はか細いながらも確かに繋がっていた。

(……………)

宮永咲 2巡目 手牌

{①①①②②③③北北北北中}

ツモ

{①}

「カン」

——問題は、少なくとも現時点において、まともに妹尾さんのアレに対抗できるのが多分私しかいないだろう事実。そして妹尾さんの

アレはおそらく姉の眼の範囲から外れていて、しかし対抗するためには私も相当の能力を使用する必要がある、そうなるときつと姉がこれ幸いと私を潰しに来る。

この状況を利用し、妹尾さんを持ち上げる形で2位に甘んじる手段も考えたが、今は是が非でも点数が欲しい。誰かのために、なんてガラじゃないけれど、あれほど育て甲斐のある打ち手は中々いないのもまた事実。やはり私も姉の血縁者ということなのか、あるいは私の能力から成る固有の感性に依るものなのか。

宮永咲 嶺上ツモ

②

「もいっこ、カン」

宮永咲 手牌

②②②③③中中

暗槓 裏①①裏 裏北北裏

(後者っぽいかな……まあ、別に良いか)

いずれにしろ、ここは無理をしても一度和了る。私の勘が正しければ、多分きつとまだおそらくは姉もこの手を妨害できない、はず。……」

嗚呼——「多分」だの「きつと」だの「はず」だのと、それを断言できない自分が嫌になる。実際には内心で確信出来ているのがもつと更にますます嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嗚呼嫌だ嫌だ。

どうして私はいつもこうなんだろう。離婚騒ぎも京ちゃんの時でさえも、結局私は何も出来なかった。あの日の火事の時だって、本当は、私には、あの子が辿る運命すら、ちゃんと見えていたはずなのに――



「ロン」

宮永照 和了形

〔一二三四赤五六七八九九東東〕 〔東〕

「一気通貫、混一色。赤1で親跳。18000」

「……………」

決勝戦先鋒戦東二局

風越 96000

龍門洩 116000 (+18000)

清澄 80000 (—18000)

鶴賀 108000

(……………)

嗚呼、また——否、久々にやらかした。しかも、よりもよってこんな大舞台の大切な場面で。あの日から、これからも。後悔なんて腐るほどしてるのに、本当に私は駄目な人間だ。全てを忘れて投げ捨ててしまえば——あるいは、だからこそ、私にはこのような力があるのだろうか。

私一人がどう足掻こうと、結局は何一つとして運命は変えられない。私が弄っているつもりでいる何かは、実はそれさえも既定路線で、

(そんなことあるわけがない、か……………)

目を瞑る。世界に張り巡らされた糸の中から一つ、妹尾さんと思わしきごん太いソレを己の運命に重ねて混ぜ合わせる。

(う……………)

とんでもない不快感。しかし我慢できないほどではない。しかもやったはいいものの、どうやらあんまり意味がないっぽい。私がごっそり掠め取ってもなお、妹尾さんには無数の因果が絡みついている。

それはまるで、天から注がれる恵みのように。

考えても詮方ない。いずれにしろ、土壌としてはこの一本で十分。後はこの力を姉に見咎められない程度に均して、上手く使え、ば……。

……。

(何、この力……？　びつくりするほど馴染まない……)

一体、本当に彼女にはどのようなモノが憑いているのか。少なくとも、私とは致命的なまでに相性が悪いというか、多分きつと私では使用条件を満たしていない。相応しくないと力の方が訴えている。具体的には一局もしないうちに霧散しそう。

(――仕方ないか)

どうせ使えないのなら、と。得た力を使い潰す勢いで卓に支配をかける。流石にこのレベルの能力を行使すると姉に察知されてしまうがそれも問題はない。この所為で不意の一撃を受ける可能性もあるけどそれも構わない。

いずれにせよ、この状況ではまともに戦える気がしない。多分オカルトに拠らない豪運？に、能力姉がいる卓無しで立ち向かうなんてちよつと無理がある。ならばせめて嫌がらせ、じゃなくて、少しでも有利な方向に卓を導く。

因果を絡め、運命を掴み、そして世界を嘲笑う。あるいは、仮に人間が減んでも、それでも世界は揺らがない。どちらがマシか、どちらが良いのか。分からないけれど、ならば存分に活用しよう。

(奇跡とは、重ねれば重ねるほど陳腐になる――)

その力の名は『運命奏者』フエンイタイザー。運命を手繰り、嘲笑う力。ちなみに命名は姉である。更に言うなら、多分私がやってるのは語感から受けるソレとは別物である。

(さて。どうなるかな?)

☆☆☆

(やばい……何とか、これはとんでもなくヤバイ)

混乱で死滅した語彙力が、とにかく全身で警鐘を訴えている。

あの咲と同卓する公式戦。間違いないく口クな目には遭わないだろうことは当然覚悟していたわけなのだが、それでも咲が私を前にここまで大掛かりな能力行使をするのは随分と久しぶりだ。

以前に遭遇した場面は確か3年くらい前で、その時は衣ちゃんと龍門渚さんの合わせ技みたいな場を自分含めた全員にかける自爆戦術を使っていた。その時は悪配牌に慣れていた私に辛うじて軍配が上だったが、多分今回はその真逆。それは、この配牌を見れば直ぐに分かる。

宮永照 配牌

(二二二三三三三三⑨⑨⑨北北中発)

ツモ

(北)

配牌が良い、なんて次元じゃない。配牌の時点で聴牌——しかも四暗刻単騎。加えて他の人の表情を「見る限り、おそらくはこの卓に座る全員が、これと同レベルかそれ以上の配牌になっている。

ここまですべて飛んだ状況だと、勝利条件に流れも読みも運も技術もまるで一切の必要がない。役を知っていればそれだけで——ど素人だろうと熟練者であろうとも、全て等しく同様に運命の気紛れで和了る。そして、咲の狙いはその一点に尽きる。即ち、

(あいつ——この状況だと分が悪いから、全員の運を太くすることで誰が和了ってもおかしくない状況を創り上げたんだ……！)

今更説明するまでもなく、私のオカルトは「見る」ことだけに特化して、その先に関してはノータッチというか、例えば危険牌なんかの読みの部分は基本的に私の経験則に依る。

とはいえ、私はその「見える」範囲が広過ぎて視線の動きや理牌の癖、意識の揺めきなどから未来予知の真似事が出来たり、更にオカル

トが絡めば “山がどう干渉されたのか” なんかも見えるので自然と抵抗の仕方も浮かんでくる。

故に私は、この舞台が咲によって整えられたものだとは分かるし、それが妹尾さんの豪運を利用したものだということもなんとなく理解している。

しかし、しかしだ。私に見えるのは言ってしまうえばそれだけ。常時『照魔鏡』というオカルトに頼っている私は、運が良い時の経験が圧倒的に不足している。無論、ダブリーする能力とかに当たった時なんかで似たような経験はあるにはあるのだが、それは追い続けることを前提にというか、その前提があつた上で “和了れる可能性がある” からこそ、和了り筋という名のパズルを詰めるように打つ——とにかく、私が劣っていることがその根幹にあつた。

だが、今回の咲のやったことは違う。対抗することこそが過ちという、これまで私がしていたこととは真逆の選択肢が正答になる能力。逆らつてはいけない、力場に逆らえば逆らうだけその恩恵を見失うオカルト。

「……………」

宮永照 打牌

〔発〕

「カン」

宮永咲 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏〕 明槓〔発横発発発〕

(……………!?)

そして私はもちろんのこと、他の面子にもこのような異常な場面の経験はないはずで。そうなると一体、誰がこの卓で一番優位を取れるのだろうか。

「もう一つ、カン」

宮永咲 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏〕 明槓 〔発横発発発〕 暗槓 〔裏白白裏〕

言い訳をするようだが、油断をしていたわけでは断じてない。今の鳴きにはオカルトの気配を感じなかった。単なる咲側の上振れ——あってもおかしくはない。その程度の、普通の麻雀でもそれなりの確率で起こり得る、ただの運命の悪戯だろう。

「ツモ」

しかし、今はそれが心底から憎らしい。この卓とは比較にもならないほど高確率で起きる現象、それが上手く噛み合うとこれほどまでに取り返しが付かなくなる。

「嶺上開花。大三元——32300」

宮永咲 和了形

〔四五六⑧⑧中中〕 〔中〕 明槓 〔発横発発発〕 暗槓 〔裏白白裏〕

無常の一撃。たった一打、ただの一手で筆られたとは信じ難い致命打に、思わず唇が引き攣る。されど、それこそが麻雀であるのだと、私は深くため息を吐くのだった。

決勝戦先鋒戦東二局一本場終了

風越 96000

龍門洩 83700 〔—32300〕

清澄 112300 〔+32300〕

鶴賀 108000

きつと何かを頑張るこの日

「つ、ツモです！ えーとえーと、2000、よんせ——」

「違う。多分ドラが頭から抜けてる。それは倍満」

「4000、8000ですね。どうぞ」

「その牌ロン咲。満貫で8000」

「え？……はい」

「お姉ちゃんそれロン。12翻の24000点」

「マジか。……って流石に配牌から清老頭なら素直に和了りなよ」

「大四喜満貫にしたお姉ちゃんがそれ言う？」

「ロン。3倍満返しの36000。これで逆転。やったぜ」

「やっぱりさっきのは偶然じゃないのか……相変わらず慣れるの早いなあ」

「それが自慢だからね。慣れてしまえばこっちのモノだよ」

「むむむ……」

「？ えーと、ドラ無しの混一色に役牌、三暗刻で10翻にも満たないと思うんですが、それはどんな役なんです？」

「ああ、これは槓ドラって言うて——」

「その牌、ロンです。16300」

「はう!？」

「あれれ？ おかしいなあ。今度は私だけちよつと手牌が悪い気がするんだけど……」

「いや今度のは偶然だからね？ 下振れだよ下振れ。今更何言っても無駄だとは思うけど——さて、次は私が親だね」

「止めないと地獄を見るんですね分かります」

「が、頑張ります……！」

「……………」

……………

……………

……………

決勝戦先鋒戦南2局一本場終了時点

風越	9	2	0	0	0	
龍門洩	9	9	7	0	0	
清澄	1	0	0	6	0	0
鶴賀	1	0	7	7	0	0

「……………」

今まさに目の前で起きている事態を、私はどこか遠くで眺める。蚊帳の外である事実よりも、何とというか現実感そのものが感じられない。

(一体、この卓で何が起きてるの……?)

思考もガタついて来ているのか、先程から似たような陳腐な言葉ばかりが脳に反響する。あり得ないだのおかしいのだと、単に現実から逃避しているだけの戯言が彷徨っている。

「ツモ。2000オール」

「ぐっ……………」

「あう……………」

「……………」

2巡での和了。トップを再度取られたというのに、点棒を渡す私の動きには、もはや微塵の悔しさすらも感じられない。ただ頭に浮かぶのは疑問。いやこの際、この卓で何が起きているのかはどうでもいい。

ただ、何もできない。その事実だけが無力感、脱力感という形で、ヤスリのようにざりざりと、鈍く粗く精神を削っていく。

福路 配牌

〔九九九九⑨⑨⑨北北北西発〕

（また——）

配牌から一向聴。しかも役満を狙える手。普段であれば垂涎モノなこの手も、今はこれ以上なく虚しく感じる。

どんなに優れた手牌であっても、和了れなければ全てが無意味。だからこそ麻雀には「流す」といった戦術が存在し、私も好んで良く使っていた。

「ツモ。4100オール」

「……………」

しかし、いざそれが「やられる側」に回ってみると、こんなにも虚しいものなのか。贅沢を言っているのは分かる。これまで散々似たようなことをやってきたのに、どの口がと憤られても仕方ない。

でも、それでもこれは違いうだろうと。そう考える私の気持ちも理解して欲しいと。そう願うのは我儘なのだろうか。

福路 配牌

〔一二一二三四五六七八九九〕

（っ……………）

本日都合2度目の聴牌。先の配牌も一向聴であったことを考えると、これは少ないと言えるのだろうか。でも、見るからにそれ以外に



も問題がある。それは、私がこの大物手を形に出来ないと言った実力的な話ではなく。いや、あるいはそういう問題なのだろうか。分からない、分からない、分からない、分からない。

福路 ツモ

⑥

打牌

⑥

「ロン。8600」

「は、はい……」

開かれたのはタンヤオ三色の手。奇しくも最初の妹尾さんの和了りとほぼ同型の手だ。これもとんでもない奇跡であるはずなのに、どうにも陳腐に感じてしまうのは何故だろう。そして、この手を振り込まずに和了れる人間というのは、一体どのような化け物なのだろうか。

南3局3本場 福路 配牌

〔東東東北北北西西南南南白〕

「……………」

再びの聴牌。大四喜字一色四暗刻単騎。ダブル役満採用のルールであれば、直撃でトツプの宮永咲さんすら容易に飛ばせる超大物手。しかし、どうだろう。これ以上ないくらい手牌が良いのに、まるで一切和了れる気がしない。一切の間違いようがない手牌のはずなのに、それでもおそろくは何かが誤っている。何が違うのか。何をすれば良いのか。それすらも全く理解できない。いや、あるいは、私がこの場にいることこそが過ちなのではないだろうか？

(どうすれば……何をすればいいの……?)

自分でも、自分が何を言っているのか分からない。誰が見ても最良の手で、やるべきことは明白なのに、それで結果を出せないなんて

狂っている。けど現実には揺るがない。だって私は、まだ何も出来ていない。

宮永咲 打牌

②

「それロン、2900!」

「な——」

宮永照 和了形

{123456789②} {②} ポン {1横11}

4巡目での和了り宣言。相変わらず恐ろしい早さでの和了だが、この和了りがこれまでの半荘で一番遅い和了りだというのが笑えない。鳴き一気通貫ドラ1の2000点、一見すると平凡にも見える手。しかし、その手順がこれまたおかしい。照さんの河に初手から連続で並べられた2枚の9索。つまり萬子と索子の違いこそあれ、彼女の手は配牌時点では先程の私とほぼ同等の手だったことになる。

和了れたからいいものの、敢えて聴牌を崩した上で逆転の芽さえ自ら潰すような和了り。何故そんなことができる? どうしてそんな真似が出来る?

この場面、この状況で、当然のように役満を捨てるなど、それこそ狂気の沙汰としか言いようがない。しかし現実には彼女は和了り、私は同等かそれ以上の手を以てしても和了ることが叶わなかった。この差は何なのだ。一体、彼女には何が見えているのか。

「ツモ。500・1000です。ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「あ、ありがとうございます!」

「……………ありがとうございます」

結局、何もかもが分からないままに、オーラスもあっさり姉さんに流されてその半荘は終了する。最後の手も役満間近であったとか、

一度も5巡を超えなかったとか、私が焼き鳥だったとか色々考えることはあつたけど、今はただただ何も考えずに、布団に入って深く休みたい気持ちでいっぱいだった。

決勝戦先鋒戦半荘一回目終了

風越	84000
龍門洩	96400
清澄	129000
鶴賀	90600

☆☆☆

「だ、だいぶマシンに抑えられた……」

「途中から……いえ最初から何もかもが異常な卓でしたわね。基本1〜2巡で和了することも、それに風越を除く全員が普通に付いて行っていることも」

見るからに消耗した様子の照先輩を透華が迎え入れる。これほど消耗した彼女を見るのは初めてだが、それも無理はないとボクは思う。というかボクどころか照先輩以外の部員がああ卓に座っていたらまず間違いなくもっと酷い目に遭っている。衣やあのモードの透華でさえ生き残れるか怪しい。それほどの惨状だった。つてか揃いも揃って平均2巡で和了るって一体何なんだよ。ボクが言うのもアレだけど全員イカサマしているのかな？

「それで、そろそろアレの種明かしをして欲しいんだが……」

「……どれがいいかな？」

「どれって言うか……あの配牌のことだな。何をどうしたらあんな巫山戯たことになるんだ？」

「アレね。まあ、あれは気になるよね」

当然、ボクと同様の疑問を抱いただろう純くんが代表して切り込

む。疑問を抱くというか、もはやありとあらゆることを色々と超越した配牌だった。全員が役満寸前、しかもそれがぼぼまるまる半荘一回分続くとなると、どんなに途方もない確率なのか考えるだけで気が遠くなる。

その言葉を受けた照先輩は、ぐったりした様子のままよたよたと衣の座っていたソファの隣に腰を掛けてその長い金髪のてっぺんに軽く手を乗せると、

「そうだね。衣ちゃんから見てもどうだった？」

「純の其れに近い何かであることは理解する。しかし、その手法があまりに奇天烈で私には言語化出来ん」

「そうそう。でもあんな芸当が出来るのは流石に咲以外にはいないから安心してね」

「オレに？」

眉を細めて猫のように善がる衣と、それとは対照的な顔で心外だと主張する純くん。まあ、あんな真正銘の化け物と同類扱いされてしまったては、そんな怪訝な表情をするのも分かる。

「うーん何から……まあ、一つずつ話そうか。まずは妹尾さんの豪運についてからだね」

だいぶ精神的に持ち直したのか、再び立ち上がった照先輩はテーブルの上にあつた智紀が纏めていた牌譜を手に取り、小さく「なんだこいつやべえ」とどの口がほざいているのか分からない感想を漏らしながら控室のモニターのすぐ横に立つと、

「まず前提として、妹尾さんのアレは一過性のものです。今しばらく……多分この大会が終わってから一月やそこらは保つと思います。が、今大会で沸いてる熱が冷めて冷静になって、本人が一度「あれ？いくらなんでもおかしくない？」と認識してしまえば自然と解けるシンデレラの魔法的なナニカです」

「何かの能力、というわけではないのですか？」

「まあ、あれだけ過剰だと能力と言えなくもないけど、私は違う認識かな。何て言えばいいのか分からないけど、無知が故の無敵モードというか、多分自分がどれほど凄いことをやっているのかが分かっている

くて、だからこそ『良配牌だと良いなあ……やったあ良配牌が来た！』  
『くらの感覚であの配牌を実現させていたんだらうね』

「今すぐ現実の厳しさを叩きつけてやりたい……」

全ての局で配牌から複数の役付きで聴牌という、良配牌とかの次元じゃない配牌をモニターで見えていた礼堂さんが恨めしそうに言う。しかし気持ちは分かる。あれが良配牌程度の認識とか、麻雀を舐めているとしか言いようがない。この大会に向けて何年も麻雀を真剣にやっている人間が、そんな麻雀に対する理解すら浅い化け物に蹂躪されていたなど悪夢でしかないだろう。

「だけど無意識でもあれだけのことが成せるということは、鍛え上げればもつと厄介なことになる可能性があるということ。かの有名な小鍛治プロがほぼ初心者状態でインハイを制し、そこから技術を磨いて手が付けられなくなったように、再度山を越えた妹尾さんも面白いことになると思うよ。一年もあれば一通り学べるだろうし来年に期待だね」

「期待したくないなあ……」

（え？ たった一年で方向性は違えどあのレベルになるの……？）

突如として浮かび上がった特大の脅威に戦慄する。一過性と言われて多少は安堵していたのに、その地和が前提みたいな理不尽が結局は来年にも現れるとなつては心穏やかではいられない。

「それで、咲なんだけど——」

しかし、来年のことを言い出したらその無敵モードの妹尾さんをナチュラルに上回っていたもう一人の化け物がいる。しかも彼女に至っては照さんですら凌ぎ切るのがやつとというもはや何を言っているのか理解できない存在。それが真実であることは先の試合で存分に思い知った。そんな彼女は、果たしてあの戦いで何をしていたのか。

「妹尾さんの豪運に便乗した……って言うのかな。誰しもやたらとツイてる時ってのはあると思うんだけど、咲は妹尾さんのツキを自身のものだと思魔化して、その対象を自分にした——井上さん風に言うなら、『流れを掠め取った』わけだね」

「……それだけではないのだろうか？」

「うん。咲はその上で更に対象を拡大して、“あの卓自体が異常である”と世界に誤認させている。もう既にあんなにぶつ飛んだことが起きているんだから、今後もそれ以上の何が起きてもおかしくない——そんな風に運命をこねくり回して、それによつて確率の概念は半ば消滅し、全員が当然のように役満を聴牌するような地獄を創り出したわけだね」

「????」

何を言っているんだこいつは。どうしてたかが麻雀に『世界』なんて単語が迷び出て来るのか。あと概念が消滅って何だ。運命をこねくり回すって初めて聞いたぞそんな言葉。ただ、あの卓が地獄という認識だけは同意である。

訳がわからない。だが、今の話を聞いて再認識した。宮永咲という人間は、もはや何もかもが規格外過ぎる。今存在しているトッププロのうち、一体何人が彼女を相手にまともに戦うことが叶うのだろうか。

頭を抑える動作がすっかり板に付いた透華が、絞り出すように問う。

「それが真実なら、やはりあの子は格が違いますわね……どうしてそんなことになっているんですの？」

「咲は今は人生の絶頂期だからね。京太郎くんと結婚したらだいぶ落ち着くはず。……つまりあんな風になったのは多分私のせいですごめんなさい」

「元々の素質に加え、常時妹尾さん状態が続いているというわけですか……」

納得できるようなできないような理屈を展開する照さん。でもそうなると逆に照先輩がどうしてそんな状態の咲ちゃんを抑えることができるのか分からなくなる。やっぱりどっちも化け物じゃないか。

ボクが内心で頭を抱えていると、珍しく……本当に珍しく衣がトテトテとボクのところまで歩いて来て、おそらくはボクを慰めるための言葉を紡ぐ。

「案ずるな、ハジメよ。照はああ言っているが、実際には言葉ほどの脅威ではないはずだ。いや、事実今のハジメでは100戦やつて一度も和了れないやもしれんが、それでも懸命に抗えば不思議と再起不能な事態にはならん」

「それは……どうして?」

「彼奴の能力は非常に度し難い。おそらくは現状の扱いでも相当に持て余している。そして、練度があれ以上になることもないだろう。それは徒に敗北率を高めるだけだからな」

「?? ごめん、ちよつと理解ができなくて……」

「力の強大さに怯えて縮こまることこそが彼奴の思う壺だ。そういう意味では、妹尾佳織の存在はこれ以上ないほど奴への最適解と言える。——要するに、ハジメであれば大丈夫。衣はそう信じてる。彼奴に対して理解が及ばすとも、そう認識している衣おねーさんを信じよ」

「——そう、だね……」

相変わらず何も分からないままだが、衣から確かな信頼を寄せられているのが感じられて思わず涙腺が緩みそうになる。ボクは透華ほど衣に対して露骨ではないが、それでも彼女同様にあの排他的だった衣の存在を知っている分、その感動もひとしおである。

「な?せ、来年はハジメが彼奴と戦うことになるだろうから……」

「え???」

ぎらつと付け加えられた言葉に脳がバグる。は?え?何それ?ボクが戦う?彼奴って誰?もしかして宮永咲と?ボクが?……どうして?

「照がないのは当然として、衣が先鋒向けではないのは知っての通りだ。そうなると誰がどの配置に付くかなのだが、まずとーかは色々な意味で正直先鋒に置きたくない。ならば純かハジメか智紀のいずれかを先鋒に配置するのが妥当という話になり、しかし今の純は中堅に置くのが一番相応しいように思う。あとは実力順にハジメ、智紀で先鋒次鋒だ」

「あんなの相手に和了れる気がしないんだけど??」

「案ずるな。ハジメであれば猛特訓を経た来年には半荘一回で親を二度と流すくらいならどうかできるようなっているはずだ。照ほどではないが、衣の優秀な観察眼を信じよ」

「期待が、期待があまりにも重い……!!」

しかもそこまでして親を流すだけつてもうそれボロ負け前提じゃない！　そこは嘘でも『お前なら勝てるさ』くらいは言つてよ!?　いや来年になつてもまるで抵抗できる気がしないのは事実なんだけど、『お前じゃ親を流すのがせいぜいだけど折れずに頑張れよ』つてはつきり言われて今まさにその気力がゴリゴリ削られてるんだけど!?

そんなボクの慟哭を無視して、衣は小さな顎にこれまた小さな手を当てると、

「しかし、解せんな。運の流れを掠め取ったのなら、どうして其れをそのまま自らに用いなかった？」

「さつきも言ったけど、妹尾さんのアレは初心者だからこそそのコストカットだったわけで、咲は天和地和ダブリーが如何に困難な役なのかを知っている。これは推測だけど、奪つたはいいけど扱い切れそうになかったから、流れとか全部使い潰す勢いでとりあえず状況をイーブンにしたんじゃないかな？」

「苦肉の策というわけですね。ということとは……」

「そう、咲にとつても、あの卓は相当に苦しい。それは今の点数状況が物語っている。そして咲さえ抑えることが出来たなら——あとは順当に勝てるはずだよ」

力強く言い放つた照先輩。まだまだ不安はあるものの、彼女であれば任せられるという確かな信頼がある。

ならばボクらは信じよう。そして全力を出し切ろう。彼女が勝つても負けてもそれでも、ボクらだけでも勝利を掴めるように。それこそが、団体戦という競技の強みなのだから。

☆☆☆

「っ……」



謎の疲労感に、足元がよたつく。どこか視界も覚束ない。自分が何をしているのかも曖昧になってくる。

しばらく壁にもたれ掛かり、そこで今更ながらに会場の地図を控室に忘れていたことに気づいた。柄にもなく緊張していたのだろうか。しかし、まあ、これまで通路を真つ直ぐにしか進んでいないので、とりあえず来た道を戻れば試合会場には戻ることができるだろう。

控室に戻ろうとしない私を、部長はどんな目で見るだろうか。試合の前にあれだけ大口叩いておいてこの有様では、幻滅されてもおかしくない。それは嫌だな、と思うと同時に、それも仕方ないと考える自分がいる。常識的に考えて、あの部長がそんなことを言うはずがないのに、どんなに非常識な曲芸が出来ても、やはり私は根暗女のままなのだなと再認識する。

「おーい、咲！」

「京ちゃん……？」

馴染みのある声に、俯いていた視線を上げれば、そこには見慣れた金髪の男子の姿が映る。どうしてここに、と戸惑えば、彼の手に控室に置き忘れた会場の地図が握られていたのが見える。それを渡すためにわざわざ会場付近まで探しに来たのだろうか。相変わらず外見に反してやたらと気配りの利く男である。

「……ごめん、ちよつと肩貸してくれる？」

「また随分と疲れているな。麻雀に疲れるようなところはあるのか？」

「オカルトが絡むと割と……お姉ちゃんも昔、体力を消費するタイプのオカルトの調整に苦心したとか何とか……」

「そんなもんか……まあいい、よつと」

「きやつ……」

ぐいつと力強く肩を引き上げられる。今はプライベートでバスケットをやっているらしく、運動部顔負けのがっしりとした体格が頼もしい。

しばらくそのまま歩いていると、間が保たなくなったのか、不意に京ちゃんが語りかける。

「それで、どうだ？ その様子だと随分と苦戦してるみたいだが」「実は結構苦しい……やってみないと分からないくらいには困ってる」

「そうか……お前がそう言うんなら、流石はお前の姉さんだけはあるな」

「麻雀に関しては、私が先輩なんだけどね……」

「そうなのか？と感想を漏らす京ちゃん。そういえば、その辺りのエピソードについては語ってなかったかもしれない。まあ、今はあえて語ることもないだろう。あまり愉快な話でもないし、これからいくらでも話す機会はある。

「そんなにも苦しいなら、いつそ諦めるか？」

「……」

私が何と答えるのか知っているだろうに、ハツパをかける意味も込めてか、意地悪く京ちゃんがそう問いかける。それに私は、対抗するように手に力を入れて、

「……もうちよつと頑張る」

「そっか。なら、俺から言うことはナシだ」

にっこりと笑う。私には到底出せそうにない快活な笑顔。普段は恥ずかしがって私にはあまりこんな顔を見せないのに、こういう時には惜しまないのは本当にずるいと思う。

「しかしまあ、そんなまでして。随分と部長に御執心なんだな？」

「……だって、あの人は。私なんかより、よっぽど凄いなだよ」

「？」

「あの人……久さんには、数え切れないほどの不運が絡み付いている。私はあの子が死んだ時、私が世界で一番不幸なんだと不貞腐れていたけど、あの人はそれ以上の不幸に囲まれて、それでも笑顔で過ごしてる」

だから私は憧れた。彼女の生き様に、その笑顔に。その身に振り返る不幸など大したことないと笑い飛ばしながら、あるいはそんなものを内に秘めてもなお、あんなにも綺麗に笑える彼女の姿に。

だから私は、ほんの少し……ほんの少しだけ、彼女に幸せを味わっ

て欲しくなった。それを容易く成せるだけの力が、私にはあつたから。それはきつと彼女のためではなく、ただの私の自己満足の、ために――

「あ――……………」

「……………」

「……………聞いてた？」

「……………悪い」

「あ――あああああああ!!!」

「ちよ――咲!？」

反射的に京ちゃんを振り払って全力で駆け出す。疲労は精神的なもの、その気になれば走るのも問題はない。

不覚――不覚にも程がある。まさかこの私が、如何に疲れていたとはいえ、あんなにも情けなくてこっぴどかしい執着を、よりにもよって京ちゃんに話してしまうなんて――

「おーい、待てよ! 別に良いことじゃないか!」

「軽く追いついて感想を言うのやめて!?! いいから放っておいてよお!」

それから唐突に始まった追いかけては結構な時間……具体的に私が肉体的な疲労で動けなくなるまで続き、そんな逃げ惑う私を遠巻きに余裕そうに追いかけて来た京ちゃんの手によって、結局私は控室に戻ることもなく、そのまま疲労困憊の状態で後半戦に望むのだった。

## きつといつか報われるその日

千里山高校麻雀部の部室は、たとえ当日の部活が休みであろうとも、学校が休校でさえなければ部員は自由に出入りすることができる。

これは今では千里山麻雀部結成時から代々伝わる伝統ということになっていくが、実際は伯母ちゃんが監督を務めるようになってすぐ捏造したありもしない虚構らしく、目的としては休日はまだ部室に出張するようなやる気のある生徒を炙り出すためと夢も何もない話らしい。

加えて、如何にやる気であろうと無かろうと、レギュラーに選ばれる基準は実力一本に絞られるため、極端な話殆ど部活に参加しないような幽霊部員であっても実力がその他の部員を上回ってさえいれば、よほど人格や成績がアレな場合を除いて問題なくレギュラーの座に居座ることができる。ならばそれに意味はあるのかを問えば、実際に意味らしい意味などなく、ただの伯母ちゃんの自己満足に近いものなのだそう。

尤も、部室の鍵を管理しているのは監督なので、必然わざわざ休日に鍵を借りにくる生徒の存在は監督にも伝わり、また如何に実力主義とはいえ監督もそういったやる気のある生徒に対しては多めに実力を発揮する機会を与えてくれる。

実は清水谷先輩が早くからレギュラーに選ばれたのもそんな経緯で、まあ彼女の場合はどうも家庭の方に居づらかっただけらしいというオチはあるのだがそれはそれとして、何にせよ図書館なり教室なり“そういう場所”だと集中力が増す人種であるウチは、これ幸いとその伝統（笑）を存分に活用し、今日も部室で一人黙々とパソコンで動画を見ながら牌譜を纏めていた。

「お。ようやく顔を上げてくれたなあフナQ。なんや今印刷機から出てきたこの紙渡せばええんか？」

訂正。その日は珍しくウチ一人ではなく、もつと珍しいことに休日どころか平日さえも不定期に参加するような人物がそこにはいた。

「ああ、ありがとうございます。ですが今すぐ使うわけでもないんで、そこらへんに置いていただければ」

「りよーかいや。なあなあ、終わったんならちよつと付き合つてーや。一人だと寂しいねん。一局だけでもええから」

「一度牌を並べ始めると結局10分や20分では済まなくなるので無理です。この中継が一通り終わったら付き合いますんで」

「中継？　なんやそれリアルタイムなんか。どれくらいで終わるん？」

「おそらくあと5時間はありますかね……」

「いや長いわ。何見とるんやそれ。夜までかかるやん。実質断つてるようなもんやん」

そんな風に苦言を呈するのは、園城寺怜先輩。千里山女子高等学校麻雀部の三年生で、つい最近になって一軍レギュラーの先鋒を任された千里山の絶対的なエース。まさに彼女の立ち位置こそが先に述べた千里山が実力主義である証明でもあり、またそれだけの才能があってもこれまで頭角を現すことはなく、三年になってようやく陽の目を浴びることが出来た所以でもある。尤も、彼女の場合は身体が弱いという止むを得ない事情によるものでもあったため、一概にそうとは言えないのだが。

「ですから最初に断つたじゃないですか」

「長くても一時間やそこらやと思つとつたんや。実際そのくらいで顔を上げたわけやし。まさかそんなに長いとは思わへんやん」

「別にウチが休日にごどこ何を見ようがウチの勝手ですし……」

まあ、わざわざ部室にまで来てやることじゃないのは理解できる。園城寺先輩もわざわざ部室まで来たからには、多少なりとも麻雀を打つことに期待していたわけで、そんな中唯一部室にいた仲間がこちらをガン無視して黙々と作業をしていたら、文句の一つでも言いたくなるだろう。しかし。

「そんなでしたら、何もよりにもよってこんな日でなくとも……」

「まだ昨日の熱が醒めんのや。ウチは遠足とかの前日にはゆつくり眠れるんやけど、その代わり終わった後の余韻が結構長引くねん。特に

今回は畏れながらウチが主役みたいな立ち位置やったわけやし、なんか居ても立つても居られんくてな」

『こんな日』というのは、つい昨日に全行程を終了したインターハイ大阪予選を指してのこと。当然ながらレギュラーとして選出されたウチや園城寺先輩もそれにフル出場し、連日に渡ってほぼまるまる一日中日没近くまで繰り返し返して行われた数々の真剣勝負。今日はそんな大会の翌日であるが故に、彼女が待ち望んでいたであろう部活が休日であるのは残念ながら至極当然であると言える。

しかしまあ、そうなるとそんな園城寺先輩をほっときっぱなしにするのもどうなのだという気持ちも僅かに浮かんでくる。ウチとしても部室に向かうのだからそこに部員がいることを想定していたわけで、まさか本当に誰かがやって来るとは思わなかったからと柔軟に対応しないのも如何なものだろう。

「……………」

こんなことを考えている時点で、この構いたがりな先輩の術中にハマっている気がしなくもないが、幸いにも今は時間が空いている。とはいえ先輩の求める麻雀ができるほどの時間は無く、妥協案としてウチは手持ちのノートパソコンの画面を園城寺先輩の方向へ向けると、「よろしければ、園城寺先輩もこの試合を見ますか？」

「あれ。それ別に覗いても良かったんか？」

「むしろ一度も覗きに来なかったのが意外でした」

「ウチはそういうことをされたくない。だからやらない。簡単な話や」

「それは実に素晴らしい心掛けだと思います」

心底からそう告げると、園城寺先輩は雀卓の椅子を器用に歩かせてウチの斜め後方までくると、視界が高くて見辛かったのか結局は椅子から降りてウチが座るソファのすぐ隣に寝転ぶ。やや態度や行儀が悪いが、しかし園城寺先輩はそれ以上に身体が悪いことを知っているので敢えてスルー。すると無人の雀卓が映る配信画面のバナーを確認したらしき彼女が言葉を紡ぐ。

「牌譜が印刷機から出てきた時点で麻雀関係やろうなあとは思ってっ

たけど、これは長野県予選の中継か。まだ終わつとらんかったんやな」

「ウチら大阪や東京なんかは出場校が多いので、かなり余裕を持った日程でない和不測の事態が起きた時に困りますからね。他には比較的遠方から出場校を募る北海道も相応の長さの日程で試合が行われていたはずですよ」

「なるほどなあ。でも、長野つつたらアレやろ？ 龍門渕。あそこは今年も去年のメンバーそのまんまやし、やったら手加減してても予選程度は一捻りやん。ぶつちやけ見るところなんてあるんか？」

「ウチも最初はその懸念も有りましたが、物の見事に杞憂でしたね。それどころか、このままではその龍門渕さえも危ういかもかもしれません」

「……なんやと？」

その言葉に、すぐさま怪訝な顔をする園城寺先輩。これまでに見せた態度こそ雑にも思えるが、その実彼女はおそらくウチの部員の中でも一、二を争うほどにあの高校の恐ろしさを知っている。何せ彼女に取ってしてみれば、万年三軍でうだつの上がない自身を名門校のエースの座にまで引き上げたのは、他でもない龍門渕の尽力によるものだとも言えるからだ。そして、そんな尊敬すべき高校の行く末が危ういとなれば、彼女としても気が気ではないだろう。

「嘘やろ？ だってあの龍門渕やで？ っつか画面さつきから何してんねん係員が何故か雀卓を外に運びよつたんやけど？」

「ああ、これは念のために自動卓を予備のモノと交換するとのことよ。選手以外には南場に入る辺りで周知されていましたが、いざ実行するとなればこのタイミングしかなかつたのでしょうか」

「念のためって……そんなことでわざわざ自動卓を交換するんか？」  
「どちらの答えに対しても、それはその牌譜を見ればすぐに分かります。安心してください、一瞬ですよ」

どういうこつちやと呟いた園城寺先輩は、手に持ったままだった妙に空白の多い牌譜を見て怪訝な顔をするも、その一瞬後には事態を把握したらしく普段は眠たげなその目を見開いて、

「なんや——これ。冗談やろ？ 一体何をどないしたらこないなイカれたことになる？」

「その疑問に完璧な回答ができるのは、おそらくこの世界で宮永照ただ一人でしょう。ですが彼女のような異能を持たぬ我々であっても、状況から『誰がこれを成したか』を推測することはできる」

「これを誰かがやった……んやろなあ。こんなん人為的以外の何物でもない」

卓に座った全員が配牌時点であわや役満という状態に陥る。まさに神懸りとしか呼べない卓だった、だからこそ偶然にはあり得ず、下手人がいることは明白。そして、それが誰なのかは、それこそあのオカルト殺し宮永照の存在と、この点数状況が物語っている。

「清澄高校一年……『宮永』咲か。妹か親戚か、顔もそっくりやしまあ相当近い間柄なんやろうな」

「解説の藤田プロによると、彼女は宮永照の妹さんだそうです。どうも藤田プロと個人的な交流があるらしく、藤田プロ本人が彼女と直接打ったことがあるようなことを仄めかしていました」

「妹か。なら納得……は簡単にはできそうにないけど、まあこいつが誰であれ、あの宮永照を相手にこんだけめちやくちやらかして普通にトップ取ってるあたり相当ヤバいな。流石に妹だけあってオカルト殺しみへの対策もバッチリってコトか」

「……逆に言えばこれだけ馬鹿げたことができる怪物を相手に、当然のように直撃を取れる宮永照と果たしてどちらが恐ろしいのでしょうかね」

あの練習試合の時にしつこく聞き出したので宮永照の持つ能力の概略については大まかに知っている。だからこそ言えるが、彼女が如何なる能力によってこの状況を創り出したかを何かしらの手段で理解したところで、ウチであればあの場での確な対応ができる自信がない。

何せ背後から手牌を見てるだけでも手順も捨て牌も狙いも無茶苦茶で頭がおかしくなりそうだった。それ以前に猶予が1巡あるかどうかすら怪しいあの状況下で平然と役の組み替えを行える時点で常



軌を逸している。

(そして困ったことに、それで実際に宮永照は和了っている。きつと、彼女が仕掛け人を相手に直撃を取った局こそがその局での“正解”。しかしそれはあまりにも険しく、おそらくは正気であれば決して辿り着けない茨の道……)

麻雀で勝つために麻雀で学んだ全てを捨て去る必要がある。それは当然、それが上位の打ち手であればあるほど困難になる。

しかし考えてみれば、上級者になるほど牌効率もクソもない素人の暴牌を恐れるのは確かにその通りで、意図してそれをやっている認識するなら対策としては間違っていないのかもしれない——いやどう考えても間違っているわ。なんやねんこの暴牌なんでこれで和されるんやナメとんのか？　そもそも平均2巡とか考える暇もないやんけそれもやめろボケ。

などと嘆いても結果は変わらない。少なくともあの卓にはこんな巫山戯た真似ができる怪物と、それに平気で喰い付いて行けるこれまた頭のおかしい化け物が居て、そのどちらかは必ずウチら千里山の前に立ち塞がることになる。それも、今回のような互いに喰らい合うような敵対者も存在しない状況下でだ。

「てかしれつと鶴賀も相当頭おかしいなこれ。何かの間違いで風越が上がつてこーへんかなあ……」

「流石に望み薄でしょうね。龍門渕にはあの天江も控えていますので」

「せやなあ。……やつぱズルいなあ龍門渕。こんだけヤバイやつ相手でも何だかんだトバない程度に点数を残しさえすれば捲れることが決まっとるんやから」

「そう甘い話でもないと思いますが、オーダーそのものが先鋒にエースを据える今の傾向にマッチしているのは事実ですな」

天江という絶対的なエースを有する龍門渕が最も恐れるのは、その天江を無視——即ち“先鋒で全てを終わらせるような化け物が何もかもを速攻で終わらせる”こと。しかしながら、宮永照というもう一人の怪物の性能がそれを許さない。そのような化け物をこそ喰い物

にする理不尽なまでのオカルト殺しは、まさに正しい意味での『先鋒』としてうってつけだ。

そして彼女の更に厄介なところは、そんなある意味で局所的な刺さり方をするメタ性能を有するにも関わらず、普通にも強いという矛盾した存在であること。きっと彼女には現時点でもこれからも普通に勝てるし普通に負ける。実際、千里山との練習試合の彼女の平均着順は1・7。これは順当に考えるなら相当にやばい数字だが、その平均着順が1・0を下回らなかった天江と比較するとあまりに頼りない数値とも言える。

(本来、ウチと龍門済みたいな力関係の高校と練習試合をすれば、ウチ含めたレギュラー陣であれば1・5を上回る程度なら難なく出来るはず。問題なのは、宮永照はその数字を怪物相手であつても維持できることや)

むしろ怪物相手だと勝率が極端に増すという特異性は、唯一無二であり対処が非常に難しい。誰でも普通に勝てるはずなのに、確実に勝とうとすると負けてしまうのは、天江衣とはまた違った意味での初見殺しと言えるだろう。

事実、あの音に聞いた永水の神代は去年、彼女にいつそ清々しいくらい封殺されて敗れている。プロに行つてもまず間違いなく先鋒に回されるだろう——とは監督の談。そうでなければ厄介な相手を抑えるため局所的に使われるか。持つこと自体に価値がある、普段使いもできるジョーカー……それが千里山における宮永照の評価である。またそれ故に、監督にすらどうにもならないとサジを投げられるほど。

しかしながら、今まさにその評価が揺らぎつつある。上記の性能を有する宮永照を相手にあからさまなオカルトで平然とトップを取るような存在——宮永咲。その結果が宮永照の身内であるが故のメタかそれ以外の要因なのかで彼女の評価は多少変動する。だがそれでも、彼女の認識はこの大会の後には揺るがぬものになるだろう——あの宮永照を相手に明確な優位を取れる唯一の存在として。

その優位性がこの程度であるのかそれ以上なのか、はたまた全ては

偶然で期待外れであるのかはまだ分からない。ただ、確かなのは——互いにこれが全力ではないだろうという確信。  
(こんな化け物、予想外ではありませんが——凡人は凡人なりに、これ幸いとお溢れを啜らせて貰いましょか)  
何にせよ、美味しい状況なのは間違いない。だからこそウチは、それからは園城寺先輩がウザ絡みしてきても無言で、齧り付くように画面を仰視するのだった。

☆☆☆

「ロン。人和……はありませんね。8000点です」

後半戦は、容赦のカケラもないその無慈悲な発声から開始した。再び起家となった福路さんの第一打を直撃。これにより元々顔色が悪かった福路さんの表情は更に青くなり、点棒を渡す際の緩慢とも取れるゆったりとした動作は、如何にこの一撃が彼女にとっての致命打だったのかを物語っている。

(終わり、かな……)

まだ試合は始まったばかりだが、もはやこの卓で福路さんに出来ることはないだろう。ただでさえまるでペースに追い付いていなかったのに、その上心まで折れては話にならない。

咲なら『蓋をした』とでも表現するのだろうか。いくら不安要素を潰すためとはいえここまで徹底的だと流石に同情するが、咲の立場からすると最初に福路さんを封殺するのはこれ以上なく妥当で、加えて極論この程度で折れるなら早いか遅いかの違いなので、相手が悪かったと諦めてもらうしかないだろう。というか人のこと構ってる余裕はないですはい。まあ、裏を返せばそれだけ警戒しているということだから……。

〔九九一①①①①⑨⑨⑨北北北白〕

（あれれ、おつかしいぞオ？ 卓自体を入れ替えたはずなのに何も変わってない……）

そんないきなり対戦相手の一人が死亡するという波乱が吹き荒れた後の東二局。配られた配牌を見て、どこぞのメガネの糞ガキの真似をしながら内心で頭を抱える。東一局もそうだったし、まあこの状況を想定してなかったかと言えば嘘になるが、正直実現して欲しくなかったというのが本音である。

（だって卓を入れ替えたって聞いたから流石にねえ……？）

というかそれ以前に、この状況は咲にとつても相当リスクが高いはず。なのにそれでも継続しているということは、それほど妹尾さんの潜在能力が凄かったのか咲がリターンを優先したのか。ウチの大将の存在を考えると後者の線が濃厚だが、いずれにしても、まこと運命というものは奇妙で奇天烈で厄介なこと極まりない。

咲の様子を軽く伺えば、傍目にもすぐ分かるほどにやる気に満ち溢れている。前半のような威圧はまるで感じられないが、オカルトの気配——威圧そのものが誰かの模倣でしかない咲の場合は、〃取り繕う余裕もない〃今の状態こそが、彼女の正真正銘の本気モードと言える。

（咲がこんなにも必死になるなんて何年振りかな……ほんの少し、ほんの少しだけ——楽しみかも）

無理やり唇を吊り上げる。前世の記憶による影響か根本的な闘争心に乏しい私であるが、それでも最低限の敢闘精神は持ち合わせている。

もつと言えば私は——どこか全霊に成り切れないこんな私が、死力を尽くし築き上げた舞台を、無力化するでもなく上から叩き潰すことに、僅かながらの暗い喜びを抱くのだ。

「リーチ」

宮永照 ツモ

〔白〕

打牌

〔1〕

猶予は2巡。リーチは打点を稼ぐ以上に選択の幅を狭めるが、しかし今回は問題ないと判断して初手から切り込む。この判断に理屈らしきものは存在せず、根拠となり得るのは私の勘だけだが、この程度のことと選択を誤るようであれば私はここに座っていない。私だつて、伊達にオカルト殺しと呼ばれているわけではないのだ。まずはここで一度和了つて、そこから――

「……………チー」

宮永咲 手牌

〔22223333裏裏裏裏裏〕 チー〔横123〕

問題はない。そう、本来であれば問題はないはずだ――しかし、今回の戦いに限れば、この卓にはそんな私をも知り尽くしている私以上のヤバい化け物が存在するわけで。

（ちよ、それ鳴くの……………?!）

一発消し目的――ではないだろう。無論、その目的もあるのだろうが、井上さんがたまにするそれと違い、無理鳴き特有の「聴牌気配が遠ざかった感じ」がしない。いや、本人にとっては実際無理鳴きなのかもしれないが、仮にそうだとしてもその程度では終わらないのが咲の怖いところ。

「……………」

宮永咲 打牌

〔東〕

咲の持つ技能、「運命を弄る」とは即ち、事象の結果を都合の良い方向へ後押しするというもので、その過程についてはどうやら重要視されていない。故に本気の咲を相手にした場合、無理鳴きが本人も意識しないまま勝手に伏線へと昇華されるという、割と意味不明な事態が頻発する。

（そしてそれは物凄くざっくり表現すると、要するに放っておけば自然と和了するということでもあつて——あああもうホントどうなってるんだこの世界は。何で私はたかが麻雀なんかで運命だの事象だの伏線だのとゴチャゴチャ考えなきやいけないんだ。でも実際そうなんだしとにかくこのままだとヤバイヤバイヤバイどうか……いやいや落ち着け私。気を強く持て私。ここは見逃してもOK、まだいける、まだいける……）

「……………」

福路 打牌

〔発〕

常日頃から「絶対に和了る手段など存在しない」と公言している私であるが、実のところ例外は割とあつて、その一つに「対戦相手が諦めていること」が挙げられる。それはまあ当たり前と言えばそうなのだが、生憎とこの世界の麻雀は理屈が通用しない場面があまりに多過ぎて何が正しいのか分からなくなる。

「……………」

妹尾 打牌

〔赤五〕

……………

.....

.....

『咲に勝てない？ そんなの当然だろ、お前まだ全然初心者なんだから』

『もう一年にもなるのに初心者だとか関係ある？ 麻雀って最終的には運ゲーじゃん』

『あるだろ流石に。なんで麻雀のルールに鳴きなんてクソ面倒なモンがあると思ってたんだ。それなりに麻雀やつてる馬鹿がそういうナメた発言する雑魚との差を広げるためだろ？』

『うぐ。……いや、でも。それでも咲やお母さんはやっぱりおかしくない？ 半荘一回で役満がポンポン出るようなゲームじゃないよこれ？』

『それについては素直に同情してやる。だがな、そこで腐ってねえでこの環境をチャンスだと思えるようでないや、一年どころかいつまで経ってもアイツらには勝てねえぞ』

『.....』

『ま、それだけだったのもアレだ。アイツらに関してそんな意見が出るのも当然、だったら今からアイツらに勝てるかもしれない方法を一つ教えてやる』

『ええ……最初に聞いたってアレだけど無理じゃない……？』

『ああそこだそこだ。まずはその考えから矯正する。その後については——ま、お前の頑張り次第だな』

『頑張ってなんとかなるものかなあ』

『どんな競技でも極まってくると、結局はそれが一番大事なんだと気づくもんだ。俺は実際執念だけでアイツらについて行ってる。少なくとも、やる気なんざやろうと思えばいくらでも捻り出せるんだか

ら、あるに越したことはないだろう』  
『……そう、だね』

……

……

……

確率は根性で超えられる。

この言葉に元ネタがあつたのかどうか、流石にもう覚えてはいない。まあ異能力バトルの登場人物やギャングブルなんかで切羽詰まつた人間であれば割と誰でも言いそうな台詞だが、この世界ではそんなトンデモ理論が現実のものとして罷り通っている。

思念は世界に干渉し、根性は確率を破壊し、気迫は運命を凌駕する。現象そのものの認知度はさておき、そんな一部常識の置き換わつたこの世界において、それを理解してなおそれでも「これはおかしい」と法則の穴を探ろうとする私は、きっと相当に捻くれた人間なのだろう。

宮永照 ツモ

〔北〕

〔カン〕

前世については既に別人のそれと割り切っているが、思えば前世から私はこんな性格だったような気がしなくもない。大衆に塗れ、大衆に従い、そのくせゲームなんかでは人気キャラよりマイナーキャラに逆張りする。私の能力もおそらく元を辿ればそんなもので、世界がそうだからと素直に恩恵を受け取るのに抵抗があつただけなのだろう。



宮永照 嶺上ツモ

①

「もう一つ、カン」

もつと素直になっていけば、こんなにも悩むことなんてなかったはずだ。順当に順調に、成長に従いどんどん配牌も良くなって、咲にだって真正面から立ち向かい、雑に和了るだけで有象無象を蹂躪する存在になれたかもしれない。

宮永照 嶺上ツモ

⑨

「……もう一つ、カン」

けれど私はこの道を選んだ。自らの運を犠牲にするような能力を編み出し、毎度のように神経を擦り減らしながら針に糸を通すかの如く戦い続けている。後悔はある。苦悩もある。しかしこれが中々にやりごたえがあつて、それ相応に面白い。

『楽しいめ。いつも、誰より、心から。神つてモンは大抵が残忍で気紛れなクソつたれだが——800万も居りやあ、中にはお前のそんな姿を見て、ついうっかり手を貸しちまう奇特な馬鹿もいるだろうさ』

『ぎ、雑っ……!! あまりにも雑だよお父さん……!?!』

楽な戦いは性に合わない。必死に悩み抜いて、無駄に苦しみ抜いて。けれどそれでも勝てなくて。しかし、だからこそ、私はそれ乗り越えた瞬間に絶大なカタルシスを感じる。悪趣味だという自覚はある。共感是要らない。同意を求めることもしない。でも、それでいいと教わったから。それでもいいと言ってくれた人がいるから。

「ツモ」

宮永照 和了形

〔九九白白〕 〔白〕 槇子 〔裏①①裏〕 〔裏⑨⑨裏〕 〔裏北北裏〕

〔嶺上開花、四暗刻。 8000・16000です〕

だから私は、私なりに。私なりの楽しみ方で。 “それでも”と全力で世界に抗い続けよう。その意志がきつと巡り巡って、私の力の根源になってくれるはずだから。

決勝戦先鋒戦東二局終了

風越 68000

鶴賀 74600

龍門洩 128400

清澄 129000

## やがて必ず辿り着けるその日

妹尾佳織は興奮していた。

幼馴染にして大切な友人でもある智美ちゃんから唐突に誘われた麻雀部。入部して即レギュラーかつ一ヶ月もしないうちに全国予選というあまりの展開のハイスピードっぷりには流石に驚かされたものの、智美ちゃんが音頭を取るだけあつてか部内の雰囲気はとても良く、また純粋に麻雀という競技の奥深さに心惹かれ興味を持ち何だかんだとノリノリで大会に参加する羽目になった私。

我ながらチヨロいなあとは少し思ったが、別にその選択自体には後悔をしていない。強いて言えば私のような超の付くど素人がいきなりこんな大会という神聖な場を荒らしても大丈夫なのかとそれなりに悩んだりはしたのだが、嘘でも『麻雀の才能がある』と言われてしまえば人間なんて簡単に調子に乗るもので、最終的にはあれよあれよと主に加治木先輩の強い薦めで気づけば先鋒まで任されるようになってしまう。

流石に私にエースの座は重いのでは……と反論しても、何故か加治木先輩は聞き入れてくれない。智美ちゃんに援護を頼んだが、彼女はむしろ面白がつて賛同する始末。理由についても何度か聞いたが、やはり才能がどうのと言った曖昧なことばかり言われて、きつと体良く押し付けられたのだろうとその時は思っていた。

半ば自業自得ながらも、才能だとかそんなありきたりな言葉で誤魔化されるあたり私が押しに弱いと言われる由縁なのだろう。惨めに敗北する未来しか見えずに当時は軽く絶望もしたが、数日もした時には割り切っていた。大会には私以上の初心者だっているかもしれないし、どうせ記念参加のようなものなのだから、惨敗してもその時はその時だと。

一週間もする頃には、先鋒でいればむしろ他校のエース……強い人と存分に戦えることに思い至って興奮を抑えられないようになっていた。だってどうせ胸を借りるのなら強い人が良い。私を先鋒に推

した加治木先輩が後悔するほどスタボロにして貰って、格の違いとやらを見せつけてほしい。意趣返しの意味も込めてそんなことを智美ちゃんに伝えたら、「かおりんは大物だな」といつもの間延びした口調で言われた。どういう意味だろう。

『あ、ツモです。えっと、トイトイと三暗刻。でしようか……?』  
『な——それ、四暗刻じゃ……!?!』

しかしながら、いよいよ待ちに待った大会が始まると状況が一変する。無論、記念参加とはいえ大会に出るからには私も死力を尽くす心意気ではあったのだが、困ったことにいつかの加治木先輩の戯言は真実であったようで、自分でもびっくりするくらいトントン拍子に大会を勝ち進んでしまう。

(あれえ……?)

一回戦の結果、プラス63400点。歯応えがない、とは違う。勝った側である私が言っても説得力が無いかもしれないが、私が戦った相手はおそらくその全員が私を優に上回る実力者だった。私が勝ったのは単に運が良かっただけ。けれど、その運をこの日この場でしっかりと持つて来れるという意味では、確かに私は紛れもなく彼女たちを上回る才能を有していたのだろう。

(これが才能って言うのも違う気はするけど……)

釈然としない表情で戻る私を、加治木先輩は大袈裟なくらい持ち上げてくれた。それを恥ずかしく思うと同時に、こんな勝ち方はこれっきりだろうと午後の二回戦に臨めば、それも驚くほどあっさりと突破して、気付けば私は現在、ここ長野県インターハイ予選大会決勝戦の舞台の片隅に立っている。

(何だかなあ……)

シンデレラでももう少し段階を踏むだろうサクセスストーリー。しかし当然ながらそのまま勢いに乗って優勝なんて甘い話があるはずもなく、どうも如何に私の才能とやらが優れていても、それだけで最後までいけるほどのこの道は楽でもないらしい。

①①①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑨⑨

ツモ

〔発〕

(これ……かな)

打牌

〔発〕

最良と言つていい配牌と無難な捨て牌。おそらく、この手牌を見た百人のうち百人がこの選択を妥当と判断することだろう。常人であればまず間違ひのような無い手であり、そこで最も点数の高い形。加えて麻雀という競技の中においてもこの形の役満は待ち数が最多であり、それを2巡目の時点で聴牌できたとなれば、もはや己の勝ちを確信してもおかしくない。

でも――

「ロンです。鳴き一通混一色、5200点」

宮永咲 和了形

〔一二三四五六七八九発〕 〔発〕 ポン 〔南南横南〕

河

〔一九〕

「は、はいっ……!」

あからさまに狙い澄まされた一撃。素人である私にも、その和了形が最高形をあえて崩してのものであることは一目で理解できる。まるで私の捨て牌を事前に知っていたかのような奇妙な打ち回しは、傍目にはとても理解出来るものではなくても、撃ち抜かれた私から見ればこれ以上ない最善手となる。

(すごい!・なんで私の狙いが分かるんだろう?)

心底から感服する。私の目からは、私の打ち筋におかしなところは

何も無いように見えた。しかし彼女は事実としてそんな私を狙い撃ち、その証拠を堂々と私の目の前に晒している。

点数もそうだ。今の一撃で彼女の点数は私の倍近い数値となった。それはあまりに順当な結末。否、現時点でも我々の差を示すにはこの点差ではまるで足りないほど。初日の結果がおかしかっただけで、本来であれば私のような素人が並居る強豪を相手にすれば、こうなることは必然であったのだ。

「ツモ。6000オール」

宮永咲 和了形

〔1223336688北北発発〕〔1〕

河

〔発8〕

3巡目での和了。相変わらず一切の躊躇をした様子もなく役満手を放棄しての最速の和了り。けれど、既にその暴挙を咎める人間はここにはいない。それが単なる暴牌ではないことは、もはや誰の目にも明らかだからだ。

（山や手牌が見えてるのか、あるいは未来が見えているのか……）

どちらだとしても、あるいはその両方だったとしてもなら不思議ではない異常な精度の読み。私個人としては、山や手牌が見えても他人の捨て牌までは干渉できないと信じたいたので後者のセンを推している。何にせよ、彼女の麻雀が私では到底及ばない一つの境地に到達していることは間違いないだろう。

妹尾 配牌

〔九九九111999①④中白〕

再度配られた配牌を見る。配牌の時点で見つかった牌が3つ。これまでの配牌にも負けず劣らない素晴らしい配牌なのに、どうして微塵も勝てる気がしないのだろうか。それどころか、こんなにも分かりや

すく和了りやすい配牌なのに、もはや私には、次に切るべき牌すら分からなくなっている。

「……………」

ツモ

①

打牌

④

(みんなは一体、何を思って、どんな牌を選んでいるのかな……)

私の場合、丸い1を引いた。丸い4か中か白がいらぬ。中や白の方が多分大事。だから丸い4がいらぬ。なんて、自分でも自覚できるほど単純な考えで捨て牌を選んでいる。思考に10秒も掛けていない。けれど他の人は違うんだろうなあというのは、そんな私の何倍も何十倍もの時間を費やして捨て牌を厳選しているみんなの様子を見ればわかる。

河

福路

⑧

妹尾

④

宮永照

①

宮永咲

①

こうして全員の捨て牌を眺めても、彼女たちの真意は掴めない。字牌から捨てるのがセオリーだとは教わった。でも、三元牌と呼ばれる白、中、発の字はそれぞれみつつ集めるとそれだけで役になるから保持するのもありだとも教わった。単にその必要ないくらい手が良い

のか、それとも――

「あ……」

妹尾 手牌

{九九九111999①①中白}

ツモ

{中}

聴牌。多分、丸い①か中のどちらかで和了れる四暗刻。でも、既の中の方は2枚とも先に捨てられてしまっている。つまりは実質単騎待ち……宮永咲さんは、もしかして私のこの手牌を見越して？ 流石に考え過ぎだとは思うのだけど、仮にそうだったとしたら彼女には一体何が見えているのか。少なくとも、私にはそんな真似は無理だろうという確信がある。

しかし、私がそれに嫉妬を覚えることはない。そもそも素人であるこの私が、全国でも有数の打ち手であろう彼女たちに並び立つなどあまりに烏滸がましいこと。今の私の内に占めるのは、彼女たちに対する畏怖、あるいは尊敬に近い感情。それは山の頂を眺めるように、人間がこの領域まで至れるのかという、ある意味では失礼とも取れる純粹な羨望だけである。

(……………もし、読まれているとすれば……………)

必然、頭の中にそんな懸念が過ぎる。あれほどの精度で狙い撃ちができるのなら、つまりは今の私の手牌だって、彼女には透けて見えているのではないかという話。

実際、現状ダントツのトップである宮永咲さんがわざわざ第一打から1分近くも悩むのは何か意図があってもおかしくない。そして、仮に私の手牌が何らかの方法で覗かれてしまっているのなら、少なくとも普通にやっついてはいっつまで経っても宮永咲さんに敵わないのではないかと。

(……………)

ふと気がつけば、右端にある中の牌へと翳していたはずの指は、随



分と左の方へズレていた。この選択を、きつとみんなは暴挙だと罵るだろう。この点差、この状況下で、碌でも無い思い込みだけで、みすみす完成した役満を崩すなんて、それこそ初心者でもない——

「……なら、いいよね」

小さく、誰にも聞こえないように、本当に小さく独り言ちる。立場を言い訳に勝負を捨てるような真似、加治木先輩は怒りそうだなあと思う。でも智美ちゃんはいつもの調子で流しそうではある。どちらかが間違いなのか、どちらにも正解はないのか。いずれにせよ、一つだけ正しい言えるのは——このまま何もせずまごついていると、どちらにせよ和了れないという真実のみ。

（ここから、ワザと道を逸れたりしたら……一体どうなるんだろう？）

妹尾 打牌

①

「……………」

私が牌を手にとったまさにその時、ちらりと伺った宮永咲さんの様子は。

前半戦と相変わらず険しい表情のままながら、ほんの少しだけ、視線を右の方へ動かした——ような気がした。

「チー」

「……………!?!」

直後。

待っていました、と。まだ私が捨て牌を人差し指の腹で抑え付けているような段階、牌の絵柄を識別できるかどうかすら怪しい、そんな喰い気味のタイミングで宮永照さんがその牌を鳴く。

宮永照 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏〕 チー〔横①②③〕

そうして晒される一筒、しかしそれは一巡目で照さんが捨てた牌と全く同じであり、つまり彼女は一巡目に一度捨てた牌を、私の捨て牌を利用してわざわざ鳴き返したということになる。

それに一体どんな意味があるのか。いや、そもそもそんなことが可能なかすら今の私には分からない。けれど、分かる。分かってしまった。不思議と、なんとなく、直感的に。あるいは本能的に。

——まんまと利用された。それもきつと、私ではなく、私以外の誰かを狙うための駒として。

そして、この場面。この状況下において。2番手である照さんが狙う相手となれば、それは当然、

「……………」

宮永咲

〔四〕

しばらく悩んだ末に、再度手番が回ってきた宮永咲さんがゆっくりと牌を捨てる。しかし、

「ロン。自風牌ドラ6赤1で倍満。16000の1本場は1630

0」

「……………はい」

宮永照 手牌

〔赤五六九九1111西西西〕 〔四〕 チー〔横①②③〕

おそらくは彼女の狙い通りに、宮永咲さんは観念したように点棒を差し出す。あの宮永咲さんから再び直撃をしたことで、改めて彼女の恐ろしさを思い出す。

宮永照さん。試合前には、彼女こそがこの試合での要注意人物であると聞かされた。加治木先輩曰く、おそらくはどんな相手に対しても一定の成績を残せる狂った対応力の持ち主であると。

試合前までは流石にその物言いはどうかと思っていたのだが、こうして対面するとそうまで言われる理由が分かる。いくら妹さんで身内とはいえ、こんな凄い人を相手に普通に直撃が取れるのは色々とおかしい。いや、こんな打ち方が出来る人を相手に当たり前のように圧倒している妹さんがおかしいのか。どちらにせよ、彼女たち姉妹の争いが加熱するほどに、改めて自分が場違いなのだという実感が加速していく。

(これが、全国トップクラスの打ち手……)

厳密には、まだ一年生で無名の妹さんにそういった称号は不資格なのかもしれない。しかし、もはや妹さんが全国クラスの姉と互角かそれ以上の存在であるのは疑いようも無いだろう。

(どうしよう……)

けれど、本当にどうしたものか。妹さんの猛攻に対して、私の思いつく限りの奇策で対応したつもりが、それさえもお姉さんに見破られて利用されてしまった。

加治木先輩に伝えられたお姉さんの対応力。それはつまり奇策に強いということであって、ならば私程度の経験で彼女を超えられないのは必然。しかし真っ当に戦えば当然この私に勝ち目などなく——いよいよ何も出来なくなつて困窮する。

(素直に打てば妹さんに和了られて、道を逸れるとお姉さんに咎められる……)

どうすればいいのか。どうにもならないのか。曲がりなりにもこの舞台に降り立って、今更のように無力感を味わうのか。

それは本来、私が一回戦で噛み締めるべきだったもの。そうならなかったのは単に運が良かっただけ。それは分かっている。それは理解している。

でも、悔しい。そんなくだらしない理屈なんて抜きにして、ただただ悔しくて掌を握り締める。

嫉妬しないなんて嘘だ。私だって雀士の端くれ、こんな格好いい打ち方が出来るのなら私だってやってみたい。けれど事実として私にはそんなことはできなくて——私がつと前から麻雀をやっていたならこんな気持ちにはならなかったのか。それは分からないけれど。少なくとも、こんなにも後悔を残すような結末にはならなかっただろう。

（遠いなあ——）

既に手の届かない領域で尚も激しく殴り合う2人の姉妹を、私はすぐそばで遠巻きに眺める。いずれ必ずその場所へ辿り着くのだと、自らに言い聞かせながら。

☆☆☆

「お姉さん、ホントにあの咲ちゃんと互角以上に殴り合ってるじえ……」

優希が思わずといった様子で呟いた言葉に、私は全力で同意を示す。

いや、事前に本人から聞いてはいたのだ。今回の対戦相手である宮永照。彼女は宮永さんにも劣らない実力と、またそれを裏付ける実績もある強敵である。ともすればあの宮永さんですら負ける可能性がある相手であると、試合前から散々聞かされていた。

しかし、それでも。私はたとえ本人がそう言っていようとそれは謙遜の一種だろうと思っていた。まさかあの宮永さんが負けるなんてあり得ないと。ある意味では慢心に近い感情を、しかし私は心からの確信と共に信じ切っていた。

けれど、どうだ。いざ試合が始まってみれば、繰り広げられたのは私の想像を遥かに超える異次元の戦いと、それに当然のように適応して互角に殴り合う二人の姿。信じられない、どころではない。もはや己が正気すら疑うような場合は、まさに私の見込みの甘さの証左でもある。

「また役満——それぞれ緑一色に四暗刻に九蓮宝燈に国士無双ですか……国士無双は確かこれが初めてですが、もはやそんなことはどうでもいいですね……」

和の言葉。台詞から察せられるように、あの和ですら役満の聴牌に何の感情も抱いていない。疑問は既に出尽くしている。考察なんて陳腐なだけ。須賀くん曰く、宮永さんはちよつとしたアクシデントで控室に戻るタイミングを逸してしまつたらしいが、仮に戻ってきていたとしても、私には何も言えることはなかつただろう。

「……どうなるのかのう」

「……」

投げやりに、自棄つぱちに、諦めたようにまこが言う。その対応も正解だ。あんな戦いに、私たち凡人が何を言っても変わらない。変えられない。運命を覆せるような人間なんて、それこそモニターのその先にしか存在しないのだから。

でも——

「信じましょう」

「ん？」

「信じるのよ——あの子は、宮永さんは、必ず勝つと言っていた。だから信じるの。その言葉が真実だと。この世界に訴えるように」

いつかあの子は言っていた。人間の意思は、時に運命すら覆しかねないと。私は運命なんて分からない。意思がどうしてそれに影響するのかなんて知らない。でも、他でもない宮永さんの言葉だから——私たちがそれを信じないで、一体どうするのか。

「……そうじゃな。その通りじゃ」

私のその意思が伝わったのか、まこはすぐさま前言を撤回して姿勢をきつちりと正す。もしや、意思が運命を変えるとはこういうことな

のか。そうであるならこれで2人、いや、この部室の全員で6人分。応援してくれる学校のみんなも含めて文字通りの百人力。運命というモノを感じるには、申し分ない数値ではないだろうか。

『ツモ。 国土無双、 80000・160000』

その意思に応えたのか否か、まさしくそのタイミングで宮永さんは役の名が示すように類稀なる実力を魅せつける。その和了は、対戦相手を突き放すように、突き落とすように、まるで彼女の勝利という未来を、うんめい確とあの場に刻み付けるためのもののように見えた。

決勝戦先鋒戦南一局終了

風越 46000

鶴賀 55400

龍門湊 130700

清澄 167900

## きつとそうだと信じたあの日

卓上で複雑に絡み合う線が、視界全体を埋め尽くす。

私が運命と定義する何か。因果、未来、ツキ、流れ、名前は何でもいい。それは私にとっては生まれた時から見えていたもので、また同時に自然と干渉できるものだった。

ただ、干渉と言っても、語感から想像するほど大したことはできない。これら無数に流れる糸の一つを絡め取り、あるいは撓ませてなんか上手いことする。理屈なんて説明できないし、自分でもどうしてこのようなことが出来るのか分からない。しかし事実として私はそれを当然のように成し遂げ、それにより誰かに致命的な不幸を撒き散らすことがなかったことだけが僅かばかりの慰めである。

あからさまに特別なこの力、それに優越感を覚えなかったと問われると嘘になる。けれどそれ以上に、煩わしい出来事の方が多かった。ババ抜きは悉く初手で全て捌け、アイスの当たりは百発百中。それ以外にもこの力は様々な局面において割と都合良く調整が可能で、特に幼い時分には自制も最低限のものでしかなかった。必然、そういったものには敏感な子どもの中に、私が集団に中々馴染めなかったのは自業自得とも言える。

麻雀を始めるようになった頃には、私がこの力を麻雀以外で発揮することはなくなっていった。具体的にどののような経緯があったのかは割愛する。一つ言えるのは、それは決して愉快な出来事ではなかったという事実……いや、今更あえて隠すようなことでもないか。

と、言っても、簡単な話。男女七歳にして席を同じにせず——ある程度分別が付く歳になると性の違いから男が女を避けるように、あるいは女が男を排斥するように、私という人間もそうであったというだけだ。異端と思われる程度ならまだマシで、酷いモノになると面と向かって化け物と評される。いや、流石に小学校低学年にそこまでの語

彙力は無く、実際には『へんなの〜』くらいのノリであったが、しかし幼心にはその程度が思つた以上に堪えるもので、およそ一年ほどの無様を晒した後、学年を上がる頃には私は、まるで傷痕をでも隠すかのようにこの力を隠すようになっていた。

幸か不幸か、その目論見は非常に上手くいった。隠すことなんて簡単だ。他の誰もこの力を持たないのだから、ただ見ないふりをすればそれでいい。発覚時期が早かつたのも幸いした。小学校に上がったばかりの頃の子どもなんて、まだロクに物心がついていないような時期。クラスも変わって数週間もする頃にはそんな出来事はすつかり全員の記憶から忘れ去られ、そうなるに輪に加わる機会もそれなりに訪れて、意識さえすれば溶け込むことは容易だった。そうして良くも悪くも早熟だった私は、まるで騙すようにして急速に周囲に馴染んでいった。

運動は苦手だった。激しく動いて、あるいは感情が昂って、何かの拍子で力が暴発するのを恐れたから。本の存在を知つたのはその頃だ。露骨に運動を避ける私を見て、読書好きであった姉が善意で薦めてくれたもの。よくある子ども向けの冒険ファンタジー小説。具体的にはデル○ラクエスト。学校の図書館にもあつたそれをおよそ三ヶ月で読破して、II以降の作品をお年玉を使用して揃えたのは記憶に新しい。

以降、読書は自他共に認める私の趣味となった。しかし、そういった趣味はどうしてもお金が掛かるもの。その時点で主に割と子どもに甘く金銭管理が雑な父のおかげで5万円そこそこは貯まっていた気がするお年玉。しかしそれをたつた数日で使い切りそうな勢いで浪費をする私を見て、心配になった母が賭け麻雀を名目に一度そのお金を取り上げようとする。

——そこから一ヶ月。地獄のような鬨ぎ合いが始まつた。母の最大の失敗は、打つ前に私へ麻雀のルールをきっちり教えてしまったこと。お金なんて将来に関わるモノ、如何に理不尽と思われようとも、妙な言い訳なんか用意しないで素直にすぐさま取り上げてしまえば良かったのに。下手に賭け麻雀なんてご立派な名目で勝負を挑んで



しまったせいで、10000点10000円という雀荘にも中々無いであろうあまりにもアレなレートが家族麻雀として成立してしまったのである。

そして、あの父に引つ掛けられるだけあって、母は驚くほど真面目で融通が利かなかつた。具体的には、初手役満とかいうあまりにも悲惨な事故をなあなあにせずに認めてしまったのだ。元プロとしてのプライドもあつたのだろう。2戦目以降、油断をしなければ互角以上に戦えてしまえることも災いした。結局、その日の収支はおよそトントンで、勝負は次の機会に持ち越されるようになった。それが第2の失敗。ちなみに母はこの後、だいたい20くらいの失敗を重ねる。

母の負債が10万を超えた辺りで、何かのきっかけでこの地獄を知つたらしい父が参戦し借金については有耶無耶になつた。そして母が能力全開の私と互角だつた事実から、麻雀に関してだけはこの力を思う様振る舞つて問題ないことを知つた。これに関しては環境が悪かつたと思う。後に参戦した父も姉も同様にそうだったのだから、勘違いしても無理はないだろう。いや、勘違いですらないのかもしれない。こんな私ですら、例の小鍛冶プロに勝てるのかを聞かれると首を傾げざるを得ない。

そんな経緯で無数の宝物ぞうしよを抱えた私に、ある日一人の友人が出来た。夏休みになつて家まで遊びにやつて来た、同じく読書が趣味だという親戚の子。尤も、単に運動を厭う私と違って彼女の場合は足が不自由という止むを得ない事情があるので一緒にするのは失礼かもしれないが、とにかく自分でも驚くほど私と彼女は話が合い、一緒に遊ぶようになるまでそう時間はかからなかつた。雷かみなりが落ちる——なんて、冗談みたいな不運に見舞われて、私があの子を失つてしまうまでの、束の間の幸せな記憶である。

☆☆☆

宮永咲 配牌

〔北北東東西西南南南南発発白〕

「……………」

あの日から。

私の力には、ひよつとしたら “反動” があるのではないかと思いはじめようになった。

おそらく、実際にはそんなものは無いに等しいのだろう。しかし、そう思い始めるようになったこと自体が、私にとっての転落の始まりだった。

何かが上手くいかない。少しでもそう思ってしまったえばそれがその通り現実になる。テストで良い点が取れた、ご飯が好物だった、なんて些細な喜びで多少持ち直しても、また一度挫けてしまえばそれまで。不幸にも、本の虫であった私は無駄に語彙力も豊富だった。“揺り戻し” という言葉の意味とその概念をきっちり理解していた。

度重なる不運に嫌気が差し、私は半月もしないうちに家の中に閉じこもるようになってしまった。みんなは友達を失ったシヨックによるものと認識していたけどそれは違う。怖かったのだ。もしもあの事故が、私の力によるものだと私自身が認識してしまえば、この身にどのような罰が降り注ぐのかと恐れていた。それがひよつとしたら、あの子の時のように周りを巻き込んでのものになるのではないかと。けれどそう鬱々と閉じ籠ること自体が、そんな思考をますます加速させた。私のせいだ。私のせいだ。私が私が私が。そんなことを延々と考え続けて、いつそ一思いに——いつしかそう願うようになってまた一年。しかしいつまでもいつまでも、その瞬間は終ぞ訪れることはなかった。

宮永咲 2 巡目 手牌

〔北北東東南南南西西西発発白〕

ツモ

〔白〕

打牌

〔西〕

ある日、部屋にあったトランプを手を取った。適当にシャツフルして捲る。スペードの1。再び捲る。スペードの2。捲る捲る捲る捲る捲る捲る捲る捲る捲る捲る。最後に捲られた2枚のジョーカーをトランプごと投げ捨てて、私は力が失われたわけじゃないことを思い知った。また同時に、あの事故が偶然によるものであるということも知った。

でも、偶然とはなんだろうか。私のこの力は、そんな偶然をこそ都合良く捻じ曲げるもので。ゆらゆらと、ふらふらと。何も分からないままに家の中を練り歩く。その日、親は自宅に居なかった。火事による影響は私の想像よりもずっと大きく、家の生活リズムを塗り変えてしまうほどだった。

家を出た。いい天気だ。空は青く、電柱で小鳥が歌っている。天を仰ぐと、その瞬間に無数の小鳥が空高く飛び上がった。私が意識を向けたからだろうか？ つかそんな話を本で読んだことがある。真偽は知らないし、そんなことはどうでも良かった。

何となく思い立って、飛び立つ小鳥を追いかける。自分でも何故こんな行動に及んだのか分からない。ただいくら追いかけても追いかけても小鳥は天高くへと離れていき、決してその距離が縮むことはない。

宮永咲 3巡目 手牌

〔北北東東南南南西西発発白白〕

ツモ

〔1〕

打牌

〔1〕

嗚呼——あの鳥に比べて、私はなんて惨めで醜いのだろうか。たった一つ、人とは異なる感覚を持っているだけで思い上がって、それで

この世の全てが思うがままと自惚れて。

人は決して鳥にはなれない。多少人とは違ったとて、私なんてその程度だ。空を飛ぶことを夢想して、しかし叶わず地べたを這いずり回る虫。否、動くことさえ厭う私は――

『そらっ!!』

『え――?』

人が、空を飛んでいる。

そんな目を疑う光景に、思わず呆然として立ち止まる。そしてここに来てようやく、私がいっつの間にか近所の公園まで来ていたことに気づいた。

『へっへー。どうだ、オレが今んトコ最高記録!』

『すっげー、やるじゃん!』

『ぬぐぐぐ、次は僕がやる!』

そして、件の人物――空飛ぶ少年はといえば、ブランコの方から駆け寄ってきたたくさんの友達に迎え入れられその輪に交ざる。

『……………』

もしかしなくても、その少年はブランコから勢いよく山なりに飛び出したのだろうか。何と危なっかしい。私の目の前、つまり私の立っているこの場所からブランコまでは優に5メートルはある。そんな距離をその身一つでひとつ飛び。命が惜しくないのだろうか。

胸が騒つく。血の気が引く。蛮勇でさえない。そもそもその行為に何ら意味など無く、失敗して怪我をしてもただ愚かだと嗤われるだけだ。でも、当の本人は呑気に笑っていた。心底から楽しそうに。よもや訪れるかもしれない運命など、まるで最初から存在しないかのように。

『……………』

しばらく遠巻きに、その少年を眺める。これもどうしてそんなことをしたのかは覚えてない。多分、ただ少しだけ気になった。言っつしまえばその程度の動機。如何にも悪ガキっぽい印象を受ける、おそら

くは地毛だろう自然な金髪が特徴的な少年。年齢は私と同じか少し上くらいだろうか。しかし共通点と言えばそれくらいで、あらゆる意味で、彼は私と、何もかもが対照的な位置に存在しているような人間だった。

宮永咲 4巡目 手牌

〔北北東東南南南西西発発白白〕

ツモ

〔中〕

〔聴牌……〕

多分、きつと。一目惚れだったんだと思う。人は、自分に無い要素を持つ存在に惹かれるという。だから、私とその少年を目で追うようになったのは必然で、こうして結ばれたことは偶然。でも、私の見えていた運命では、その未来に辿り着く可能性は限りなく低かった。なればこそ、私がこの未来に辿り着けたのは、人の意思が、誰かの思惑があつてこそ。

運命は人の意思によって歪められる。かつて私はそう言った。

運命は人の意思によって変えられる。いつか姉はそう告げた。

些細な違い。単なる言葉遊び。何も違わないと誰かは言う。でも、違う。この力を忌避している私には、運命の流れ、その大筋を変えることは出来ない。言うまでもなく、その結果を恐れているからだ。故に、運命を変えることができるのは、いつだってそれを運命と観測できない誰かだけ。何をしようと、何が起きてもその行動に迷いを抱かない、抱けない。そんな人間にこそ運命を変える権利がある。それは決して、今の私には出来ないことだ。

そして同時に、それこそが私の、あるいは私のこの力の、おそらくは唯一にして最大の弱点となる。

「……………」

宮永咲 打牌

〔南〕

「ロン」

「――」

宮永照 和了形

〔一一二二三三三九九九七八九南〕 〔南〕

「12000」

「……はい」

（油断、をしていた……わけでは、ないんだけど――）

どこか違和感のある和了り。あまりにあっさりとして「流れ」を堰き止められたからか、悔しさよりも先に疑問が湧き立つ。

「……」

なんだろう。上手く言えないが、いつもの気持ち悪さが無いと言うか。もうなんかネチネチと隙間を縫うような嫌らしい感覚が驚くほど感じられない。そう、例えるならそういうのを放棄して、無理やり和了ったような、そんな感じの。

どういふことかと姉を見れば、彼女は私を一瞥して無駄に綺麗なウイנקをする。煽りかと思つたのも一瞬、閉じた片方の眼をいつまでも開かない彼女を見て、すぐさまその理由について思い至る。

（「初見殺し」……）

常時拡大してる視界をあえて制限することでその分いくらかの力が戻ってくるという、姉の有する真正正銘の最後の奥の手。またの名を自爆戦術。繊細なコントロールが自慢のピッチャーが、ありとあらゆる制球を彼方へと投げ捨ててど真ん中に全力投球するかの如き暴拳の果てに得られる力。失つたモノに比べてまるで釣り合いが取れていないひと時の快樂。

（残り2局――てつきり私、

オーラス

ラス親を止めるために使ってくるものか

と……)

いや、だからこそなのか。であれば、確かにその目論見は成功していると言える。しかしそれは無謀に過ぎる。たかが2局。されど2局。少しでも点数を稼ぎたい団体戦、ここで捨てるにはあまりに惜しい。

無論、姉とて馬鹿ではない。初見殺しと公言しているだけあって来ると分かっていれば容易く避けられる凶撃。当然私にも警戒されているオーラスを避け、なおかつ局数が長引かないように点数を稼ぐのであればこのタイミングでしかないというのも理解はできる。

(でも、納得は——だってこのタイミングで使うかな普通)

視界を制限する——などと軽く言うが、要するにそれは彼女がこれまで積み重ねて来た戦法、姉の麻雀全ての否定に等しい。

如何にもな様子の姉を見るに、この和了りで削ったのは視界の丁度半分。それが具体的にどの程度のことなのかは私には分からない。けれど、この状況、この場面で流れを変えるほどの和了りとなると……そう安いものではないはずだ。

「……………」

南3局 宮永咲 配牌

{四四四4444④④西西西南}

南3局

風越 46000

鶴賀 55400

龍門洩 142700

清澄 155900

(13200……か)

満貫一発で引っくり返る点差。思えば、随分な接戦になってしまったものだ。本音を言えば、10万は流石に努力目標にしても、それに近い数字は稼げるだろうと思っていた。しかし、蓋を開けてみれば1

0万点はおろか、途中経過とはいえ逆転された場面まである始末。

単に私の想定が甘かったのか、それ以上に姉の成長がそれほど著しいのか、あるいはその両方か。

(どうしようかな……)

良くも悪くも、私の麻雀における対戦経験は家族のモノに偏っている。だからこそ異常な練度で研磨されたとも言えるし、だからこそ引き出しが少ないとも取れる。何にせよ、その性質上対戦を重ねるほど強化されていく姉と比べると、私の成長速度は非常に緩やかなものとなっている。

否、私の実力は、むしろ今が頭打ちであると表現してもいいくらいだ。考えれば考えるほど、麻雀の腕が磨かれれば磨かれるほどにおそらく私の力は相対的に弱体化していく。今の曖昧な状態、このくらいの塩梅がベストであるという自覚もある。無論、実はこの能力がまだ途上であり、以降にとつともないブレイクスルーが発生する可能性はゼロではないのだが、少なくともそれは今ではない。

しかし、

「……………」

(——やっぱり、いつも通りが一番しつくり来るかな)

私のこと。姉のこと。両親のこと。恋人のこと。そして部長のことなんかを色々考えて、その上でそれら全てを一旦思考の外に追いやる。結局のところ、麻雀なんて個人競技だ。今まさに団体戦なんてその持論から外れた舞台に立っているわけだけど、それでも私はそう認識している。

団体戦のメリットとして浮かぶのは精神的な余裕や4倍の点数だろうか。しかしそれは同時にデメリットにもなる。特に部長はそういうプレッシャーに負けそうで今から心配だ。私の場合はどうだろうか。私もあまり強くない気がする。いつも通り、普段通りに戦えば、緊張を容易く誤魔化せるだけの実力が、この私にはあるだけで。

「……………」



〔四四四4444④④西西南〕

ツモ

〔四〕

「カン」

何処となく不吉な配牌。しかしそんなことは私には関係無く。当然に、必然に。たった一枚の牌を山から引き抜く。それが何枚であろうと何処に存在しようとか関係ない。『ある』と言う可能性さえあれば、私はそれを当たり前に引ける。

宮永咲 嶺上ツモ

〔④〕

「もいっこ、カン」

姉を見る。相変わらず片方の目を閉じたままで、珍しく視線が露骨に私へと向いている。それが先の和了りの代償なのか、単に一つになつた瞳の動きから推察できるだけなのか私には分からない。でも、それもおそらくはもう、無意味だ。

宮永咲 手牌

〔④④④西西南〕 暗槓 〔裏四四裏〕 〔裏44裏〕

宮永咲 嶺上ツモ

〔④〕

「もいっこ、カン」

運命が見えるが故に、運命を変えることを恐れる私。ならば私の得意分野とは、その運命を正しく導くこと。既に定められた結果を、よき盤石なものとして補強する。だから私は強く在る。如何に矛盾してようと、それが私の麻雀だ。

宮永咲 嶺上ツモ

〔西〕

「とどめ、カン」

宮永咲 手牌

〔南〕 暗槓 〔裏四四裏〕 〔裏44裏〕 〔裏④④裏〕 〔裏西西裏〕

一度は偶然。二度は奇跡。ならば三度は？ 四度目以降は？

確率というものは、度が過ぎると一気に陳腐なものと化す。言い方を変えるなら、あまりに重なりと実感が湧かなくなる。私が槓子を好むのは、それが良い塩梅で認識を歪めるのに役立つからだ。

三度目の偶然はイカサマを疑われる。しかし四度目であれば、それは最早その人物に取つての必然となる。必然とは即ち運命の導き。ならばこそ、それを妨げるのは、決して容易なことではない。

「――嶺上開花。四槓子四暗刻単騎、8000・16000」

宮永咲 和了形

〔南〕 〔南〕 暗槓 〔裏四四裏〕 〔裏44裏〕 〔裏④④裏〕 〔裏西西裏〕

南四局

風越 38000

鶴賀 47400

龍門洩 126700

清澄 187900

（妨害はない、か……）

まずは無事に和了れたことに安堵する。和了れる自信はあったのだが、何か企んでいそうな姉が何をするか分からなくてつい過剰に警戒してしまった。警戒し過ぎるのは私の悪い癖だ。分かってはいるつもりなのだけだ。

オーラス 宮永咲 配牌

〔一二三四赤五東発発発白中中中〕

オーラスでも配牌は相変わらず。半荘一回隔てても継続している時点で予感があったのだが、流石にここまで妹尾さんの豪運が凄まじいものだと思つてなくて正直かなり驚いている。来年はまだしも、再来年にはこの豪運を適切に使い熟す熟練者が君臨すると考えると、これは中々どうして恐ろしい。

いや、来年以降は姉がいなくてだけマシだろう。今現在私が苦戦を強いられているのは、どう考えてもこの無駄にウイंकが綺麗な姉が原因だ。どうでもいいが、どうやったらあんなに綺麗に片目を閉じられるんだろうか。私がやったら眉間に皺が寄ったり、開いたもう片方の目が半開きになったりするの。いや本当にどうでもいい話だけど。

宮永咲 打牌

〔赤五〕

「ポン」

「はえ……?」

宮永照 手牌

〔裏裏裏裏五北北北〕 ポン 〔五五横赤五〕

どこか覚束ない動きで私の捨て牌を取り込んだ姉の姿に、自分でもびっくりするくらい間の抜けた声が漏れ出る。

（何この鳴き……?）

無理鳴きというか、何で槓子をわざわざポンしたのでらうか。ポンした巡目では加槓も無理、槓ドラなんて今更だし、少しでも手が進む明槓の方がいい気がするんだけど。

「……」

宮永照 打牌

〔発〕

「……………？」

そんな姉は、ちらりとわざわざこちらを一瞥して、これ見よがしにゆつくりと手牌の一枚を河に放る。……え、まさか鳴けど？ 正直もんのすごく怪しいんですけど？ いや、確かに嶺上牌は有効牌だから鳴かない理由はないんだけど……。

(……………)

「……………カン」

だいぶ悩んで、少なくとも損はないだろうと判断して姉の捨て牌を鳴く。嶺上牌は白、順当に今私が必要な牌の一つ。別に何か仕掛けられていたというわけでも無さそうに更に頭が混乱する。これではまるで、ただ私の手を進めただけではないか。

(……………)

考えて、考えて、考え抜いて。やはり順当に一つの牌を手取る。意外性も面白味もまるで無い真つ当な選択肢、だが、ここに来て奇を衒う理由もない。姉が何を企んでいようと、何をしてこようと真正面から叩き潰す。私は当然にそれが可能で、シンプルが故に今の弱体化した姉では抗えない。同時に、私はそれが一番強い。

(よく分からないけど——ここまで整えば、もう速度で負けることはない)

和了までにはあと1巡か2巡、あるいは3巡を要するだろうか。しかしいずれの場合にしても、まず間違いなく姉よりは先んじて和了ることができる確信がある。そして、姉に如何なる企みがあろうとも、先に和了りさえすれば全ては無意味と化す。

宮永咲 打牌

〔四〕

だからこそ私は、最早お前にできることはない、それを証明する

かのごとく自信満々に河へその牌を叩きつける。だからこそ——この先の展開は、私にとって、本当に予想外の出来事だった。

「……ツモ」

にやりと笑う。基本どこか達観した様子の姉が、ごくまれに見せる年相応の嫌らしい笑み。調子に乗ったウチの部長とも僅かに共通する部分がある。

「え？」

イタズラが成功した悪ガキのような、嫌味ながらも不思議と苛立ちが湧かない笑顔。しかし、それ自体は問題ではない。それよりも。何よりも、まず一番予想外だったのは——

福路 和了形

{2223334446688} {8}

「緑一色、8000・16000、です……!」

その発言の主が、そんな如何にもな表情で笑っている姉ではなく——そこから正反対の場所に座っていた女性から、発せられたものだということである。

先鋒戦終了

風越 70000

鶴賀 39600

龍門湊 118700

清澄 171900

☆☆☆

「……どういふことなの？」

試合が終わって、会場からも立ち去って。選手もそれぞれの控室に戻ろうとしたまさにその瞬間、丁度二人きりになったタイミングで妹に呼びかけられる。

何を指しての発言なのかも定かではない、随分漠然としたその質問。けれど今このタイミングで聞きたいことは察せられるので、その旨だろうと私は回答する。

「私の奥の手だけ——実は、同卓した全員に有効なんだ。だから、それで……」

「それ、嘘だよな？ 流石の私でもそれくらいは分かるよ」

なんか秒で見破られた。一応嘘じゃないのに。いや嘘言ってたけど。でも内容自体は嘘じゃないんですよ？ 全員に使えるのはマジです。けれど妹はそんな反論を言わせる暇も与えず、詰め寄るよう言葉を重ねる。

「南二局のあの和了り。多分だけど、アレで全部使い果たしてたんだよね？」

「……」

「あまりにもあつさり和了られたからおかしいとは思ってたんだ。あの時点では逆転も十分に視野に入った。だからお姉ちゃんは、奥の手をあのタイミングでチラつかせて警戒を煽り、ワザと点数を下げたり、これ見よがしに片目を閉じることで、『まだ何かがある』と思わせ私に半荘を流させようとした……違う？」

「……さて、どうだろうね」

違わない。まさしくその通りだと、モノクロの世界で咲を見つめる。やはり、この妹は本当に恐ろしい。家族だからこそ、私の思考や実力を完全に読み切っている。後にも先にも、ここまで私のことを理解している打ち手は彼女を除いて存在しないだろう。確かに彼女の実戦経験は私達家族に偏ってはいるが、それ故に今の私では彼女に届かない。それは最初から分かっていたことだった。

(でも、それでも……)

それでも、元より勝ち目なんてなくても、その上で彼女に勝つ方法を模索するとなれば——それは彼女の自滅を狙うより他はなく、後半の試合運びは、全てそのためのものと言っても過言では無い。咲の言う通りに敢えて南二局での点数を引き下げ、とにかく鳴ける牌はなるべく不可解に見えるよう全ツツパ。それが功を奏したのか、最後の最後は、確かに私の思う通りに事が運んだと言えるだろう。でも。

「そこら辺は想像にお任せするけど、一つだけ訂正しておこうかな」  
「……？」

「確かに、咲の言う展開を私は望んでいた。それが上手いこと咲の不安に繋がって、あの和了りを成立させたのかもしれない。あるいは、オーラスになっても全員の手牌は役満寸前だった。だから実はまだ私に残されていた最後のごく僅かな力が働いて、それによって彼女は和了れたのかもしれない。でも——」

そこで一度言葉を区切り、会場から伸びる長い廊下の先、福路さんが去っていった方向を眺める。咲も私に釣られてその方向を怪訝な顔で見つめたところで、私は改めて言葉を紡ぐ。

「福路さんは、あの状況下にあってもなお、最後の最後まで諦めなかった。その執念が、最後に私たちを凌駕した。実態はどうあれ、真相なんてそれでいいんじゃないかな」

「——」  
その結論は完全に思考の外だったのか、妹は呆気に取られたという顔をして、軽く咽せて吹き出してしまう。そして珍しくふふふと少しだけ含み笑いをすると、何かしら吹っ切れたかのように、  
「そっか、そうだね。きつとそうだよね」

そう言って、笑いながら彼女は会場を後にする。これまでの家族麻雀では見る事がなかったどこか満足そうな彼女をその姿が見えなくなるまで見つめ続けて、ようやく私はどうにかこの試合を乗り越えたのだと、心底から安堵してその場に崩れ落ちるのだった。

## 何かどことなく安堵するこの日

国広 配牌

〔五12378⑧北北東東西南〕

やっぱりこんなものだよなあ、と。自身の配牌を見てつくづく思う。

つい十数分前までこの卓で行われていた、この世の地獄を凝縮したような先鋒戦。あの照さんが散々『強い』と評するだけあって、自分の中に少しだけ残されていた甘い考えや常識なんか完膚なきまでに粉碎された宮永咲さんの死闘。

17万と12万。試合の結果だけを見れば惨敗なのだが、あの戦いを見てそう表現できる人間は素人以外の何者でもないだろう。最早トブことが当然と言っているあの状況、生き残っただけ奇跡なのに挙句プラスで折り返すなど人間技じゃない。勿論、そんな環境を生み出した張本人である妹さんこそが何よりも恐ろしいのは間違いないのだが。

国広 6巡目 手牌

〔12378北北北東東西南〕

ツモ

〔西〕

（聴牌。これも相当早いはずなんだけど……）

河が2段目に行かないうちに聴牌。中々見られないだろうかなりの上振れなのに、直前の対局があまりに酷すぎてこの幸運も霞んでしまう。しかし、まさにその対局の影響で速度ばかり追及したせいか迷彩も何も無い素直な染め手となってしまったため、まず直撃は取れないと見た方がいいだろう。



(……………)

染め手は鳴きを絡めても成立する分比較的作りやすくその割に高打点で、何より見栄えが良いので初心者から上級者まで好まれている。

反面、染め手はその性質上捨て牌に特徴が出やすく狙いや待ちが読まれ易い。具体的にどの待ちなのかはまだしも、萬子索子筒子のいずれかで染めていることくらいは初心者でも簡単に推察できるだろう。

「ノーテン」

「ノーテンじゃ」

「聴牌」

「ノーテンです」

(……………ま、こうなるよね)

故に、染め手の待ちはこのような事態が頻発する。特に今回のような早い巡目での聴牌の場合、立直をせずともボクがツモ切りを繰り返したり索子が捨て牌に交ざって来ると尚更警戒されて和了れなくなる。

東一局から流局での親流れ。なんとも締まらない結果による始まりだが、逆に安心する。少なくとも、先鋒戦の時のような出鱈目な存在がこの場にいないことが分かったのだから。

(よりにもよって一番上手い人が清澄だけど……………この分なら、まあ何とかかなりそうかな)

良くも悪くも堅実な打ち手しかこの卓にはいない。強いて言えば清澄の次鋒の人がおそらく透華とも真つ向から打ち合える熟練者だが、だからこそここで無茶をしてリスクを取る選択はしないだろう。

主にチームメイトのせいで搦手ばかり鍛えられているボクだが、それでも真つ向勝負では中々のものと自負している。具体的には、照さん曰く『全国上位クラス』である透華に10回に一度は勝てる程度……………だろうか。尤も、透華は割と本番に弱いタイプなので実際にやってみるとどうなのかは分からないが、最低限この卓でカモられないだけの実力はあるはずだ。

「ツモです。1300・2600。ありがとうございました」

「ありがとうございます」

「お疲れさん」

「……ありがとうございます」

結局、山もなくオチもなく。何一つとして予想から外れる事態もな  
いままに次鋒戦は終了を迎える。最初の想定通り、地力が高い清澄の  
人がやや稼いであとはほぼ現状維持。理想とも言っていない試合結果  
なのに、どこか物足りなく感じてしまっている辺り、ボクもつくづく  
非常識に慣れてしまったんだなあと、なんとも微妙な気持ちになるの  
だった。

次鋒戦終了

風越	65200
鶴賀	37400
龍門渕	107900
清澄	189500

☆☆☆

『清澄高校中堅に登録されている片岡さんですが、ある意味では咲以  
上に厄介な存在であると言えるでしょう』

いつもの調子で照さんが告げたその言葉は、事実上の敗北宣言と  
言っても過言ではないだろう。

「はいドーン!! リーチ一発ツモドラ3、18000!!」

中堅戦東一局は、そんなあからさまに調子に乗ったそんな発言から  
始まった。

(マジかよ……)

圧倒的トップが起家から親っ跳で連荘。状況的に勢いづくのは当  
然だし、それをマナー以外の理由で咎めるつもりもない。もっと言う  
なら、この展開は予想していた展開の一つではある。しかしながら、  
実際にこうして対面してみると理不尽としか言いようがない。

『東場に強くなる』——だったか。シンプルにうざってえ……』

なるほどこれは厄介だ。何せただのツモのみがリーチ一発ドラ3なんて雑な上乘せで6000オール。衣のような陰湿さは皆無で、照さんのような鋭さもない。ただひたすらに上から殴り付けるだけの派手さ・力強さは、どこか透華や例の妹さんに通ずるものを感じる。

新道寺のようなややこしい条件は不要で、単純明快故に穴らしい穴も無く、弱点が明確だからこそ舞台上では無敵。流石に現時点だと“実力不足”というもつと根本的なところに横穴が空いていてそれが隙となるらしいのだが、それもコイツが今後成長していけば分らない。牌譜を見るだけでも目立つ南場のミスをほんの少し減らすだけで、彼女は全国でも上位に君臨するような雀士となり得るだろう。

加えて、現状が非常にまずい。この試合、ここまで圧倒的な点差がついている状況だと、ちよつとやそつとでは清澄が優位という“流れ”は変えられない。例の妹さんや衣、照さんとまでは行かずとも、透華レベルの実力があればそれも強引に引き戻せたりもするのだろうが、あいにくと俺にはそこまでの力はない。

「ま、だが……おつと」  
「？」

ついつい口に出してしまつて慌てて手元を抑える。当然だが、発言一つでも控えるに越したことはない。こと麻雀となると照さんが基本ポーカーフエイスを崩さないように、顔や態度は思っている以上に相手に伝わりやすい。言葉なんてもつと露骨に判断材料へと繋がる。これは極端な例だがたとえば対戦相手が『へっへ、こりやツイてるぜ』などと言いながら萬子や索子ばかりを捨てていれば、その人物の手牌さえ透けて見えることだろう。

尤も、そういった発言や態度をブラフに使う行儀の悪い雀士もいるにはいるのだが、幸いと言つていいのかこの大会では舞台が舞台故にそういう雀士にはまだ遭遇したことがない。まあ、その手の雀士は打ち筋が捻くれている場合が多く、俺や照さんなんかはむしろその方がやりやすくなるのだが。

一番困るのは、今まさに暴れている片岡のように、素直に地力で圧

をかけられること。そうなるこちら側が差を埋めるために無理をする必要がある、その隙を狙われたりなんかすると目も当てられない。特に照さんが相手だと地力も負けてる上洞察力が高過ぎてビツクリするくらい勝てないのが現状なわけだが、それに比べるとこの程度は児童戯のようなもの。厳しいのは確かだが、一度の親番を乗り越えれば後は自ずと機会が訪れる分、そのチャンスさえ与えられない衣よりはかはいぶマシだ。

(まあ、照さんに言わせれば、衣も分かり難いだけでちゃんと穴はあるらしいけどな。その辺りも含めて、本当にあの人が味方で助かったぜ)

衣の力は分かりやすく強大だ。照さんが居なければ、彼女こそが無敵の存在だと錯覚しておかしくないほどに。

彼女の力を当てににして、トントン拍子で勝ち抜いて。それで思った以上に魔境だった全国で俺やハジメくん辺りが飛ばされて敗北する。そうなる衣を先鋒に回す必要が出てきて、対オカルト以外では成績が振わない別の高校へ行った照さんとぶつかって惨敗。そんな十分にあり得た未来を辿った場合に、俺は衣に掛けるべき言葉が何一つとして思い浮かばない。

話がそれってしまったが、要するに今はまだ苦境でも何でもないということ。如何に東場のコイツが強くても、真に無敵の存在などあり得ない。それは照さんがこれまでに散々証明して見せている。ならば俺は彼女の後輩として、その可能性をただ信じて突き進むだけだ。

「おっと、それだ。ロン、1000点」

「じえ……!?!」

一局の様子見を経て、鳴きまくり晒しまくりの見苦しい手牌で、どうにかこうにか一度の和了りをもぎ取ることに成功する。幸いにも片岡は大多数の雀士同様に『鳴かれると調子を乱す』タイプだったらしく、和了自体はそこまでの難易度ではなかったが、だが困ったことに、彼女は調子が乱れても勢いが止まった感じはしない。そこは流石にあの妹さんのチームメイトなだけあるだろう。

(……)は静観だな。無理をすれば勝てないだろうが——こ

の点数、それ以上に事故が怖い)

怯えていると嗤ってくれてもいい。今でも鮮明に思い出せる去年の大会の記憶は、深い後悔とともに身に刻まれている。

清澄の大将がどんな人間なのかは知らない。しかし、少なくとも目の前のコイツであれば、衣を相手に一撃加えるくらいの隠し球があつておかしくない強さを秘めている。そんな打ち手を差し置いて大将に座る人物。用心に用心を重ねて損はないだろう。

衣は強い。如何なる強敵が現れようとその認識が揺らぐことはない。だが同時に、そんな衣さえ何かしらの形で出し抜かれる可能性は必ずある。それこそが去年の大会の結果なのだから。

それが照さんや妹さんのような形なら認めよう。だが去年のような形での敗北は我慢ならない。真っ当にやればまず間違いなく勝つた試合。それが俺らのせいで実力が誤認されるなんてあつてはならないのだ。

(十全に暴れられる状況なら、衣は絶対に負けねえ)

理屈的にも、心情的にも。それこそが最善と信じて俺は半荘二回をじっくり使つて点数状況を整えていく。勝てる状況を万全に、そうでないなら突破口を開く。それが、このチームにおいて俺がすべきことだと確信して。

中堅戦終了

風越 70100

鶴賀 69100

龍門渕 74800

清澄 186000

☆☆☆

「ツモ、2000・4000」

堂々たる和了り。動作に連動して舞う長い金髪と、一際目を惹く容姿や漂う気品が重なり、さながら舞台上で踊っているかのように見える。

龍門渕透華。龍門渕高校麻雀部副将にして副部長。かの名門校、龍門渕高校における理事長の孫であり、全国模試ではその恵まれた環境に見合った優秀な成績を収めている。入学時から変わらず首席を維持し続ける明晰さは麻雀でも存分に発揮され、全国という舞台においても安定した打ちっぷりを披露した。

(……強い、ですね)

そんな彼女に私は、点数以上に、打ち筋や技術面の方に目が行く。派手な見た目に反するような堅実にして確かな経験を感じさせる打ち回し。デジタルをベースにした言ってしまえば地味な戦い方は崩す隙も余地もなく、私にとってはこの上なく厄介だ。

無論、宮永さんレベルにまで振り切っているとそれはそれで問題があるのだが、普段は主に東場で暴れるゆーきの甘い打ち方を咎めるようなテンションで打つことが多いので、全員が全員堅実にして打つ卓、というのは実はリアルではあまり経験がなかったりする。

(でも……)

しかし、現実では馴染みはなくても。画面の中の話なら別だ。暇さえあれば没頭していたネット麻雀。そこは誰でも気安く入り浸れ、垣根が無いからこそ初心者から猛者まで日々日々入り乱れる。南場の優希よりもミスが目立つ子や、第一打を役満直撃して即終了なんてある意味であの宮永さんすら凌駕するような豪運の持ち主さえあの電子の海の中には存在する。

そしてネットには垣根こそ存在しないものの、篩のようなものはある。初心者は初心者同士、熟練者は熟練者同士と同じレベルの参加者で揃えることで、より切迫した試合を楽しめるシステム。積み重ねた戦績が、そのまま自身の評価に繋がる無情な格付けは、けれど私にとってはそれなりに心地良いものだった。

『……………』

否、それなりにどころではなく、時に寝食を疎かにするほど没頭した。有り体に言うと、私はネットの海という名の沼に、ずっぷりと全身を浸かってしまったのだ。

（それが巡り巡ってこの舞台、と……）

きっかけは何だっただろう。奈良にいた友達の影響か、あるいは単に力試しの延長線上か。少なくとも、余人ほど情熱を持っていたわけではない。けれど麻雀とは、情熱と実力が決して比例しないこともまた一つの事実。残酷な話ではあるが、勝負事とは得てしてこのようなものでもある。

「ツモです。1300オール」

しかし、だからと言って私が彼女を凌駕しているかと問われるとそうでもなく。先の持論に矛盾するようだが、実力が切迫している場合は当人の熱量によって勝敗の偏りが発生することもある。今回のケースはまさにそれで、ならばそのような場合、私はどうすればいいのだろうか。

負けたいとは思わない。やるからには何としても勝ちたい。モチベーションだってちゃんとある。けれど、それが龍門渕さんの熱量を超えてるかを問われると疑問が残る。

（私は、薄情な人間なのでしょうか……）

例の力の反動とやらで階段さえ登れなくなって、須賀くんに背負われて控室に戻ってきた宮永さんに、私は『何もそこまでして』という感想を抱いた。彼女はそれを必要な代償と説いた。しかし私が同等の力を持っていて、この一戦のためにあそこまで見苦しく、みつともなく足掻くことは出来ただろうか。

「……ツモ。1300・2600」

極論を言ってしまうえば、こんな葛藤に意味などない。私が何を思っても配牌が良くはならず、逆に何を嘆いても和了ることは出来る。例外として、宮永さんのような人種は意思の力でそれを多少なりとも偏らせることが可能だそうだが、この場においては何の意味も成さない。ならばここで私が死力を尽くそうと、変えられるものはごく僅か。少なくとも、見合うだけのリターンを得られることはないだろ

う。

(……………)

「ロンですわ、3900。これで終了ですわね。対戦ありがとうございます  
いました」

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「……………ありがとうございます」

試合が終わるその直前になり、今更のように思考が巡る。本当にこれで良かったのか。いや少なくとも悪い結果ではない。むしろ相当に奮闘した方だろう。でも——などと、既に何の意味も成さなくなつた問いかけ。

後に宮永さんは、そう思える時点で十分に立派であると言う。実際、私にこれ以上のが出来たかと聞かれるとそれは否だ。もっと言えば、全てを出し切らなかったのは私に限らないのかもしれない。けれどそれでも、まだ私に出来ることはなかったのかと、罪悪感のような感情がいつまでも残り続けるのだった。

副将戦終了

風越	53400
鶴賀	71500
龍門洩	84400
清澄	190700

☆☆☆

「……………点数だけ見れば圧倒的やな」

それまで画面を無言で見つめていた園城寺先輩が、不意にそのよう



なことを呟く。素直に賞賛するでもなく、どこか含みのある言い方をしているのは、次の大将戦こそが本番であると彼女も理解しているからだろう。

「そうですね。そして、おそらくは先鋒を除く全ての卓において、打ち手同士にそこまでの力の差は無いのでしよう。勿論、多少なりとも確かな差は存在するはずですが、それも幸運一つでひっくり返るようなものでしかないはずです」

「せやろな。だからこそ、この結果は偶然や。十分な地力を持つ清澄が、実力通りの結果を運良く発揮できた。それだけのことでしかない。やけど——」

「そう、結果そのものは偶然。ですが、そうなるように導いたのは誰かの意図があつてのこと。理由はおそらく……」

「ま、去年のがよっぽどトラウマになつとるんやろな。でなければそれこそ去年の決勝みたいな点差になつてるハズや。あの人、見た目はオラついとるけど案外健気なヒトなんやね」

園城寺先輩は茶化して告げる。主語こそ無いが、誰のことを指しているのかはすぐに察せられた。ほぼ同等の実力者が並ぶ卓の中、唯一成績が戦績ほど振るわなかった人物。その選択の是非はさておいて、この大舞台でチームメイトに全てを託し場を整えるなどと、よほど深い信頼がないと不可能だ。

そして、天江衣はまず間違いない、その期待に応えるだけの成績を叩き出すだろう。故に、一度や二度の奇跡では誤魔化せない舞台作りは、見た目以上に龍門渕というチームの勝利へ貢献しているはずだ。

尤も、それはあの卓で、宮永姉妹に匹敵するような怪物が存在しないという前提があればこそその選択ではあるが。

「……何かがあるとすれば、清澄の部長か」

園城寺先輩が呟く。本質的にはウチと同じ『持たざる者』であつた彼女は、時折このように思考が共通することがある。特に不安や懸念といったマイナス感情においては一致率がかなり高く、だからこそ清水谷先輩に嫉妬されたり——まあ、それはさておき。

「彼女が天江衣に勝てるとは思いません。ですが、彼女には天江と同

格だろう宮永咲を半年間有していたアドバンテージがある。点差も通常であれば半荘2回では覆せないほど圧倒的なもの。規格外の雀士に対する何らかの手段、いわゆる“逃げ切り方”のような何かが存在しているもまるで不思議ではない」

「無論、天江はそれを許さない。加えて保有する能力も妨害向き——逃がさない、和了らせないよう努めるはずや」

「半荘2回で親番は4回。連荘さえ発生しなければ残りの全てを和了られたとて可能性は十分にある。まあ、天江は同時に高火力の打ち手としても知られているので、そう上手くは行かないでしょうが……」  
「でも、強そうなんよな、この人。何か妙な隠し球持ってそうやし、真っ向から戦えば、竜華ですら普通に危ういと思うわ」

「……………」

その爛々とした“眼”に射抜かれて、続ける言葉を見失う。本人曰く、未来を見据える超常の瞳。根拠など無くても、彼女の発言というだけで自ずと説得力が生まれる。

そして彼女の言う“竜華”とは、当然あの清水谷先輩なわけで。そんな清水谷先輩は他でもないあの天江衣に一杯食わせた人物なわけで。それを清澄の部長は上回っている可能性があつて——

(…………ダメや、分からん)

そもそも情報が出揃っていない段階で考察するなどナンセンスだ。最低限、清澄の部長がどのような打ち手であるのか知ってからでも遅くない。あれこれ考察するのはやはり楽しいが、偶には素直にその“隠し球”とやらを堪能して驚愕するのも一興だろう。

「…………どうなるんやろか」

宮永妹の存在により、先が見えていたはずの勝負は、しつちやかめつちやかに掻き回された。今、モニターの先に映るのは、何が起きてもおかしくない舞台。それはまさしく、麻雀というゲームを象徴するものでもある。

だからこそ面白いと評する人もいる。ウチはどうだろうか。少なくとも、それを否定する気はない。ただ、この勝負の行く末が気になるのは間違いなく。いよいよ空も更けて来た無人の部室で、ウチらは

齧り付くように画面に集中するのだった。

まるで何かに導かれるその日

「おい、清澄の！」

会場の扉を開けるや否や、いきなり大声で指し示される。声質も声色も何もかもが違うはずなのに、どこか優希とも被るハキハキとした良く通る声。ただ無遠慮に声を掛けられただけだというのに、それだけで声の主が快活な性格だろうことが伺える。

そんな少女……猫耳にも見える独特な癖毛の黒髪の女性はと言うと、声の勢いそのままにずけずけと私の近くにまで歩み寄ると、驚いて硬直したままの私へこう告げる。

「お前んトコの先鋒の所為で、キャプテンがこれ以上ないくらい落ち込んでるし！ ホントはそいつをこの華奈ちゃんが直々にぶちのめしたいとこだけど、ルールは守らなきゃだし、代わりにお前で我慢してやる！」

「……………」  
(……………)

初対面にはあまりに厳しい物言い。その発言に、何より迫力に押され思わず無言になる。嫌われる気満々の乱暴な主張は結構な挑発というか割と酷い言い草なのだが、何というか、妙に叱り慣れているとすべきか。不思議と逆らう気が失せてしまう。でも同時に、何故か微笑ましく感じてしまうのは何故だろうか。

(ある意味、とても強い子ね……………)

それはそうとこの少女。風越の大將——確か登録名は「池田」さんだっただろうか。物言いからしてキャプテン……まあ多分部長であろう福路さんがあれだけズタボロにされたというのに、たとえ当人じゃないからと元凶たる清澄ウツチに向かってこれだけ強気に出れるのは素直に凄いと思う。

(というか、あの先鋒の子もどつかで見たコトがあるような気がするのよねえ……………どこだったかしら)

「……ええ、そうね。期待しているわ。よろしく」

「ふん！ その余裕、直ぐに打ち砕いてやるし！」

ちよつと関係の無いことを考えながら握手でもと手を差し伸べると、拒絶こそされなかったものの露骨に邪険にされてちよつと落ち込む。余裕どころか、私の視点ではむしろ彼女のことは私の同志とまで認識しているほどだというのに。まあ被害者の会とかそういう仲間意識なので勝つ気満々な向こうからしたら一緒にされるのは勘弁だろうけど。

（余裕、ね……）

しかし、傍からはやはりそう見えるのか。単に嫌味としてそう言ったのか。いずれにせよ、随分と買いつけてくれたものだ。そんなにこの私が強そうに見えるのか。まあ現状全国2位の龍門渕を差し置いての圧倒的なトップであるし、あの宮永さんが天江さんに劣るようには見えないから、親玉である私を警戒するのも当然ではあるのだが。（ここで私が、ハツタリを利かせられるような性格だったら……）

多少は試合を有利に進められるようになったのだろうか。しかし目の前の池田さんはむしろ奮起して厄介なことになりそうなので一概にそうとは言えない。当然、天江さんにも意味をなさないだろう。なら一般的な有利不利はどうあれ、無理にそれに拘る理由もない。

「おつと私が3番手か。順位を暗示してようで少し嫌だな」

そうこうしていると、会場に3人目の雀士が姿を見せる。なんだかんだと名門校である風越を抑え、互角以上の戦いを繰り広げる無名高。まあ私の立場から言ってもアレかもしれないが、そもそもこの卓で戦いが成立する時点で相当におかしい。

聞けば、例の地獄のような先鋒戦が成立したのは、鶴賀の先鋒の存在があつてのことらしい。もはや私には到底理解できそうにない話だが、彼女も彼女でこの場に居るのはやはり、それに相応しい理由があればこそのことなのだ。

「……………」

プンスカ擬音が鳴り響く様子で、ずしんと勢いよく座席についた池田さんに倣い適当な席に着くと、鶴賀の大将もそれに追従し、しばし

無言で見つめ合う。

どこか気まずいなんとも言えない時間。早く会場に来た我々の自業自得と言えればそれまでだが、私からこの空気を崩すのもなんか違う気がする。何せ状況だけを見ればウチの学校が他の追隨を許さない圧倒的トップ。今まさにそれが原因で怒っている池田さんもいるわけ、だから――

「清澄の。少しいいだろうか？」

「へあ？」

だからこそ、もしもこの場で会話を切り出すとするならば彼女しかない。予想はしていたはずだったのに、まさか本当に声を掛けられるとは思わず、妙な返事をしてしまった。

しかし鶴賀の大将は聞かないフリをしてくれたのか、あるいは単にスルーしてか特に私の反応については追及せず続ける。

「いや、まずは自己紹介からだな。私は鶴賀学園の大将を務める加治木と言う。実績も何もない母校で大変に恐縮だが、それでもこの場で似たような立場の高校と出会えたことを嬉しく思う」

「ど、どうも……」

加治木と名乗ったこの女性。堅いというか、または馬鹿丁寧というか。自己紹介なんかよりも言いたいことは色々とあるだろうに、なんともまあ律儀なことだ。

「ん？ ああ、この点差で同類呼ばわりは失礼だったか。すまない、どうも思った以上に頭が混乱しているらしい。なにせ当初の想定では清澄と龍門<sup>全国<sub>2</sub>位</sup>の点数はそのまま逆転していた。それがよもや、我々が龍門<sup>全国<sub>2</sub>位</sup>と肩を並べ追い継ぐ側とは――勝負とは分からないものだな」

「……そんなの、とーぜんのことだし」

半ば独り言のような言葉に反応したのは、意外や意外、まさかの池田さん。不機嫌そうな表情ながらも、しっかりと発言の意図を汲んで自らの持論を容赦なく口にする。ともすれば突き放しているかのよくな厳しい物言いではあるが、加治木さんは気を悪くするでもなく、むしろ興味深そうに頷いて。

「ふむ。とこうやう。」

「天江や宮永の姉妹、それにお前のトコの先鋒あたりも。アタシはそいつらの持つ十二カがどの程度のものなのかを知る術はない。でも、それを測れないのは単にアタシがまだ弱いから、未熟だからだ。そして、そんなのはどんな競技だつてありふれたこと。お前がそれを読み違えたのも同じ。だから、そんなことを嘆いても意味なんてあるわけがないし」

「……………」

淡々と、つらつらと池田さんは語る。先の態度からはこのような考え方をする人間には見えなかったのだが、やはりあの程度の第一印象なんてアテにはならないか。

しかし、その思い込みはすなわち私が彼女を侮っていた事実には他ならない。舞台のせいかもしれない。状況によつてかもしれない。それでも『時にそういう考え方が出来る』というその認識が私に有るか無いかのほんの僅かの差が、試合での致命打となり得る可能性は十分にある。

（何せ、その「読み」だけであの宮永さんを相手に互角で競つたお姉さんという実例が存在している——）

十万点差は半荘二回分での持ち越ストツクしと考えると破格の数値だが、理論上はたったの二局でひっくり返る差でしか無い。

ならば少しでも足掻こうと、握つた拳に力を入れる。如何に宮永さんと言えども、他者の思考は推測は出来ても暴くことは「絶対に」できない……らしい。その理由については麻雀が麻雀として成立しなくなる能力には制限が云々とあの子は色々言っていたが、その理屈（？）はともかくとして、まあ思考を読まれたら麻雀どころじゃないからそんな能力は存在しないという結論は理解出来なくもない。

故に私は考える。少しでも長く、少しでも鋭く。幸いにも、悪知恵に関しては昔から無駄に働く方だった。伊達に学生議長長なんて立場に収まっているわけじゃない。お悩み相談なんて慣れたもの、人を顎で使うことなど日常茶飯事だった。それが麻雀の実力に繋がるのかどうかはさておいて、自分が持つ他の誰かに無い要素は、それがそのままその人の強さとなる——そう評する人もいた。というかまん

ま宮永さんが言っていた。

信憑性、根拠なんてどうでもいいこと。元より私はそんなものが保証されるような世界で戦っていない。どれほど努力をした人間でも、対戦相手の一時の気紛れで当たり前のように読み違える。あるいは単純に確率に裏切られ裏目るなんて日常茶飯事。なんと恐ろしく、なんとも無為な競技なのだろうか。

しかし、それでも。TRPGなんかでは固定値を優先するような臆病者<sup>チキン</sup>な私でも。それでも私はこの無情極まりない競技が大好きなのだ。

(まあ、尤も——)

「今宵もぴたりと5分前。やはりハギヨシは良い仕事をする」

「……………」

威厳。

比較的高い池田さんより更に二回りはトーンが上の甲高い声。ともすれば子どもと見紛う幼い声色に似つかない力ある言葉に、脳がバグって混乱を起こしそうになる。

不快感とも違う違和感から咄嗟に声の主を探れば、いつのまにか会場の扉が開け放たれていて、扉を背景にすっぽり絵画の如く仁王立ちする少女の姿が見える。

龍門渕高校二年生、天江衣。その肩書きは、堂々たるインターハイチャンピオン。インターハイ競技人口約一万人の頂点に立つ存在。更には去年、彼女はそれまでの歴代獲得点数のレコードさえも更新している。即ちそれは史上最強の高校生と呼んで差し支えないということ。

(この子が、最強の高校生——)

……………高校生?)

胸を張る長い金髪の少女。前述した通り、彼女は肩書きに相応しいだけの実力、相応の威厳や雰囲気有している。しかし、知っていた



はずなのに、こうして実際に見るとイメージしていたよりも更に一回り二回りくらいは体格がちゃんまりしている。

確か優希の身長が140センチを少し超えたくらいだったか。正直彼女でも発育不良を疑うレベルだというのに、天江さんは彼女よりも更に一回りは身体が小さい。目測だが、130センチを下回っているのではないだろうか。一切の先入観を抜きにして見ると、子どもが背伸びをしているようにも思える。

それはそうと。

(この子が、宮永あの子の同類……)

とてとてと歩いて空いている席に着く天江さん。椅子と身長が合わないらしく足をぶらぶらさせるその姿からは、はつきり言っただけ強そうには感じられない。でも、それはきっと私がまだ未熟だから。実力が足りていないから、のはず。

ただ、あからさまに強そうであれば、逆に程度が知れるというもの。宮永さんがそうであるように、理解できない、得体の知れない存在である方が恐ろしいのはよくある話。

だから不満を抱くのは違うと、つい先ほどに池田さんも言っていた。いやまあ流石に宮永さんレベルの異能があればやはり何か物申すところはあるのだが、それでも嘆いたところで何も変わらない。精一杯ポジティブに考えるなら、実力が解らないのであれば勝てるかどうかも分からないということ、つまり勝てる可能性がある——あるいはそう捉えることが出来るのなら、私は人生をもっと楽しく生きられたのだろうか。

(……………)

考えても仕方ないこと。分かってはいても、最近は特にこうして頭を回す機会が増え、過去を思い出して気が沈みそうになる。それでも、割と幸運と言っつていい今を思い起こしてどうにか堪える。

全ては今更だ。今は今私が出来る限りのことをするだけで、それ以上を求められても無理なものは無理。

そして、宮永さんは10万点差があれば最低限勝負になるだろうと言っていた。あと出来ることと言えばまあ、天江さんの強さが宮永さ

んの想定よりも下回る、言ってしまったえば期待外れであることを祈るくらいだろうか。

(……ま、こっちは望み薄よね)

情報に踊らされてるだけと言えばそれまでだが、何か本能の奥底から真つ当に闘って勝てる気がまるでない。点差を活かして、どうにか減点を抑えて、そんなハンデ戦を前提に辛うじて抗える程度。

嗚呼、なんて厳しい闘い。とても辛い。非常にキツイ。今すぐにも逃げ出したい——だからこそ、どういうわけか燃えてくる。

(私も私で、難儀な性格よねえ……)

現状では都合が良いので無視しているが、我ながらいつかギャンブルで破滅してしまいそうで不安である。私自身、そういった欲は全部麻雀で解消しているつもりだが、将来的に興味本位でパチンコなりに手を出したりしたらどうなるか。……あまり深く考えない方が良さそうだ。

「そろそろ時間だな」

「そうね……」

加治木さんの発言を合図に、最初にこの会場に居たからと仮親として私が賽を振る。会場は不正防止のため、私たちの他に誰もいない。周囲を囲うカメラによつて状況は把握されているが、基本的に体調不良や災害などの不測の事態が起きるまでは徹底して不干渉を貫いている。

孤独の闘い。とはいえ真後ろで応援されてもそれはそれで問題だが、心細いことには変わりがない。特に私は世人より寂しがり屋という自覚があるから、そこが戦況に響くかどうか。

(起家は天江さんか……)

そして幸先の悪いことに、まだまだ心の準備も整わないうちに、開幕から地獄の風が吹き荒れるのが確定してしまう。いや、天江さんはおそらく典型的なスロースターターで制圧力が高い分序盤は様子見到に回ることが多い。今回もそうだと考えるのなら、天江さんが起家というのは勞せずして親番を流せる可能性があるということ。

ならば一概にこの席順は、もしやあながち不運とは呼べないのでは



卓から、どうにか突破口を見出さねばならない。

(一応、ヒントは貰っているけど……)

『とはいえ、この方法で理解するのは傾向だけ。最後に頼れるのは己が勘のみです。何故なら——』

(この手の力は、実力差が理不尽さ具合にそのまま反映される。だから、最終的な判断は自分がするしかない……)

理解できるようでやっぱ理解できない理屈。けれどまあ、そういうものだと無理やり納得することは出来なくもない。

「……………」

竹井 配牌

{一二三九九三五八九東西西発}

(……………)

再度配られた牌をざっと眺める。配牌の時点で面子候補が5つ。常であればこの時点で半ば己が和了りを確信するような良配牌だが、この卓に限れば配牌から聴牌しているくらいじゃないと、いや、天和でもないし安心はできない。

何せ宮永さんと来たら、地和ですら『鳴けば止まるじゃないですか』などと言って実際に先鋒戦で阻止しているのだ。天江さんの「格」が宮永さんと比べてまだどの程度かは不明だが、宮永さん本人が「同格」と認めている以上、彼女に同じことが出来ても驚かない。

加えて天江さんはそれはもうあからさまに妨害に特化した打ち手であり、その分野であればおそらく宮永さんをも超えているだろう。故に天和が最善手であり、とはいえ流石にそんな豪運を通り越した何かを望むほど愚かではなく、そもそも親が天江さんなのでどう足掻いても不可能。

そんな相手に、良い手ではあるものの、逆に言うところ止まりなこの手牌で挑む。心が折れそうになる。けれど、何も無いよりはそれだけいい。

「……………」

竹井 2巡目 ツモ

②

打牌

〔一〕

今更になって、どうしてこれまでのインターハイに個人でも参加しなかったのかと後悔ばかりが募る。

焦っているのも、余裕が無いのも、偏に私が大会の経験を持っていないから。チャンスが無いのもぶっつけ本番なものもまた然り。要するに現状は、これまで意地を張っていた私のツケだと言える。

〔10万点、か……〕

——以上、言い訳終了。いつまでも長々と愚痴を、本当に背負った肩書きに見合わない情けない女だと自嘲する。

嘆くのは後。マイナスな思考は全部後回し。既にその差は大分削られてしまったが、事前に宣言した通りの数値でそのツケをいくらか肩代わりしてくれた心優しい後輩の手助けもある。

だったら、ここで私が頑張らなくてどうする。無理でもなんでも、何としてでも和了るんだ、絶対に……!!

〔………〕

竹井 3巡目 ツモ

⑨

打牌

〔二〕

〔………〕

竹井 4巡目 ツモ

〔白〕

打牌

「……………」

……………」

……………」

……………」

インターハイから一月ほど前のある日のこと。

『そうですね。いつそ配牌は捨ててしましましょう。左から順にばいっと。ぜんぶ』

『はっ。』

既に部員も先が上がってしばらく、空も暗くなり始めた二人きりの部室で、そんな私の間の抜けた声が響き渡る。

冗談だろうと思つて聞き直せば、やっぱり流石にこれは冗談だったようでやや安心。ここ最近で分かったことだが、どうも宮永さんは基本短期決戦型というか、単純にいつまでもダラダラと麻雀を繰り返すのに慣れていないらしく、こうして一日の試合回数が嵩むと途端に色々なものが雑になってくる。思考も試合も発言も色々。だから宮永さんに本気でなりふり構わずどうしても勝ちたいのなら耐久戦がおすすぬめである……というのはさておき。

そんな状態の宮永さんに真面目な話を振った私も私で迂闊ではあつたのだが、それでも今の発言のポンコツっぷりは殊更に酷い。珍しいこともあるものだとその時は思っていたが、後で須賀くんに聞いた話だとむしろ麻雀の時の態度こそが異常で、それ以外だと割と普段から随所でこんな感じらしい。聞きたくなかつたようなそうでもないような何とも言えない彼女の弱点であるが、しかし話はここで終わ

らない。

『いえ、いや……意外と悪くない手なのでは？ 力量差的に、干渉し得る配牌は全て罨と言つていいでしょうし、上手くハマれば部長のスタイルに合致する。どうせ最後まで保たせる前提なら他の人の和了りも気にする必要はなく、もしも戦法を切り替えられても配牌で判断できる……』

『……宮永さん？』

そんな経緯で、唐突に、あまりに雑に紡がれたあからさまな戯言。しかし宮永さんは何故か自身のその発言に食いついて、付いていけない私を余所に色々とよく分からない考察を繰り広げる。

その日から更に数日が経過し、宮永さんが出した結論としては『試す価値はそれなりにある』というものだった。なんでも要約すると、『どうせ目処は立たないだろうから、半荘2回のうちの一局を捨てる価値は十分にある。部長であればどのような形であれ、その一局で取っ掛かりは掴めるだろう』と。

期待されているのか馬鹿にされているのか良く分からないが、実際一局自由に打つてみて攻略の手掛かりも糸口もまるで見つからないのは事実。このような狂気の所業をぶつつけ本番で「モノは試し」と行うのは精神的にキツイが、これも私の怠慢の結果と割り切つて強行する。すると。

竹井 14巡目 手牌

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨西西白発

ツモ

〔白〕

(出来た……)

せめてもの抵抗と雀頭になる西だけを残して手を入れ替えた結果、自分でもびっくりするくらいスムーズに聴牌してしまい逆に困惑する。

たかが聴牌に14巡も掛けて大丈夫かと頭の中の冷静な私は思うものの、実のところツモ切りの回数であれば前局の方が最終的には上回っていた。そう考えると勝負の舞台に上がれるだけ精神を削った価値があるというものだ。

しかし。

「……む」

牌を手に取り、確認して手牌の上に横向きで重ねたまさにその瞬間、私が驚くのとほぼ同時に天江さんが僅かに眉を顰めるのが見える。聴牌気配を感じ取ったのか、そんなに態度に出ていたか、とかなり焦るも、そもそも宮永さんであれば目を瞑っていても聴牌気配くらいは感じ取れそうだなあと今更のように気づいて辟易とする。

そう。ここまでしても、こんな奇策を用いてまでどうにか食らい付いても、その成果は最低限の参加資格を得ただけ。対する天江さんは万全の体制で待ち構えていて、ならば当然、彼女は舞台へ割り入ろうとする邪魔者わたくしを全力で蹴落としにかかることだろう。

そして奇策で舞台に割り込んだ私に、そんな天江さんに対抗する術などあるはずがない——その筈が、何とも運命というものは私の思った以上に良く出来ているようで、

「……ツモ。混一色、白、一気通貫。3100・6100、です——」

「……………」

竹井 和了形

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨西西白白 {白}

まるで何かに導かれるように、自然と山に一枚しか無いはずのその牌を引き込む。断言してもいいが、この和了りは完全に偶然、つまりは奇跡のようなもので、再現性は見込むべくもないだろう。

「……」

しかしながら私には、そんな自分で自分に驚いている滑稽な私を、嘲るでもなく次の局に移るまでの間、じつと無言で見つめ続けていた天江さんの姿が、何故か妙に印象に残るのだった。



鶴賀	風越	清澄	龍門洩	大将戦東一局一本場終了時点
6	4	1	9	
4	6	9	0	
4	3	0	3	
0	0	0	0	
0	0	0	0	

## いずれ何かに望まれたあの日

『いよいよ半荘一回を残すのみとなった長野インターハイ予選。ここで最後の半荘を迎える前に、軽く試合全体の振り返りを行おうと思います』

『そう時間も無いし、本当に軽くだがな。特に中盤辺りの動きの少ない半荘は容赦無く省いていく』

『まずは先鋒戦、ここでは昨年度優勝校であった龍門渕が——』

「やっぱりウチ藤田プロの解説好きやわあ」

「……まあ口調こそ男勝りでだいぶ人を選びますが、解説の評判はプロの中でも一、二を争うほどですしね」

藤田靖子。佐久フェレッツターズに所属するトッププロが一人。いわゆるプロ麻雀せんべいカードで分類されている“S級”の中では目立たない部類に入るものの、第一線で戦うそれら並み居る強豪を相手に平然とトップを取れる上澄みも上澄み。

少なくとも、あの天江と彼女のどちらが上かを聞かれると、ウチはそれに明確な答えを出すことが出来ない。野球ボールとテニスボールの違い程度か、あるいは月とスッポンであるのか。蟻の視点しか持たないウチにはいずれもただ強大なものとしか認識できない。ただ、少なくとも彼女があちら側の人間であることは間違いないのだろう。

しかしながら、その上で藤田プロの打ち筋は非常に人間らしく、凡人たるウチから見ても学ぶことは多い。それは他のトッププロと比較して、見ているモノがまだ常識の範囲内に収まっているからだろうか。なにせよ、去年までは間違いなくこちら側だった園城寺先輩からの評価が高いというのは頷ける話ではある。

『しかし、蓋を開けてみれば先鋒戦は清澄の圧勝という結果に終わりましたね』

『あれはむしろ、あの程度で凌いだ他の面子を褒めるべきだと思うがな』

『あの程度って……先鋒戦終了時点で5万点差ですよ?』

『アレ相手なら本来その倍の点差が付いても健闘したレベルだ。あの卓に同席していたのが天江含む他の面子であれば、東一だけでそのまま試合が決まっただけでもおかしくはなかった。平然と和了れる姉の方や今後が楽しみな妹尾は勿論、個人的には最後の和了り、風越の福路なんかも評価したいところではある。……そういえば、妹の方は個人戦には……参加する予定か。まだ気が早いけど、対戦するやつは今から(愁傷様と言っておこう)』

「評価高いなあ妹さん。まあ確かにそんなくらいヤバかったけど」

「直接戦った経験があるようなコトを仄めかしてましたし、仮にも決勝の先鋒戦であれだけ大暴れできるのであれば妥当でしょう」

「というか園城寺先輩は他人事のように語っているがそれでいいのか。ほぼ確実にのし上がってくるアレを前に悩む羽目になるのは県大会個人戦上位である貴女たちだろうに。」

「考えんようにしてんねや。後回しにできる事は後になって考えた方が気が楽になる」

「ソレ後で余計苦しむヤツやないですか……」

自分は流石にそこまでぶん投げる気にはなれないが、そうしたくなる気持ちは良くわかる。そもそもウチは身近な人物、園城寺先輩や江口先輩、清水谷先輩にさえ手も足も出ない現状で何を言っているのか。下手な考え休むに似たり、過ぎたるは及ばざるが如し——とにかく、確かに今考えても仕方ないことではある。

『次鋒戦は余裕のある清澄が更なるリードを広げましたが、こちらはあくまで常識の範囲でしたね。あまりにあんまりな先鋒戦を見て萎縮していたのかもしれませんが』

『堅実に打つ。言うのは簡単だが、実際に行うのは難しいの典型だ。ただ点差を維持するだけでも、稼ぐべきところで勝負に出なければ削られるだけ。経験の差だろう、その辺の見極めが染谷は頭ひとつ抜け

ていた。無論本来の力、実力通りの成果を出せたのは、点差による精神的なプレッシャーがほぼゼロだったのも大きいだろうがな』

「そうなん？」

「でしようね。才能云々ではなく、積み重ねたものがデカいからこそ強い、そういうタイプの打ち手です。万では利かない回数 of 対局を重ねた先にある力。ウチのような研究畑の人間には一番辛い相手です」  
おそらくは誰にでも得ることができて、しかし決して真似は出来ない力。あの宮永姉妹でさえも、似たようなことは出来ても真に同じ判断は出来ないだろう。

多くの初心者がそれを目指し、いつしか諦めて中級者の座に甘んじる。自らを上級者と名乗るベテランも、真の意味でそのレベルにまで到達している者は少ない……というより、この年代にはまずいない。相当幼い頃から……それこそ実家の近くに雀荘があつて、親と一緒に入り浸っていた——考えられるのはそんな感じか。あるいは実家がそもそも雀荘を運営しているセンもあり得る。これも宮永や天江とはまた違った方向性で対処が非常に困難と言える。

「点数的にはパツとせんけど、中堅も副将も見たところ中々やし、どつちが厄介か分からんなあ」

「ええ……そして、この大将戦の推移。これは——」

大将戦前半戦終了時点

龍門渕	140800
清澄	171200
風越	34600
鶴賀	53400

『最後に大将戦一戦目ですが、これは……』

『予想通りと言えばその通り。予想外と言えばまさしく。どちらとも取れるし、どう受け止めても間違いではない。だが、敢えて表現するのなら——微妙な結果、だな』

『終始他の面子を圧倒していたインターハイチャンピオン天江。ですが狙ったように親番で割り込む清澄の和了により思うように点数が伸びず、逆転までは至りませんでした。』

しかし、それでも半荘一回の稼ぎと見れば破格。最後の半荘も同様の稼ぎであれば、決着までには逆転できます』

『3万点。天江相手には心許ない数値だが、しかし容易く「問題ない」と樂觀視できるほどの差でもない。そも偶然だろうがなんだろうが、この半荘で差が埋まらなかった時点でその可能性は十分にあるだろう』

「たまたま対策がタイミング良くハマった、って感じやな」

「おそらく対策そのものは存在し、竹井はそれを身に付けている。しかし、成功率は恐ろしいほど低い——ですが、10回に一度の偶然をちよūd天江の親番に持って来れるあたり、やはり彼女も『持っていますね』

まるでドラマの演出を見ているかのように、都合良く残されているその可能性。多種多様な牌譜……特に天江や荒川のような異次元の打ち手を相手にした試合では、随所でそのような傾向が見られる。

ここで和了っていれば。ここを阻止出来たなら——それはただの結果論。けれど実際に為せたのならば、確かに存在していたはずの可能性。

(……………)

『ただし、麻雀という誰にも平等でなければならぬゲームにおいて、意図して己が運命を歪めようと目論む者は——』

「……運命に嫌われるってか。あほらし、それらに喧嘩を売つとるよ  
うな連中のクセして」

「ん？」

思わず漏らしてしまった独り言に、隣にいた園城寺先輩が反応する。そういえば、この人もオカルト使いであるのなら、彼女の言う“致命的な欠陥”とやらを抱えているのだろうか。……それが分かれ

ば、ウチもアイツらに勝てるのだろうか。

「なんやフナQ。文句言つとる割には楽しそうやな？」

「文句なんて言うとりましたっけ……？」

「全身で訴えてんねや。また何か面白いモンでも見つけたんか？」

「……いえ」

面白い……かどうかはともかく、非常に興味を惹かれる内容ではある。その果てにあの理不尽な連中を振じ伏せられる結果が待っているのなら尚更のこと。面白い？ まあ、面白い、のだろうか。自分でもよく分からない。ただ、それに価値があると思うから、こうして必死に学んでいるのだ。

「分からないから知りたい。その程度ですよ、ウチの動機なんて」

「それで自分の時間を削れるってのは凄いなと思うんやけどなあ……」

(……)

自身の体調のせいで、否応無しにその“自分の時間”さえも満足に取れないくせして、それでも麻雀に時間を費やす自身のことには棚上げする。そんな先輩にどの口がとツッコミを入れたかったが、それを指摘するのも野暮な気がしてやめた。

☆☆☆

「……部長、びつくりするくらい悪運が強いですね」

控室に戻るや否や、試合中に復活していたらしい宮永さんからそんなことを言われる。まあそもそも麻雀の試合でスタミナを使い果たしてダウンするのは割と意味不明な現象ではあるが、それでもあの宮永さんが弱ってる姿を見てそれなりに衝撃を受けたこの身からすると彼女の復活は素直に喜ばしく思う。

きつとそれが態度に出ていたのだろう。ともすれば悪口と見られておかしくない言葉を受けても嬉しそうな表情の私に、宮永さんは僅かに「う…」と声を漏らし露骨に視線を左上の方に向けると、微妙に

上擦った声で告げる。

「現時点で3万点差。正直、予想していたよりもだいぶいい感じですよ。これなら本当にいけるかもしれないですよ」

「……あれで？」

我が事ながら、どこか他人事のように反論する。今更彼女の言葉を疑うつもりはないが、このペースで削られてしまうと次の半荘の半ばには逆転されてしまう。どこるか天江さんは典型的なスロースターターで、これからガンガンテンポを上げていくと考えたらとてもじゃないが今のペースでは凌ぎ切れない。そんな有様で「いい感じ」などと言われても正直反応に困る。そんな私の思考を知ってか知らずか、宮永さんは視線を更にも上へと逸らすと、

「私の勝手なイメージでは十中八九この時点で逆転されていて、理想的な流れを辿ったとしても1万点差付近でギリギリ踏み留まってる感じでした。そこからは部長持ち前の生き汚さ……もとい、粘り強さで耐え凌いでどうにか食らい付いて最後の最後に奥の手ぞん！——って展開だと思っていたんですが、これは良い誤算です」

「……」

【悲報】宮永さんの想定、私の想像を数段下回っていた。

いや、まあ。流石に私も宮永さんとの特訓があつたとはいえチャンピオンを相手に互角で戦えるなどと自惚れていたわけではないが、それでも『10万点差があれば勝負にはなる』と言ったからにはせめてもう少し上を想定して欲しかったところではある。

そもそも当然のように語っているが奥の手って何だ。そんなもの知らないし教わった覚えもない。無論あつたらとつくに使っている。とりあえずそのことを聞くと、

「そこは部長、土壇場で閃くんですよ。あの卓は主に衣さんのせいで運命が複雑に絡み合っている所以对抗策がいくらかでも創り放だ——……よもや「何か」が見えてくる可能性は十分——多分きつとそれなりにあるはずですよ」

「……なあ咲、もしかしてだがお前、自分を基準に考えてなかったよな……？」

「そ、そんなことないよ？ 確かによくよく考えたらそっち方面の開眼が前提だったなあとか、出来なければどうせ無理だからそれ以外のケースについて考えるの放棄してたとかそんなわけないからね」

「語るに落ちてるじえ」

「……………」

（前から薄々は思っていたけど、なんか宮永さんって妙に私への評価高くないかしら……）

もしかしてだが、よもや宮永さんは私のことを、パン生地のように叩いて形さえ整えておけば勝手に膨らんでいく何かだと考えてはいないだろうか。確かに特訓ではそれはもう揉まれに揉まれ尽くしてもう生半可なことでは動揺しなくなってしまうが、あの特訓でも宮永さんのやたらと多彩な能力への対処で手一杯で、身についたのは多少の対応力くらい。結果としては手の届く範囲がほんの少し増えた程度、力の総量自体はおそらく殆ど変わっていない——否、それを變えることは叶わなかった。

そもそも、いくら勝利に「開眼」とやらが必要だったとしても、そんなポンポンと強くなれたら苦労はしない。だからこそ宮永さんも特訓においては裏技的な近道ではなく、私の地力を上げることが優先したというのに。

そんなことを思っていると、須賀くん達を相手に苦しい言い訳をしていた宮永さんであるが、やがて思いついたように話題を變える。

「それはまあ、それが当時の最善だったと言いますか、私の理想だったと言うべきでしょうか。ですがこうなっては部長の奮闘を無駄にするわけにもいかないので、これからは失点を抑える方向で行きたいと思います。それはもうお姉ちゃんばりに身も蓋もないことを色々と言っちゃいますよ」

最初からその方向性じゃ駄目だったのだろうか。私が思わずそう呟くと、宮永さんが無駄に綺麗な表情で『部長の成長が最優先なので』と誤魔化してるのか本気なのか良く分からない発言をしたので何も言えなくなる。この台詞をまごを始めた他のメンバーが言ったのならいくらか反論できたかもしれないが、宮永さんというだけで不



思議と逆らう気力が無くなるのだから立場というものは恐ろしい。

「ええと、まず衣さんの遅延能力の詳細からですが、彼女の能力は『相手の手牌に爆弾を送り込む』と言った感じですね。とはいえ爆弾といっても字面の印象とは逆で、その爆弾を抱えている限りどう足掻いても和了れなくなるとかそんな方向性の能力です。」

今の部長の力量だと最大で面子1つと面子候補1つが罫ですかね。要するに手牌の3分の1前後が足枷となっています。一局目があの手で索子と字牌、二局目が萬子と索子だったのでおそらく何らかの法則性はあると思うんですが、実際に座ってみないと見当がつかないの  
で勘で見破ってください。多分慣れればいけるはずです」

「え」

そして当然のように語られる新情報の嵐。色々とツツコミどころはあるものの、まずは手牌の3分の1が地雷であるというとんでもないカミングアウトに困惑する。というか待って欲しい。要らない牌を押し付けるのも面子候補が揃わないようになっているのもそれが地雷なのも納得は出来ずともなんとなく理解はできるが、面子そのものが地雷とは一体どういうことだろうか。だって抱えて置けば間違  
いなく一面子となる。他の牌を全て入れ替える羽目になったとしても、3手分は浮くのではないだろうか？

そのような旨の反論を行うと、宮永さんは呆れた顔で、

「甘いですね。その手の常識・理論をいくら飛び越えてこそその能力者です。そもそれを言い始めるなら最初から何も考えずデジタルで打てば運次第では勝てることになってしまいます。ですが——」

「じゃな。咲もそうじゃが、ああいった人種にそういう小賢しい理屈は通じんじやろう。それは去年の結果が物語つとる」

「です。まあ、もつと厳密には、むしろ逆にそういう我々こそが常人以上にガチガチな法則で縛られていたりするわけですが、そこも言い出せばキリがないというか、流石にそこまで看破できるのは対異能の経験に優れたプロか、私やお姉ちゃんのような例外側の能力者か、あるいは原村さんのようなもつと変な人か……こう考えると結構多いですね」

「良く分かりませんが、しれつとその並びに私の名前を入れるの止めて貰えますか？」

突如として躍り出てきたその名前に和が不満そうに声を上げる。それ以前に、ここで和の名前が挙がるのがかなり意外である。彼女は実績こそ中学王者と並外れたものがあるものの、基本的には典型的なデジタルでこういった非常識な話題には出てこないものだと思われていた。なのにこうして宮永さんが名前を挙げるとは、ひよつとして彼女には何か秘密があるのだろうか？

「……実は我々オカルト使い側の視点で見ると、原村さんって驚くほど侮られやすいんですね。」

存在が油断を誘いやすいと言いますか、間違いなく真つ当に強いはずなのに何故か過小評価されがちと言いますか。生半可なオカルトは真正面から破れる凄まじい豪運の持ち主のはずなのに、どうしてか甘く見てしまつて気付けば取り返しが付かなくなる。ある意味ではとんでもない初見殺しだと思います」

「なんですかその不名誉な評価は。ほんの少しだけ期待した私が馬鹿みたいじゃないですか」

ぼそつと呟く宮永さんであるが、当然のように聞かれていて剥れた顔をする和。とはいえ宮永さんもその反応には慣れたもので、「何か言つたかな？」などと戯けて対応する。

しかし、流石に宮永さんも自覚しているのか、須賀くんに軽く嗜められてすぐさま謝罪に移行する。部活でよく繰り広げられていたいつも通りの流れ。今が極限状態だからこそ、普段と変わらない何気ないやりとりが心に染みる。

それからしばらくわちゃわちゃと騒いでいた一年生組であつたが、休憩時間が半分も過ぎたところには流石に会話もひと段落したらしく、先鋒戦の疲労がぶり返したのだろう、宮永さんが息を切らせて近くにあつたソファに座り込む。

そんな彼女に頼りっぱなしで悪いとは思うものの、こちらとしても既に手段を選ぶ余裕は残されていない。疲れていようが気絶寸前だろうが、聞き出せることは全部聞く。今宮永さんに頼らなければ私は

爆死する。ここは継り付いてもヒントを限界まで引き出さなくては。

「ええと、先程も言いましたがまずは仕込まれた『地雷』を見つけることが最優先。それらを切り捨てないことには勝負になりません。判別する方法は一応あるはずですが少なくとも部長には無理なので勘で探り当ててください。早い巡目で地雷を処理できれば露骨にツモ運が向上するはずなので事実確認は結果から判断して次の参考に。逆に地雷の処理が遅れたまま一定の巡目を迎えると地雷が増えていく仕組みになっているので、あまりに手が進まない局の場合はそのパターンも次に活かしましょう。」

今更悠長にとお思いかもしれませんが、衣さんが能力者である以上、そういった試行錯誤も含めてゲーム全体での勝敗がペイされているので、心が折れない限りはまず逆転不可能な点差にはなりません」  
「……………どうしてそう言い切れるの?」

「『理不尽だから』です。まあ私含め、その理不尽なルールを押し付ける側の人間が主張しても説得力はないかもしれませんが…………」  
「理不尽…………?」

理不尽。まあ理不尽なのは間違いない。だが待つて欲しい。それを言い始めたら能力なんてものが自分が理不尽極まりない。しかし彼女はそれを理不尽ではないと言う。理不尽にならないように理不尽を強いている。それこそあまりに理<sup>み</sup>不<sup>が</sup>尽<sup>つ</sup>な持論ではないか。

「そう。それは誰が見てもおかしい。故にこそ、麻雀のゲーム性を否定するような力は、誰が相手でも負ける可能性を残さねばならない。部長はその現象を、その事象のことを、ヒトが何と呼ぶのかを既に知っているはずです」

「……………」

## 『運命』

この手の話題になると、必ずと言っていいほど顕れる単語——宮永さんの力の根源。

彼女がいつか運命奏者フエイタライザーと呼称していた、運命を自在に操る神の如き

力。それは麻雀のような「運」が根底にあるゲームであれば、まさしく無敵と評するほかにない恐るべき異能である。

しかしながら、そんな異能を有する宮永さんは、それでも自身のことを「絶対」とは称さない。それは実際に宮永さんを超えるヒトが存在しているのだとか、そういう『上には上が』的な理論ではなく、なんでもそうしないといけない制限があるからなのだと言ったことがある。今回の此れも、それに該当するのだろうか。

「……………」

「まあ、理由については難しく考える必要はありません。麻雀なのだから、それが道理であるというだけのことです。私だって、例えばパズルのような攻略されることが前提のゲームであればその過程をガン無視できますし、それは衣さんも同じだと思います」

「お前謎にジグソー早いのもそんな理由だったのか……………」

「はいそこ茶化さない。……………忘れないでください。卓に座るとは即ち、麻雀をする気があるということ。転じてそれは、自らの敗北の運命を孕むという意味です。」

誰よりも勝ちたいと願い、その道を磐石にする。誰よりも負けることを恐れ、その道筋を惑わせる。我々は運命の繰り手、僅かな可能性さえあるならば、それを弄るのは造作もない。しかし反面それ故に、どんなにか細かい道筋であつても、その可能性を想像してしまった瞬間に、我々はその運命を保証してしまう——」

「……………」

（ひよつとしなくても、これは……………）

励ましているつもり、なのだろうか。だから勝てるはずと。どんなに僅かな可能性でも、どんなに険しい道であつても、確かに可能性は存在しているのだと。それにしても婉曲というか、不器用で妙に理屈っぽいのが、そういうえば彼女は割と人と接するのが苦手だったことを今更のように思い出す。

実際、彼女は私のためにこの大会に参加していると言つて過言ではない。それは決して私の自惚れなどではなく、本人も公言している事実である。一体私のどこにそんな惹かれる要素があつたのかは分か

らないが、だからこそ私も、こと麻雀に関しては無条件に彼女を信じていることができる。

私を知る中で、誰よりも強い打ち手。今私が対峙しているチャンピオンはおろか、それよりも明確に強いであろう雀士さえも優に圧倒して魅せた正真正銘の怪物。そんな彼女が、手ずから私の未来を保障してくれる。これほど恐ろしく、頼もしいことはない。

決意を新たにする私。しかし、それを知ってか知らずか、宮永さんは話している最中にも徐々に表情を曇らせていくと、不意にこのようなことを告げる。

「でも……ああ、いえ。……そうですね。もう既に察しているかもしれませんが、最初からこの方針で行かなかったのは、単に私の我儘です」

「え？」

生憎と何も察していない。突如として訳知り顔で放たれた宮永さんの告白に、私は間の抜けた声を上げる。ヒトには見えない「何か」を識別できる彼女は、時々こうして飛躍した会話をすることがある。今回もその類かと思いきや、どうもそういう雰囲気ではない。一言で言えば、どこか重苦しい空気を感ずる。一体何事だろうか。

「私は、その……部長に自分を重ね過ぎていたんだと思います。私だったら、私であれば——そんな風に考えて、期待して、部長ヒトの限界というものを見誤っていた。

私相手ではもう駄目なんです。部長は既に、私を相手にするのに慣れてしまっている。だから、衣あいたなしげきさんを相手に、目醒めるとすれば10万点……そうなれば良いなど、いえ、そうなって欲しいと、私は勝手にそう願っていました」

「それは……」

「ですが！」

相変わらず理論こそよく分らないが、とにかく宮永さんの期待に添えなかったのだろうことは何となく察したので、思わず謝罪してしまいいそうな私を阻害するかの如く宮永さんは言う。

「既に運命は私の手を離れている。衣さんも、私の姉も、私自身も、

きつと名の知れたトッププロでさえも。ここまで交錯した意思の行く末を計ることはできない。

本当は、私一人で10万点を用意するつもりだった。国広さんをもっと場を乱すはずだった。優希ちゃんが想像以上に抑えられてしまった。東横さんが本領を発揮できなかつた——それ以外にも色々、様々な思惑の果てに今の結果があり、その上で可能性がまだ残されている」

「……………」

「だから、その、ですから——」

声を張って、真剣に、まるで何かを悔いるように宮永さんは語る。正直に言えば、私如きでは彼女の主張していることの半分も理解しているとは言い難いが、本来は一人で10万点稼ぐつもりだったのは本当なんだろうなああとどこか他人事のように思う。

そしてこのタイミングでそれを言い出したのも謎であるが、それらしき理由を推測することはできる。多分今、宮永さんは焦っている。私には運命なんて見えないけど、それはつまり、先程から暗示していたように限定的だろうとはいえ未来が見えるというわけで、けれどそれが計れない、分からないとなると、土壇場で手当たり次第に手を伸ばしたくなる気持ちは分かる。

何故なら私もそうだったから。いや、私の場合は彼女にも遥か及ばない。何故なら私は無様であろうと、その手を伸ばす努力さえも怠っていたのだから。

「——分かつたわ。ありがとう、宮永さん。私、頑張るわね」

「へ？ は、はあ。どういたしまして……その、頑張ってください」  
分かつたわ(分かつていない)。けれど強がって、格好付けて礼だけを告げる。とりあえず天江さんの能力と私が目指すべき方向性は理解した。それだけでもアドバイスとしては破格だ。元よりこれは私の勝負、これ以上を求めるのは流石に贅沢が過ぎるだろう。

宮永さんの方を見つめ、なるべく不敵にニヤリと笑う。出会ったその日と同じ顔。けれど立場はだいぶ変わってしまった。それでも当時のままの同じ目的で、全国に向けてひた走る。

弱い私には、その未来に辿り着く根拠も自信も無いけれど、そんな未来を保証してくれる誰かみやながさんがいるのなら、確かにその未来は存在しているのだと信じて。

「何故だろう。物凄く今更だし、頭ではきっちり分かっているつもりなんだが、未だに咲が強者ムーブをしていると脳が理解を拒む……」  
「しっ！ 黙れ犬。今良いところなんだじえ」

「人によって一貫していると言えば聞こえは良いのですが……」  
「まあ控えめに言っておんしの相手をしている時とは別人じやないや、むしろ久を相手にしちよる時のが例外か？」

「……思いつきり聞こえているんですけど、黙っていた方がいいんでしょうか」

「あはは……」

どう答えても面倒なことにならなそうなので、とりあえず曖昧に笑って誤魔化す私だった。

☆☆☆

竹井 配牌

〔234①⑤⑥⑨⑨北西発発発〕

(で、この中に地雷とやらが眠っていると。まあ、薄々そんな感じじゃないかとは思っていたんだけど……)

改めて解説されると酷い能力だ。確かに自分から気づけた方が見破る精度は爆上がりしそうだが、流石に事前に解説が欲しかったころではある。

平均4つで最大5つ。言葉にすると簡単だが、何のヒントも無しにそれを見抜けはハードルが高過ぎる。そもそも地雷云々が無くても面子と面子候補、つまり実質2面子が配牌時点で削られているとかその時点で色々と酷い。こんな能力を見せつけられて「麻雀をする気がある」とか詐欺じゃないかとすら思う。

(でも……)

竹井 1巡目 ツモ

(一)

打牌

(発)

(点数は重要じゃない。諦めなければ逆転はできる……)

宮永さんの話。色々となるところはあったが、一番重要だと思っただことはこれだ。前半戦では削られていく点差ばかりが気になっただが、そうと分かれば点数などどうでもいい。

この試合は、私が天江さんの力にどれだけ抗えるかに全てが懸かっている。結局のところ、最初に言われていたことと同じだ。出来れば勝てる、そうでなければ負ける。宮永さんが情報を出し惜しみしていたのは、少しでも出来る確率を上げるため。そも本来気づくべきは私、ならばそのことで彼女を責めるのは酷だろう。

しかし。

「……………」

竹井 2巡目 ツモ

(三)

打牌

(発)

(今更も今更だけど、こんな打牌をしておいて「諦めてない」ってのもアレよねえ……)



客観的に見て、私は一体この会場の人間からどう見られているのだろうか。

麻雀のことをまるで知らないど素人でも、手持ちの牌を左から順に全部入れ替えるのがどれだけ頭のおかしいことなのか分かるはず。無論、お姉さんや妹尾さん辺りを筆頭にもっと酷い打ち方をする参加者は存在していた。しかし、そういう打ち手は一樣に酷い闘牌に見合った成果を出しているため、より一層私の打牌のアレさは目立つことだろう。

竹井 3巡目 ツモ

〔二〕

打牌

〔発〕

「……………」

何故かって？ 簡単だ。何せ自分でも正気を疑っているのだから。第一打から暗刻である発を連打。とてもじゃないが少なくとも経験者のやる行為ではない。損して得取れ、なんて単純な話でもない。運命など見えない私は、勝つために負けに行くことの大切さを理解できない。頭では分かっているつもりでも経験が拒否反応を起こす。

なのに何故断行するのか。嫌なら拒絶すれば良い。それで負けても仕方がない。それで負ければおかしいのは世界の方だ。いくらでも言い訳は並べられる。いくらでも弁明はできる。なのにどうして。

（宮永さんは「勘で探り当てろ」って言っていたけど……）

実際に座らないと見当が付かない。部長、つまり私には無理だろうとも言っていた。事実、今に至ってもどの牌が地雷であるかなんて私にはさっぱり分からない。慣れれば行けると言われたものの、それはきつと、この一度や二度の対局では不可能だろう。

（でも……）

でも、違う。違った。気付いた。気付いてしまった。それを見破る方法があると。なまじヒトから外れている宮永さんだからこそ気付

かなかった方法で、地雷を看破する手段は確かにこの卓に存在していることを。

「ポン」

天江 手牌

〔裏裏裏裏裏裏裏裏〕 ポン〔西西横西〕

牌を退ける動作に長い金髪が靡く。おそらくは前半戦同様、海底牌を引く調整のための鳴き。起家である天江さんがこのタイミングで一度鳴いても海底には辿り着かないが、そこはお得意の運命とやらで「何やかんや上手いことやる」のだろう。

「……………」

そう。既に確信している。天江さんであれば宮永さんと同じことができる。即ち天江さんには運命が見えているのだと。

私には無理だ。それは事実で揺らがない。でも、この卓にはそれが分かる人間がいる。宮永さんが見出した細い艶道を、その解を保証してくれる存在がいる。

「……………」

竹井 4巡目 ツモ

〔⑨〕

打牌

〔⑥〕

「……………」

（――「外れ」ね。萬子が連続して来たから、筒子は使わないのかと思っただけど……………」

そう、その方法とは、天江さん本人の反応から地雷の是非を問うというもの。

状況も味方した。如何に天江さんが化け物だろうと、現状のトップである清澄高校、つまり私を全く意識しないなんて出来るはずがな

い。これが他の二校と同様のスコア、すなわち何も考えずに勝てる点差であればこの手段は使えなかった。偶然とはいえ都合の良過ぎる前半戦の和了りもある。多少なりとも意識されていれば、その反応にも期待できる。

竹井 5巡目 ツモ

①

打牌

4

「……………」ピク

(よし、ビンゴ……！)

全く、麻雀が人を見る競技とはよく言ったもの。熟練者になればなるほどそのことを重要視するのは、彼女らに存在するかも怪しい。どうしようもない不運を、どうにかカバーするための知恵なのだ実感する。

(コレを捨てられると、貴女は嫌なのでしょう……?)

昔から、粗探しは得意だった。悲しいことに。無駄に悪知恵も働いた。嘆かわしいことに。だけど、それがこうして役に立つこともあるのだから、つくづく運命とは良く出来ていると思う。

「……………」

竹井 15巡目 手牌

①①②②③③④④⑤⑤白白中中

(聴牌……)

長い長い闘牌の末、私には到底理解できそうにない過程を経て、すっかり一新された手牌がようやく姿を現す。

最初に捨てたはずの三元牌が何故か二つになって戻ってきたり、代



和了るその瞬間まで自分でさえも自らの和了りをまるで信じていなかった。いや、それ以前に嘆く必要なんてない。このタイミングで和了れた……その価値はきつと、私が思うよりもずっと大きいのだろう。

『そうなって欲しいと、私は勝手に——』

勝てるなんて言わない。言えない。先程の宮永さんの言葉は、希望を通り越してもはや彼女の願望でしかない。だからそれに私が応えられるとは言わないし、他でもない私自身がそれを信じられない。だけど、足掻くくらいはいいだろうと。いつかその期待に応えられる自分になりたいと。僅かに手を掛けた崖の取り付きで、柄にも無く必死に臨むのだった。

大将戦後半戦東一局終了時点

龍門渕	132800
風越	30600
鶴賀	49400
清澄	187200